

っぱり、まだ、機嫌のよいときだけであった。一步進んでは二歩しりぞき、二歩進んでは一歩しりぞく、というふうにししか、成育できないのだ。機嫌がわるいときには、返事も会話も消えて、たちまち元の状態に逆もどりしてしまふ。ゆううつそうにも、かなしそうにも、しているわけではないが、そんなときには、たぶん、なにかが思うようにならなかつたり、だれかに痛められたり、欲望がおさえつけられたり、しているに違いない。そして、幸吉はいま「たからもの」のイスやテイルのほうへ、どうしても行きたくないのだ。おとなのほかに、いわば暴力でおさえつけられ、神経がますます狂っているのだ。

「ミシンの機械にウンコ付けよか。ば、い、ば、いよ。うふ、うふ。動かれんようになつてしまふからあかんなあ。おふとんのうえにシッコしよか。くそうて、つめとつて、ねられへんよ。うふ、うふ。まるいイス、お便所へほかほか。こえ屋さんがヒシヤクでくんで、トラックに入れて持つていってしまふなあ。キハツのビンにウンコ付けよか。くそうなるなあ。せつけんて洗うても、とれへんよ」

自分でたすね、自分で答えながら、なんべん、なんべんとなく繰り返している。幸吉が以前ひとりごとを言っていたとき、これも会話の芽ばえに役立つだろうか、ほくや妻がいち／＼答えていたのを意外にもおぼえていて、こんどのひとりごとを組み入れていくのだ。前半の、たとえば「キハツのビンにウンコ付けよか」というのは幸吉の以前のひとりごとで、後半の「くそうなるなあ。せつけんて洗うても、とれへんよ」というのは、ほくや妻の返事だった。この二つを一つにし、ひとりで、ふたりぶんを言っているのだった。ほくやが絵本を読むのをやめ、梅子といっしょに、だまって聞いていると、幸吉の声はますます大きくなってゆく。とき／＼「うふ、うふ」と笑いごえもまじって、なんだか、ひどく愉快そうにも聞こえる。ウンコやシッコや便所などがしきりに出てくるのは、それによって無意識のうちに、うつぶんを晴らそうとしているのだろうか。それともフロイトの説のように、そういうものに特別な興味をいだくという幼児の精神状態に、七歳のいま、ようやく達しているのだろうか。

編輯後記

十月十九日、熊本県鹿本郡植木町の田原坂公園で蓮田善明文学碑の除幕式が行はれた。入ふるさとの駅におりたち眺めたるかの薄紅葉忘れなく、蓮田第二次應召時の望郷の歌が刻まれた。広島から清水文雄氏、東京から飛行機で栗山理一氏、学友、知友、地元民百名参加した上で、



遺児君一君（九大第二外科研究室）の長男慶太郎ちゃん（一才）の手で除幕式が行はれた。僕は事務多端で参加できなかった。三十日清水氏から當日の写真が送られてきた。こゝに掲げたのがその一葉である。菊花を挿げられた碑石の前、未

(6)

果樹園

第59号

わがひとに與ふる哀歌 小高根 二郎
 夜 火 事 美 堂 正 義
 自殺の記 福 地 邦 樹
 標 的 的 吉 本 青 司

ヘリック詩抄 森 亮
 ひとり遊び 池 沢 茂
 ホ ラ 貝 堀之内 歴
 地球のわかれ 浅 野 晃
 半自叙伝の序 田 中 克 己
 編輯後記

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄（四十九）

小高根 二郎

その頃、伊東は真剣に東京近傍への転動運動をしてゐた。しかし、若い友である私にはアタビにもその気配を示さなかつた。今かんがへると、伊東の上京の意志は「舞踏」といふ譬喩で語られてゐたのである。

三月上旬かの或る寒い午下り。北三国ヶ丘に伊東を訪ねた私は、「文芸」三月号であつたかに発表した「若死」の朗読を聞かされた覚えがある。

若 死

おほかはおもて
 大川の面にするどい皺がよつてゐる。
 昨夜の水は解けはじめた。
 アロイデオといふ名と線油とを授かつて、
 かれは天国へ行つたのださうだ。
 大川に張つてゐた水が解けはじめた。
 鉄橋のうへへ汽車が通る。
 さつきの郵便でかれの形見がとどいた、
 寝転んでおれは舞踏といふことを考へてゐた時。

しん底冷え切つた朱色の小匣の、
 真珠の花の螺鈿。

若死をするほどの者は、

果樹園 第五十八号

（毎月一回一日発行）

昭和三十五年十二月一日発行
 池田市野町一六八
 編輯兼 小高根 二郎
 發行所 元市印刷株式会社
 池田市野町一六八
 發行所 果樹園社
 定価 三十円

自分のことだけしか考へないのだ。

おれはこの小匣を何処に藏つたものか。
 気疎いアロイデオになつてしまつて……

鉄橋の方を見てゐると
 のろのろとまた汽車がやつてきた。
 第二詩集「夏花」

この「若死」の原型には「N君」といふ献辞が添へられてゐる。N君とは夭折した彼の教へ子なのだらう。

隙間風がよく通る三畳の凍てついた玄關兼書齋で、私は慄へながらこの酷薄華麗な詩の朗読を聞いてゐた。伊東と私の間には小さな瀬戸火鉢があつた。乏しい炭水はうずたかく灰を積んでゐた、伊東は朗読に自ら陶醉するに従つて火鉢を両腕に抱いて了つた。私は凍えた靴下の爪先だけを火鉢の肌に触れ、からも凍えからまぬがれてる恰好だつた。

大川の水は解け初めたが私の凍えはなほらなかつた。アロイデオ・Nはつ、がなく天国に着いたさうだ。大和川の鉄橋を刻みながら遠去る貨物列車。その列車が置いていつたかのやうに、形見別けの真珠貝の螺鈿をほどこした小匣がとゞいた。教師の俺は、延命の策

である生の象徴としての「舞踏」を懸命に考へてるといふのに、教へ子である若いNは、んきに天国へ旅立つて了つた。自分のことだけ考へてはい、んだからナ。土台、若死をするほどの者は皆、自分のことしか考へないんだ。俺の兄貴の英一、潤三、岩蔵……にしたら、みんなそれだ。現に後に残つた四男坊の俺が、とんでもない債務附家督でさう苦勞させられてるぢやないか。結局、長生きをするほどの者はひとのことばかり考へさせられるんだ。それにしても形見分けの指輪入れである真珠貝の小匣。中年男にどう使ひ途もない少女好みの嗜好品……。これを一体どこに蔵つたものか？ 朗詠を聞いてゐた私は、寒さと感銘のため、齒の根が口腔の奥でカチ！カチ！鳴つてゐた。そこに熱い番茶が運ばれてこなかつたら、私は鉄橋のやうに凍結して了つたに相違ない。

私は伊東ほど若死を嫌した者をしらない。四男坊で家督を継がねばならなかつた自らの苦い体験から、極端といつてい、ほど若死を嫌したのだ。伊東家に男と生れた者はみな四十の峠を越すことができない。不惑に辿りつくまでに夭折するんだ。この忌むべき格律が卒塔婆となつて、伊東の胸の深处に佇んでゐたからなのだ。長男英一、享年三十五、

夜火事

美堂正義

黒煙に交つて火の粉が高くあがり
家から家へと炎はすばやく移る
赤い空に背後の山が墨絵のやうに浮んで
一層悽慘を対応させる

青春の火の玉を抱いて

火山のやうに鳴動して止まないで

鬱勃と噴きあげてくるものに苦しみ

心の燃えるのに耐えかねた

いま 私の若い姿をそこにみる

過ぎ去つた日々のはれたものへの愛惜が

美しく昇華しては返つてきて

私を傷けようとする

自殺の記事

福地邦樹

僕は三面記事では

人殺しとか自殺とかが

一番好きなのだけれど

今までで殊に感動したのは

三年ほど前だったか

二十才位の身元のわからぬ娘さんが

映画館で睡眠薬をのんだ記事だった

映画のはねたとき眠るやうに

一人残されて死んでいたという

そして紙きれの遺書には

誰ももうらないで死にます さようなら

とあつたそうだと

眠くなつてきた眼で最後に見た場面は

どれほど美しかっただろう

そしてそれがどのように朦朧としはじめ

たのだろうか

その五六行の記事を私は今でも

時折思い出して

賢明院藤林良栄居士。次男潤三、大村中学二年十六で死去、空受学昇順善士。三男岩蔵は生後間もなく逝き、その名もはかない玉泉秋子位。長兄の生の限界であつた年齢まで後一年しかあまさなくなつた三十四の静雄にとつて、越ゆべき格律の峠はあまりに峻しく高く見えてゐたに相違ない。

「若死」の朗詠を聞きつ、齒の根が合はぬほど私が感銘させられたのは、寒気も手伝つてはゐたが、死を歌ひつ、それ以上の愛執で生を守らうとしてゐる伊東の意志である。その意志は、寝転んで舞踏を考へ、形見分けの美しすぎる小匣を蔵はうとする姿勢によく看取される。

さう言へば、死を歌ひながら、結局それ以上の上の愛執で生を歌つて了ふ傾向は、一年半前、満二十才の若さで天国に旅立つた辻野久憲に捧げた「わが笛」でも顕著であつた。伊東は久憲の才と徳とを追慕しながら、結局では八友よ讃めよこれの現に残りし野に、わが吹きて行く笛の音をVと、生き残つた自分を歌つてゐた。けうといよハネになつた久憲にさへ、伊東が吹き鳴らす笛の音——詩の傾聴を強引に強ひてゐた。

この死者より反射的に生者に眼をそむける傾向は、Nと同じ教へ子である終和典君の、

兄の新也君の若死に捧げた追悼文にもよく現れてゐる。

……………

終新也君の組を私が受持つたことがなかつたので、君のことに就いては充分知ることがない。然し、君の風手は多くの生徒の中で立勝つて、私の注意をひいてををつた。顔色は雪白といつてい、ほどの気品のある美しさで、素直な柔和な微笑がいつもその目許や口辺に浮んでゐて、大へん気持のよい人柄のやうであつた。私は君を見ることに自分の子供もあんな風に美しく素直に育つてくれればい、とよく思つた。君が突然亡くなられて、いつかお母様にお会ひした時、君のことを悲痛な気持ちに堪へないと云つていろ／＼とお敷きになつた。それが私には一つもくども迷惑にも感ぜられず、あんなにい、子供をなくなされたらそんな悲しみも尤なことだと、いかにも自然に共感された。受持の宮脇先生にも大へんかはいがられ、御両親も玉のやうに慈しまれたらしいのも、私には素直に同情出来た。

さういへば、いくら美しすぎるところがあつた。終家とおつき合ひは、令弟の和典君が私の受持の組の生徒であつたから始まつたのであるが、和典君はあんなにい、兄さんの弟だ

から大へんだと思ふ。亡くなられたのであるから一層だ。絶えずくらべられるのだから大変だと思ふ。和典君は兄さんとは又違つた資質の人のやうで、複雑なところも、今のところ分裂したところもあつて、多く将来の大を期すべき人柄である。兄さんのやうに早くから完成したところのあるのとは異つてゐる。しかし悲嘆のどん底にあられる御両親を出来るだけなぐさめるやうになさい。私はそれを祈ります。

(昭和二十一年十月「終新也追悼文集」
伊東静雄「葬式当日の弔辞」)

この追悼文の異質さは、秀才で美少年であつた新也君への追悼よりも、いさ、か凡才型の弟和典君への激励と同情に力を注がれてゐる点にある。それは、若死した新也君が宮脇先生の担任で、生き残つた和典君は伊東の担任だから……といふ、比重関係からではない。明らかに既述した若死を嫌する伊東の心情は、生者に組し、加担してゐるのである。

伊東は生の舞踏を意図して、三月二十七日から四月四日まで、珍らしく九日間も上京した。転動と第二詩集出版の契機をつかむといふ宿願を果すためである。東京といふ検舞台での鮮麗な舞踏を夢みてゐる。が、結果的には、またまた伊東は若死の運命に遭遇して

了つたのである。つまり、上京して二日目——三月二十九日、中野江古田の市療養所で、満二十四才で若死してつた秀才立原道造の枕頭に佇む結果となつたからである。

その間の事情は、「四季」立原道造追悼号に書いた次の文章に詳しい。

その後わたしは、田中君から度々立原君の病状を知らせて貰つてゐた。そして学校が三月の休暇になつたので、立原君の見舞をも、主要目的の一つにして上京した。そして宿にねて疲労を直したり、近親の家を訪うたりして二日ほどしてから、田中君・保田君に会い、一緒に病院に行かうとして話込んでゐたら、丁度そこにもう立原君の死去通知が来つてしまつたのだ。

この追悼文では、さすがに伊東の転動運動の主目的は伏せられてゐる。故辻野久憲も死床で最後の希望としたのは、伊東の故郷長崎への旅であつたが、立原が死床に臥したのは無理な長崎への旅が直接原因であつた。まるで長崎が黄泉の国でもあるかのやうに……この二秀才の若死と伊東の故郷とが関聯を持つてゐた事実、よほど彼に異常な衝撃を与へたに相違ない。

標 的

吉 本 青 司

正午に近づく
農学校の花時計
秒針のあわただしさが
青春の時を語っている
ほくの書いた詩片を
白い小鳥にする風たち
少年の狙つた空気銃は
的はずれて
窓ガラスに当る
ふいに走り去る車に
乗っていたのは
政治囚だ

長崎はわたしの故郷である。立原君は、そのことを知つてゐたらうか。……中略……自分の度々の経験でも、長崎までの汽車旅行はいけないと思ふ。しかしお国自慢めくが、長崎の気候は病人にも悪くないと思ふ。湿気はさうない。むしろ乾燥の適度な健康地と思ふ。長崎の気候が立原君の病気を悪くしたと思ふと寝覚めが大へんわるいから、強ひて気候は悪くないと自分のために言つて置きたい気が持たす。……中略……長崎県には入つてからの汽車旅行は、大村湾を沿うた線と、新しく別に開通した有明海沿ひの線と、二つのうちどちらを撰んだらうなどと考へてゐた。大村湾は、日本の地中海だと云はれるほどで、明澄で静穏でしかも快活だから、そちらの方が君の趣味に合ふかもしれない。或は一生活れられない印象を受けるのぢやないかも考へた。しかしわたしの趣味と馴染の方かといふと、有明海を是非見せたいと思つた。沈鬱な中に一種異様な、童話風な秘密めいた色彩と光が交りあつて、これはまだ日本の詩人も画家も書いてゐないものだ。立原君は果してどちらを通つたのであらうか。それとも、もうその時は疲れ果てて、窓を閉して寝てゐたのぢやあるまいかと思ふ。(昭和十四年「四季」七月号、伊東静雄・立原道造君と私)

伊東はこんな感慨で、ハインのやうな美少年……とはやされた立原の死の枕頭に、佇んだことだらう。

立原道造は昭和九年第一高等学校を終へ、昭和十二年東京大学工学部建築科を卒業すると、数寄屋橋際の石本建築事務所を務めてゐた。楽譜風な大型の詩集「萱草に寄す」「曉と夕の詩」を出してゐた。享年満二十四。病名肺結核。先の辻野より四歳も若く死んだ。同じく夭折の秀才だつた。

伊東と立原とはたゞ一回出会つたきりの薄い縁であつた。つまり、「わがひとに與ふる哀歌」出版記念会の当夜出会つたきりである。又、伊東は立原から「四季」に執筆を依頼した書簡を一度貰つたことがある。が、伊東はその返事を書かなかつた。光、風、花、鳥、虫だけが構成する明澄で華麗な立原のソネット……。そこから立ち昇る夭折文学の死臭を、伊東は生理的な鋭敏さが嗅ぎとると、彼を嫌忌してゐたからである。

堀辰雄、室生犀星氏等の先輩詩人たちから愛された美少年詩人……。その華麗な舞踏を終つて崩折れるやうに眠つてゐる立原の枕頭で、伊東が眼を光らせたのは、白布で蔽はれてゐる立原の死相ではなく、看護のために立

伊東静雄全集

全一冊豪華決定版

桑原武夫・富士正晴・小高根二郎 共編

井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄のところから出発しなければならず、しかもまた結局はそこに帰つて行かなければならぬであらう。」と絶讃。三島由紀夫氏は又「私の青春の師」とた、へた。まこと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に継ぐ日本現代詩の正統。その詩精神は古今和歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集を経てこれを超克し、現代詩として初めて西欧の詩歌に一步も譲ることのない高峰を形成した。

【詩集】 既刊詩集の題字をなした未刊

童話「山科の馬場」名品「今年の夏」卒業

のこと「水晶観音」其他を含む 【論文】 論文

「子規の俳論」伊東の詩精神を

説明する一談話のわがひととを解

ふる哀歌「談話のかはりに」等 【書簡】 とに与

明する書簡を含む三六七通解

★菊版上製函入★200頁 ★豫価2100円

一月

下

月

発

文

書

院

京都市(中央局区内) 仏光寺通高倉西

振替京都二〇二番

原のベッドの下にウスベリを敷いて寝起きしたといふ愛人・浅路さんが、死後もまめまめしくかじづいてゐる姿だつたのである。伊東は辻野久憲の愛人・加藤よし子さんをとっさに想起したらう。伊東の関心は、死者にでなく生者だけに向けられてゐる事実、立原の死後五日目に頼原先生に出した次の書簡に明らかである。つまり、立原の死には全く触れてないのである。

「東京に参つてをります。能勢さんにもお伺ひしました。いろいろ親切に言つて下さるのがうれしく二時間はかりも、べらべらしゃべりこんでしまひました。保田君その他多勢にも会ひました。連中の顔みてゐたら詩集出すのが何だかいやになつてしまひました。その内委細ご報告に参上したいと存じます。

東京・大森にて 伊東静雄

(昭和十四年四月三日東京大森より京都市)

(大將軍西町二六頼原道造宛はがき)

伊東は頼原先生を介して申入れてゐた希望の転動先について、具体的に能勢朝次氏にお願ひしたのだらう。舞踏を想つて軒昂として上京した筈の伊東は、どうしたことか詩集上梓を断念するほどの嫌悪感に陥つてゐる。「保田君その他多勢」といふ語感の底に、その嫌悪の原因が潜在してゐる。恐らく、伊東は

若冠にしてすでに新聞・雑誌の記者連に取囲まれ、文筆業者として応待に多忙な保田氏にも反撥を感じたらう。と共に、東京の文学仲間を用意周到さや利発さに対しても、田舎者らしい反感や侮蔑や嫉妬をこもこも感じたらう。或ひは、伊東に機先を制して昨夏上京してゐた田中氏との新宿でのいざこざが、その直接原因であつたのかも知れない。

「伊東は上気嫌で、私と新宿を歩いてゐた。いまもある高野フルーツバーラーの前あたりで、私は急に伊東の方をふり向いて、こはい顔をしていた。『あんた東京でそんなことをいつてたら、居れなくなりませよ。』伊東は急になさしい顔をした。伊東が何をいつて、私がたしなめたかは忘れて、その時の顔だけは今もおぼえてゐる。

伊東はこのあと大阪へ飯つて、出来てゐた筈の東京移転はつひに実現しなかつた。私にはがらされて、自分でこの話をこつたつたのではないかと思ふ。」

(昭和三十四年「果樹園」三月号
田中克己の一言)

伊東は恐らく田中氏と新宿の雑沓を歩いてゐて、「東京は薄情だ……。」といふ台詞を吐いたのだ。この台詞は、同じ新宿で催された処女詩集「わがひとに與ふる哀歌」出版記念会の当夜、彼が抱かされた感懐だつた。あ

の日、コギト同人の誰もが彼に泊れ……とは言つてくれず、中原中も一宿一飯の奇縁を結んだのだ。その日の感懐が、そのまゝ、伊東の口を衝いて出たのだらう。この台詞は田中氏の牆にピン！ ときたらう。売文と家庭教師。上京以来妻子を抱へて生活の確立のために悪戦苦闘してゐた彼にとつて、上京を決意するなら、東京の薄情さと組打ちするぐるゐの覚悟がなくてはなるまい……と反撥を感じたらう。「あんた！ 東京でそんなことをいつてたら、居れなくなりませよ」。当然、この戒言が田中氏の口を衝いて出たらう。伊東は親友にいきなり平手うちを喰つたやうな悲しい顔をした。これも当然である。「東京は薄情だ……。」といふ伊東の言葉は、いはゆる台詞であり、東京での挨拶だつたからである。大阪商人は朝の挨拶に「お早う……。」とは言はず「儲かりませつか……。」と言ふ。伊東はその大阪風の挨拶を創作したわけである。「文芸文化」の蓮田善明が応召し、後事を託された清水文雄氏を支援するために、後日池田勉氏も上京するが、池田氏を訪ねた伊東は、やはり「東京という所は、薄情な土地だ。青いイケガキを、家のまわりに、ぐるつとめぐらせて……。」と挨拶して、池田氏をめぐらはせてゐる。(昭和三十四年「果樹園」三月号、池田勉「薄情」)

死の棘

島尾 敏雄 著

【河上徹太郎評】 この小説は、女があつたことが妻に発覚し、ヒステリックな妻の追求に戦く夫を主人公とし、その陰惨極まる家庭を刻明に描いたもの。しかもその残酷の裏に何か温く美しいとすらいえる人情が漂つてゐるのは、この種のが私小説の特質であつて、これこそ性格はまるで違うが、泡鳴、善藏と同じ系列に属する一傑作である。

講談社刊
定価 三二〇円

田中、池田両氏共に大阪出身だから、伊東はこの挨拶に当然合権をうつてくれるものと独り合点をしたのであらう。

先の頼原先生宛旅信の三日後、つまり、四月六日、日本橋は橋町の立原家で、道造の告別式が催された。その前日の五日が始業式だつた。従つて、伊東は告別式には参列せず、

四月四日に離京したのである。

留守に大谷正雄（忠一郎）氏から書簡がきてゐた。朔太郎先生は昨年四月中旬、白秋夫妻の媒酌で大谷の妹M子さんと再婚してゐた

ヘリック詩抄 (二)

森 亮

柳

柳よ、お前は失恋には一番いい木、

いやいや唯一つ頼りになる木です。

思ひが叶はないで悩む若者や乙女の額には

お前の枝葉で編んだ冠がかざられる。

ひとたび恋の薔薇がしをれたとき、

又はそおと置き忘れられたとき、

これなる柳の冠が失意の男たちに

涙にしとどに濡れてかつげられる。

恋する胸を冷え上がらせるすげない黙殺が

可哀さうな乙女たちにさし向けられたとき

彼女たちには失くした恋のつくぐなひに

あはれ枝葉の冠が与へられるのです。

が、M子さんは有名な子煩悩の朔太郎先生のお母さんと折合ひがつかず、丁度その頃離婚となり、ひそかに中野のアパートに囲はれてゐた頃だつた。

恋に身細る若者たち、面寝れした乙女たち

みんなみんな人目の光りに堪へられず、

お前の冷えびえする木蔭にやつて来て

ひと夜さを泣き明かすのです。

一五九一に聖ポール寺院の近くで生れたヘリックは翌年父の不慮の死に遭つて淋しい少年時代を送つた。十七才で亡き父と同業の金銀細工師であつた叔父の徒弟となつた。その後ケインブリッジに遊学しロンドンに歸つて文人、音楽家などと交はり、宮廷にも出入りした。三十九才のときデヴォン州はデイインブライアーの牧師となり、クロムウエル等の内乱の際に寺領を逐はれて都に歸つたが、王政が回復してデヴォンの旧寺領に戻り、一六七四年その地に八十四の生涯を終つた。ここに訳出した「柳」は詩集「ヘスペリデーズ」二六三番の詩である。

伊東は大谷氏に次のやうな書簡を送つてゐる。

「お手紙有難うございました。三月の末朔太郎先生にお会ひし、あなたの詩のこと申しましたら、先生もよく知つてゐると云はれました。新宿で一緒にお酒のんだので、朔太郎先生はこのごろ少し元気がないやうでした。先生は貴君の詩が、今少し先生の詩風を脱したらいい、が、といふこと一寸洩らされました。わたしもさう思ひますので、いらんことですが一寸書いときます。詩といふものは、その風といふことが生命みたいなものですから。いつも非情派（大谷氏が林富士馬大垣）ありがたう。元気を祈ります。大阪にも遊びにおいで下さい。」

(昭和十四年四月五日堺市北三宮ケ丘町四〇上
福島県白河町本町五四大谷正雄宛はがき)

伊東は上京中朔太郎先生と新宿で酒を呑んでゐる。前述した田中氏とのいざこざも新宿であつた。或ひは一緒であつたのかもしれない。伊東は朔太郎先生が元気がないことに触れてゐる。M子さんとお母さんの間に絶望して、その收拾策に苦慮してゐたからだらう。それとも、自分の詩精神の継承者と信じて

るた伊東の詩風が、いつか朔太郎のそれよりも、佐藤春夫氏のそれに近附いてゐたといふ理由も、附け加へられていゝ、かもしれない。

伊東はこの書簡を書いた翌日、つまり、立原道造の告別式当日、突然……私を新世界近くの職場に訪れてきた。埃を置いた黒いソフト。白墨の粉末を肩に乗せた黒の脊広。学校取りのいでたちだった。いつになく、にこり……ともせぬ厳しい顔だった。

「東京に行つてました。丁度、立原の死に出会ひました。」と、愛想のない口吻だった。

私は立原の死も告別式の当日であることも知つてゐた。終焉ちかい立原が、君に会ひたがつてゐるから、暇ができたなら上京するやうに……といふ田中氏の便りを貰つてゐたからである。私は見舞ひの林檎を送つたゞけで上京しなかつた。次で、死と告別式の通知も貰ひ、弔電をうつただけだった。

ハナミダ カゼニヒカリテ トホシ キミ
ガ ハフリカナV

といふ用文だったと、今に記憶してゐる。

じつと頬を押しあてて休んでいる。背をまるめてかみ、うっとり沈んだまなざしだった。うば車に乗っていたころのことでも思ひ出しているのか、なにか空想か幻想にふけつてゐるみたいだった。

ホラ貝

堀之内 歴

露路奥に微びついて住んでいた髭山伏がその門口にお堂を建てた
大小屋ではない ▲権現堂V
家内安全 商売繁昌 一切願事叶うよし
それにしては……

ギリ／＼の晩秋の日に初大祭が執行され駅前から商店の軒伝いにそのお堂まで数十流れの赤い木綿の幟が立った
敵めしすぎた万端の準備
当日は朝から時雨の霧らうお天気
幟ばかりが赤々と濡れそびて垂れていた
午下がり 雨の小降りに 遠いななき
一と声高い法羅貝の会図

ひとり遊び

池 沢 茂

はじめ家にあつたイスとテーブルは、古道具屋から買つてきた勉強用のテーブルと、それに付属した四角いイスと、それから、ミシン用の小さい丸いイスとが、それ／＼一つずつだった。家に閉じこもりがちの幸吉は、多くの時間を、このテーブルと二つのイスを使つて遊んでいた。たいていのおさない子供とおなじく、幸吉も、高いところからとぶのをよろこんで、テーブルのうえにのぼつては、ドシン、ドシンと、とびおる。とき／＼「へーい」などと大きな声をあげ、うれしうに、なんべんも繰り返してゐた。

ところが、のちには、テーブルのうえにイスをのせ、そのうえに腰掛けるようになった。もう幼児ではない。すでに学齢に達し、養護学校の学園へかよつてゐる。それでも友達はいないから、ひとり、へやのすみっこにテーブルをはこび、そのうえにイスをのせて、たじつと腰掛けてゐるのだ。こちらの気のせいか、なんとなく沈んで、さびしうに見える。ふつうの子なら、近所にも仲よいの友達が出てきて、さかんに遊びまわつてい

やがて、たゞみのへやでも、やるようになった。たゞみが破れてしまふから、妻もほくも、叱らずにいられない。それでも、さかない。叱られるという意味がわからないのだから、ほくも妻も、ほとんどあきらめてゐる。

稚児行列が繰り出した
そこらじゅうのお神さんらの御盛装が
一人ず、稚児の手を曳いている
日頃は小芋の餓鬼ものかおが
それはもうお白粉の厚塗りに紅溜いて
硬はばりの▲良い顔Vだ

列のうしろに山伏同勢十人あまり
音途朗々 法羅貝の大合奏 お、
ハヤマブシの ホラのカイ……V
猶すばらしい彼らの歩度の悠やかさ
大外股で 音たてず地を踏んでくる
髭さんは最後尾 今日だけは彼は大名
一杖と法羅貝を手に黄金色の陣羽織
結構すくめのでちを
惜しみなく糠雨に濡らせている
ハヤマブシのホラの……V

一九六〇・十一月三三

る年ごろなの……と、かわいそうにもなつた。それでも、本人はべつと、たいくつそうではなかつた。しばらくすると、イスからテーブルのうえにおり、そこからまた座敷におりる。とんでおることもあるし、テーブルのそばに、ミカン箱や、もう一つのイスをおいて、それを足場にすることもある。それから、また、テーブルへのぼり、さらにイスへあがる。こんなことを黙々と繰り返してゐる。できるだけ高いところへあがりたいたいのか、テーブルにのせた四角いイスのうえに、もう一つ、小さいほうの丸いイスを積みかさね、そのうえへよじのぼろうとするとときもある。頭はもちろん天井へとぶいてしまふ。でも、二つかさねたイスはぐらくして、どうしても、のぼることができない。こんなときは、じれて、とつぜん機嫌をそこね、しばらくは手をつけられなくなつた。

板敷きの応接間で、うば車みたいに、イスを押しているときもあった。たいていは壁にそつて、なんべんも四角く回つた。テーブルを押すときもあった。これは大きすぎて回れないから、しばらく押し突きたつてしまふと、すこし引いて、からだがいれるだけのすまをこしらへ、逆に押しつけてくる。とき／＼イスの背中あるいはテーブルのうえに、

ところが、しばらくすると、たゞみのうえでイスやテーブルを押しながら「たゞみが破れるよ。たゞみが破れるから、あかんよ」と幸吉は、さかんに、ひとりごとを言つてゐる。「あかんよ。たゞみが破れるから、やめときなさい」

ほくや妻がすかさず注意すると「これやたら破れへんわ」と幸吉は、うれしうに笑つてゐる。見ると幸吉は、たゞみの目にそつて押しているのだ。たゞみの目に、さからつて押せば破れ、そつて押せば破れないと、ほくや妻が教えたのを、そつくり理解してゐるのだ。もっとも、口では正しく言つても、やるほうは、やはりやめずに続けている。目にそつた一枚のたゞみを通りすぎると、こんどは目にさからつた、たゞみになり「破れるから、あかんよ。破れるから、あかんよ。破れるからあ！」と繰り返しながら押しつ、ける。たゞみのへりの布も、むろんいたんでしまふ。

おなじことを繰り返していると、さすがにあきるので、すべり台用に買ったラワン厚板のうえに、イスやテーブルをのせ、うん／＼力んで押しあげたり、すべらせたりもした。テーブルは両側のあしで、押し入れの中段のたなに支えかけたすべり台の板をきつち

り扱むようにのせ、顔をまっかにして押しあげる。子供には相当な力仕事だ。それも、なんべんも繰り返している。そのうちに、たぶんあきてきたり、気分が変にはしゃいできたり、ぼくたちや妹の梅子などにじゃまされたりすると、そのイスやテーブルをいきおいよくすべり落とす。むろん下で引っくりかえって倒れる。そのために、とき／＼、ふすまがやぶれたり、ガラス障子の、さんが折れたり、ガラスがわれたりする。それでも、これらは、友達がひとりもない幸吉の、孤独なあそび、たゞ一つの運動だった。ことばの数が異様にとほしく、ことに会話のほとんどできない幸吉が、イスやテーブルを相手にして、ひとりごとをさかんに言い、ときには、めずらしい知能のひらめきも見せて、ひとり静かに楽しんでゐるのだった。

ところが幸吉は、このイスやテーブルを、玄関の門から路上へ、持ちだしたり、投げおろしたり、することもあった。

ぼくたちの家は道路よりも一段高く、石垣のうえに建っている。玄関の門には、六段ほどの、石の階段がか、っている。幸吉はイスやテーブルを、この階段のうえから、投げおろしたり、押しころがしたりするのだ。イスはゴロン／＼と幾回転もしながら落ちて、引

っくりかえる。テーブルはあしをうえにして押すと、ザ、ザ、ザ、ザとすべり落ちて、したのコンクリートの舗道にあたり、けたましくぶつ倒れる。すると幸吉は大きな声をあげ、からだをよじって、笑いころげた。大きなものがゴロン／＼ところがったり、ザ、ザ、ザとすべり落ちたり、さかさまに引っくりかえったりするのが、おもしろくて、たまらないらしかった。道を通る人はびっくりして目をそばだてた。たま／＼その場に通りが、つたら、けがをしたに違いない。

もつと困ったのは、イスやテーブルを持ちだして、道路のまんなかに置くことだった。タクシーやトラック、オート三輪、自家用車などが、わりあいひんぱんに往来する舗道なのだ。まんなかに、なにか意味ありげにイスやテーブルが据えてあったら、たいていは、いったん停車しなければならぬ。たぶんそれが幸吉にはおもしろいのだ。「自動車を通られへんから、あかんなあ。トラックのじやまになるから、あかんなあ。じやまになるからア」とさかんに「ひとりごと」を言いながら、なんべんでもイスやテーブルを持ちだそうとする。交通法規で罰せられないためには声をあらげて叱りつけ、泣いても、わめいても、イスやテーブルをもぎ取ってしまうより

詩集 火焰歌

果樹園叢書

二八〇頁

浅野 晃 著

イズムといふ一切の拘束と呪縛を棄却した著者の詩境は、当今無比の豁達さと清明さとを誇つてゐる。濾過に濾過を経た詩語は何等の新奇なてらひも弄せず、しかも宇宙の理、人生と哀しみ悦びを盡し得て妙である。まこと、達人の境涯を極めたと言ふべきであらう。

果樹園社

仕方がない。ところが、妻は市場へ買い物にでかけ、ぼくは裏庭などで、たとえは日曜大工の仕事なんかしているとき、おもてのほうで、警笛がつけさまに、鳴りひびくことがある。あわててとびだして見ると、舗道のまんなかに、テーブルがでんと据えられ、そのうえにイスがのせられて、おそろしく意味ありげに見え、その手前に、一台の大型トラックが停車し、いらだ、しくクラクションを鳴らしているのだった。タクシーのなかには、子供のいたずらと知っているのか、窓から手をのばし、にや／＼笑いながら、その変な物体をそつと押しつけ、そのま、通りすぎてゆ

く運転手もあった。

幸吉にとつても幸運だったのは、幸吉が非常におくびょうなことだった。親が叱ったのでは、ふだん甘やかしているせい、それとも慢性になっているせい、なか／＼きかない。かえって、いこじになり、わめきあべれる場合も、すくなくない。これが他人、こと

地球のわかれ

浅野 晃

こここの深淵からながめると
地球はつめたいひとつの星だ
たとへば故郷の家の白壁のやうに
じつと光を返してゐる

川波の音もしなければ
松風の音もしないこの時刻
学校の教室では子供たちが
せつせと読本をよんでゐよう

わたしが生きてゐるかぎり
体験はロケットのやうに空を切る
それは記憶となつて

に見ず知らずのおとなから叱られると、まっさおになり、ふるえあがってしまう。親がそばにいと安心してゐるのか、あまり効果がないけれど、たぶんぼくも妻もいないところで、運転手か、通行人か、近所の人のだれかに、なんべんか叱られたに違いない。この危険な、反社会的な遊びは、いつのまにか、ば

ふたたびわたしをつくりあげる
つぎつぎ記憶は沈んでゆく
けれど面影はどうして消えよう
たとへ言葉は忘れられても
歌のしらべは耳にある
かぞへきれない永劫の生の
記憶のつながりがわたしの
光のなかですれちがひ
つひにかなしく結ばれる
目をつむつて遠ざかる
すべては夢だといふやうに
ちがふ、空想も体験であつた、この深淵
さへ記憶でひしと彎曲する

半自叙伝の序

田中克己

半自叙伝なるものを書くにはわけがある。まづ半といふ理由から述べると、私の性格は一本気でなく、いつも顧みて他をいふのである。これは長いつきあひの友人たちは勿論、

現在わたしの教へてゐる学生諸君がよく知つてゐる。それで自叙伝と題したら、自分のことより他のことを述べる方が多く、看板にいつはりありといふことにならう。それからもう一つの理由は、私は老来いくらか自主的にはなつたが、もともと主義も主張もなく、周囲に動かされ易い。まはりが動いたり、近くに強いしつかりした人がゐるたりすると、必ずその感化を受けて同調追随する。この同調追随したのも、もしくは人はないか、といふこともこのごろ書いてみたい。さらに自叙伝として出生からはじめて青年時代を書くとする、途中で終りになる可能性が多い。筆者の根気もさることながら、戴せる方も長くなると困ることがあるだらう。果樹園はその点は大丈夫と信じてゐるが、書きたいところを、なるべく早く書いてしまひたい。私には青年よりも中年、中年よりも老年の愚痴を書きたいといふ誘惑が強いのである。

そんなわけで半生を書くとするれば、いつからはじめるか。この点では私は迷はずにきめることが出来る。昭和二十年八月十五日から始めるのである。終戦——私はこの言葉はきらひである——いな降服の日からである。この日はなんといつても私にとつては、記念す

べき日である。だいたい戦後の祝祭日にこの日が入つてゐないのが、私にはふしぎでならない。昔の中国には国恥記念日といふのがあつて、敗戦その他を記念する日があり、それが青年たちを鼓舞し激励したのである。愛国者にはこの記念日があつてよい。また帰還してから聞いたのであるが、私の母校の、右翼で有名であつた某教授は、この日の翌日、自由主義者と目され、戦争中したがつて不自由だつた某教授に会ふと、「あなた方の世の中になりましたね」と挨拶したさうである。従つて自由主義者にとつても八月十五日は記憶すべき日であらう。よけいなことを附け加へると、この右翼教授はその後しばらくして、自分の昭和二十年八月十五日以前の論文著書はみな取消すといふ声明をした。私は著書論文をそんなに簡単に取消せないことを知つてゐるし、取消すつもりもないが、それにしてもいくらかの説明が必要だと思ふ。それにはその後の私を見てもらふのが早道と思ふ。

実は昭和二十年八月十五日以前のことは「老兵の記録」と題して、保田与重郎君たちのやつてゐた雑誌「祖国」に連載した。だいぶ長くなつたころ編輯の奥西保君が「もうすこし飽きましたね」といつた。それで私はこの日に老兵が自殺することにして、筆をとめ

た。事實は老兵はまだこの通り生きてゐるのである。そして愚痴をきかず年齢になつてゐるのである。読者諸氏には御迷惑かもしれないが仕方ないことである。以上しるして序とする。

編輯後記

十一月一日。島尾敏雄氏より「死の棘」をいたゞいた。近來……感銘を覚えた数少い本の中の一つだつた。

十一月十三日。森亮氏が学会の途次来阪した。丁度發妹倉八千代女士が阪急百貨店で個展を開催されたからである。短時間だつたが互の健康と情熱を確かめ得た。

十一月十五日から五日の間、愛知女子大生の丸地淑子さんの訪問をうけた。幸論に伊東静雄を選ばれたからである。伊東全集の選刊で御迷惑をかけたわけである。

十一月十九日。吉井勇氏逝去。

歌の終焉を意味するかもしれない。十一月二十四日。「大阪手帖」内田克己氏の紹介で福田恆存氏と談合した。心暖まる初冬の一夕だつた。(〇)

果樹園 第五十九号 (毎月一回一日発行)
昭和三十六年一月一日発行

編輯兼 池田市野町一六八
印刷所 小高根二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八

発行所 池田市野町一六八
果樹園社

定価 三十円

果樹園

第60号

わがひとに與ふる哀歌 小高根 二郎
 パンツで怪我をした話 福地 邦樹
 秋のセンチメンタリズム 田中通 義
 皿 吉本 青司
 ヘリックク詩抄 森 亮

ダイニング・キチン 池 沢 茂
 奇妙な思ひに 美 堂 正義
 断 章 浅 野 晃
 半自叙伝の序 田 中 克己
 死 の 化 石 堀之内 歴
 月 の 炎 国 弘 浩介
 小島信一君のこと 小高根 二郎
 編輯後記

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄（五十）

小高根 二郎

電文を交換台から打たした私は、事務机によつて、窓越しの温暖な春の日射しを浴びてゐた。仕事であるレイアウトも広告文案も手につかなかつた。二階である窓辺は、十間ほど向ふの土堤の奈良線と同じ高さだつた。そこを往来する奈良行と湊町行の汽車。その列車の窓に克明に浮いてゐる旅人を、ぼんやり出迎へ見送つてゐた。この出会と擦過……。

それに私は立原との出会と再会の契ひを思ひ出してゐたのである。

私は一度だけ立原と会つたことがあつた。

昭和十二年の年末東京の家に飯つた時だつた。場所は三原橋際の茶寮「門」であつた。瓦斯ストーブは暖く燃え、上気した窓は汚い堀割を霞ませてくれてゐた。間断なく音楽がレコードで奏でられてゐた。初夏に立原の処女詩集「萱草に寄す」の贈呈をうけてゐた。そのお礼もせねば……と、私は立原を待つてゐた。立原の顔を知つてゐるわけではなかつた。「萱草に寄す」の詩風にふさはしいロマチックな風姿で、すぐ判断がつくと確信してゐた。表の扉が開いた。風と一緒にボヘミヤン・スタイルのツバ広の黒のソフトにマントを羽織つた長身の青年が入つてきた。瞬間、互ひに互ひを察知してゐた。一輯すると

狭いテーブルに向ひ合つた。ハインといふ評判にふさはしい美貌だつた。特に、虫や鳥や風や光を蔵つてゐる眼は涼しかつた。その美貌を際立てるやうに、右かん骨のところに、脂肪瘤がいたましく盛りあげかけてゐた。私はその脂肪瘤が気になつた。眼をそらせようと思ひつゝ、結局そこに眼がいつた。と……立原はいきなりすつくと立ち上つた。私ははッ！とした。彼はマントの蔭から濃緑の表紙をした楽譜のやうなものをとりだして、それを両手に奉持した。

「第二詩集です。献呈します。」と、彼は言つた。彼の唐突な動作の意図が判つた私は、あわて、及び腰に立ち上ると、有難う……と「曉と夕の詩」を頂戴した。

この献呈をうけた二著のお礼に、奈良の古道具屋にみつけたマリヤの厨子を、立原に贈つたのは翌年の二月頃だつた。三つに折ればマッチほどの大きさになる銅製の厨子だつた。ぼんやりみると観世音菩薩と見過すが、よく検分すると両手に乳呑子を抱いてゐる。明らかにキリシタンパテレンの秘藏品だつた。それを奈良駅近くの古道具屋の店先のガラタタの中から発見した私は、立原にふさはしい返礼の品として送つたのである。その立原の礼状は、恐らく立原書簡中の最も美しいものの

一つであり、立原道造全集編集に際しても送りそびれたもので、ここに掲載する。

「マリヤ様の御厨子 ゆふべ いただきました

厚く 御礼申しあげます

このあひだの 夜なにかしら おはなししたく しなかつたことが かへつてからは いくつもいくつも 浮んで来ました 僕は もつと多く そして もつと いい言葉ばかりで あなたと おはなししたか つたのです いつまでも 心のこりに 悔みられました

——「羽の小鳥に すぎなくなつた 僕のちひさい生命が 夜にだけ それを明るく 夜にする ランプのそばで 生きること を かんがへました しかし それは 死なのではないでせうか 別離に 耐へながら 光にみちた真昼に 唯一つすべてを 肯定した微笑に 信頼して つづけ営まれる生を おもひます 新しく生きたいとおもひます

そのやうな日に お贈り下さつた マリヤ様が 何であるか! あなたが 考へてゐられるより おそらく更に 深い ひとつの物体であり 同時に それは ファウスト・第一部の 最後に聞かれた ひとつの

とうたふ グレゴリアの衆讃歌の 妙有のしらべに かよふものが ありは しないかしら……

春が来て 馬酔木の咲く日に お約束しま

パンツで怪我をした話

福地邦樹

第一話

大晦日の日は寒波がおしよせ 近來めずらしく木枯が吹きすさび 日中でもあたりの物をこおらせた 妹はしかし 新しい洗濯機に氣をよくして 何度も洗いのをしたのだが 物干し場で何か堅いもので びしりと耳朶を傷つけられた それがなんと 僕の水つたパンツに切られたと うらめしそうに言うのである

第二話

僕が腎臓が悪くて入院していたころ

声でありました 物体の美しさに 「仕事の営み」を 持ちながら それと一致したい欲望をすら考へねばならないまでに 僕は 肉体を拒絶する 精神を持ちました しかし 大きなめぐりが来たのではないでせうか 観念化した肉体が 新しい生をいふときに! 一切の生物・無生物の 身体が ここに 生きるのではないでせうか 美しい夕べにだけ 感謝にみちた 告白が 白い花のほつりでなされました それは 嘗ての形式のやうにおもはれます 一切の汚れをすら 光らせる 真昼の 時間に だれも ゐない つめたい石の上で 愛と感謝と 信頼と 祈りとを 告白します 僕らが 別々の時間に 立つたことのある 同じ場所——たとへば 僕らの国の青春 だつた場所 や 人間の素朴な驚きが 何かを問ひかねた場所 で 僕たちは つながれてゐます 孤独ではあり得ない孤独の感情が つくりもせず つくられもせず 僕たちを結んでしまひます 言葉はなく なり ただ 歌が あるのではないかしら ここにゐて けふ あなたに うたひかける僕の歌は 見えも きこえも 感じられもしない ものになりました 「人のこゑせぬ 曉に ほのかに 夢に」

せう 僕たちは 奈良が 青く かがやく 午前にする再会を——あなたとの再会は ひとつの故郷ではないでせうか……古代の寺院のほとり で ふたたび たつたひと

知合いの肺浸潤の娘も入院して

僕達はうちとけた仲だつた

彼女の父親が看病に来ると

その洗濯がまた傑作だつた

彼女の下着いっさいに

ものすごく堅い糊をつけるのである

頃は丁度夏だつた

夏には糊をきつくと涼しい

というのが好人物の父親の主義だつた

そのきつい糊のついた下着をつけて

娘は僕の病室に遊びに来た

何やらガニマタのような歩き方をして

「ズロースにまで糊をつけるものやから

股がすりむけてしまうたわ」

股のどこら辺がすりむけたのか

残念ながら詳しいことは聞きもしたが

僕はそれ以来 よけい

彼女とその父親が好きになつてしまつた

桑原武夫・富士正晴・小高根二郎 共編

伊東静雄全集

全一冊豪華決定版

井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄のところから出発しなければならず、しかもまた結局はそこに帰って行かなければならぬであらう。」と絶讃。三島由紀夫氏は又「私の青春の師」とたへた。まこと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に継ぐ日本現代詩の正統。その詩精神は古今和歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集を経てこれを超克し、現代詩として初めて西欧の詩歌に一步も譲ることのない高峰を形成した。

〔詩集〕 既刊詩集の題字をなした未刊 詩集「事物の本」抄を取録

〔論文集〕 卒業論文「水島観音」其他を含む

〔書簡〕 「わがひとに与ふる哀歌」のわがひとを解明する書簡を含む三六通

〔日記〕 未発表の日記

★菊版上製函入 ★六〇〇頁 ★二二〇〇円

京都市(中央局区内) 仏光寺通高倉西

人文書院

振替京都二〇二番

つる感歌詞を 言ひかはすときは!

春は いま 僕のすべての 願望のうちに

息づいてゐます

では その春の 花の 午前に お目にか

かつて けふの心のこりを 美しく 成就

いたしませう お身体をお大切に

立原道造

私が立原を見舞ひに上京しなかつたのは、この書簡で約束された△春が来て 馬酔木の咲く日に お約束しませう 奈良が 青く

かがやく 午前にする再会を▽に、妙にこたはつたためかもしれない。立原が臨終近くの床で、僕に会ひたがつたといふのも、彼が大阪へは立寄らず、京都からいきなり山陰に抜け長崎入りをした違約に、気が刺して、詫びるつもりであつたのかもしれない。いや、彼に長崎への最後の旅に急がせたものは、△お贈り下さつた マリヤ様が 何であるか!……僕は 肉体を拒絶する 精神を持ちました▽と感銘した、マリヤの厨子の誘ひだつたのかもしれない。そんな思ひを反芻し、のろのろとやつてくる汽車を待つてゐるところに、伊東が来訪してきたわけだつた。

私は、立原の死の枕頭に佇んだ伊東より、道造回想の思ひに溢れてゐた。が、なにか一と向きに昂奮してゐるらしい伊東は、私に回

秋のセンチメンタリズム

田中通義

乳児を抱いてポートで客を呼ぶ男
あいすくりいむ売りのりん

噴水のように見えるのは時間の推積
孤高の姿勢で砂利を踏んでゆくのは
あれは秋の少女

僕に言えることは
噴水はただ

自虐の精液にすぎないということ

あいすくりいむ売りのりん
あいすくりいむの売れないのは
あのりんの所為なのに

秋の陽

いやらしく
おおいかぶさつて
年増女の恋
ぬくぬくと重い

でもそれはありがたい
風はもう冷たいから

死

孕んだ散髪屋の娘に
首をあずけるとき
あなたは
その子宮の内の死を
嗅ぐことが出来るか

転落

娘

ほつと息を吐いて
頬をおさえる度に
あるこーるがなつかしく激む

外は闇で
窓は曇つた
窓にむらんぶはいくら

不具の少年が
窓にうつ顔を不敵に
ねめまわしていた

運転手なんかいない

そんなバスが
夜

田舎の銀行へ
転落したのだ
冬

夜

夜は少女
月があつてもなかつても
夜は少女だ

ひとりで
田舎の道を歩いている晩など
よく
少女のお胎が
かわいらしく花開いて
仄かに燐光を発している

田中通義君は十八才の青年である。四條驛高校の三年生で、私が今そのクラスの担任をしている。彼は二才のとき小兒麻痺にやられ、それ以後右足が不自由である。彼の詩は一口に言つて既に大人の眼を持った、非常に感覚的な詩である。作品はまだ出来不出来があるが、どれも発想は詩になつてゐる。ここには一応完成されている詩五篇をえらんだ。彼の詩の基調はモダンな風な感覚と、青年期の清潔なセックスと、加うるに不具による内攻的な自虐と聡明とであろう。テーマをうまくこらえていつたら面白い詩が書けると思う。

(福地邦樹)

想の思ひを話させなかつた、伊東は若死した立原のことは深入りせず、後に残つた愛人浅路さんのことばかり熱を入れて語つた。

彼女は平凡な事務員風な少女であつたこと。美少年の立原とは不均衡を感じさせるやうな風貌だつたこと。彼女は立原のベッドの下にウスベリを敷いて寝て看護したこと。死後も変らずまめしくあれこれと世話してゐたこと。伊東は語勢を強めて、彼女が立原と同じやうに美しかつてごらんさい。立原のあの美しいソネットは、一体どこに支へを持ってますか？あの少女が美しい人でなかつたからこそ、十人なみの平凡な少女だつたればこそ、あのソネットが真実になるんです！と、力説した。

それは、「飯郷者」にいふ、美しい故郷はそれが彼らの実に空しい宿題であること。無数な古来の詩の讃美が証明するV式の逆説的な論理であり、伊東式な倫理だつた。伊東は席の立ち際に、若死をするほどの者は、その短い時間の間に、ちやんと生涯の仕事をして逝くものです……と附け加へると、いつになく愛想なく飯つていつた。多分、それから伊東は新世界の雑沓にもまれにいつたのだ。きつと雑沓にもまれつ、後掲の悼詩「沫雪」を彫琢する心づもりがあつたからだ。

伊東はその三日後、次のやうな上京報告を頼原先生にしてゐる。

「四日に飯りました。五日はもう学校でした。東京にゐる間は教員であること忘れられて気持大へん解放的でした。能勢さんのお家は地図で搜しました。新築の明るい家でした。大へん気楽に一時間半程話していただきました。わたしも喋りました。大体先生のお手紙通りのお話でした。学者ではその他斎藤清衛氏にお会ひして喋りました。転任のことはわたしは急いでをりません。私に適當した恰好な口を気長に待ちます。十年も辛棒したのですから。その内天理の方に行き、お話し申上げたいと存じます。」

(昭和十四年四月九日堺市北三国ヶ丘町四〇より)

伊東は上京中に転職の斡旋を依頼しに能勢朝次氏の他に斎藤清衛氏にも会つてゐる。或ひは斎藤博士を介し、かつて清水文雄氏が在職し、清水氏が学習院に転じた後は蓮田善明が奉職した成城学園にでも、推薦してもらふつもりであつたのかも知れない。

伊東は翌五月号の「コギト」に、次の作品を発表してゐる。

沫雪 立原道造氏に

冬は過ぎぬ 冬は過ぎぬ。匂ひやかなる
沫雪の
今朝わが庭にふりつみぬ。籬 枯生は
た菜園のうへに
そは早春の花よりもあたたかし。

さなり やがてまた野いばらは野に咲き
満たむ。
さまざまなる木草の花は咲きつがむ あ
あ その
まつたきひかりの日にわが往きてうたは
むは何処の野へ。

……いな いな……耳傾けよ。
はや庭をめぐりて競ひおつる樹々のしづ
くの
雪解けのせはしき歌はいま汝をぞうたふ。

第二詩集「夏花」

「コギト」所載の「沫雪」の献辞の原形は
、この「立原道造氏」ではなく、「久振り
に偶々成つたこの歌を、わが記念に、故立原
道造君に捧げようと思ふ」となつてゐる。

らとなく洩れ伝へられた。それは五月に降つ
た春雪——伊東の「沫雪」が予感した季節は

ヘリックク詩抄 (三)

森 亮

詩歌こそわがささへ

まだほんの少し、わたしには
書きたいことが残つてゐる。
それから心なえはて
この世にいとまを告げる。

いくら愚図つてはゐても、
わたしが此処にとどまるのは
あつといふ間もない一刻、
それが過ぎればわたしは去る。

すべてを打ち倒す「時」よ。
嘗て世に在つたどの人の
形見の碑をも

お前は地上に長くは残さない。
どれだけ多くの人が地下納骨堂に
身を横たへて忘れられてゐることか。
(死んだが最後誰が彼等に頭を下げる)

つまり、この「沫雪」を立原に捧げたのは
、彼の死にたまたま出会つたと云ふ偶然から
で、主体性はあくまでも伊東自身にある。伊
東自身の記念——たまたま転戦を意図した上
京で、立原の死の枕頭に佇んだ結果になつた
といふ思ひ出のために、立原に捧げたのだ……
といふことになる。既述した、彼の若死嫌
忌の感情は、こゝでも如実に現れてゐる。
この「沫雪」が発表された五月——詳しく
言へばその十二日に、ノモンハン事件が勃発
した。日満側はハルハ河をもつて国境線と認
定してゐたに對し、ソ蒙側はハルハ河東方十
三軒のノモンハン附近であると解釈してゐた
からである。

外蒙古騎兵隊七百はハルハ河を渡河してき
た。日本軍は前月に策定したばかりの国境紛
争処理要綱——侵さない。侵さしめない。万
一侵された場合は機を失せず鷹懲する——と
いふ精神に基いてこれを撃退した。外蒙古軍
はさらに兵力を増強すると侵入を繰返した。
このジャーナリズムの報道には、昨年の張鼓
峰事件の場合よりも不吉な予感が色濃くした
。やがて、ソ蒙側、狙撃三ヶ師団、機甲五ヶ
旅団、外蒙古騎兵二ヶ師団の近代装備の圧力
で、第二十三師団を基幹とする日満側が激減
的な打撃を受けつゝ、あるといふ事実がどこか
ずれの不吉な臭ひだった。この臭ひは四ヶ月
にわたつて漂ひ、つひには死臭を帯びてゐた。

ぼつりぼつり死者たちは腐れてゆく。

ごらん、わたしが自分に築く

この生きた記念碑を。

ねたみ深い「時」も

これだけは倒すことができない。

石の柱を建てたい人は

建てるがよからう。

詩歌こそわたしの希ひ、

わたしが建てる塔です。

シェイクスピアのとき友でありライバルでも
あつた古典主義者のベン・ジョンソンをヘリック
は文学の師と仰いだ。若いヘリックのロンドン
の生活の最も花やかな時間は悪魔亭(ザ・デヴィ
ル)につつまれたジョンソンとその一党の酒宴の席
で過ごされたと言つてよからう。この古典主義者
からの感化と彼生来の資質とでヘリックは端正で
理智的な詩を書いたが、多少の情熱とお色気と茶
目つ笑とがそれに潤ひを添へてゐる。今回の「詩
歌こそわがささへ」は詩集の作品二二番であ
る。

皿

吉本青司

△ふるいけや
かはつとびこむみつのおと▽
△ドングリ▽
と読み上げられ
大きな皿をもちつた
かえり道
いきげんで皿を持ってあるいた
手にかざすと皿は月のよう
月は
空にもかがやいている 金色に——
夜店でみかんをかうと
ぼくの皿も金色だ
△人工のいろはうつくしい▽
自然のいろはうつくしい▽
ひとりごとを言つてあるいた

ダイニング・キチン

池沢 茂

ぼくたちの家では、お勝手を建て増してか
ら、百貨店の特売日をねらつて、テーブル
と、それに付属したイスを四つ、そろえて買
つた。ダイニング・キチンは、妻の念願だっ
たからだ。ほそながい板の間で、きゅうくつ
だったけれど、いろ／＼工夫して、そのテー
ブルとイスをすえつけ、ぼくたち親子四人、
そこで食事をするようになった。料理を作っ
ても、ちよつと手をのばせば、食卓のテーブ
ルにのせられる。食器を洗うときも、流し場
がすぐ目のまえにある。おさない梅子がおは
んや汁などこぼしても、板の間だから、そう
じが簡単にできる。以前は一坪たらずの、お
まけに土間だったから「便利になつたわ。こ
れまでの苦勞は悪夢みたい……」と妻は喜ん
でいた。しかしこれも、ひと月ほども続かな
かった。これまで家にあつた勉強用の古いテ
ーブルとイス、それにミシン用の小さな丸い
イスは、幸吉が積みかさねたり、そのうえに
乗つたり、うば車みたいに押ししたりして、私
有の「おもちゃ」にしていたが、こんどは、
あたらしい食卓用のテーブルとイスを使いは

じめたからだ。

「ごはながたべられへんから、あかんよ」
「幸ちゃんのイスとテーブルは、あすこにあるやないか。これはごはんをたべるのんやから、貸しなさい」

食事になると、ほくや妻がこもこも言
って、そのイスやテーブルをお勝手まで運ん
でくる。食事がすむと、幸吉はじきに、その
イスやテーブルを動かしていつて遊ぶ。食事
どきになると、ほくや妻がまた、いろ／＼に、
なだめたり、叱つたりして、元どおりに並べ
なおす。あたらしいのを幸吉に与え、古い勉
強用のを食卓として代用してみたりもする。
こんなことをなんべんか繰り返かえしていた。
すると、そのうちに、幸吉はだん／＼言うこ
とをさかなくなつた。なだめても、すかして
も、全然受け付けてくれない。むりに引き取
ると、こちらの気が変になるほど狂いあばれ
る。そのイスやテーブルを積みかさねたり押
したりするのも、ことさらに、お勝手やふろ
場の出入り口でやるようになった。妻がガス
レンジで料理している、そのほうへ、イス
やテーブルを押しやうく。流して食器など洗
おうとすると、たちまち、その場へ移動させ
る。ふろへはいらうとすると、テーブルやイ
スでふさいで、いれまいとする。ことに妻が

断章

浅野 晃

師走の日光は寒くきびしく
人と物とに注ぐ
けれども物はつんばで啞だし
巷はせつせと忙しい
子供たちがそこらにゐて
注ぎに注ぐ赤い日光を
ひろげたのひらに受ける
注ぎに注ぐ日光は
芦がかぶさつた沼や
万年雪の山嶺の上を
しずかにさびしくすぎ
惜しげない捨身の道を
魂の血のしたたりが
ルビーの色に凍る時刻まで、そして
うねりにうねる大洋の上を
木枯しといつしよに消えてゆく
けれども悪と世間とに届こうと
かれは何物よりも足早に
明日の日もやつてくる

残り湯を使って、ふろ場で、せんとくして
ると、ドアのそとにテーブルをすえ、そのう
えにイスを積みかさねて、出られなくする。
以前はテーブルが一つとイスが二つだった
が、あたらしいのと合わせてテーブルが二つ
とイスが六つになったから、これらを積みか
さねられると、おとなでも、なか／＼動かせ
ない。おなじところに並べられると、そのあ
たりは、それこそ足のふみ場もなくなつてし
まう。ときには、へやの通路をふさいだり、
寝るように敷いたふとんのうえに、テーブル
を運んできたりする。このために、ほくた
ち、ことに妻の生活は、すっかり乱されてし
まった。

「幸ちゃんにはきつと、なにか大きな欲求不
満があるんやわ」

「イスやテーブルを取られるので不満なのか
な」

「もつと根本的に、親の愛情にうてるのと
違うかしら。親の愛を妹の梅子ちゃんに取ら
れたと思つて、怒ってるんやと思つて」

「うん、それはたしかにあるなあ。けど、も
つと根本のところは、ほくはやつぱり、幸吉
の収集癖やと思うな。テーブルを自分の寝床
のうえに乗せるのなんか、取られるはせんか
と、寝るまも心配してるんやないかなあ」

「わたしが炊事したり、せんとくしたりする
のをじゃまするのは、わたしに十分構つても
らわれへんので反抗してるんやないかしら」

ほくと妻はいろ／＼と話しあつたが、ほく
には結局、妻のいう愛情の問題よりも、幸吉
の持つて生まれた収集癖のほうが、もつと根
本的に思えた。おさないころから次々と発生
した棒や板ぎれ、ビンのたぐい、カギやクギ
やネジ、マジックインキや切りぬいた紙きれ
等々の収集癖と、おなじ経過をたどっている
のだ。はじめのうちは、たぶんまねごとや見
おほえから、ときには教えられて、なんと
く、それらの物を使って遊んでいる。友達が
ひとりもなく、ほかに遊びも楽しみもないか
ら、物だけを相手にしたその孤独な遊びに、
ますますはまりこんでゆく。やがて家族の迷
惑になり、しば／＼、取りあげられ、借用さ
れる。すると幸吉は、取られまい、さわられ
まいとして、類似のものをすべて手もとに収
集し、異様に執着してゆく。イスやテーブル
も、幸吉はやがて、全部を一か所に集めた。
はじめはお勝手のみずやのまえに集めていた
が、とき／＼気が変わるのか、ふろ場のドア
のまえに移動させたり、玄関のへやへ運んだ
り、居間まで持つてきて積みなおしたり、し
ていた。最後に、寝ているあいだも心配なの

奇妙な思ひに

美堂 正義

昨夜の雨が降り止み

今朝はすがしい初冬の明るい空

ラジオ体操は

東京は雨です室内でも……と云ふ

一瞬不思議な気持ちになる

この狭い日本でも

こんなに気象は違ふものかと

当然のことが疑問に思へる

か、枕もとのすみに積みかさねて、そこが一
定の場所になった。二つのテーブルをなら
べ、そのうえに、六つのイスを全部、二つず
つかさねて置いてある。小型のテーブルみた
いな古い調理台も、のせてある。ほくが日曜
大工で作つた折れた、みのはしや台ばしご
も、集めている。カギやネジ、こわれた目ざ
まし時計、いろんなビンやマジックインキな
ど、さまざまながラッタをいれた木箱も、過
去の収集癖のなごりとして、イスのあしのあ
いだに保管している。倉庫にでもしまひこん
だみたくに、これら全部が居間の二畳を占領
して大きな山をなし、たゞじつと、置かれて
あるだけなのだ。もはや、うば車みたいに押
したり、積みかさねて乗つたりする遊びはし
なくなつたから、幸吉自身にとつても、なん
の役にも立たないように見える。それでも自
分以外のものには、どうしても使わせないの
だ。ちょっと動かしただけでも、気が狂つた
ようになってしまふ。

しかたがないから、ほくと妻は、はじめの
うちは、立つたまま、で食事をした、家のなか
で、立ちんぼのま、めしをかきこんでいる
と、戦災にでもあつてゐるみたい、あわた
ましい悲壯な気持ちになる。家庭らしい落ち
つきや安らぎは、さっぱりなくなつてしま

う。妻もとう／＼あきらめて、もど／＼どお
り、おぜんにした。板の間でも、座ぶとんを
敷けば、すわれないことはない。そうしてし
ばらく続けていると、すこしぐらい不便で
も、すわって食事をするほうが、やはり、し
つくりする。幸吉も、イスやテーブルは積み
かさねたま、放っているから、い、かげんに
執着はなれただろうと「テーブルで、イス
に腰掛けしてたべよか。学園とおんなじやか
ら、い、やろ」とたすねてみると、あわてて
立ちふさがり、さわらせまいと地んだんふみ
ながら「おぜんでたべよ。おぜんでたべよ」
と繰り返した。

半自叙伝の序(続)

田中 克己

愚痴を書くといつたが、うそだらう、とい
ふ人があれば、知己の言だと思ふ。このごろ
自分をよく省みると、途方もないうぬぼれに
気づく。エリート意識——たぶんさうであら
う。しかしそれがなくて、どうして書け、発
表できよう。ただそのうぬぼれが、私の場合
は水統しない。あとに非常な後悔、いなむし
る恥辱感ともなふ。これではあからさまな
自己擁護などできるはずがない。もとより他

死の化石

堀之内 歴

《ミドゥエーの海戦を境にして戦局は
一路敗戦へと忙々であります》
クリスマスイブの夜のテレビが
米軍写す所の古い海戦ヒルムを流す
アナウンサーと 生存兵の一人が出て
当時の実況が語り合われる
蒼古な写真の北海は 寒々と烟るのに
生存兵は朗らかに 当時Vを語る
よそ／＼しいその声は どうしてだろう
オールナイトに向かう男女の群が
盛り場へと流れ沸る巷の端から
逃れるように 私を帰って来た
ジャズもジングルベルも女の嬌声も
未曾有繁栄の成果とすれば
使ひ切れぬ金が行き渡っていることか
《加賀双龍の数百の艦載機も出撃す
前艦の被弾で空しく沈み去りました》
もどかしい攻撃機のボヤけた飛来
ポツリ沈没する大空母の無力さ
一切を単調に終了させる暗い海の非情

おやしらぬおやし

人の批判も社会相の暴露もできさうもない。
しかも私は書きたいのである。書いてしまひ
たいのである。読者諸友にお願ひがある。よ
んで、私のうぬぼれに気づいたら叱つていた
だきたい。まちがひを発見したら訂正して
いただきたい。おまへのことなど詳しくおほえ
てゐるものか、との仰せであらう。しかし私
なら、他人のことはおぼえてゐるのである。
東京へ帰つて来てわかつたことが少くとも
一つだけある。召集になる前、私はたきつけ
に困つてこれまで大切にしまつてあつた手紙
類をもやしはじめた。年賀状からはじめて、
これだけはといふ大切な手紙だけが残つた。
復員して私はそのとつてあつた大切な手紙の
ことを忘れてゐた。思ひ出した時には、紛失
してゐることだけがわかつたのだが、いつ、
どうしてはわからなかつた。私が復員した
時、出迎へた大垣国司、彼がどうかしたの
だ、といふことがわかつたのだ。彼は、私宛
ての朔太郎の手紙をもち歩いた。私宛ての保
田与重郎の手紙をひとに見せた。そして私が
復員して来たとき、私のいまだにおぼえてゐ
る変におぼつた顔で出迎へて、私に「保
管してゐましたよ」といつて返してくれなかつ
た。返しそこんで、そのまま私にとつて、
この手紙類は喪はれてしまつたのである。お

私の頬を涙が伝う あ、何が誘うのか
二十年と云う古写真のチラつきの子
解説アナの硬く冷たい感傷語のせい

北から南 太平洋じゅうで死者達は今も
夫々の日の儘の恰好で海底に横たわり
断ち切られたその日の歴史を

彼らは今でもまだ抱き続けている
《米英Vに殺されたのを恥じている
皇国不敗を信じているが それらは今何
と八愚かな事柄Vに見られることか

野暮ったい旧軍装で八つまらぬ死Vを
今以て死に続けている確乎たる横臥を
二十年後の繁栄はお構ひなしの素通りだ
ジャズでない 讚美歌でない

単純稚拙な あれら軍歌の調べが
彼らの耳で聴きつづけられてゐるのだ
彼等の歴史の千切れた口の前に 私が今
曳き出されており 涙は頬を伝うのだ

彼らの死さえ 今や恥ずべき事だとは
訳しらぬチビが云う「父ちゃん泣いてる」
ジングルベルよ甘く酔え
ジャズよ 八行かせVよ
俺はしらん

一九六〇・十二・二四

天津図書館長

詩集事件

小島信一 著
三〇〇円
東京都千代田区神田神保町一ノ三 世代社

私の日記は、昭和二十一年の復員以後は、
一日も欠かしてゐないが、それまではとびと
びである。軍隊では、隠してつけてゐたが、
天津をたつとき、たぶん西川英夫にたのん
で、その知合の中国人に預けた。そしてその
ままである。しかも私の半自叙伝はこの箇所
からはじまるのだ。どうか、気がついたら誤り
を指摘して下さい。私は低血圧のせいであ
る——これを最近になつて私は知つたのである——
記憶力が弱い。うぬぼれのせいでも、過去を自
分に都合よく記憶してゐるかもしれない。ど
うぞ叱つて下さい。以上を序にして、次から
まあはじめます。

(信頼する服部三樹子さんの卦によれば、私
の運は昭和三十六年から開けるさうである。
それまでは何をしても、むだ骨折りだとい
ふ。私が書いてゐるこの序は三十五年の最後
のものである。むだかもしれない。しかし半
自叙伝はむだにしたいくない。それがまだ書き
はじめない主な理由である。)

小島信一君のこと

小高根 二郎

推し詰つた師走に、二回死にそねた体験
のある小島信一君から、「事件」と題した立
派な詩集が届いた。僕は丁度書いてゐた年賀
状の端に、「君が生きてゐて詩集を出した。
こんなめでたいことはない」と附け加へた。

第一回は確か丸山公園の裏山、手首の血管
を切断して、地面をのたうち廻つてるところを
救はれた。Yの案内で京都市民病院に彼を見
舞ふと、繃帯をした手でドンブリ飯を食つて
ゐた。その恰好を見て若いYは友情として激
怒した。「どうせ死ぬんやつたら、うまいこ
と死ぬね!」。生き返らぬやうな方法を選べと
いふのである。

第二回は僕の任んでゐた洛南宇治のワキイ
ラツコ陵の裏の茶畑であつた。睡眠剤をツ
イスキーで嘔んだらしいが、多量にすぎた嘔
吐して助かつた。警察から電話があつて、黄
槿の病院に収容されてゐる未遂者は貴殿の知
己とのことなのでおいで願ひたい……といふ
のである。出向いてゆくと、韓国人経営の殺
風景な病院の二階で、彼はドンブリ飯を頬張
つてゐた。僕は嚇!となつた。いつも未遂と

月の炎

国弘浩介

白き花みじろぐ冬の日をかさね 日本
海流にたゞよう平和

爆音を遠くひびかせ旅客機の 傾斜が
とらふ冬の感情

どこまでも蚊の送りくる霜の夜 寒念
仏の群れと行き返う

あい寄りてなお生くべしや富士の雪
なだるる空の雲は死のいろ

屠殺さる牛遅々として霜をふむ 冬木
の肌はなべて血のいろ

うとまれて生くるにあらず愛恋の 苦
さに耐えて今日あるいのち

狂いたる女枯野にきてうたう 地をな
めさりし野火のくれない

黄のいろに陽は燃えつつも冬木みな
枯れ落ち歴史の推移はげしく

ドンブリの関連がいけないのである。

「どうせ死ぬ気だつたら、東京に出て、最後の一夜をやつてから死んだらどうだ！」と、僕はどやしつめた。

それから間なし、彼は僕の忠告に従つたか東上した。横浜あたりで日傭をやつてるところで、生れて初めての彼の労働の体験を祝福してやつた。その後、僕は第二詩集「郷愁」を出して、その出版記念会が新宿で開かれた。すでに東京に出て生活の基礎を築いたらしい彼は、その発行人役を買つて出てくれ、進行係まで勤めてくれた。

彼の生活や思想がすっかり健康になつたので、「果樹園」を創刊した時も同人に誘つた。第二号に「ねそべりの詩論」を書いてくれ、八夢が実現するという事はある。僕はそういう事を体験しただけでも、生き延びた意味があると思つた。と、蘇生の辯を書いた。詩集「事件」に光つてるのは、その蘇生者の着眼、死から逃げ戻つた者しか持合せてゐぬ横着で厚利な眼だ。居住者が拉致されても判らぬ「公団」住宅の不安。やられる前にやツつける武器「ジェット機」の代金一億を稼ぐためにあくせくした国民の勤勞。現代の何時何処にも仕掛けられてゐる「見えない銃座」。これらうらかりを月火と決り出す。

編輯後記

十二月十三日。都立大学専攻長矢野永積先生から激励のお葉書をいただいた。第五十八号の拙論で伊東が非常に珊瑚集に影響されてゐた事実を吃驚されたといふのである。先生ほどの大家で、未熟な僕達の愚論を精説して下さる学問に対する真率さに、敬礼申しあげます。十二月四日。大朝の「一九六〇年関西詩壇の歩み」で、拙誌の安心した方々に感心した。とあつた。本号で五巻を完結したのであるから、当然さう見えるかもしれない。

十二月廿五日。福地邦樹氏と一緒に伊東静雄全集の書籍校正を終了した。これで詩、散文、日記、書簡をすべて校閲したことになる。二月上旬には店頭に出る予定である。汎く讀者の御批評を願ひあげる。

三十六年元旦。年賀状で早大村上菊一氏、川副国基両教授より激励の御言葉をいただいた。いよいよ期待にお応へしたい。

果樹園 第六十号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年二月一日発行

池田市野町一六八

編輯兼 小高根二郎

大坂市東住吉区桑津町五ノ八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園社

定価 三十円

果樹園

第61号

わがひとに與ふる哀歌 小高根二郎
調 味 吉本青司
小さい時間 堀之内
月 美堂正義

足音 萩原葉子
大阪の夕暮 福地邦樹
無条件降服 田中克己
ぞうきんがけ 池沢茂
ヘリック詩抄 森亮
渚 浅野晃
堀之内君のこと 小高根二郎
編輯後記

わがひとに與ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄(五十一)

小高根二郎

伊東は五月中旬、次のやうな書簡を、「文芸文化」の清水文雄氏に出してゐる。

「お手紙拝見しました。色々考へましたが、決局、保田君の暗示以外に出れさうにありませんので書く元気がありません。いつも不義理で、どうぞ悪しからず。」

(昭和十四年五月十四日堺より東京市世田谷区(祖師谷二丁目)日本文学の会清水文雄宛はがき)

この書簡は、蓮田善明が応召以後「文芸文化」の編輯をやつてゐた清水氏が、七月号に「現代の詩人」といふ題で執筆を依頼した際

の返事である。伊東は保田与重郎氏の暗示以外に出られない……と執筆を断つてゐる。いよいよ珠玉を求めることが急であつた伊東にとつて、評論といふ散文なぞ瓦礫にひとしかつたからだらう。伊東にとつて詩は生理だつた。飯を喰ひ糞をする生理と同じだつた。現代の詩人がどんな飯を喰ひどんな糞をしてゐるか？、糞をすべきであるかなぞといふ解説は、いやだつたのである。ちなみに、この月熊本の託摩野で初年兵訓練をしてゐた蓮田中尉は、中国の野戦に渡つたのである。

伊東は翌六月の「コギト」に、次の二作品を発表してゐる。

夜と昼

柳

やま吹の 咲きぬる垣ねのへに やなぎ
は幾日は ちりにし穂状花ぞ
葉をもるしろきひかりに交はりて
わが取りおとす 堪へごころ ひとに知られず

春をよろこぶものの目に 朝かげと
夕陽のひかり目立たぬ季節なれ
山吹はいつか移りし 卯のはなのいまし
ろき 垣へを
柳はおのれき揺れつつ 青くかすかに照らすなり

かかるとき かかるころの 玉ゆらの
青きかげに
誰れか驚きて見入らざらん
ながとし月 過計の心われより奪ひに
し

かの 奇しくあかるきおもかけぞ そこ
に立てれば

燈台の光を見つづ

くらしい海の上に 燈台の緑のひかりの
何といふやさしさ

明滅しつつ 廻転しつつ

おれの夜を

ひと夜 彷徨ふ

さうしておまへは

おれの夜に

いろんな 意味をあたへる

嘆きや ねがひや の

いひ知れぬ——

あゝ嘆きや ねがひや 何といふやさし

さ

なにもないのに

おれの夜を

ひと夜

燈台の緑のひかりが

彷徨ふ

第二詩集「夏花」

前作「夜と昼」は、六月の夜と昼のあは
ひに、萬象のこれは自ら光る明るさの時刻、
逐ひ逢はざりし人の面影……と、二年前に
歌った「水中花」の再現であり、後作の「燈
台の光を見つつ」は、明らかに一年前の「夕
の海」の連作である。

この新旧二作をそれぞれ比較してみると、
そこに、一種の解体作業ともいふべき意識
的な用語の柔軟化を発見することができる。

或ひは、伊東が発足以来……抱懐してきた古
今和歌集に主体されてゐる日本でのパラドキ
シカルな肯定の抒情と、リルケを中心にした
現代独逸の詩精神に影響された西歐的な譬喩
的抒情とを、和漢朗詠集に探つた対応の形で
こゝに取り出してみせたとも考へられるので
ある。こゝに、日・独の詩精神を象つた二作
を対照的に同時発表をしてゐるわけは、前述
した解体作業であるといふより、それを一つ
に融合する前の一種の稀釈であつたとみるべ
きだらう。なぜなら、この二作を発表した翌
「コトギ」七月号に、その稀釈から融合に成
功したとみられる絶唱——最初に西歐を超克
した詩人としての矜持を歌つた「燕」を発表
してゐるからである。

又、この二作は、さうした意味からだけで
なく、私には印象的であつた。私事にわたつ
て恐縮だが、伊東のこの二作と一緒に拙作「
通天閣にて」が「コギト」六月号に上梓され
た。私はこの「通天閣にて」で初めて詩人と
して伊東に認められたからである。
六月中旬、伊東は次のやうな書簡を、富士
正晴氏に出してゐる。

伊東静雄全集

全一冊 豪華決定版

桑原武夫・小高根二郎・富士正晴 共編

井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄の
ところから出発しなければならず、しか
もまた結局はそこに帰って行かなければ
ならぬであらう。」と絶賛。三島由紀夫
氏は又「私の青春の師」とたへた。ま
こと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に繼ぐ
日本現代詩の正統。その詩精神は古今ナ
、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集
を経てこれを超克し、現代詩として初め
て西歐の詩歌に一步も譲ることのない高
峰を形成した。

【詩集】 既刊詩集の萌芽をなした未刊
童話山科の馬場「名品」今年の夏
のこと「水晶観音」其他を含む 【論文】 論文
「子規の俳論」伊東の詩精神を
【書簡】 「わがひ
解明する」談話のかはりに等 【日記】 未発表の日記
【日記】 未発表の日記
【日記】 未発表の日記
【日記】 未発表の日記

★菊版上製函入 ★三六頁 ★定価三〇〇円

京都市（中央局区内）仏光寺通高倉西

人文書院

振替 京都市一〇二番

「お手紙うれしかつたです。このごろはあ
まりわたしの詩読んでくれてる人もあるま
いと少しさびしく思つてゐたところでは
うれしかつたです。ところが、京都のぐ
ろりや、そさえてといふ本屋が再興して、
日本浪漫派叢書を出すさうで、わたしの詩

集もその中に入れたいと云つて来ましたの
で、目下旧稿整理中です。七月の終りには
お手許まで差上げれること、思ひます。
その折はどうぞよんで下さい。
身体大切にして下さい。
（昭和十四年六月十四日堺市北三国ヶ丘町四〇より京
都市左京区吉田上大路六小沢方富士正晴宛はがき）

調味

吉本青司

藤のはなびらを
テンブラにして食つたことがある
海辺の色にそまつた
酢がきの味も忘れられない
すべて即席のあじわいは
イキを大切にす

近所の青年にたずねたら
ハシブイ……
魅力でしょう コンスタントな▽

イキとシブイと どう違う
インスタント
コンスタント
そして本物と似せ物と

ところで 昨日
道ゆく青年のしやべつたことは
ハシブイ▽

日本へ来たデュアメルは
鮭の燻製と
柿を好んで食べたという
だけだ 日本の
パンは食べなかつた

燕

おそらく、富士氏が「夜と昼」「燈台の光
を見つつ」の読後感を伊東に書き送り、これ
はその礼状であらう。融合を前にしての稀釈
を意図したこの二篇の詩が、若い詩人の富士
氏に好尚されるとは、夢にも想はなかつたに
相違ない。よほどうれしかつたのである。末
尾には、第二詩集「夏花」の企劃が、次第に
具体化してきた事実が語られてゐる。

翌「コギト」七月号に、伊東の絶唱中の絶
唱——第二詩集「夏花」巻頭を飾る「燕」が
つひに発表された。前号二作の日・独の詩精
神の稀釈の経過を経て、こゝに渾然と融合し
て稀有の傑作に結晶したわけである。

門の外の ひかりまぶしき 高きところ
に 在りて 一羽

燕ぞ鳴く
単調にして するどく 響りなく

あゝ、いまこの國に 到り着きし 最初

の燕ぞ 鳴く

汝 遠くモルツカの ニュウギニヤの

なほ遙かなる

彼方の空より 来りしもの

翼さだまらず 小足ふるひ
汝がしき鳴くを 仰ぎきけば
あはれ あはれ いく夜凌げる 夜の闇
羽うちたきし 繁き海波を 物語らず
わが門の ひかりまぶしき 高きところ
に 在りて
そはただ 単調に するどく 夥りなく
あゝ、いまこの国に 到り着きし 最初
の燕ぞ 鳴く

第二詩集「夏花」

こゝにはもはや、説明や、解説や、寓意の影さへも認められない。たゞ、この国に一番最初に到着した燕が一羽、凱歌のやうにビチ！ビチ！ 鳴いてゐるばかりである。その声音の八単調にV八するどくV八夥りなくV振幅する音波こそ、この国の詩歌が傳承するひびきそのものであるのに氣附く。

こゝには、伊東が詩に発足以来……ひさしく対応を求めてやまなかつたリルケの片鱗もない。その対応の境涯から身ぐるみ脱出を終へて、やうやく日本の現代詩として、この国の古典に対しても一歩も譲るところのない境地に到達したのである。

頼原退蔵博士も、伊東はこの「燕」に於い

て、芭蕉のいはゆる「句と身と一枚になる」境地に到達した……と、卒業論文「子規の俳論」以来の交渉とその歷程を回想されて激賞したのである。

「彼の卒業論文に於ける堅実さが、更に正確なそして豊かな観照となつて言葉の底に光つて居る。巻頭の「燕」の一篇は、彼のさうしたたしかな足取りを最もよく示して居るであらう。「単調にして するどく 夥りなく」といふ一行の中にも、最初に渡りついた燕の声に対して、作者の心がいかに動きのない確さをもつて居るかは見られる。それは観照といふよりも、寧ろ燕の声の中に投げ入れられた作者の心自体の表現である。私はそこに芭蕉の所謂「句と身と一枚になる。」境地を思はず居れない。作者の歩いて来た道は、やはりこゝを過ぎして居たのであらうか。習俗への作者の烈しい反撥はひとり狐疑の道を辿つて遂にこの境地に到つたのだ。」

（昭和十五年「ゴキョ」七月号、頼原退蔵）

（伊東静雄君と詩集「夏花」）

頼原先生がこゝにいふ「句と身と一枚になる」芭蕉の境地……とは、原典がさだかでない。東大出身ではあるが、後年京大の頼原先生に師事した清水孝之氏（高知女子大教授。頼原退蔵校註「与謝蕪村集」増補考）の解釈

月

美堂正義

あなたに見送つて戴いたとき
月は晴れた冬空に澄んでゐて
道は真白い帯のやうに輝いてゐたが
その月がいま南紀の海の上に
寝不足の眼に眩しいくらい
車窓の硝子越しに冴えて
鋸状の切り立つた崖の小島が
私の故郷の風景とは違つた相貌で
海岸の砂浜の向ふに浮んでゐる

あれから六時間しか経つてゐないのに

に従ふと、「松の事は松に習へ。竹の事は竹に習へ」といふ赤冊子（服部土芳著三冊子）が伝へる芭蕉の遺語の精神を、頼原風に解釈したものであらう……といふ。つまり、「芭蕉の風雅は私意私情を去つて造化に依ることをその要諦とした。即ち自然と同化する事であり、それは現実への最も深い観照に立つものと言ふ事が出来る。貞門・談林以来単にをかしみとのみされた俳諧の卑俗が、この深い観照によつてさびにまで止揚された。田螺をとる鳥に春雨の柳と同じ美が見出されたのである。その意味で芭蕉の俳諧は常に現実から離れて居ない。さびの理念は対象を想化するものではあるが、それはあくまで現実を諦視する心境の統一として求められた。所謂句と身と一枚になる境地である。」（村元文庫、頼原退蔵著「蕪」）
この頼原的な解釈によれば、伊東は「燕」一篇によつて芭蕉のさびの境地に到達したと言へるであらう。

伊東は絶唱「燕」を発表してから、次のやうな書簡を富士氏に送つてゐる。
「お葉書有難う。広告の件ですがね、あれから本屋との交渉ごについて、目下いつ出るか、又果して出るか否かも不明といった状態です。ほから又一軒豪華華版出すとい

小さい時間

堀之内 歴

補装のない駅前広場に入つて来る俾は砂塵揚げに往々に威力を誇示し怪体に尻揺つて 哄笑を残してゆく片隅で 靴修理屋の風除け戸板は 昼間 彼の過去の年月へ回顧的すぎる今では困むものではなく、むしろ 砂塵を吸ひ込んでいる 板面に消えたペンキの痕跡の呪文が 色わるい水膨れの靴屋の親爺さんを 避け難い魅惑でひきよせている かくて終日 砂かぶりの塑造羅漢となる

靴は履き捨て 靴盲目の世だ そうな 灯がつくと居なくなる親爺のあとで 戸板は 宵の逢曳きをやわらかたに 囲み 更けて威儀正しく 酔客の放尿を迎える
一九六一・一二四

ふ本屋が昨日あらはれたりしてこんとんとしてます。そんな風ですから、広告しはらく見合はせて下さいな。深切に云つて下さるのにすみません。しかし近日中に原稿きれいに編輯して、あなたに前以てみていただくつもりであります。学校無暗にいそがしく閉口してゐます。二十日は午後四時ごろが、です。待つてゐます。

天氣がひどく激しいから健康に氣をつけねばいけません。昨日珍しく「日本歌人」(註・前川佐美雄氏主宰の)といふ雑誌の歌の会に出たら、みんなむやみに浪漫派とかローマン的とか云つてうれしがるので癪にさはつて、くそみそにののしつて自分ながら氣が変になつたんぢやないかと思ひました。尤も部屋が殺人的に暑かつたせいもあるでせうが。」

(昭和十四年七月十日堺市北三国ヶ丘町四〇より大阪市西成区鶴見橋通四丁目富士正晴宛はがき)
この書簡の冒頭、第二詩集「夏花」の広告を富士氏の「三人」がやらうといふ申し出に對し、出版書肆がぐろりあ、そさえてになるか、或ひは子文書房になるかしかとせぬことを詫びてゐる。

訂正・第五九号拙論中大倉正雄(忠一郎)とあるは誤謬・正雄は忠一郎の弟である目、林富士馬氏より教示をいたした。

足音

萩原葉子

家の前の砂利道が補装されて、歩く人の足音がめだつて高く高くなった。

夏の夜などは、かなり遅くまで足音が続いて、のんびり涼をたのしみながら歩く様子がその足音でわかる。子供連れの賑やかな足音もあれば、若夫婦が何かを小声で話しながらの幸せそうな足音もある。だらしなくガラガラとサンダルを引きずって、私の神経をいらだてる足音もある。

冬になると、これらの足音は急にせわしなくなつて、一刻も早く我が家にいそぐ響となり、やがて寒に入るころは駆け足に変わる。夜道に乾いたカラカラという高い音は、道路に薄氷が張っているかと思うほど、はりつめて聞こえる。夏のころの賑やかな行き交いは寒さと共にまばらになつてゆく。

足音も絶えた寒い深夜に、糸を引くような哀しいチャルメラが静かに通ることもあるが、それを呼びとめる声をまだ聞いたことがないのも、この辺は住宅地のせいだろう。が、

ガタビシと車を引き「石焼いも」と節をつけて呼び歩く車の後からは、いかにも寒そうなお走りで追いかけてくる女の下駄の音が、ちよんちよん家の前あたりで止る。

毎夜この誰とも分らない人たちの足音は、どこからともなく近づいて来てはまた去つてゆく。深夜に私を訪れる人も帰ってくる者もないのにながし胸さわぎを覚えるのはなぜだろう。期待と恐れや悲しみとで行き交う足音を聞いていると、時折の夜は、足音は家の前で止まり、呼ぶ声は借家の若夫婦である。「明日から暫く旅行に出るので後を頼みます」とか「家賃を納めに来ました」の声がかかり、しかしすぐ足音を残して二人は帰ってゆく。そうしたなかでなお、足音は続いてゆく。だが、いつもひとつの足音に私は緊張させられている。急ぎ足かと思うとまた歩調をゆるめ、高く低くその靴音は乱れる。中年過ぎの女の疲れた足音らしく、遅い夜の同じ時刻にしのびよるようにその音は近づく。子供を残して無理な務めに出ているのだろうか、待つ人のない家に疲れて帰ってゆくのだろうか。その靴音は私の幼い遠い日の母の記憶へとつながってゆく。

夜中に目を覚ますと母はいない。がらんとした怖い家に泣きながら母の帰りを待って、

耳を澄ますと無気味に静まった道路に、カラカラと乱れた靴音が近づき、私は犬のように

ひとつの足音を嗅ぎ分けるのだった。帰って来ない母とも知らずに、幾つかの足音に期待

大阪の夕暮

福地邦樹

西の空はオレンジ色で

大阪の夕暮に

紫の煙がのぼる

終日うめきつづけた巷の声は

いま疲れて

夜の静にはいろいろとする

オフィス勤めの人は

そそくさと帰りをいそぎ

道ゆく人の流れは速くなる

夕刊を売る声

まだ人目を惹かぬネオンの赤青

それらが

ひとしきりの賑わしで抗ってみるが

暮方の空から来る静けさには

勝てそうにもない

私はどちらの気分か

身を任してよいかわからず
それでも

人の流れのなかに
歩みを進ぶ

富める日に

朝日会館で

フランス映画「美しき争い」を観る

コリンヌ・リュシエールと

アニイ・デニコオとが綺麗で

美しくて良い映画だった

観客は少なかつた

帰りにフランス・ジャム詩集を買う

今日は 僕

何だか金持だった

そして夕刊まで買っちゃう

そうだ 今夜は働きに行かんでもいいの

だぞ

又そう思つてみる事で元気づき

映画の名残に頭をふらふらせながら

駅と反対の方角に足を向けた

(初期詩集より)

私の国語教室

福田恆存著

現在の国語改革案の単なる批判にとどまらず、国語の本質と成りたちとを深く分析し、国語の純正と合理性とを追求する！ 国語教育にたづさはる人々にはもちろん、正しく文章を書かうとする人々にとつても必読の書！

- 第一章 「現代かなづかひの不合理
- 第二章 歴史的かなづかひの原理
- 第三章 歴史的かなづかひ習得法
- 第四章 国語音韻の変化
- 第五章 国語音韻的特質
- 第六章 国語問題の背景

定価 三四〇円

東京都新宿区央米町七一

新潮社

振替東京八〇八番

国語協
問題議
推薦会

と悲しみとを味わい続けた夜、夜。

それからまた悲しい足音だが、耳を澄ますともうひとつの足音が、深夜に酔いつぶれて帰ってくる父の足音が、ふと生々しく聞こえてくるような夜もある。さまざまな足音のなかでも一番寂しい足音である。まるであやつり人形の危がなかつたさで、あえぎながら、石につまづきながらのあの足音は、もう決して聞くことのできない足音でもある。

柏子木を敲いて、ひとしきり賑やかに夜警も行ってしまつと、急に静かさが恐しくなることがある。どんな足音でもよい、それが人間の足音ならばと思う静かさになる。そんな時、私はひとつの足音を待ち続け、今では耳を澄まして待つ足音もないことを忘れていたのである。

無条件降服

田中克己

昭和二十年八月十五日、私は北支派遣独立警備歩兵第四九大隊(宇田川部隊)の第四中队(荒木隊)の二等兵であつた。河北省の唐県に駐屯するこの大隊の本部の情報室付を命じられて、ただ一人の二等兵として、情報室

のあらゆる雑役と情報整理とをしてゐたが、この日のたぶん夕方、無電班の一等兵が私を呼びに来た。珍しいことでもあり、拒むことも出来ないもので、ゆくと、「無電で君が代を傍受した何だらう」といふ質問である。

私は即座に答へた。「ソ連への宣戦布告だと思ひます」。ソ連軍が満洲と内蒙古へほとんど入つて来てゐる、といふことを、私は二等兵ながら知つてゐたのである。満洲には日本軍の精銳がゐる。少くともここ北支よりは良い兵隊がゐる。私はさう思つてゐた。といふのは、私たちの部隊は新しく編成された、各地からの寄せ集めであるが、満洲へと異動した部隊の補充として、内地から召集された私を最年長とする昭和九年度の第二国民兵役といふ、おそろしく悪い体格の大阪人が、二等兵の全部だつたからである。その満洲軍がなんらなすところなく、ソ連軍の侵入を許してゐるのは、天皇の宣戦布告を待つてゐるからだ、といふのがこのころの私の考へであつた。

無電班の兵隊たちは、私の判断に同意して解放してくれた。そしてこの私の判断は、すぐ隊内にひろまつたと見える。小林俊文伍長が私のところへやつて来ていつた。「田中、今夜、酒を飲まう。」私は同意して、酒の肴

として塩豚を買つて来た(と思ふ。私はこの小林伍長と義兄弟の約束をし、彼から当時の金としては大金の五千円を預つてゐたのである)。

酒に弱い私はすぐ酔つた。小林は独酌でやつてゐたが、この頃、毎夜、敵がやるマイクでのアナウンスを聞くと、立ち上つて、「うるさい。止めて来る」といつた。私はねたま、「止めて来い」といつて、それからうとうとした。小林は河南省の開封から召集されて来た予備役の下士官で、年は私よりは若い、やはり三十歳を越えてゐたらう。見事なあごひげをはやし隊内で誰しらぬ者のない特異な存在である。開封で何をしてゐたかは知らないが、皆から畏敬されてゐる。今夜の酒もそんなわけで、どこからか手に入れて来て、就寝時間後に、あかあかと燈をつけて飲んでゐたのである。

二人がかはした会話はおぼえてゐないが、ソ連への宣戦で「世界中を敵にまはしたな」と私がいふと、彼も「世界中を敵にまはした」と同意した。そこへ中共軍からのアナウンスだつたのである。これは城内の中国人に対するものか、或ひは私も日本兵へのものか、私にはわからない。中国語の出来る小林にもわからなかつたのだと思ふ。毎夜ガア／＼

ヘリック詩抄 (四)

森 亮

ダイアニーミに

星のやうに自分の空をもつて輝いてゐるふたつの瞳を

恋人よ、あなたはひどく自慢にしてゐる。男心がどれもこれもわが虜になるのを眺めながら
自分は無傷でゐられる情らしいあなたの心恋ひ慕ふ風を程よくあしらつてゐる房々した髪の毛―
あなたはわが身の徳を余りにも自慢にしてゐます。

でも、お忘れなく。あなたの耳を飾るルビ

1は
それはいつまでも宝石の紅い色で匂ふので
す
あなたの柔らかい耳たぶの先から離されて
からも、

あなたは美しい世界が跡なく消えたの
ちまでも。

ヂュリアの息

そら、大きく息をしてごらん、え、もう一度、
さうですよ、ヂュリア、わたしは誓つて言ひます、
あなたの吐く息からは東邦のあらゆる香料の匂ひが、
ほのぼのと立ち籠めてくるのです。

ヘリックの詩集には女性に關係のある詩が非常に沢山入つてゐる。多くの場合、彼女たちはヂュリア、アンシア、エレクトラ、ダイアニーミ、セルヰアといふやうな古典的な名前で標題に現はれ、又は詩中に歌はれる。それらの名前にはそれぞれ特定固有のモデルがあつてもよいはずであるが、實際はそんなモデルの存在を疑ひたくなるくらいヘリックの取り扱ふ女性には余りにつきりした個性を示してくれない。極端な言ひ方をすれば、彼女たちはこの詩人が好んで歌ひ上げた蓮や桜草のやうな自然の景物と大して変らない。それだけに深みはないが、美しいことは美しい。「ダイアニーミ」は作品一六〇番「ヂュリアの息」は一七九番である。

ときこえるばかりなので、不審に思つてゐたのを、この夜は、止めにゆくことになつたのである。

ぞうきんがけ

池 沢 茂

(半自叙伝)

二年生の二学期がおわりに近いころ、ぼくがひるから、学園へ参観に出かけてみると、幸吉はたいてい、先生やクラスメイトといっしょに、教室のそうじをしていた。おひるの給食がおわつたあと、まず、めい／＼の机とイスを壁ぎわへ片付け、テラスのすみから、ぞうきんを一枚ずつ取ってくる。それから、水道が並んでいる洗い場でぬらし、ゆかのぞうきんがけをするのだ。なかには、はか／＼しんでできない子もある。ぞうきんを水で洗い、しばって、使いやすく四角にたたむという動作が、幸吉にも、なか／＼おぼえられない。それに、ぞうきんの取りあいをするとき元氣な子に突きとばされたりすると、急に力が抜けて、テラスや廊下で、ひとり、ほんやりしている。

「幸ちゃん、幸ちゃん！、幸ちゃん！」
先生が声を張りあげて、三べんも四へんも

呼び、手をとって引っぱるくらいにしなれば、仕事にかゝらない。仕事にかゝっても、一段落して、ぞうきんを洗い、しばって、むところ、また、つかえてしまう。

生徒にはなるべく自分の力でさせなければならぬ。以前のように親のそばへ引ついでくるようになったら、これまでの進歩がむだになってしまう。しかし先生は、三人が一堂クラスずつ、それ／＼十人ほどの生徒を受け持つてゐるので、ひとりにだけかゝつてゐるわけにいかない。みな若い女の先生で、ほかの学校には見られない匂ひが満ちてゐるけれど、ことに丈夫で張りきつてゐる幸吉の先生も、ときにはやりきれなくなつてしまふ。ぼくも見かねて、洗い場のあたりでほんやりしている幸吉のそばへ、手つだいにゆく。

「とうちゃん、しばってあげよ。こうして、もんで、水で洗つて、洗つたら、二つに折つて、ぎゅっと、しぼるんやな。しばつたら、ひろげて、また二つに折つて、もう一べんた、んで……な、これでい、やろ。こんどは幸ちゃんが自分でやつてみ」

「かあちゃんおうちにおるか」

ところが幸吉は、もし／＼したようすで、ぼくを見あげ、こっそりとたずねるのだ。なにか重大な秘密を相談するときみたいに、目

が熱っぽくうるんでいる。

「かあちゃんはおうちにいるよ。ちゃんとす番して、幸ちゃんを待っててくれるよ」

ほくは幸吉を安心させようと、なだめるように答えた。やっぱり母親のことが一番気になるのだな、ことに、なれないぞうきんがけなどさ、れると母親のありがたさに甘える気持ちわきおこってくるのだなあと、ふつうの子と変わらない幸吉の心情に、はっと目を見張る思いだった。ところが、これは間違っていたのだった。この答えを聞くと、幸吉の顔は不意にゆがみ、不安にいらだち、いまにも泣きだしそうに、じり／＼して、頭ごと、からだを押しつけてくるのだ。幸吉が家を出て学園にいるあいだは、だれも、母親さえも、家に残ってはいはならなかった。

「たからも」のイスやテーブルが、家の座敷に、積んであるからなのだ。梅子と友だちになって近所のトミコちゃんやマチコちゃんも、遊びにきていてはいけない。座敷をほうきで掃くと、イスやテーブルを、動かしたり、さわったりするから、そうじをしてもいけない。家のなかにだれもおらず、支閥の戸にカギがか、つておれば、イスやテーブルが元どおりに維持されるから、一番よいのだった。

渚

浅野 晃

人知れぬこの渚で

ある日やさしい乙女が

乙女の必死の腕が

見知らぬ若者のいのちを救った

若者は救はれたが

乙女は波に吞まれて消えた

若者が意識を取戻したとき

乙女の姿はどこにもなかった

人知れぬこの渚で

ある日かがやく天が

あふれる光をそそいだ

いまもさうであるやうに

地図をこらん

荒涼たるこの海岸線を

どんなに探しまわつても

これの渚が見つからうか

さうした事実があつたといふことは

誰かがそれを見たということだ

それを見てゐたものがある

見てゐておぼえてゐるものがある

それが誰であらうとも

わたしの信じるのはそのものだ

どんな場所でのどんな出来事も

このものは見て忘れない

堀之内君のこと

小高根 二郎

過日、神戸の池沢茂氏からの書簡に、堀之内歴はまだまだ隠してゐて人に見せない才能を秘蔵してゐるやうだと言つてきた。なんでも彼から原稿用紙十枚ばかりの長い手紙がきて、それに果樹園小隊のことが述べられてゐたが、卑屈と自嘲の中に光つてゐる眼光と偉倣さに、感心したり呆れたりしたといふのである。

即ち、小隊の編成は、小高根部隊長（実は予備中尉）、福地下士官（万年下士官）、ア

学園へ参観にいったときだけでなく、バスのおり場まで迎えにいったときも同様だった。バスがとまると、幸吉は先生に言われるまでもなく、ひとりでおとなしく、さっさとおりてくる。引きずりだすようにしなければ下車しない生徒もあるから、この点は、たいへん成績がよかつた。ところが、おりてくるなり、バスには背中をむけたま、「かあち

ちゃんおうちにおるか」「おそうじしたか。ほうきで掃いてるか」「トミコちゃん、マチコちゃん、あそびにきてるか」「支閥にカギかかっているか」などと、こつそりと熱っぽく、たずねはじめるのだ。バスからおりると、先生は「さようなら」となんべんも声をかけて手をふり、それに対する応答を期待する。幸吉はいちばん近距離で下車するふたりのうちのひとりだから、つゞいて乗ってゆく多くの生徒たちが「幸ちゃん、さよなら」「幸ちゃん、さよなら」と窓から手をふって、しきりに呼びかける。これにも当然こたえなければならぬ。ほくはハラ／＼して「さ、先生にさよならを言いなさい。お友だちにさよならを言いなさい」と責めずにいられない。それでも幸吉は「たからも」のイスやテーブルのことが気になって、気になって、それどころではないのだ。あいかわらずほくのほうを見つめたまま、しかたなしに背中をのうへ手をまわし、うしろむきに、おしりのあたりで、ちよつと手をふる形をするくらいがせい／＼だった。

ほくはあわてて、とにかく幸吉を安心させようと「かあちゃんは市場へ買い物にいらつてよ」「おそうじはまだしてないよ。幸ちゃんがうちへ帰ってからするって言うてた

ず会つてゐるが、覚めてゐて睡つてをり、睡つてゐて覚めてゐるやうな男だと感じてゐた。初稿は彼がやつて、僕は責にする前に立ちあふのであるが、僕が補正しなくてはならぬのは、本文の8ポである場合と同じほど、四号明朝の標題であつたり、五号明朝の作者名であつたりするからである。もつとも彼の近視、或ひは乱視はきついため、活字が大きければ大きいほど見にくいことがあるのかもしれない。

今度、誠信書房から「道元禅」第四巻が出たが、その「道元禅と情操生活」の項に、堀之内君は「道元禅師と詩」といふ文章を書いてゐる。彼が道元禅に造詣が深かつたなぞとは、この本が出て初めて知つたことであるが、私の堀之内君も正鶴とまではいかななくても狂つてゐなかつたのに安心したのである。「覚めてゐて睡つてをり、睡つてゐて覚めてゐる」と僕に感じさせたのは、まさしく堀之内君の忍術——只管打坐しかんたざに精進した道元禅の功德の顕現だつたのだらう。つまり、覚睡一如だつたにちがひない。

堀之内君はその文章の中で、「正法眼蔵坐禪箴」「道元禅師清規集」「現成公案卷」「山水経卷」「有時卷」等から、道元禅師の詩人的骨格を探りだしてゐる。彼は詩形の偈や

道元禪 第四巻生活

文学博士 飯田利行 編

- 一、自然と人生 飯田利行
- 二、無限の向上
- 三、人間の關係
- 四、僧堂生活 酒井得元
- 五、道元禪と在家生活
 - イ道元禪と在家生活 井上耕哉
 - ロ道元禪と一經濟学者生活 笠森伝繁
 - ハ道元禪と大学生生活 堀正邦
 - ニ道元禪と高校生生活 下平巖
 - ホ道元禪と農民生活 太田浜二郎
- 六、道元禪と情操
 - イ道元禪師と詩 堀之内歴
 - ロ道元禪と俳句 松野自得
 - ハ道元禪と書 横江知彦
 - ニ道元禪と建築 横山秀哉
- 七、道元禪と健康生活
 - イ道元禪と健康生活 西勝造
 - ロ道元禪と柔道 三船久藏
 - ハ道元禪と剣道 飯田利行
 - ニ道元禪と食事 井舟万全

誠信書房 振替口座東京一〇二九五

果樹園六十一号 昭和三十六年三月一日発行(毎月一回二日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

短歌集「傘松道詠集」からでなく、前掲の散文から詩人的骨格を探りだし、それが素人に詩として判りやすくするために、特に行に並列して掲げて見せ、親切な解説を付けてゐる。俗塵に埋れてゐる僕にも、「現成公案巻」の次の詩骨にはなるほど感銘させられた。

仏道をならふといふは、自己をならふなり。

自己をならふといふは、自己をわするるなり。

自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。

自己の身心、および己の身心をして脱落せしむるなり。

……中略……

これこそ道元禪が本命とする只管打坐の精神なのだらう。成仏の姿であり、無念無想の本尊……といふわけだらう。

かうした境涯から堀之内歴君の人物を見直し、作品を読み直すと、池沢氏が「まだまだ隠してゐて人に見せない」エトワスがありさうな気がする。直截にして光を放つ何か確かに彼の作品の底にある。然し、第六〇号の田中通義君の詩のひどい誤植の例を再び繰返さぬやうに、彼の覚睡一如の茫々漠々たる只管打坐に、僕は時に喝を入れて、校正の正確な俗務に引戻さねばなるまい。

編輯後記

一月五日。正月休で版販した斎田昭吉君に数年前ぶり出会つた。同じ伊東の教へ子だつた時事通信の面谷君も一緒だつたので、ひととき伊東の懐旧談に花が咲いた。

一月二日。島尾敏雄氏の年賀状に、ちかごろ池澤氏の作品をていねいに読んでいる旨の記述があつた。富士正晴氏も愛読者の一人だが、池澤氏の作品は文学的価値にとまらず、精神医学的にも貴重な文獻である。

福田恒存氏のところで消息を知つた十数年前に前田純敬氏から便りがあつた。引續き手術後の写真も送つてくれたが、病院時代の伊東ではあるまいかと疑つたほど、面影がよく似てゐた。

一月五日。大朝の詩集誌評で第五九号の吉本青司氏の「櫻的」がとりあげられた。近頃の彈力的な氏の抒情は讀者間での定評となつてゐる。

一月二日。福田恒存氏から「私の國語教室」、伊藤信吉氏から「萩原朝太郎年譜と参考資料」をお送りいただいた。兩者とも著者な僕には学ぶところが多かつた。

一月二日。淀野隆三氏が突然動機先に来訪され、その上激勵の言葉をいただいた。十年ぶりの出会となつたかと思つた萩原葉子さんを新聞人として迎へた。定評ある隨筆を連載される。お期待がひいた。

年頭から、すべてなつかしいひととおもふひとが、みんなかへつてくる。まるでほのいふきのやうだ。(〇)

果樹園 第六十一号 (毎月一回二日発行)

昭和三十六年三月一日発行

池田市野町一六八
編輯者 小高根二郎
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園六十二号 昭和三十六年四月一日発行(毎月一回二日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

果樹園

第62号

わがひとと興ふる哀歌 小高根二郎
冬 至 堀口太平
しかも突然に 吉本青司
無条件降服 田中克己

夜の歌 森亮
卒業生に 福地邦樹
ひもで結ぶ 池沢茂
壺 美堂正義
祝賀気 堀之内歴
断 章 浅野晃
グエルレエヌ 辻野久憲
編輯後記

わがひとと興ふる哀歌

作品と書簡から見た伊東静雄(五十二)

小高根 二郎

先の富士氏宛書簡の五日後、伊東は次のやうな書簡を私に送つてきた。

「お手紙有難う。御悠遊の二様子まことに羨しいかぎりです。小生は点数の奴隷に相成りみぢめなものです。これがすんだら遊びに行きます。その時、ご自慢の彫刻拝見します。こんどは九州旅行なさるんですか。その前に一度お会いして、よささうなところ二、三申上げて、愉快なご旅行にしてあげたいと存じます。

わたしは汽車ときいただけで、胃のどこ

ろがむかむかするやうな健康状態で旅行など思ひもよらず。しかし、この一と月程前から水彩画を書き始め、大へんく、熱中してしますので、この休みは学校のガラスぱりのアトリエで大いに画筆をふるうつもりです。今迄に約三枚書き、一枚はわりに上手にかけたので家のものからはめられませんでした。小さい声で云ひますが、詩はここでお留守です。色の方がずつと心が染しいやと思つてます。(勿論これは下手の間のこととなるべし)その内小生の絵を、コギトの表紙にして貰ふつもりです。まあそれが叶はねば小生の詩集の表紙は是非自作の絵もてかさらん、と、いきごみをります。今迄は静物ばかりですが、休みには風景の大作をやるつもりです。

委細の画談はこの次の御面会の折にゆづります。

十五日

伊東静雄

小高根二郎様

(昭和十四年七月十五日堺市北三国ヶ丘町四〇より大)

(阪市住吉区鷹合町三三〇薫風寮小高根二郎宛封書)

伊東が画談をやり私をアパートに訪ねてくれたのは、暑い日曜の午下りだつた。阪和線の金岡から電車に乗り、鶴ヶ丘駅で下車すると、近畿鉄道南大阪線の針中野に通ずる砂利と石ころがごろ／＼とした新墾の道を、汗びつしより……になりながら、やつてきてくれたのである。アパートはその道に沿つて曠野の一角に建てられてゐた。

庭球コートを開んでコの字型に建てられたモルタル式二階建て。その二階の突端にある私の居室に入つてくるなり、伊東は窓から首を突きだしてあたりを展望した。そこから見渡される、大和川堤防までの、畑地とも、曠野ともつかぬ広表に眼を細めた伊東は

「こゝの部屋代はいくらです？」

と質問した。十八円である由、私は答へると「ふむ……こゝの方が先のとこよりはいいです。」

と、伊東は満悦した。先の阪堺線は南田辺の池畔に建つてゐたアパートは、当時としては最新の装置をした豪華な貸室で、部屋代は二

十四四だった。そこを一度訪ねてきたことのある伊東は、部屋代を聞いて憤然とした。何？二十四四ですって？一畳四四の割ちやありませんか！それだけ出せば立派に一軒家が借りられます。もつと安いとこに越して旅行でもなさい！さう……私に忠告すると、彼はとつと……と飯つて了つたことがあつた。

私は伊東の忠告を容れて前記の曠野のアパートに越してゐた。毎月で六四の剰余金を貯めておいて、先の書簡で「悠遊」で伊東を羨しがらせた小旅行を、しよつちゆう企て、ゐたのである。

伊東の視野には熱氣と磁気を孕んだ鉛色の雲が、堤防の向ふ、影絵となつて佇んでゐる立樹や部落を圧して煮凝つてゐた。伊東のゐる三国ヶ丘あたりが、それらの影絵のさらに向ふに、指向する時刻を知らせるやうに、妙な明るさで潤んでゐた。

伊東はやつと座につくと、今度は九州の何処に旅行するかと訊ねた。阿蘇だと答へるとあんまり興味がなささうだった。私は書架に祀つてゐる名張の小旅で求めた人麿影供像を示した。烏帽子をかぶり髭髻を蓄へた人麿が、毛筆を握つた右拳を膝に置き、左腕を脇息にもたせて、まさに名吟をうそぶかんとする

姿を象つた木彫である。これもさして伊東の興味を呼ばなかつた。彼には骨董趣味も考証癖もなかつたからである。伊東は、こゝでいきなり

「あなたの「通天閣にて」はよかつたです。あ的一篇でああなたは真実の詩人になりました……。」

と言つた。交際四年にして、初めて聞いた讃辞であつた。伊東は他人の詩は絶対に褒めないものだと思つてゐたので、この讃辞に私は顔を紅潮させた。

「今日はあなたの詩を朗吟してあげます。」と、彼が所載誌のコギトを求めたとき、私は有頂天になつたのを、今に覚えてゐる。

通天閣にて

小高根 二郎

旅せざる日の旅の歌

棲み慣れの うらぶれ町も

熱くなほ 愛さん願ひ

日々かくて 旅ゆくこゝろ

かなしみつ われ住ふなり

熱くなほ 愛さん願ひ

季も好し ふと公園の

古びたる 鉄塔に凭れ

巴里なる エツフェル塔も
かくこそと 思ひつべしや
竣工ときに 明治四十四年
永らふ われと等しく
幾年の風雨をや 凌ぎきつらむ
見よ かしこには

冬至

堀口 太平

墨田検査庁の廊下で、
呼ばれて立つた人の椅子をみつめてかけた
みんな、おとし穴におちたように思つてい
るのだ。

免許証をかえしてもらつて、
錦糸町の通りになると、
夕日が、立冬のそらを、ごろごろところが
つていった。

精工舎の屋上の旗が、
蛙のような、年とつた女にみえたのは、
古い初恋の記憶であろう。
女は、芸者にててから、いちだんときれい

になり、
鈴をはったような目をしていた。

いまは、中風でねたきりだ。
見るかげもないよ、と隣にいた金治が、私
に電話した。

貨物引込線の踏切をわたるとき、
光のくだけている音がかすかにして、
私の胸にこたえていた。

あの右折禁止の標識には、まんまとかかっ
たものだ。

産婦人科の医者や、帽子屋の広告の間に、
水のなかのさかなのような、目につかない
さまに、仕掛けてあつた。

私には、半日の保養だつたが、
みんな、おとし穴におちたように思つてい
るのだ。

桑原武夫・小高根二郎・富士正晴 共編
伊東静雄全集

全一冊 豪華決定版

井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄の
ところから出発しなければならず、しか
もまた結局はそこに帰つて行かなくれば
ならぬであらう。」と絶讃。三島由紀夫
氏は又「私の青春の師」とたへた。ま
こと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に継ぐ
日本現代詩の正統。その詩精神は古今和
歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー
、リルケに対応を求めつつ、和漢朗詠集
を経てこれを超克し、現代詩として初め
て西欧の詩歌に一步も譲ることのない高
峰を形成した。

〔詩集〕 既刊詩集の磨牙をなした未刊
重訂「山科の馬場」名品「今年の夏」
のこと「水晶観音」其他を含む

〔論文〕 卒業
「子規の俳論」伊東の詩精神を
「子規の俳論」伊東の詩精神を
「子規の俳論」伊東の詩精神を

〔日記〕 未発表の日記
明する書簡を含む三六七通

★菊版上製函入 ★五三六頁 ★定価二〇〇〇円

京都市（中央局区内）仏光寺通高倉西

人文書院

振替京都一〇二番

おほらかに 運河よこたふ
群立つ場のきらめくあたり 悲しみの
古城を高く そばだたしめ
いくたびか 煤煙にむせび
島浮く海に そゝぎたり
緑はと 尋ぬれば

江東楽天地の、アクションドラマの着板を
みただけで、駅の方へ行つた。
太陽が、泥をつんだトラックのように、
ごろごろと大きな音をたてて、ころがって
いった。
ぎりぎり、ぎりぎり、絶えずくだけている
音がした。
あてにしていた手形は、不渡りになりそう
だ。

豆をしほつて、
油がたらたらとたれるのは、いつの世でも
神話であろう。
小さな浮気心が、生きたり、もえたり、
夕日のなかで、
よこれた旗をふつてゐるのだ。

(三六・二・三三)

指さ、ん ひんがしの陣所なりし小圓丘
そを 措きて

なべて寄せては返す たゞ藁
をりからの光に睡び わだつうみの

金波 銀波

龍宮とても 何かあらん

ひとあらば たとへん我よ

今浦島

まことや 終ひに失ひし

青春の日よ いづこそや

訪ねんとて 遠くして

汽笛一声 汽車よ発て!

われあがなはん さらに麦酒を

これはやがて遭遇するに相違ない、私の青春喪失の予感を歌つたものであつた。はぐれたる春の日の歌だつた。事実、塔の真下の飲食店や興行場から、青春喪失を鼓舞したり教唆する軍歌や好戦的な流行歌が、拡声機でななりたて、ゐた。共鳴して高鳴りすぎてヒビ破れたり、または相殺されてかすれた楽の音が、三百有余尺の天空まで舞ひ上つてきて、麦酒の酔ひを覚めさせたものだつた。

朗吟のすんだところに、食堂からお茶代りの酒がとどいた。詩人としての出発を祝福された私は、心から彼に徳利を傾けた。彼はま

たこ、ちよげに酒杯を傾けた。今度は自作の

「燕」を朗吟してくれた。次で書架から詩集

や訳詩集を抜きだすと、彼は酒杯のあひまに

朗吟を続けた。空いた徳利と皿の交換にアパ

ートの小母さんや女中達が出没した。伊東は

彼女達にも着座を命じ傾聴を強ひた。紫煙と

酒肴と人いざれとが立籠めた手狭な六畳に、

朗吟によつて招待された東西の詩人もゐるら

んだ。細眼鏡の藤村。軍服姿で威儀を正した

鷗外。手品でもやりたげな指さばきで紙巻煙

草を口に運ぶ明太郎。大仏耳をぶらんざげた

春夫。ボヘミアン・スタイルのハットをかぶ

つた不頼中也。中空をつかれたやうに凝視め

つゞけるヘルダーリン。コメカミに神経脈

を浮かせたボードレール。猥雑不潔なヴェル

レーン。男喰ひのノワイユ夫人。幽鬼まがひ

のリルケ。即物屋のケストナー。E・T・C。

その末端に、更年期障害の小母さんと山だし

の二少女がゐるならば光栄に浴したわけであつ

た。

伊東は満悦してゐた。酒の外に自らの朗吟

に酔つてゐた。酔眼はそれら招待客の間を泳

いでゐた。

「今度は恋物語をしませう。私の昔のロマ

ンスを披露しませう……」

と言つた伊東の眼は、青春を取戻したやうに

かゞやいた。

——学生時代のことであつた。夏休で帰郷

する汽車で偶然に気品のある女人と同席し

た。たとへば、中河與一の小説「天の夕顔」

のヒロイン・あき子のやうな人を想像してく

れたらいい。旅という責任のない退屈しのぎ

から、四方山の話語りかけられ、或ひは語

りかけた。彼女の国は広島とのことだつた。

あれこれだべつてゐるうちに汽車はいつか広

島近くを走つてゐた。長崎と言へばまだずい

ぶんありますわね。いかがですか? うちで

一息入れていらしつたら? さう彼女に誘れ

て、口では断つたが、いざ汽車が広島に着い

てみたら、身体は彼女について下車してゐ

た。案内されたところは門構への立派な邸だつ

た。それお茶! それ、お風呂……という歓

待ぶりだつた。夕食にはもちろん酒も用意さ

れてゐた。つい、話しの糸口がほぐれて、彼

女が未亡人であるということが判つて一泊し

た。これが機縁になつて、休暇の往き還りに

は、必ずといつてい、ほど立寄るのが例であ

つたといふ。

私は半信半疑の思ひで伊東の恋物語を聞いて

ゐた。伊東の淡い風貌から推して、このロマ

ンスはいさ、か話がうますぎた。さう狐疑

する私を見てとつたのか、

「その人との交際は、今に続いてゐるので
すよ!」

と、伊東は恋物語の上に、さらに念を押しした

この恋物語を聞かされたのは私だけではない。私と同じ若い友の一人であつた長尾良氏も聞いてゐる。長尾氏の場合、彼女は未亡人ではなく素封家の娘である相違があるだけだ

しかも突然に

吉本 青司

占星家ユセフの予言が

正しければ

ことしの春 または夏のはじめ

世界戦争がおこる

ここまで書いて これは

何とよそよそしい言葉だろうと

自戒する

ある高等学校の学園祭に

たのまれて書いた短かい詩

△こどもたちの合唱は

いつまでつづく……▽

つた。

伊東が語つたこのロマンスには明らかに脚色がある。舞台の広島は姫路であり、ヒロインには明らかに酒井百合子さんが仮象されてゐる。が、あたかも伊東が恋を得たかのやうに物語つたのも、彼の詩法で得意とした「芸術的主観に基く客観主義」の芸術的主観の匙加減、或ひは「逆説的な肯定の譬喩」のつも

そんな ほくのことどもたちへ

キャラメルのカードと引きかえに

送られてきた模型飛行機

液体糊のカプセルを切つて

木製飛行機の胴体に

銀色の翼を着けながら

△ねえ 金星には人がすんでるの?▽

占星家ユセフの予言が

正しければ

ことしの春 または夏のはじめ

世界戦争がおこる

しかも突然に

りであつたのかもしれない。だから

いま私たちは聴く

私たちの意志の姿勢で

それらの無辺な広大の讃歌を

と、内容では歌ひながら、標題では「わがひ

とに與ふる讃歌」とはせずに、ちやんと「わ

がひとに与ふる哀歌」としてゐるぢやあない

か? と伊東は地下で嗤つてゐるかもしれな

い。

「さあ……今度はあなたの番だ! あなた

のロマンスを聞かせなさい。」

と、伊東は身体を泳がせるやうにして言つた

が、彼の眼はすっかり坐つてゐた。アパート

の小母さんや女中達の前にして私がためらつ

てゐると、伊東は今度は生理学をおツ始めた

。Kale Leibesbeschaffenheit の講義で

ある。胎内の温度と快感の相関性について、

ある。彼の身振り入りの誇張された表現に、

女中達は緒々顔を真ツ赤に染めると、ひやー

ツ! という悲鳴をあげて、ばたばた駈けだ

していつた。小母さんはにやにやにして坐つ

たま、だつた。あなたも生涯の伴侶を選ぶと

きは、Gesicht で選んではいけない、ネ……

いいですか Geschlechtorgan の良否に着目

してください、といつた講義の結論だつた。

落ちるだけ話が落ちたのを汐に伊東は立ち

無条件降服 (続)

田中克己

小林伍長と私とがかはしあつた「世界中を敵にしたな」の嘆声はソ連の裏切に対する怒といふより、むしろ落胆だつた。日本とソ連とは一九四一年、即ち昭和十六年の四月以来、中立条約を結んでをり、ソ連がドイツに攻められて苦しい最中にも、日本はこれを破らなかつた。スターリングラードの攻防戦を関ヶ原として、ソ連の形勢が良くなることなど、もとより愚かなわれわれには想像もつかなかつたが、その愚かさの故にも裏切をしないので一九四六年までつづくわけだが、その一年前に存続するか、否かの意思表示をする事になつてをり、ソ連がその取りきめ通り一年前に「存続する意思なし」と通告して来たのが、丁度、私の兵になつて半月目の四月五日のことだつた。この通告後まだ一年近く有効だつた善の条約を破つた——私は憤慨すべきたつたらう。しかし憤慨するとならままだもつと正当な理由がある。中立国であるソ連はこの年の二月七日にヤルタで米英と会談し、カラフト、千島を取ることを条件にドイツ降

夜の歌

——ある夜眠る前に——

森 亮

けふのことがきのふのことのやうに思はれる真夜中すぎ

星間の世界は遠のいて

そこはかたない興奮が歌の器を充たしはじめる

これが純粹の本当のわたしであらうか
空より少し重たくて手からこぼれるもの

昭和三十六年二月

上つた。私は玄関前まで送つて出た。七月の夜の闇は深かつた。星屑もまだだつた。幸ひ乾燥をした新墾の五間道路だけは伊東の駈る方向にはのかに浮いて見えた。私は伊東の足許を危ぶんだ。いや、大丈夫……と断言する言葉の根元で、ふらッ……と伊東の腰が泳いだ。が、拳大の礫を踏んまへて伊東は立ち直つた。では氣をつけて……と伊東の影と闇とが同化する頃に私は声を掛けた。さよなら……と闇に彼の声が浮き、靴が踏みしき蹴とばす砂礫の響きが伝つてきた。なんとなし私がこゝろが伊東との別れとなるやうな氣がした。伊東に詩人としての出発を祝福されたこの日。この日が彼と合ふ最後の日のやうな氣がした。私は闇に沈むやうに路上にしやがんだ。伊東の靴と礫が作る反響を聞きもらさぬためだつた。ときどき砂礫の飛び散る音がした。が、やがてなんにも聞えなくなつた。そこで私は立ち上つて深々と息を吸つた。夜草の臭ひがした。私は自分に言ひ聞かすやうに、さ……よ……な……ら……と呟いてゐた。

論

卒業生に

福地邦樹

卒業生を送り出すことは

学校の庭に

何か果物か花の樹を植えるように

にぎやかで楽しい

彼等は去つて行くのではなく

次第に僕らの心の中に

花を咲かし

実を結ぶ

服の二三ヶ月後には対日戦に参加することを協定してゐるのである。

私たちは憤慨すべきたらうか。ヤルタ協定が明らかになつてからすでに十五年であるが、理論的にはどうあらうと、これに抗議し憤慨した人間など、私はいまだに見たことも聞いたこともないのである。

とまれうちひしがれた日本に、さらに手をふりあげてかかつて来る、この強国の現実を、私は第三者の立場にゐたらともかく、日本人であり、兵であるからに、身にひしひしと怖ろしく感じたのだと思ふ。酒はやけ酒であり、叫びは悲鳴だつたのだ。しかもその底には私自身が若かつたころ、本氣に信じた共産主義の真実が実は非常に甘かつたのをこのとき身をもつて感じたのだ。ブルジョア的なヒューマニズム、封建的な俠客趣味、そんなものはかけらもない。世界征覇——といつて悪ければ世界共産化、のためには、最短距離をゆき最有効な手段を使用する。それを体験した私は、宣戦どころか、戦意の喪失するのをおぼえ、酒をもとめた。あたかもまはりを開んでゐるのは、中共第八路軍の定唐支隊であつて、それがいまラウドスピーカーでなつてゐるのである。

小林伍長はその呼びかけをとめるために出

余

かけていつた。叫び声はとまつたか。私はそんなことも氣にとめないほど酔つてゐたやうである。氣がつくと人声がして、小林伍長がかつがれて来た。情報室の長である斎藤中尉もやつて来た。小林は「うるさいやめろ」とがなつてゐる中、城壁から墜ちたといふのが、ついて来た歩哨の説明であつた。

そのあとよくは覚えてないが(満十五年たつたのである)、伍長は私と宴会してゐた下士官室にねきされ、私が枕許で看護することになつたのだと思ふ。私は一人になると、また義兄弟の兄のことばで「小林どうしてそんな無茶をしたのか」と叱つた。小林のこの時の答は「もう面倒くさくなつたんぢや」といふのだつた。たぶんこの記憶にまちがひはないと思ふ。小林は後でも話すが、信州の岡谷の人である。「面倒くさい」といふ関西弁をいつたかどうかは、私も自信はないが、この内容は私の創作でなければ、小林と私との親しさの証明にならう。場所は兵營である。戦斗のみを目的とする軍人が、敵国と戦ふことを「面倒くさい」といつたとすれば、普通ではないからである。

話をもとにもどるが、私もこの日えらいことをいつたものだ。ラジオの君が代をとつさにソ連への宣戦布告と誤判し、とつさにそれ

をいつてしまったことがそれである。もし無条件降服と譲り、さう答へたら、私は多分、半殺しになつてゐたらう。私は愚かだつたから、この時は助かつたのだ。それが、何の自慢になるか。自慢でいつてゐるのではない。私がいま生きてゐるのは、こうした愚かさかへも、助けをしてゐることを、真実を書かうと思へばいはずなれないのだ。これからも愚かであるか、いやもつと愚かになるだらう。損得を考へてではない。私はだんだん老いるのである。

小林を介抱したのは一晩だけだつたやうである。下士官室には、も一人現地召集の老伍長がゐた。この晩は見なかつたが翌日からただ一人いるところへ、飯を運んだおほえがある。ところで小林の負傷したのは足だつたやうに思ふが、医務室に入院したのだつたか、見舞つたことにもおほえがない。(唐巢撤退のとき牛のひく車にのつてゐたことだけおほえてゐる。)風の便りに北海道にゐる労組の役員だときいた。信州岡谷の小林俊文の住所をご存じの方があつたら教へていただきたい。この文章をより正確にするためにもかれが必要である。

(半自叙伝)

ひもで結ぶ

池沢 茂

それまでの幸吉には、結ぶという行為は、まったく不可能だつた。ねまきのひもも、いくら教え、練習させても、結べなかつた。ふろしきも、むろん結べなかつた。学園でも、生活指導というところで、ひもを結ぶけいこさせたもの、先生がなんべん手をとつておほえさせようとしても、幸吉はてんで受け付けなかつた。もっとも、学園の生徒たちにはひもの結べない程度の子が多かつたから、はじめこの教職に張り切つてゐた先生たちも、やがてあきらめて、そのけいこは打ち切りになつた。それに応じて、家でも、ねまきは、パジャマになつた。上着はボタンでとめ、ズボンは、ゴムひもが通してあるから、はくだけでよい。ふろしきには、すべて袋やカバンが用いられ、くつは、ひもを結ばなくても、足を突つ込むだけではけるズック製になつた。ところが、こうして何か月かたち、だれもが忘れてしまつたころ、幸吉はとつぜん、自分の意志で、ひもを結びはじめたのだ。占有しているイスやテーブルやハシゴを取らぬまいとする一念からだつた。

壺

美堂 正義

壺を撫でたり、掌にのせたり、心を落ちつかせる土の冷い触感にひとときを過す慣ひが身についたが、いつも陶器の肌は滑に澄んで美しいひとのやうに私との間には夕ぐれの黝い川が流れ拒絶と近寄せない非情が指先から伝はつてくるのにひかれてゐたが

壺の生命の虚しさを知り初め人間の運命の愛しさに思ひ至るしんと沈んだいりどりにけふふと忘れたはずの哀しみを想ひ出す柚葉の流れた跡に以た稚拙で一途の青春の日のいちらしいまでの己れの姿それも水のやうに淡々と

祝賀気団

堀之内 歴

春が来ている とに角 :
線路傍の銀行ビル工事は 春を待ち惚びていたんだな 今日完成
〇〇組土工と親しくなつたら
別れを惜しみに 彼はやつて来た
△こんだア富山だ 明日発つよ△
急行電車は 今日やけに揺すつて走るが
威張っているんではなさそうだ
彼奴はいつでも あの通りに忙ぐ
そろりと発車する 生徒鈴なりの
普通車は 銀行踏切りで特別徐行
車中の眼は 一せいに祝賀会場にゆく
△なんや お祝いや△
風が舞寄せた砂塵の白い一団が
ゴミ車のゴミ山から紙切れを散らす
車を避けて立ち止まる拍子に老人が
激しく咳いて 咳が止まらない様子
うち上げ火花の音は……

一九六一・二・二五

ぼくと妻は食事に買ってきたテーブルやイスを幸吉に占有されたとき、やがてあきらめて、元のおぜんを出して使つた。いったん幸吉に集められ所有されてしまうと、食卓にかざらず、指一本ふれるのにも気を使わねばならなくなる。前からあつた勉強用のテーブルとイスも、ミシンについていたイスも、ぼくも日曜大工で作つた折りた、みのハシゴも、妙なガラクタがつめてあるミカン箱も、幸吉が積みかさねている形のまま、そつとしておくより仕方がなかつた。勉強用のテーブルとイスは、妹の梅子はまだおさないし、ぼくもいつからか読むのも書くのも寝たまま、でするやうになつたから、必要がない。いろんなあきビンやカン、折れクギやネジ、こわれた目ざまし時計やおもちの破片などをつめこんであるミカン箱も、幸吉以外の者には、なんの意味も持っていない。でも、妻がミシンをかけるときには、イスがないと困る。柱時計のネジをかけたとき、たなのうえに物をあげたり、おろしたりするときにも、主としてそのために作つた折りた、みのハシゴが、やはり必要になる。しかたがないから、ぼくたちは、幸吉が学園へいつてゐるあいだに、それらの品を使つた。そして帰ってくるまでに、用をすませて、元どおりにしておし

おいた。

それでも幸吉は妙に感付くのだつた。い、かげんに積みかさねておくのではなくて、テーブルも、一本のあしはた、みのへりのどのへん、もう一本のあしは敷き居のはしからどのへん、というふうに、きっちり決まつてゐるらしかつた。そのうえにのせてあるイスも、もう一つうえにかさねてあるイスも、そのあしや、背中のもたれのぐあい、すべて一定しているらしかつた。イスとイスのあいだに立ててあるハシゴにも、一センチほどの狂いもない定位置が、あたえられてゐるらしかつた。ふつうの小学校はおろか特殊学級へもはいれない子を集めている学園へかよつていて、数は全然かぞえられず、字はもちろん一字も書けないのに、この点はふしぎだつた。本能の直感みだつた。学園から帰つてくるなり「まるいイスさわつたア」「ハシゴさわつたア」あるいは「トミコちゃんがあるそばにきて、さわつたア」「マチコちゃんがさわつたア」「梅子ちゃんがさわつたア」などどわめきながら、地だんだをふみ、からだをよじつてあばれるのだ。なだめても、わけを言いきかせても、役に立たない。黙つて待っていると、やがて、わめき声のあいだに「ミシン、かけたんや」「時計のネジ、かけ

「おそうじして、ほうきがさわったんや」などと、合の手みたいな「ひとりごと」がまじりはじめて、ぼつ／＼落ちついてくる。三十分か一時間もすると、ふと、われに返って、おとなしすぎるぐらいの平素にもどってしまふ。

あき学園にゆくときも、テーブルやイスやハシゴが気にか、つて、幸吉は家を出たがらなかった。「トミコちゃんが遊びにくるッ」「梅子ちゃんがさわるッ」「ミシンかけるかア」などとダダをこねて、カバンをほうりだし、ときには服もぬいでしまふ。むりにクツをはかせようとしても、あばれて、へやの奥へ逃げこんでゆく。からだだけはふつう以上に大きくなっているから、妻では手にあわないうときもある。そんなときには、ほくと梅子は応接間へ閉じこもり、なからカギをかけて、じっと息をひそめている。梅子が声をあげたりして感付かれたときは、ほくと梅子もいっしょに家を出て、玄関の戸にカギをかける。妻に手を引っぱられた幸吉が町角をまがって見えなくなつてから、引きかえし、家のなかへはいるのだ。さしあたってイスやテーブルやハシゴにさわる者がだれもないと見えさせたら、安心して、ときには喜びいさんで、学園へ出かけてゆくからだだった。

断章

浅野 晃

あれのことは誰ひとり
いまでは知つてゐるものはない
小学校の友だちも
女学校の友だちも
みんなみんな過ぎていつた
わたしが生きのこつた
わたしだけだ 知つてゐるのは
二十いくつの若さで死んだ
やさしいあれの面影を
けれどどうして伝へよう

め取られた虫みたいに、膨大なひもの網でおおわれていた。しかも幸吉は、ひもを結んでいるとき、たま／＼妙に心が燃えてくるらしかった。まる結びしかできないが、一度結び二度結びしただけでは足りないで、四へんでも五へんでも、なんべんでも、結び続けるのだ。そんなとき幸吉は、ほくと梅子が食事をしていても、梅子を相手に遊んでいても、ひとり、むつ／＼として、なにか暗い情熱に取りつかれ、目を底深く光らせながら、もう一べん、もう一べん、もう一べんと結んでゆく。そのために二本のひもは、結び目が十も二十もつながつて、一本のくさりに編みあげられる。こういうくさりの状態が、膨大なひもの網のなかに数か所あって、おさない精神に集かう暗い重荷を示しているのだ。

ヴェルレエヌ

——性別きヴェルレエヌ——

辻野 久 憲

秘密に満ち威嚇に富んだ怪童、人間を宿世を脱した少年、下界にこの大地のあらん限り揺ぎのないその地獄を見出でるまで、永遠に太陽を仰ぎ、底知れぬ沈黙を湛へ、此処彼処定めなく闊歩し歩く浮浪の児、ランポオこ

やさしいあれの思出を
誰にどうして伝へよう
わたしが忘れないうだけだ
わたしが死ねばその時から
あれの笑顔も消えるのだ
さう これくらゐの距離からが
いちばんなつかしい かえつて
それもわたしがゐるうちのこと
ゐなくなればそれもそれで
しまひである
でも どこかにゐるあれは
信じてゐるとも
あれはどこかにゐる わたしはきつと
出会うだろう 二人だけで
誰ひとり知るものはないだらう

に甫めて降り立つ、かの怖るべき文人の間、酒舗の中に、ただ他なく、かれ永遠を見出したり告げんとて、ただ他なく、われらはこの世の者ならずと告げんとて！
ただ一人、洪笑と紫煙と酒杯と、すべてかの鼻眼鏡と淫らな髭面との真中まなかにあつて、ただ一人の者この少年を賤め、且つその為人を

別の帯ひもを出して使う。それもないとはひとばんで、あくる日には、もう、幸吉が取りあげている。また別の帯ひもを出して使う。さつそく幸吉が利用する。ほくのねまきに使つていた帯ひもも取りあげられ、家のなかに帯ひもが一本もなくなつてくると、妻はいなから取りよせ、また、あらたに作つた。こんな状態になつた幸吉には、さからつても、かえつて興奮させるだけだったからだ。そうして帯吉の帯ひもは、三十本近くになつた。それから、ほくのネクタイも使い、学園から買つてきたなわとびのひもも、なわとびのけいこには使わずに、イスやテーブルをくゞるために使つた。梅子のために買ったビニール製のなわとびのひもも、妻が買つてくるしりから、つぎ／＼と取りあげて使つた。
四つになつていなかった梅子は、はじめのうちは泣いて怒つたけれど、妻やほくに言いきかされて「い、わ、幸ちゃんにあげる。幸ちゃんはおわつてねえ。なんでかしら。病氣？ なんの病氣？」とたずね「あたまの病氣」と聞かされると、わかつたのかどうか、なわとびのひもはもう、ほしがらなくなつた。
イスやテーブルやハシゴは、こうして、いゝろんな多くのひもで、がんにがらめにされた。というよりも、むしろ、クモの糸でから

悟つたのだ、彼はランポオを視た。その瞬間より、近代詩苑とも、はた、あたかも自鳴琴のごとく、飄々と漂ひ去るかのソネットの捏り上げられる居酒屋とも、彼の縁は断たれたのだ！ もはや何ものも、彼の愛する若き妻も、彼にとつて何であらうぞ、この少年の後を逐ふ限り、一切は破れ去られたのだ！ 夢想と冒瀆との真只中であつて、彼は何を語ることだらう？

彼の口籠ることを理解しつつ、しかもこの半言にて足りるのだ。
少年は蒼い、自らの後に曳きずるありとあるものにも汚されぬ眼で、あらぬ方を眺めてゐる、性別きヴェルレエヌ！ 今やただ一人後に居残る。お前はそれ以上遠くまでは行きえぬのだから。ランポオは発ち去る。お前はもう再び彼を見かけまい。そして一隅に居残り、半狂乱となつて怒号し、安寧を紊してゐる者を、ベルギイ人は注意ぶかく引立て、煉瓦垣レンガ垣の獄舎の中に埋しこめたのだ。

彼は天涯孤獨だ。彼は屈辱の極みに墮し、あらゆるものを喪ひ去つた。
妻は彼に離婚証書を送達する。
「悦びの歌」は歌はれた、すでにして慎しい幸福は去つた。

木俣修・川副国基・長谷川泉 編集

人と作品 現代文学講座

全十巻

明治書院

各巻 三八〇円

彼の眼前一メートルには、もはや裸き出しの壁があるばかり。外には彼を斥ける世界が、その内には、ポオル、ヴェルレーヌよ、創痕が、はた、人間のならぬあれらのものが、彼の裡に止める後味が。見上げる窓はあまり小やかにして、ただ蒼穹を覗はせるにすぎぬ。彼は終日端坐したまま、壁を眺めてゐる。彼を危機より遠ざけるこの場所の、あらゆる人間の弱点は拭き去られるこの城砦の内面を、あたかもヴェロニカの亜麻布のやうに、苦惱と血潮とに塗れて！

つひその上に、かの布に現れるあの佛が、あの顔が、幾世紀の底より彼の莽猛な面を指して甦り来る、あの黙せる口許が、また次第に彼を見据ゑるその眼眸が、徐ろに我が神、我が主となる奇し^{あや}の人が、彼に聖心を示し、且つ啓き給ふ、差恥よりも深きに在す基督が生れ出でるまで！

大地と大空とを喪ひ、人と神とを逸して、二十年羅興区の街頭を彷徨^{さまよ}ひ、あらゆる人々の眼に汚行と映つたほど大いな、悲しむべき放肆はいかに本質的な貧困に近く接してゐたことだらう？ ついに一切の極まる所お前がそこに落ち込み、そこに落ち込み、且つはあの売女の閨室において、地に面を伏せ、赤裸にて母親の胎内より飛び出した嬰兒のやうに大地によつて真裸となり、お前の本分に随つたあの最後を遂げることが宥されるに至るまで！

レエヌよ、詩人よ、おお、お前は何かといふ失策を犯したことだらう！

われらがこれを秘し隠す時より、あたかも世に存在しなかつたものと成り果てる、その身のあらゆる罪障を擔うて莊重に生きんとするこの途、機を得てわれらに來る、福音書と世界とを融和させんとするこの業を、お前は何ら悟りえなかつたのだ、穢しい老朽兵よ！ 貧食者よ！ お前の盃に満つる酒はいかに浅く、その槽はいかに深かつたことだらう！ お前の盃に満つる少量の酒精と人工の砂糖とを、お前は苦汁を嘗めんがために、いかに速しく呑み乾したことだらう！ 酒商人はいかに慈善病院の傍近く構へてゐたことだらう！

編輯後記

二月三日。岡山の水瀬清子さんから伊東の「津音」は最も好き作品でN・H・K岡山から朗讀したことかあつたとおたよりをいただいた。
二月五日。奈良女子大の横田俊一氏から拙誌缺号の要望で郵券を多数お送りいただいた。氏は大学の講義で伊東を論じてをられ、一昨年の入學試験問題に伊東の作品を起用されて好評だつた由である。右のやうな要望のある大層が他にあると想はれるので、郵券をお送り下さつたら寄贈申しあげるので廣告する。他に千葉大学の長谷川康夫君からも横田氏と同じ要求をうけた。
二月十日。愚女に家内を添へて三週間の養定で京大病院のドックに入れた。僻途に人文書院に立寄り製本一冊を入手した。
二月十一日。明治書院刊の「人と作品現代文学講座」に伊東靜雄と神保光太郎とを擔當することになった。
二月十三日。産經同人雜誌で六〇号の池澤氏の「グイニング・キチン」がとりあげられた。
二月二十三日。林富士馬氏より伊東全集を読みつゝ、青春を回想して幾度か落涙したとたよりをいただいた。全集を編輯しつゝ思つたことであるが、伊東を真に信じ伊東が真に許してゐた人物は林富士馬一人だつたといふことである。ちなみに「わがひとと興ふる哀歌」は本号をもつて終る。

果樹園 第六十二号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年四月一日発行
池田市野町一六八
編輯兼 小高根二郎
發行所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
果樹園社
定価 三十円

果樹園

第63号

天と地のあはひ 辻野久憲
青 不 動 浅野晃
遠 足 吉本青司

ヘリック詩抄 森 亮
えんびつけずり 萩原 葉子
無条件降伏 田中 克己
春ももなか 美堂 正義
う ば 車 池 沢 茂
に し 堀之内 歴
編輯後記

天と地のあはひ (上)

辻野久憲

先月下旬、私はかねての宿題であつた富士裾野^{かやま}神山の復生病院を訪問することができた。これは既に去る正月に決行する筈で、Y氏から紹介もしていただいてあつたのだが、そのときは生憎風邪で中止し、それ以来いはば私の「夢」の一つとなつてゐたのだ。そして無分別にも二三の人にこの予定を洩らすと、大抵止すやうに勧められもしたし、また私自身としても、そこに何らかの不純な気持が興つてゐるはしまいかと、反省しないではゐられなかつた。なぜなら、もしもこれがただ「好

奇心」のみを満たすためであつたとすれば、それはあまりに物好きだとも、更には悪趣味だとも云はれねばならぬばかりではなく、なほその上にあの不幸な病者たちを冒瀆することとさへもなるだらう。それに、たとひ自らはこれが好奇心だといふよりも、もつと切実な魂の欲求から來てゐるのだと信じてはゐたとしても、現在の私には、物質的にも精神的にも、病者たちを慰めるべきいかなる能力もないことは事実なのであつて、その事を顧るだけでも、ともすれば私のひたぶるな心をも鈍らせるに足りたのである。かかる勧告や懸念の一切にも拘らず、なほやはり私はどうしても一度あそこを訪れて、あるものを見たかつた、いや寧ろ教へられたかつた。そればかりか、この魂の欲求は日を遂うて一そう烈し

くなるばかりであつて、つひにはそれが私の裡でひとつの至上命令のやうなものともなり、自分は是非訪問しなければならぬのだ、とさへも思ふに至つた。しかも、それがよしいかに私一個の魂の必要のためであらうと、かくまで純一に高まつた欲求の前には、このあまりにも個人的な訪問も許容されるだらうと信じたのだ。そこで私は、ずつと出発の機会を待ち暮した。するとちやうど先月来、一仕事終つて、その疲れか、それともこの日頃の苦惱のせむか、鬱々として重苦しい日夜が続き、まただんだんデカダンスに沈淪しようとする心をもて扱ひかねて、ほんやり落に坐つてゐると、ふと私の耳もとで、「今だ。今だ。今を措いてはないのだ」と囁く声が出た。それを聴くと私もはつと我に返り、「さうだ、いよいよ宿願を果すべきときが來た」と思つた。そしてこの呼び声に縋りついて身に迫つた危機をすり抜けようともするやうに、急いで家に引返し、Y氏に手紙を飛ばして、改めて紹介を乞うた。その返事を待ちかねた二三日のもどかしさ。何か異様にときめく胸を抱いて、あれこれとまだ見ぬ病院内の有様を空想したり、また飯途は足を延して関西まで下り、久々にI町の老父母を訪ひ、兼ねて大阪の友人にも會つてこようと思ひめぐら

果樹園六十三号 昭和三十六年五月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園六十二号 昭和三十六年四月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

したりしながら、時を消したのだつた。
一 出発をいよいよ二十五日の朝と決めたが、
一夜明ければひどい暴風雨である。止むなく
一日延期して、翌朝十時過ぎの汽車で藤沢駅
を発つ。その日はちやうど日曜だったので、
病者たちの朝の礼拝の場に列したく、もつと
早朝に発つ予定であつたのだが、前夜更けて
からふと心の激するままに、机に向つて錯乱
の文章を綴るうちに夜も明けはなれ、疲れき
つた跡を励まして駅に急いだのだが、やはり
豫定の汽車を逸してしまつたのだつた。

小田原を過ぎるとき、私は感慨ふかく車窓
から町を眺めた。牧野信一の懐ひ出、悲しき
町よ。彼は私の愛読する詩人だつた。そして
愛読するといふことは、私自らの裡にも彼が
ゐることを意味するのだ。私は又しても、そ
こに我自身に潜む危険を読んだ。が、正午少
し前やうやく三島に着き、プラットホーム
に一步降り立つと、久しぶりに見る山の容、
しかも前日の豪雨に洗はれてひとしほ清々し
いその容に、私は忽ち見とれてしまつた。そ
して同車した若夫婦たちや、リュックサック
を背負つた快活なハイキング姿の少年少女等
の群に別れて、ただ一人彼等とは正反対の方
向と世界に向ひ、御殿場行きのバスに身を投
じたときも、私はまだ無心の状態だつた。

る。多分、入院してゐる家族を見舞にでも行
くのだらう、と私は思つた。それにつれて、
私の胸裡には、車掌の無愛想な態度に対する
怒のやうなものが、こみ上げてきた。なんて
素気ない奴だらう。もう少し丁寧であつても
よささうなものなのに……そして苦々しげに
、つんと澄して突出つてゐる車掌の後姿を眺
めてゐると、突然、「やあ！ 富士山だ、富
士山だ、ねえ、ほら」と叫ぶ声があつた。その
声の方にまた視線を返すと、さつきの男と並
んで坐つてゐた十三四の小学生服姿の少年が
、そちらに倚りかかるやうにして、車窓に近
々と迫つた富士の方を指さしてゐる。が、男
はそれに何とも答へないばかりか、前の空い
た席にひよいと移つてしまつた。どうも親子
らしいんだが。どうしたのかしら。でも少年
はなほ無邪気な有様で、今度は小声で唱歌ら
しいものを歌ひ出した。しかし父親の方は、
いつまでもちつと窓外に空な眼を向けたまま
、どこか苦悩の影の深い土色の横顔だけを見
せてゐる。私はふと、入院してゐるのはこの
少年の兄か何かちがひあるまい、と思つた
。父親の方は病人のことが心配で、周囲の景
色などには眼も止らないのだが、子供は流石
に無邪気なものだ、初めて見る山のたまたま
ひに、いつか兄のことも、自分がこれからそ

しかし、それもやがて間もなく破られねば
ならなかつた。「復生病院」と切符を求める
と、隣席の青年が胡散臭げにじろじろと私の
顔を眺めるのだ。それにふと瞳を上げると、
真向ひに、月の面のやうに凸凹な顔をして鼻
の缺けた婆さんが、ハンケチでそれを隠すや
うにして坐つてゐるのだ。「いよいよやつて
来た！」と、私は心に叫んだ。そして又もこ

青不動

浅野 晃

巨きな積乱雲
低い山脈
まひるの曠野は黙し
ただ濼々とひろがる中を
わたくしの子供が
こちらへむけて走つてくる
小さな手に
あやめの花をしっかりと握つて
子よ
おまへの手の中で

花の青がはげしく揺れてゐる
一直線に子よ走つてこい
おまへが握つてゐるその青い花
それは
老いた曠野が
よべのくだちに吐き出した
にがい想念の切れ端なのだ
曠野はいま眠つてゐる
彼女の絶倫な夢の中で
青い太陽は限りなく若い
けれど子供は走つてくる
あやめの花を握りしめた手を
しっかりと捧げ
このわたくしに手渡さうと

こへ見舞に行くのだといふことも忘れてしま
つて、ああして浮かれてゐるのだらう……そ
んな空想に耽つてゐると、今まで幾度か私の
様子を窺ふやうにしてゐた隣席の青年が、突
然話しかけた。「病院へお見舞ですか？」私
はまるで不意でも打たれたやうに、あわて
て辯解するやうな調子で答へた。「いや、一
寸……神父様にお眼にかかりたくつて……」

れから訪れようとする世界のことをあれこれ
と想ひ描いてみるのだが、それは全くあらゆる
空想を絶してゐて、つひにいかなる表象を
も創るに由なかつた。そのうちにも、バスも
いくらか見事な寒村を後にして、物さびし
い高原をひた走りに走る。かうしてやつと裾
野駅を過ぎたころ、今まで最後部にゐた五十
がらみの商人風の小男が立つてきて、何かあ
たりを憚るらしく、低声でほそほそと女車掌
に囁き始めた。すると車掌が、「えッ？ 病
院？ 病院なんてこの通りにありませんよ」
と、突慥な調子で答へた。男は心許なげに
きよときよと窓外を眺めてゐたが、暫くし
てまた何か囁く。「ああ神山のですか。それ
ならまだだから、あちらに坐つて下さい。」
車掌の車内ちゆうに響きわたるやうな無遠慮
の大声。男はなほ一そうおどおどしながら、
「よく分らないんでね……着いたら、教へて
もらひたいんだよ」と、半ば哀願するやうに
云ふ。今度は車掌は一言も答へない。男はな
ほ暫くそこにもじもじと佇んでゐたが、取り
つく島もないやうな車掌の態度に、たうとう
思ひ諦めたらしく、私たちから顔をそむける
やうにして座席に引返した。私の視線は知ら
ず識らずその後をおふ。見ると、彼の足許に
、小梱を始め五六個の風呂敷包みが転つてゐ

「何か、教会関係でも？」「さういふ訳でも
ないんですが……」が、この答への愚かしさ
！ 私は自らに腹立たしくなり、それ以上は
口を喋まざるをえなかつた。
やがて「病院ですよ」といふ車掌の声に救
はれたやうな思ひをして、急いで車を捨てた
。そして濔々と流れすぎる溪流に架した木橋
の上に降り立つたとき、急に何か心の痺れる
やうなものを感じた。思へばもう数年の昔、
冬のさなかに北軽井沢の某氏（註・堀辰雄）の
山荘に独居してゐた頃、ある夜慰めを求め
て草津まで出かけ、餓えた野良犬のやうに町
ちゆうほつつき歩いてゐるうちに、偶然、夜
目にも黒々と聳え立つてゐる門の前に出て、
「これこそ地獄の門！」と不気味な戦慄を覚
えて逃げ返つたことがあるが、私はいまやま
さに、進んでその世界に歩み入らうとしてゐ
るのだ。洵に、この内にあるものはいかなる
世界なのだらう？ それはやはり、吾れ人共
に想像してゐるやうな地獄なのだらうか？
それともまた、私たちのあらゆる空想を絶す
るやうな、未知の世界なのか？ いづれにし
ても、この橋は地上のものにして既に地上の
ものではない。現世と或るこの世ならぬ世界
との間に架せられた、象徴の橋だ。そして一
度びこれを渡る者はすべて、ダンテのあの「

「ここ過ぎて」といふ詩の心を、さながらに身に味はねばなるまい。私は一歩毎に加はるそのやうな感慨と、更には私を憚るやうにして小走りに先に立つて進むあの親子を煩はさないやうにと思つて、できるだけゆつくりと足を運んだ。が、それにしてもまあ何といふ麗かな日だらう、何といふ爽やかな大気だらう、そしてまた何といふ静寂さ、平和さだらう！雲の翳一つないまでに澄みとほつた蒼空のもとに、遠近の山の容もくつきりと瑠璃色に照り栄えて、その裾まで耕された傾斜地には、麦や茶の新芽が青々と萌えてゐる。更に、進み行く途の両側には、榎、檜、柏、榎などの木立を縫つて、桜、君楓、山吹の草木が一せいに若々しい緑の粧をこらし、その間に彼方此方と質素なコテージ風の建物が見え隠れしてゐるのだが、どこにも人の気配はない。ただ、近づいてはまた遠ざかるせせらぎの音、鶯の、鶴鶴の歌声、あまりの清々しさ、和やかさに、私のはりつめてゐた心もいつかほぐれて、まただんだんと無心の境に落ちてゆくを感じた。かうして一町近くも来たであらう、ふと右手から聞える快活な話声に、我に返つてそちらを窺ふと、ささやかな建物の内で、数人の児童が、黒衣を纏つた一人の女性に世話されながら、昼食を喫してゐ

るのである。私はその方に向つて、院長の所在を尋ねた。するとその女性が走り出て来て、丁寧に路を教へてくれた。「お母さん、あの方はお医者さん？」といふ幼い者らの声を背後に聴いて、私は教へられたとほり本館の方に向つた。いよいよ本館まできて案内を乞ふと、院長のI神父は、直ちに快く私を迎へて下さつた。が、応接室に入るや否や、私は意外な言葉を聴いた。「ちよつとお待ち下さい。いま一緒に来られた子供さんが入院されるので、部屋を決めますから。」私は愕いて、まだ玄関の前に佇んでゐるさつききの親子の方を窺つた。何といふことだ！あの少年が、あの無邪気な少年が、レブラ患者だつたのか！そして今やまさに現世とのあらゆる交渉を断たれたのだ！さう思ふと私は何か見るに堪へないものを見たやうな気がし、急いで窓辺を去ると、ドアの彼方に「やあ、よく来たね。さあ、君のお部屋を決めてあげよう」と、いかにも慈悲のこもつた神父様の声をぼんやりと聴き流しながら、そのまま椅子に坐りこんでしまった。間もなく、神父様がしづかに引返してこられた。私は率直に参観の許しを乞うと、すぐ

伊東静雄全集

全一冊豪華決定版

井上靖氏は「詩を志す者は伊東静雄のところから出発しなければならず、しかもまた結局はそこに帰って行かなければならぬであらう。」と絶讃。三島由紀夫氏は又「私の青春の師」とたへた。まこと伊東静雄こそは藤村・朔太郎に継ぐ日本現代詩の正統。その詩精神は古今和歌集の譬喩に発し、独逸詩人ケストナー、リルケに对应を求めつつ、和漢朗詠集を経てこれを超克し、現代詩として初めて西欧の詩歌に一步も譲ることのない高峰を形成した。

【詩集】 既刊詩集の萌芽をなした未刊「詩集」詩集「事物の本」抄を取録
【散文】 卒業「こと」水島観音「其他を含む」
【論文】 「わがひ解明する一談話のかほりに」等
【日記】 未発表の日記「ふる哀歌」のわがひとを解明する書簡を含む三六七通

★薬版上製函入 ★五六頁 ★定価三〇〇円

京都市（中央局区内）仏光寺通高倉西

人文書院

振替京都市一〇二番

遠足

吉本青司

中学生の一団が にぎやかに
墓だらけの山をのぼる

なかば草に埋れた墓
樹木と同居している墓
高い石柱に太々と名を彫つた墓
こけむした形身の石仏
元帥海軍大将の墓
まばらな林に枯葉を焚くのは
きつと 墓参のひとびとだ
のぼつても のぼつても
墓々々

桑原武夫・小高根二郎・富士正晴 共編

山上の公園にも墓
△空田穂童子▽
石碑は倒れ 遠足の子が遊んでいる

白いボールの雲
新芽にささやく風
赤土にそそぐ日の光
いずれも
風化した永遠の愛

中学生がいう
△いまに墓だらけになりますね
山という山は▽
一人の教師がいう
△君たちの時代には 骨も遺さず
気体にして
空を墓標にするんだな
たましいを 墓穴から
解放するために▽
まつたく驚いたことを言うものだ
△永生きしようよ……▽

はいよいよ参観に立つた。そして病棟の隅々から、作業所、庭園、耕作地と、八万坪に亘る広大な院内を、残る隅なく見せてもらった。かうして、一步一步この名づけやうのない世界に歩み入るにつれて、私の感動も亦次第に高まるばかりであつた。しかもそれは、私の豫期してゐたところは、全く別種のものであつた。一度びこを訪れたいと思つた時から、いやそればかりか、つい先き程あの橋上に立つた時でさへも、私の心の底には、なほやはり、この上もなく陰惨なもの沈鬱なもの、更には醜惡なもの、をさえ見るだらうといふ期待の潜んでゐたこと、そしてまた、己れが果してそのやうなものを見るに堪へられるだらうかといふ疑懼と、一度そのやうなものを目のあたりにして、全心的に叩きのめされてみたいといふ奇しき欲求とが交々してゐたことは、否み難い所である。しかるに、私はいまここで何を見たか？ それは私の嘗つて一度も見たことのないやうな、清朗とも聖浄とも形容していいほどの、不思議な世界であつた。では、そのとき私の「觀察」の眼が鈍つてゐたのではなからうか？ いかにも、一度び病棟に入ると同時に、私の裡からは一切の卑しい觀察の欲求がけし飛んでしまつた。が、所詮、觀察といふことは、私たちに

とつて一つの先天的の、更には宿命的の性能でさへもあつて、全き昏睡か錯乱の状態にでも陥らない限り、私たちのつひに捨てうるものではないのだ。そしてこの場合にあつても、私は敢へて断言しよう。私が全く醒めてゐたことは、いやそればかりか、私に許された最大限度の状態に於いて醒めてゐたことを。それ故に、私の眼が病者たちの上に注がれたとき、たとひ意識的であつたにせよ、なかつたにせよ、やはりそこに私の有する觀察の全性能が集中して活躍してゐたことは否みえぬことだ。

しかしそれと同時に、その瞬間における私の眼は、いかなる「成心」によつても曇らされてゐなかつたと私は信じてゐる。さうだ、その時私の裡には、その雰囲気から来るべき宗教的我心さへもなかつた。ただ私が人間として有してゐる本然の眼を以て、彼等の姿を凝視したのだ。即ち、私は肉眼といふよりも、もつと深い、自己の最奥の魂の眼を以て、彼等に対してしたのである。それだけに、私にして敢へて自負することが許されるなら、私はただ彼等の表面的、外形的な肉体をのみ見たのではなかつた。もつとその奥にまで滲み入り、彼等の内奥にある生命の究極の相をまで見抜いた、少くとも、それを仄かに感じない

は、いよいよ参観に立つた。そして病棟の隅々から、作業所、庭園、耕作地と、八万坪に亘る広大な院内を、残る隅なく見せてもらった。かうして、一步一步この名づけやうのない世界に歩み入るにつれて、私の感動も亦次第に高まるばかりであつた。しかもそれは、私の豫期してゐたところは、全く別種のものであつた。一度びこを訪れたいと思つた時から、いやそればかりか、つい先き程あの橋上に立つた時でさへも、私の心の底には、なほやはり、この上もなく陰惨なもの沈鬱なもの、更には醜惡なもの、をさえ見るだらうといふ期待の潜んでゐたこと、そしてまた、己れが果してそのやうなものを見るに堪へられるだらうかといふ疑懼と、一度そのやうなものを目のあたりにして、全心的に叩きのめされてみたいといふ奇しき欲求とが交々してゐたことは、否み難い所である。しかるに、私はいまここで何を見たか？ それは私の嘗つて一度も見たことのないやうな、清朗とも聖浄とも形容していいほどの、不思議な世界であつた。では、そのとき私の「觀察」の眼が鈍つてゐたのではなからうか？ いかにも、一度び病棟に入ると同時に、私の裡からは一切の卑しい觀察の欲求がけし飛んでしまつた。が、所詮、觀察といふことは、私たちに

のだった。そして私はふとポオドレルのあの「腐肉」と題する詩を思ひ出したが、嘗つては口誦むだに奇しいシヨックを受けないで

は、いよいよ参観に立つた。そして病棟の隅々から、作業所、庭園、耕作地と、八万坪に亘る広大な院内を、残る隅なく見せてもらった。かうして、一步一步この名づけやうのない世界に歩み入るにつれて、私の感動も亦次第に高まるばかりであつた。しかもそれは、私の豫期してゐたところは、全く別種のものであつた。一度びこを訪れたいと思つた時から、いやそればかりか、つい先き程あの橋上に立つた時でさへも、私の心の底には、なほやはり、この上もなく陰惨なもの沈鬱なもの、更には醜惡なもの、をさえ見るだらうといふ期待の潜んでゐたこと、そしてまた、己れが果してそのやうなものを見るに堪へられるだらうかといふ疑懼と、一度そのやうなものを目のあたりにして、全心的に叩きのめされてみたいといふ奇しき欲求とが交々してゐたことは、否み難い所である。しかるに、私はいまここで何を見たか？ それは私の嘗つて一度も見たことのないやうな、清朗とも聖浄とも形容していいほどの、不思議な世界であつた。では、そのとき私の「觀察」の眼が鈍つてゐたのではなからうか？ いかにも、一度び病棟に入ると同時に、私の裡からは一切の卑しい觀察の欲求がけし飛んでしまつた。が、所詮、觀察といふことは、私たちに

ヘリック詩抄 (五)

森 亮

女のころ

内心ねがつてゐた誰かからの誘ひかけを
 ぼんと断つてもそれは女の罪ではない。
 衣裳運びと着こなしにどんなに手間どるかつ

さういふ道心堅固さも女の罪といふには当たら
 るまい。

ぬけぬけと言はうとそれは彼女たちの罪では
 ない。
 素地のままでさうまでゆかぬ頬を
 おしろいつけて白さをみがき、
 くちびるには朱く口紅を塗りたくる、

ヘリックの詩には知的発想の顯著なものがかなり
 多い。今回訳した「女のころ」(一九二番)で
 も、No fault in women で始まる行が殆ど
 一行おきに並べられてゐる。又、さういふわくの
 中に収められた思想が彼の独創に出たものとは限
 らない。古典文学の書巻の気がこかしにただ
 よつてゐる。初めの二行はホラーテウスの歌章(第
 二巻の一三の二六・二七行)に負ふところがあ
 るし、中程のくちびるに紅を塗る前後はオウイデ
 イウスの「愛の技法」の「本當の血で赤味のない
 女は、技巧によつて赤くなる」(第三巻、樋口勝彦
 氏訳)の辺りに淵源すると考へられてゐる。それ
 でも一篇全体がフランス流モリスの筆致を思
 はせる皮肉な味で統一されてゐる点を私は買ふ。

そんなお作りも彼女たちには罪にならない。
 見掛けばかりは鷹揚に振舞ふけれど
 その実、うはべのレース地の大層なふくらみ

を

かちかちの亜麻布が内側から支へてゐる飾り

を

註
 1 昭和一年四月二十六日。
 2 吉浦義彦氏。季刊同人誌「創造」同人。
 3 大阪府伊丹町に父母の他に愛兒路是若子さんがあつた
 4 伊東静雄、その他。
 5 岩下莊一氏。

えんぴつつけずり

萩原 葉子

器用でない私は鉛筆が思うように削れない。小学校の時から鉛筆削りが下手で、その苦勞はいまでもおなじである。

苦勞して出した芯をおそろおそろ削っていると、かならずピンという嫌な音をたてて、はね返ってしまうのは随分情けなかった。隣りの生徒の筆入れには、芯の尖った鉛筆が整然と並んで綿にくるまっている。その形良い尖り具合は芸術品のようで、自分はずいぶんやうに削れないのかとつくづく思った。

いまでは私にとって鉛筆は切り離せない大切なものにペン皿には一、二本きり並んでいない。新しいのを削っているうちにいつか半分位になっていくし、ひどい時には持たないほど短くなっているの、すぐに無くなってしまふからだ。そのくせ時間ばかりかかるので、急ぐ時には芯は削らず四角や丸のまま、あちをむけ、こちをむけて書いていくので、しまいには字はいつそう下手になり仕方なく削る。たちまち机は削り屑の山になるし、真黒の手は見るも無残で腹立たしい。まるで私を嘲笑するかのようにはね返る芯と

取っ組んで泣きたいほどである。

このあいだ百貨店で鉛筆削り器というものをふと見て驚ろいた。青、赤、ピンク等のスマートな器械はマネキン人形のように、その容姿を誇って並んでいる。見とれていると店員さんがきて使い方を説明してくれた。なんと苦勞なしに削れるものだろうか。しかも芯はみごとにのびて、つんと尖っている。

早速それ買って取った私はうれしくて、深夜鉛筆を削りはじめた。机の奥や戸棚の隅に折れ芯のまま小指ほどのままで、一本残らずさがし出してぐるぐる器械をまわした。そしてみるみる生まれ変わってゆく鉛筆を初めて心をこめて見たのだった。気がつくともH、HBなどに混つて4H、4Bまで使っていたものが分った。堅くてナイフが通らなかつたものでも、折れ芯だと腹立たしなかつたものでもいまでは大切なものとなつた。見るとプラスチック製の引き出しには上等の軽節のような薄紅色の削り屑が、芯のよごれも見せないでふんわりたまっている。

たちまち鉛筆だいちんとなつてしまつた私は、机の上に順に並べてみたり、H、Bと分けてみたり、小学生のように、いつまでもあきなかつた。(S三六・二一七東京タイムズ所載)

無条件降服(続)

田中 克己

八月十八、九日ごろ、私は日課をすまして情報室にゐた。日課といふのは、「起床」の号令で起きて、寝具を揚げ、兵室の掃除をし、朝の点呼に出てから下士官室の片付けをし、「飯上げ」の声で朝食をもらひにゆき、下士官室と兵室にくぼり、自分も食ふ。そのあと飯の鐘を炊事班に返納し、食器を洗ひ整頓して、情報室にゆき、ここの掃除をおへて椅子に坐るのである(私は情報室でただ一人の二等兵であつたから、今はもう忘れかけてゐるが、毎日これをやつてゐた筈である)。午前中は情報も入らないので、私はいつもの通り、他の兵たちと一緒に室に坐つてゐるだけだつたらう。他の兵たちといふのは、学徒動員で上海の東亜同文書院大学から入營して来たお袋の兵長、天理外語で中国語をやつたといふ田中兵長、この二人の青年と西尾古兵殿(と私は称しなければならなかつた)とである。西尾二等兵は私と同じ年で、半年早く召集を受けるまでは毎日新聞社の門司支局勤務だつたとか聞いた。この一等兵が私のことを識つて

春ももなか

美堂 正義

真珠を融かした空に
太陽は寝むたげな顔を見せる
こんな日には南の風が

雑草の上を吹いて土の香を運んでくる
とある瑞垣から覗く梅の花が
白い花朶を散らせてゐるが

隣の垣根の蔓ばらは薄緑の芽をつけて
季節のあはたらしい変転を知らせてくれる
老いく身には芽吹く明るさがしたしく
日の光がいろいろの姿態を浮き彫りとして
午前の散歩道を哀歎の響りが諧調を醸し
道のつぎとつぎに一本の河があり
チカチカ瞳に泌みる流れも
水かさを増した音が快ろよく大きい
春の逞しい息吹きは
私をとり残して洗刺と若やいでゐる

斎
恨
み

ゐて、戦死した佐藤中尉に話七私は教育が了るとすぐ情報室勤務となつた。当然、彼のやつてゐた雑役は、みなこの無器用な二等兵にかかるとになつたのである。

佐藤中尉に代つて、この時の情報室主任だつた斎藤中尉が顔を見せたのは、十時前でもあつたらう。席についてしばらくすると「君たちだけにいつておく。秘密だぞ」と前置きして「日本は無条件降服した」といつた。そのいひ方も重々しく、感慨をこめていたが、彼はそのあと、うしろの黒板に「将校 懲役十年、下士官同五年、兵同三年」と書いて、

すぐ消すと、どこかへ行つてしまつた。私はこの間、一語も発しなかつた。他の兵も同様である。数日後、私にしては珍しいことだが、西尾古兵の日記をぬすみ見ると、この日の記事として「田中はこのしらせをきくと声をあげて泣いた」と書いてあつたので私は非常にふしぎに思つたが、もとより抗議を申しこんで訂正することも出来ないでそのままになつた。西尾古兵一名も忘れたのでその後、大毎へいつてきてみたがわからない。ご存

じの方はお教へ願ひたいはなぜ私を「泣か」さねばならなかつたのか。ひよつとしたら自分もふくめて誰も泣かなかつたのが、予想外でもあり、新聞記事的な文章からいへば不

適当だと考へたのではなからうか)。

それでは私はなぜ泣かなかつたか。——私は三十五才(満三十四才に二週間足りない)だつたのである。この年齢が自信満々で、少しも泣かないことは、近ごろになつて私も思ひ当る。その年齢だつた上に、私はもう涙が涸れてゐたのだ。昭和十八年九月に可愛盛り

の次男を疫痢でなくして、私は人前をはばかり泣いた。みつともないほど泣いた。これでもう悲しいからの涙は出なくなつた。うれしい涙はもとよりある筈もない。
泣きはしなかつたが、もとより大変な動揺を感じた。ひとはいろいろで、後で会ふ義弟の隊では、降服のしらせをきいた新兵は「記念撮影」をしたさうだ。また河上肇博士は、「元來敗戦主義者で」「大喜びに喜ん」で「あなうれし」とにもかくにも生きのびて、戦やめるけふの日にあふ」と歌つた由である。私はちがつた。兵であり、外地にをり、義弟の隊の新兵のやうに召集解除を受けて帰宅するなど考へられず、斎藤中尉の説では懲役となるのだ。

私はゆつくり考へるために、皆の出勤のあと空室になつてゐる兵室へもどつていつた。しばらくすると、西尾一等兵がやつて来て、私を見つけると「おい、水を汲んで来てくれ」

といった。兵室の入口には甕があつて、そこへ水を汲んでおくのも私の仕事だつた。ところが井戸は三〇〇米ほど先にあつて、石油鑛につるべで汲んで、運んで来るのが中々の大仕事なのである。小林伍長がいつからか中国人の少年をやとつてくれ、これもやひで運んで来る。他の班の兵たちはそれを笑止な顔で見ている。今日はまだその少年が来ないので甕はからつぽである。西尾一等兵が水あびしようとして、私にいひつけたのは当然なのである。

私はしかし、むかむかとして突然「いやだ」と答へた。(もういやだといつたかもしれない)。本当にもういやになつたのだ。第一に私と同じ重大な秘密を聞きながら、なぜ水あびをしなければならぬのだ。同い年で同じインテリでありながら。内地に同じく生死不明の家旅をもちながら。それはもう餓死してゐるか、空襲で直撃弾を受けてゐるかもしれない。私の召集直前の本所深川の人のやうに焼け死んでゐるかもしれない。しかし日本は？それを考へてみようともしないで、おまへは水浴びして、どこへ何しにゆくのだ。私は西尾一等兵とさへもゆつくり話したかつたのだつたらう。その期待を裏切られての答が「いやだ」の一言だつた。(半自叙伝)

うば車

池沢 茂

ぼくが公休日に、いつものように幸吉をつれ、ぼつ／＼歩きはじめた梅子はうば車にのせて、行きつけの散歩に出ようとする、近所のタミコちゃんが「どこへ行くの？ あたしも連れてって！」と駆けよつてきた。

ぼくはとっさに、やりきれないな、と思つた。自分のふたりの子を遊ばせるだけでも、なか／＼の重荷だつたからだ。といつて、親にばかり引つ付けている幸吉は、なるべくおなじ年ごろの子と遊ばせなかつたら、ますます／＼おかれてゆくに違ひない。タミコちゃんは女の子だけど、したしくしている近所なかで、たゞひとり幸吉とおなじだつた。それもおなじ月で、十日しか違つていない。

「あたし大きくなつたら、幸ちゃんのお嫁さんになろうかしら。おかあちゃんも、幸ちゃんのお嫁さんにしてみらいつて言うてたわ……」とタミコちゃんは、家に遊びにきたとき、くりかえして言った。

タミコちゃんの母も、ぼくと道で会つたとき「近所で、おなじどしですから、こゝろ

強いすわ。幼稚園も、いっしょにやらせていた。こうと思つてますの、小学校も、中学校も。それから、いまは男女共学ですから、高等学校も……」と、ひとみを輝かせた。

もつとも、ぼくはそのとき、たじろいで、急には返事できなかった。タミコちゃんの両親はそのころ、いまと違つて、ふたりとも元気で、なか／＼派手な生活だつたから、まずしつたほくには、つきあいが心配だつたせいもある。しかしそれよりも、幸吉の頭には正當でないところがあるらしいと、だん／＼強く認めずにいられなくなつていたからだつた。それでも、ぼくにも妻にも、まだ／＼希望があつた。幸吉がおさなかつたからだ。小学校へゆくまでにはなんとか追いつけるかもしれないと、ぼくたちはどこかで、やはり期待していた。さしあたってタミコちゃんと遊んでくれるようになったらいいのにと、ぼくも妻も、とき／＼話したつた。

「カニをとりにつくんだよ」とぼくは、幸吉といっしょに遊んでくれたらと、とっさに思いついて言った。「ちよつとだけ遠いところやけど、勝手に行って、おうちで叱られないかな」

「う、ん叱られない。幸ちゃんのおじちゃんといっしょにやったら、どこへ行つてもい、っ

にし

堀之内 歴

春一番の 西風に
吹き始めると

まひる ところ忙しい
辻に来て 足を止め
眼をつむる

風の声は しきり
声の底に 響きが

△小さくなれ もっと／＼
△小さく生きよ もっと／＼

いつか うなずいて
再び眼を開く と
あたりは 突風の中で
一瞬ひろがって 在つた

一九六〇・三・二六

て、おかあちゃん言うつたわ。よその知らんおじちゃんやたら「子取り」やから、速いところへ連れてゆかれて、サーカスに売られてしまうけんど……」

ぼくがうば車をおして出発すると、タミコちゃんはこおどしし、ケン／＼をしながら先に立つた。母が胆石の発作をおこし病気がちになつたせいとか、おとなに甘えたくてならぬらしい。梅子をおしつけてもうば車に乗りたがり、ことわると、うば車の前や横にぶらさがる。幼女から少女へ移ろうとする手前の、傷つきやすく揺れ動く過渡期だつた。どうしても親の手をはなしたがらない幸吉に一方の手をにぎらせ、うば車は片手だけで押しているのだから、らくではない。幸吉と手をつないでくれたら一番いいのに、幸吉は全然受け付けないし、会話がなんにもできないから、タミコちゃんは、ます／＼おとなのぼくに引つ付けてくる。さいわいなことに、カニ

とりの場所は案外近くにあるのだつた。市バスがしきりに行きかっている。タクシィやオートバイ、トラックやオート三輪も、たえまなく走っている。そんな舗道から、ほんのちよつとばかり、それたところだつた。神戸の山手の住宅街だから、都会のなかに、こんな一画が残っているのかもしれない。思

いがけない深い山と谷があり、その谷間に小川が流れている。わりあいきれいな水で、谷川のおもむきがある。ぼくは以前から、とき／＼は妻も、いなかの空気や景色を求めて、このあたりへ幸吉や梅子を連れてきたが、ぼくは一度、この谷川で、子供たちがカニをとっているのを見たのだつた。

三人の子供づれで、うば車もあるから、ぼくは一番の近道をとつた。すこし遠回りの、よいほうの道のあたりは、すでに急速に開けはじめ、谷間にあつた小さな田んぼも埋め立てられてアパートなどの建築現場になつていゝるせいもある。山すそを切り開いて新築された寺らしい家の裏庭に、そつとうば車をあずけ、二メートル近いがけから、ぼくがまず、すべり落ちる。それから、背伸びをして、三人の子をひとりずつ、か、えおろす。こんどは梅子をだいたま、雑木林のなかのがけをササや雑草をわけながらおりてゆく。すると谷川がある。幅は二メートルくらいだが、かわらができてゐる。その砂のうえに梅子をすわらせ、泣きださないうちにと大いそぎで引きかえし、こんどは幸吉をおぶつておろす。タミコちゃんは手を引くだけで「ひとりでおられる？」とたずねると、口をきゅつと結んで「うん」とうなずく。

浅野 晃著

英雄色を好む

320円

現在……財界、政界、文壇、評論界に活躍している百余名の「英雄」諸氏が著者との交わりにおいて示した無鉄砲でへんてこな青春。友情あり。色あり。恋あり。この書は逸話的な人物論であるとともに、日本の限られた時代の裏から見た文化史

〔目次〕はだか交友録 青春の宴 従軍当時の仲間 ジャワ独立の志士 三高の頃 思い出す人々

東京都千代田区神田神保町二ノ二

大樹書房

やれ／＼大仕事だった。そのかわり、ふいに出現した谷川のかわらにおり立って、子供たちは大よろこびしている。「こんなところに川があった。おじちゃんはい」とこ知ってるのねえ」とタミコちゃんは息をはずませ、よち／＼歩きの梅子も、さっそく、はだしに

なつて、水ぎわへ足を突っ込みにゆく。感情のはつきりあらわれない幸吉も、水は特別に好きなせいか、にこっと笑顔になって、流れのなかへと、ぼくの手を引っぱってゆこうとする。コンクリート・ミキサのひびきが、アパートの建築現場でガラ／＼とどろき、急坂の舗道をおりてくるタクシーやトラックのブレイキの音が、とき／＼、キ、キ、キーときしってくるけれど、深い岸にかまれば山林やアシなどにお、われた谷川の底は、まさりの別天地だ。小さな子供たちの相手をしているなんて、あまりにいいのよい図ではないが、カニとりなんかの子たちが来ることはあつても、おとなはだれもいない。みじめなような気持ちの、どこか深い深いところ、とても愉快な気もする。息もつまりそうな生存競争なんかも、うそみたいだ。林のなかで小鳥がしきりにさえずり、チョウが高く低く舞っている。

「さあ、とうちゃんが、おじちゃんが、カニをとってあげるよ」

ぼくははだしになり、ズボンもぬいで、流れのなかへ、ジャブ／＼はいっていった。

★ ★ ★

果樹園六十三号 昭和三十六年五月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園六十四号 昭和三十六年六月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園

第64号

天と地のあはひ 辻野久憲
牝 猫 福地邦樹
ヘリック詩抄 森 亮

カニと池沢茂
晩春美堂正義
死の能面堀之内歴
無条件降服田中克己
應上芥吉本青司
路 浅野晃
編輯後記 小高根二郎

天と地のあはひ(下)

辻野久憲

私たちはここに、一種のストイシズムを見るべきであらうか。或ひはまた、彼等の裡にあつてなほも生息をつづけてゐるものを、あの「動物精気」とか、「盲目的意志」とかの言を以て呼ぶべきであらうか。否ここにこそ、その不幸、その苦悩のゆゑに醇化されて、羈絆を超越した生命の最も純粋なる存在が示されてゐるのではなかつたか。即ち、彼等の享受してゐるものが、今や靈魂の存在にまで至つてゐることが示されてゐるのではなかつたか。なほその上に、これらの生命が、その

肉体の業苦にも拘らず、かくも平和でありうるのは、その靈魂が腐敗してゐない、少くともそれが既にして潔められ救はれてゐることの何よりの証左ではなかつたか。然るに私たちは、なまじひに満足な肉体を具へてゐる(或ひはかう自負してゐる)ばかりに、それに執着するか或ひは拘束されて、容易にこのやうな靈魂の存在にまでは至りえぬものである。しかもなほ悪いことには、自己の肉体に依據する者は、それを完うすることにのみ没頭して、多くはその靈魂を捨てて顧みない。そのため、靈魂が怖るべき病に浸され、徐々に腐り頽れ去つてゆくのに気づかないのだ。かうして、わづかばかりの外形の、肉体の満足を酔うて、その内奥の靈魂を嫌悪すべき腐敗の手に委ねた悲しむべき人々が、いかに多

編輯後記

三月七日、安西冬荷氏から、二月初旬ラジオ京都で伊東に關して放送された旨、お便りをいただいた。三月一〇日、井上靖氏が「大朝讀書欄の「えつらん室」で伊東靜雄全集を推薦してくださつた。同人吉本青司は高知新聞に「知恵と教情の寶石」と題し伊東全集を弘報してくられた。三月一日、宇野浩二氏から伊東全集及び拙誌に添ひ言葉をいただいた。三月三日、庄野潤三氏が京都新聞讀書欄に「本物の文學」と題し伊東全集を推薦してくださつた。三月十五日、三好達治氏が東京新聞に「現代詩の特異の領分を開拓」と題し伊東全集を批評してくださつた。三月二十日、伊藤信吉氏が「週刊読書人」に「結晶した購買の抒情」と題し伊東全集を推してくださった。同日夕刻安田章生氏が来訪され氏から拾遺伊東書簡一通の写しをいただいた。この会も全集が機縁となつた。三月二十二日、鹿野「双曲線」欄に「詩と生活」と題し伊東全集に關してあつた。推薦の言葉をいただいてゐるかも知れない。失礼ではあるが、こゝからあつくお礼を申し上げます。

辻野久憲の絶作「天と地のあはひ」は次号で完結する。伊東研究に關連して看過しえない文章である。(〇)

果樹園 第六十三号 (毎月一回一日発行)
昭和三十六年五月一日発行

編輯者 小高根二郎
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八

發行所 果樹園社
池田市野町一六八
定価 三十円

きことだらう！ さう思へば、私はこれらの病者たちが果して「不幸」と呼ばるべきかどうかさへ、疑はしくなつてきた。そして彼等を目のあたりにして私の感じたものが、嫌悪ではなかつたと同様に、また憐憫や同情の念とも異なり、率直に云へば、それは実に一種の羨望の情に近いものであつたかも知れなかつたのである。が、考へてみれば、彼等は決して羨まるべき人々ではない。そのやうな感情は、やはり一種のサンチマンタリズムにすぎない。ただ彼等にあつて羨まるべく、尚ほるべき点は、彼等がよくその肉体の業苦に耐へて、生命の本質なる靈魂の存在にまで至りえたこと、且つその靈魂をして清浄たらしめるやうに努力し、その希望と信頼と、更には確信との裡に、光明と平和とに満ちた生活を送つてゐることである。私たちは幸にして、このやうな肉体の業苦からは免れてゐる。この上は、私たちも亦、彼等に劣らず靈魂の業苦からも救はれ、清浄な光明の生明を享受しうるやうに努めねばならないのだ。彼等はそれを躬を以て私たちにまで教へる、あまりにも痛ましく、また尊い受難者でなければならぬ。

かうして、異常な感銘に酔つたやうになつて、私は病棟を出た。そして次に作業所から

耕作地の方へ案内されて行つたが、その行く先々で、また新しい驚異が私を待つてゐた。病者たちが不自由な手足を用ひて作り上げた工作品の美事さや、更には二十年の昔、村の人々も捨てて顧みなかつたといふ、いや、そればかりか、飲料水を求めるためにいくら掘つても目的を達せず、数年前六十尺の深さに至つてやうやく水層に達したというやうな熔岩質の礫の地が、今は百数十人の人員に供給自足することを許すほど立派な耕地に変じてゐることなどは、夫々に私を驚かさねばおかなかつた。それから私たちは、聖堂、ルルド洞窟、聖心の像等に詣で、最後に片隅の墓地を訪れた。そこには幾十の土饅頭が並び、その彼方此方に、最近埋められた人々の粗末な木の十字架が十数本立つてゐた。そのうち一本だけとりわけ真新しく、まだ剪りたてのやうなアマリスやパンジーの花が供へてある十字架に眼を止めて、私がその前に佇んでゐると、案内の人が近づいてきて云ふのだつた。「これはちやうどいらつしやる一時間ばかり前に、お葬ひした方のでございますわ。」そして更に附加へて、「ここのお葬ひといつたら、そりやはかの方に見せておあげたいくらゐですの。皆さんがここにお集りになつて、歌をおうたひになりましてね。一人も

かうして全部一巡し終ると、私はグラウンドへ行つて野球を見物した。野球は病者たちの最愛の娯楽で、毎日曜の午後缺かきずプレーがあるのださうである。軽症者がマウンドに立ち、それ以外の者も外出できる者は、みんな出て来て熱心に応援してゐる。しかし軽症者といつても、すべて顔が引釣つたり、不自由な指でボールやバットを持ち扱ひかねてゐるのだが、それを見てゐて私は少しも感傷的な気持を覚えなかつた。いやそればかりか、ゲームが進むにつれて、私もいつか我を忘れ、夢中になつて声緩したり拍手したりしてゐるわが身を見出すのだつた。そして足のお悪い神父様がヒットを打たれる度に、私は幾度代走者にならうと思つて腰を上げかけたか知れない。かうしてシーソー・ゲームが進行するにつれ、声援も亦益々盛んになる。そしてその絶え間絶え間に聞えるのは、しきりに啼きしめる鶯の声。が、そのうち何心なく後を振り返ると、観衆からただ一人離れて、さつき少年が、見物するでもなくせぬでもないやうな様子で、ほんやり佇んでゐる姿を見かけた。

お泣きになる方なぞございませぬわ。やれやれ、よかつたといふやうな様子で……」私はその十字架の表に読んだ、「神の僕 霊名ヨゼフ 何某」その裏に、「御降年 千九百三十六年四月二十五日飯天。」なる程さうだらう。彼等は死を最後の救と考へ、死ねばその靈魂は天に飯ると信じてゐる。そしてまた、それにちがひはあるまい。この土の下に埋められるもの、それは彼等の脱ぎ棄てた生命の脱殻だけなのだ。墓場からの飯途、案内の人は私の間ふま

牝猫

福地 邦樹

裏のお宅の牝猫は死んだうちのミーの恋びとだつたしっぽの長い 焦茶のぶちのやさしい眼をした小柄な猫だ春と秋にはきつと妊娠して裏の奥さんは子猫の処分にいつも困っている

に、またこんなことも話してくれた。一度ここに入院した病者の家族は殆ど見舞にやつてくる者もない由、たまたまやつて来てても、病者の顔形があまり変つてゐるので、怖がつてすぐ逃げ返つてしまふ由、そして大抵の者は死んでも報せてくれるなど云つて、殆ど葬式に列した家族はない由。それを聴きながら、私はふと胸に浮んだ一つの疑問、否、それは私がここを訪れるまでずつと胸に抱きつづけてゐながら、その時にはもう殆ど問ふ必要のないことを感じてゐた一つの疑問を、思ひきつて発した。「患者さんたちのうちにこんな方はないでせうか……絶望のあまり自分で自分の生命を絶たうとするやうな？」案内の人はその意味が通じなかつたのか、「は？」と私の方に振返つた。しかし私は既に愚かしいことを云ひ出したものだと後悔してゐた。でも一度口にした以上、引込めるわけにもゆかないので、そつと囁くやうに、「つまり、自……」が、その言葉の終らぬうちに、私はいさう答を聴いてゐた。「ええ、そんな方はございませぬやうですわね。でも、なかなか信仰におはひりになれなかつて、二年も三年もお苦しみになる方が、そんな方ははたで見てもほんとお気の毒ですわ。」その最後の言葉は、鋭く私の胸を刺した。

私達までいささか責任を感じて特別配給としてだしじゃこなどを食べさせるのが常だつたミーが死んでからもう二年になるけど相かわらず彼女は春と秋には私の家へやつて来るすると私達ははあまた妊娠だなどわかつてしばらくの間だしじゃこを食べさせてやるのだ

人ぼつちになつたのであらうか。いやいや、君はただ一人棄てられたのではない。ここに兄弟たちと同じやうに、光明と平和の約束された新しい生涯に入れよ。君は幸ひにしてまだ純真な少年であるだけに、私たち智慧の笑を食つた者のやうに、神の救を得るまでに二年も三年もの墮地獄の苦しみを嘗めはすまい。さうだ。ほんとに、君の淋しきも苦しきも、やがて間もなくにして去るだらう。しかも君の親兄弟は、すべて因ある者の約束に従つて、近き将来、恐らくはあまりにも近き将来に、君と別れねばならぬが、神の愛は今後永遠に君と俱にあるのだ……私はともすれば彼の方に向ふ視線に、胸に溢れる思ひを籠めてから叫んだのだつた。そのうちに、リーン、リーンと夕べのアンチエラスが鳴り出した。と選手も観衆も一せいに立ち上つて、十字を切りながら一瞬の黙禱を捧げた。やがて間もなくゲームも終つたので、私は神父様に伴はれて再び本館に引返した。その途々神父様は云はれるのだつた。「患者たちには何か絶えず関心を有たせることが必要なんですよ。さうしないと、自分たちの暗い運命を考へたり何かして……」そして「率先して野球を始めたのはいいが、まるでルールンか知らないの、僕はこれで四五度も神宮

球場へ行つて見ましたよ」と云つて笑はれた。それを聞きながら、私は今更のやうにこのやうな世界における教導者の聖い努力と労苦の程が思ひやられ、またそれがあればこそ、病者たちの上にこれほどの平和が恵まれてゐるのだといふことを悟つたのだ。

再び応接室の卓に相對して坐つた時、私の舌はもう先刻のやうにもつれはしなかつた。そしてお茶をいただきながら、私たちの唇にはジイド、ベルグソン、マリタン、クロオデルその他の人々の名が上つた。間もなく六時になると、神父様は立上つて云はれた。「これから夕べの勤めだから、あなたも列席していらつしやい。勤めは半にすむが、最終のパスがここを通るのが二十分だから、それに遅れないやうに、遠慮なく中座されていいですよ。」私の最初の希望では、できればここにせめてもう一日でもおいてもらつて、もつと病者たちの労働の姿をも参観したかつた。ここで受けたこのあまりに平和で幸福さうな感銘、それは今日が安息日だつたせゐもあるのではあるまいか、さうも疑はないではゐられなかつた。しかしもう一度よく考へてみれば、私はもうどうやら充分に見るだけは見たいや教へられた、これでいいのだ、これでも私の目的は立派に果されたのだ。それに、

でなくとも忙しいこの方々に、これ以上厄介をかけたなり邪魔をしたりしてはならない、これ以上はまた近い将来に再来の許しを得るこゝとして、その時に譲らう、さう思はれた。そこで私は神父様の言葉に従ふことにした。しかし、勤め中途に立去るといふことは、

流石に私には堪へがたかつた。すべての人々が声を揃へて「アレルヤ……アレルヤ……」と合唱してゐる中で、まだ禱りの言葉を知らない私一人が、黙然として頭を垂れてゐることも苦しくはあつた。けれども、それにもまして、その喜びの歌声をあとに聞き流し、こつそりとその場を抜け出さねばならぬといふことは……が、時間は容赦なく切迫した。たうとう私は、「己れにはまだ許されてはゐないのだ！」と思ひ諦めて、登音を偷みながらその場を後にした。そして橋の袂に立つてゐる聖母マリアと聖テレジアとの像に、何ごとかの赦しを乞ふやうに深く頭を下げると、パスの停留場に向つて駆けだした。かうして再びわが身を現世の境に見いだした瞬間、ふと私の唇に上り來つたのは、「ユダ出て行きて縊れたり」といふ言葉だつた。私はそれを呑むかのやうに、強く頭を振つて眼を上げた。と、ちやうど夕陽が愛鷹山と

宝永山との間に傾き、茜色に燃えたつた富士の姿が私の瞳を射た。しかしパスは私のかかる感慨にも一向無関心に、次第に夕闇のせまる村里の方へと、ひた走りに下つて行くのだつた。

旅から返つて、私は礼状を認め、その中に訪問の感銘の一端を洩らし、最後をこんな言葉で結んだ。「あの日以来、たえず私の耳許で、何かこの世ならぬばかり静かで和やかな樂の音がいたしてをります。」折返して神父様から返事を頂いたが、その中に次のやうな一節があつた。「そんなに自分自身をいぢめてはいけません。静かに祈りなさい。我々は平和と光明と喜びとのうちに活くべく造られた、神様は人間の不完全な缺陷は本人以上に御承知な筈、完全にきよくならんと心から眞ひつつ折れば、あとはお任せすればいいのです。」それを讀んで私はちよつと恥しくなつた。あんなに平安を得たやうなことを書きながら、まだ私の裡で乱れに乱れてゐる混乱を見抜かれたのを知つて、が、それ以上に、私はこの短い言葉の中に何か驚くべき啓示を見出したやうな気がして、幾度も繰返してそれを口の中で呟きながら、浜辺に降りて行つた。「我々は平和と光明と喜びとのうちに活くべく造られた。そんなに自分自身をいざめ

てはいけない……静かに祈りなさい……お祈りなさい……」まだ五月の初めだといふのに、もう蟬が鳴きしきつてゐた。また石垣の間には、月見草が咲きみだれてゐる。私はその歌声をほんやりと聞き流し、またその淡黄の粧ひをちらりと網膜の隅に止めたままで、

ヘリック詩抄 (六)

森 亮

絹の服

いとしいチュリアが絹の服をつけてみちをゆくとき、
なんと彼女の衣裳は美しいながれを見せることだらう。
それは流動する無数の線を糸がいて美しくあふれながれる。

次にまた眼を向けてわたしがそこに見るものは
前後左右にしろがろとゆるる絹物のすてきなうごき、
そのやはらかいさびがきらめきがわたしを虜

なほも同じ言葉を聞きながら、夢遊病者のやうに渚を遺つてゐた。が、そのうちにふと眼を上げると、彼方の砂丘の上に、何かほの白い胡蝶のやうなものが、無数に舞ひ降りてゐるのである。怪しんでその傍に歩みよつてみると、そこにも亦昼顔が一面に咲き乱れてゐる。

ただ。私はその傍に腹ばつて、ちつとその上に無心の瞳を注いでゐた。すると、私の頬の上にとこからともなく故知らぬ微笑が湧き上つてくると同時に、さつきの言葉の意味がはつきりと身に沁みて感じられてきた。

眠るなり死ぬなり好き勝手に振舞ふがよい。

ひなぎく

ひなぎく、さう急いで花びらを閉ぢなくてよい。とろつとした眼の落は落ち着いたもので、昼の光を捕へるに至つてゐないし、それが太陽を閉ぢ込めるには程遠い。
どの金盞影花もまだ眠りに就いてゐない。物の影はまだ大きく広がつてはゐない。真先に現はれるはずの羊飼ひの星も

チュリアがひとの生命を掻き立てるその眼を閉ぢるまでは、雛菊よ、起きてゐなさい。彼女が眠つた後なら、世の中のあらゆる物は

ヘリックの詩には表向きの主題や強調点はいいダシにされて、彼が本当に言ひたいことは別にある——と言つた型のものがある。敵本型の詩である。前々回および前回に紹介した物もこの型に属すると考へてよいが、今回の「絹の服」(七八〇番)も「ひなぎく」(四四二番)もさうである。前者では絹の服がチュリアに着られてゐる状態を描写することによつて、それを着てゐる人の好ましさを想像させる。詩人が彼女を憎からず思つてゐるから、その衣服まで憎くないのだ。後者も、表向きの主題は雛菊であつても、この詩の展開に動かし難い方向を与へてゐるものは佳人チュリアである。それゆゑこれもチュリア・シリイズの一章と見做してよい。

ぼくは谷川でカニをつかまえたとき、幸吉もきつと喜んでくれるだろうと思った。父親のぼくが、幸吉とおなじ年齢だったころ、兄に連れられて田んぼや小川へゆき、生きていくドジョウやフナやエビ、ことにカニなど見たとき、どんなに胸をおどらせたか、あり／＼と思ひ出すことができるからだ。父と子だから、いろんな点で似ている。顔や体つきだけでなく、性質も、もっと深く微細な精神構造なんかも、ずいぶん共通点があるに違いない。近所の子といふだけのタミコちゃんも、ぼくが「そら、カニがとれたよ」と声をあげると、おどりがあがって「見せて！ 見せて！」と駆けよってきた。歩きだしてまのない梅子も、はじめて見る生きたカニに、おす／＼と息をつまらせながら、ふしぎそうに、ひとみをこらしている。

カニは小川の岩かけや石のした、折れたアシや木の枝などが固まっている岸べなどに、ひそんでいた。都会のなかの川なのに、案外たくさんかくれている。流れのなかでつかま

無花果の新芽が噴き出した
あの広幅の葉に夏日の光が輝くのは
もう間もないことで
柿の嫩葉も羞ぢらひ勝ちにみえ初め
生きてゐるいつばいの悦びで
花曇りの空に両手をさし伸べるやうに
高くつきだしてゐる

浴場の窓を透して
それら若々しい姿を眺めながら
瘦せた体を洗ふ
眼に見えない垢は次から次へと

えるのはむずかしいけれど、手ごろな木の枝をひろって、みずぎわの根のあたりや、がけすその穴など、あちこち突つてみると、小さな川ガニが、はさみを振りたてながら、あわてて、水のなか目がけて駆けだしてくる。タミコちゃんもまねをして、そこらへんを樺で突つきまわり、カニが出てくると「いた、いた、いたよオ。おじちゃん、つかまえて、

際限なく出てきては落される
そのやうにいつの間にか青春は失はれ
老醜無慘
その年令に近づいてきた
私に青春はなかつたやうに思ふ
またあつたやうに思ふ
その不確実にとまどひながらも
心だけが一途に燃えたのがかすかな記憶に残り、無為に過した日々が悔しまれる
かすかな湯音と日の光り
静謐の雰囲気に融けるもの憂い倦怠
そのなかに私の生活はあり
か、はりなく時は経つていく

つかまえてエー！」と目の色をかえて叫びたてる。持ってきた粉ミルクのあきカンに入れてゆくと、やがて、七ひきほどになった。かわらの砂地に置いたそのカンのなかを、梅子はふしぎそうに、のぞきこんでいる。はじめはこわ／＼だったが、ぼくがカニをつかまえるのを見て、だん／＼平気になったのかカンのなかに手をいれようとす。

「あつ、あぶない。指をはさまれるよ。カニははさみを持つてるからね。さわると、梅子ちゃんの指をきゅっと、はさむよ。痛いよ」
ぼくがあわてて注意すると、梅子はこわがって、たちまち泣き顔になる。それでも、一びき、足が折れて弱っているのを取りだし、砂のうえに放してやると、ぼくやタミコちゃんのまねをして、捧を持って追ひかけ「カニ

死の能面

四月二十九日二科会員吉田重誠自殺す

堀之内 歴

△能面師の自殺 制作に行きつまって▽
年来の知友にして 妖怪変化
わが吉田重誠の死が 写真入りで
今朝の新聞に出ている 四十九才と
俺はあいつの年を知らなかった

あいつは時たま訪れる
鋭く切えた新作の能面を見せに
翁 怪士 小面 孫次郎 みな
白い綿にくるまって 面だけ生きて
無気味に美しかった

！カニ！ カニさん待てエー！」と、はしゃいでいる。
ところが幸吉はそのあいだもずっと、ひとりだけ、小川のなかをいったり、きたり、しているのだった。かわらに散らばっているごみのなかから、かまはこの台ぐらいな板ぎれを一枚見つけてきて、それをポトンと落とす。するとそれは水に浮かんで、浅い流れに

それよか あいつの貌の怪しいこと
過分に垂れさがった鉤鼻の下で
耳許まで裂けた口は 絶えず微笑して
静寂で 私を限りなく惑わせた
△こいつは自分のかおを彫るんだ……▽

奈良春日神社の裏はあいつの家の近く
細紐で首を己が手で絞めていた とある
やっぱり あいつは自分の顔に
魅入られていたんだ あのかおに遂に
絶対の成型を与えようと企てたのだ

△制作に行きつまって……▽
違う ちがう 彼の魂魄の上でいま
私はなにかを 払い除けようとしている
一九六一・四・二九

ゆれながら、くだつてゆく。そのあとにしたがつて幸吉は水のなかをあるいてゆくのだ。そうして十メートルほどゆくと、古いくい五、六本あって、そこにアシやサ、木の枝や棒ぎれなどが引つかかり、小さな「せき」になっている。水はそこから急に流れ落ちるけれど、幸吉の板ぎれは、そのせきまできて引つかかり、水が騒いでいるから、おなじところにとまつたま、ポコ／＼と激しくゆられている。幸吉は立ちどまって、おどっている板ぎれをしばらくのあいだ、じっと見おろしている。それから、おもむろに、その板ぎれを取りあげ、もう一度水をふんでポチャ／＼と、十メートルほど引きかえす。それから、はじめとおなじところで板ぎれを落とし、ふた、び川しものほうへあるいてゆく。すると板ぎれは、せきまで流れていって引つかかり、おどりはじめ。幸吉はしばらく見おろしていつから、やおら取りあげ、また引きかえしてポトンと落とし、川しもへあるいてゆく。こうして幸吉は、ほくたちがカニとりに大ききわしているあいだじゅう、ひとり黙々として、五へんでも六へんでも、十へんでも二十へんでも、水のなかの十メートルほどを、いったりきたり、きたりいったり、しているのだ。

「哥ちゃん、カニがとれたよオ。見においでエ。たくさんとれたよオ」

ぼくといっしょにタミコちゃんと呼んでも、なんにも聞こえないみみだった。カニのカニを目のまえに持っていて見せても、おぼつかなく視線をたよわせるだけで、ずっと、どこか遠いところをながめ、じきにまた、水の流れに見入ってしまう。そして板ぎれを水のなかに落とし、そのあとについて、ひとり、ぼくたちから離れ、あゆみ去ってゆく。ふつうの子供がよくするように「おふね遊び」をしているのかと、サ、の葉で舟をこしらえ、そばへ持っていて「幸ちゃん、ポートみたいやな。よう走るねえ」と相手になつても、べつに喜ぶようすもなく、むしろ迷惑そうにしている。だからも干渉されずに、ひとり、一枚の板ぎれを水にながし、せきに引っか、つておどるのを見、小川のなかにいったりきたりしてあるのが、なにかしら、むしように楽しいのらしかった。

水はせいそ十センチどまりの浅さだから危険はない。ずっと上流のほうでも山を切りくずし宅地を造成しているの、大雨のときなどその土砂が流れ出すせいか、せきに近いそのあたりの川底は、やわらかな砂が積もつていて、岩で足を切つたり、石につまずい

てころんだりする心配も、ほとんどない。離れて見ているだけなら、ぼくも安らかだった。

でもこのときから、ぼくはもう「なるべくタミコちゃんといっしょに遊ばせたら」などとは思わなくなった。タミコちゃんのような正常な子と幸吉とは、種類がまったく異なっているらしいからだった。外形は酷似しているも、ある決定的な相違によって全然別種の生物に分類されるように、ふつうの子と幸吉とのあいだには、いちばん重要な精神構造の面で、どうにもならない相違が存在しているのだった。幸吉は幸吉で、ほかの大部分の、おそらく九九%以上の子供とは、まるきり別の、孤独なわき道のほうへ、みちびかれ、あゆんでゆくより仕方がないのだろう。「だれとも遊ばんと、うちにばかりいて、い、かしらん。いっぺんタミコちゃんでも呼んで、いっしょに遊ばせてみようかしらん」タミコちゃんがすっかりこなくなつたころ妻がふと言いだすと「うん、そうやなあ。いっしょに遊べたらいいなあ」

ぼくは顔をあげてうなずくけれど、妻の絶望をかきたてはすまいかと気づかうほうが大きかった。

らたぶん、敗戦の事実をまだ知らない友人の兵と語るために出かけていつたのである。私はまたひとりぼつちになつて、永い間、考へて、死なう、と決心した。実はこれよりまへから私は死ぬことばかり

塵芥

吉本青司

学校の塵焼場は 前栽の片隅にある
塵芥はすいぶん出来るもので
多くは紙くず
鉛筆のけずりかす
スリッパの破れ
パンのかげら……
こどもたちは ぎっしりつまつた塵箱をかか
えて

毎日 ここにやってくる
ベトンの窠が みるみるいっばいになる
頃あいを見て 焚き口から火をつける
乾いた日には
たちまち窯いちめんに燃え上がるが
湿つた日には
じわじわと底の方からくすぶり始める
今日は 南風のある快晴で

考へてゐた。そのため他の兵より動じなかつた、と思ふ。死を覚悟する理由は二つあつた。一つは、昭和十八年九月の次男の死である。疫痢であつといふ間に失つたこの愛児は、満二才で可愛さかりであつた。無邪気そのもの

火はいきおいよく燃えひろがり
煙突からけむりも出さない
庭の桜の木も若葉になり
月桂樹が黄の花を咲かせている
その辺の芝生に こどもたちが合作した
抽象派の塑像が立っている
天に脚を向けた野獣
空虚な三角の脳髓をもつ少年
一個の馬鹿でかい乳房をつけた少女
苦惱する巨人の顔
それらを指導した若い美術教師は
この春転勤して 今はいない

新緑の木々のあいだで 怪物どもは
思ひっきり初夏の光を呼吸している
そこからも一人の少年が
——塵焼場の当番は まだなかなか終らない

無條件降服 (続)

田中克己

西尾一等兵は私のこの返事をきくと、私にとつて意外にもとびかかつて来た。気がつく

と、私は彼に組み伏せられてゐた。
意外にもといつたが、本当か。本当なのだ。私は敗戦の報に動揺して、もう何をやる元氣もなく、何を考へる力もなかつた。西尾が来て、敗戦について語りあふならともかく、まだ命令するなど思ひも寄らなかつた。それと同じく、この命令に対する拒否が私的制裁に発展するなど、もとより予想もつかなかつた。

西尾はしばらく私を組み敷いてゐたが、またやさしい声で「もうやめような」といつて起き上つた。私も立ち上つて、それから水運びに出かけた。

私はこのことを、こ二十何年間、いまいましく、恥かしいことに思つてゐる。たしかに西尾の方が冷静だつたのだ。このあとにはよくおほえてないが、西尾は私が常よりもいやいやで、従つてゆつくりと水を汲んで戻つて来たあと、その水で体をきれいに拭ひ、それか

でもあつた。このころから日本の戦況の悪化は、インテリである私には疑ふべくもなかつた。私は国の亡びることも思つた。国とともに死なう、さうすれば次男のゐるところに行ける。私はインテリのくせに、さう割り切つて考へた。これが死ぬことを怖れずにねがふ理由だつた。

しかしいま敗戦の事実を知つて、(私は日本は亡びたと思つた) 私は生きてをり、水くみ飯上げその他の雑用に相変らず使役される。私は死ぬべきである。さう考へながら、私は今や、この死は、愛児のところへゆくことにならないのに気づいてゐた。敗戦と同時に、私は大きな転機を迎へたのである。今度はいやな死である。しかし生きてゐるのは毎日、なほつらくいやだつたのである。

私と同じ気持だつたと認められる者が隊に二人はゐた。一人は隊で最高の地位にあつた宇田川中佐だつた。この隊長は私室から一歩も姿を見せなくなつた。その後も命令は出、日朝日夕の点呼の際に伝達されたが、誰が作製したものか、私にはわからない。もう一人は満洲の佳木斯(ジャムス)あたりから召集されて来てゐた老中尉だつた(その名を私は忘れた)。私の中隊付、荒木中隊長が入院中は代理をつとめてゐた。その間も毎朝早くから、太鼓を

叩いてお題目をとなへてゐたのを、私はおほえてゐる。荒木中尉がたぶん敗戦で原隊に帰つて来ると、この老中尉は大隊本部付になつて私たちの近くに室を与へられたが、もう太鼓を叩かなくなつてゐるのに私は気がついてゐた。ある日この中尉が私にいつた。

「田中君（この中尉と藤中尉とは他の兵のゐないところでは、私をさう呼んだ）、内地はどうなつてゐるだらうかね」

「焼く野原となつてゐませうね。」

「君の妻子はどうしてゐるだらう。」

「疎開してゐると思ひますが、死んでゐるかも知れません。」

「生きてゐてアメリカ軍が上陸して来ればどうだらう。凌辱されはしないだらうか。」

「さうかも知れません。」

「その時は君はどうするかね。」

私は決然と答へた。

「ゆるしてやります。」

老中尉（今から考へれば私より二三才上でせいぜい四十前だつたと思ふ）はいかにも同感といふ風になつてゐた。

この中尉の心裏には、日本軍の占領地人民に対する暴行掠奪があつたのだ。佳木斯を中心として多く建設された日本人村は対ソ作戦の人的基地でもあつた。そこへ進入して来た

まふつもりだと気がつく。翌日も汁粉が出た。そのまへだつたかと思ふが、情報室の兵室の前で、いまままで壁だと思つてゐたところが開かれて、その倉庫から色々な物がとり出されてゐる。見ると針や糸や布である。

私は指図してゐる上等兵にたのんで糸と針とを分けてもらつた。両外套が山のやうに積まれる。いつのまにか掘られてあつた穴へもつて行つて焼却するといふのである。私はまた頼んで一枚もらふ。これと同時に靴下やジニパン（シャツのことである）も新しく下給された。

主計室に交渉が出来たと見えて、情報室は全部集合させ、一列にならんで袋を手渡しで運ぶ。三浦上等兵が塀の上に立つてこれを受取り、塀の外へ投げる。そこには中国人がゐる受取つてゐる様子である。これが衛門を通過させないで、隊の食料を運び出す方法であることは明瞭であるが、私は二等兵でもとより黙々として運ぶだけである。いなその二等兵も同じことをした。

私の手伝ひに中国人の少年が来てゐたことは前述した。命令は出ないながら唐県撤退が近く、この少年とも別れと知れたので、私はそこら辺に捨てられている物を拾つてゐたのをこの少年に見せる。金づち、布などひろげ

ソ連軍との対戦、婦女子の困苦は目にあまるものがあつたらう。しかも今や無条件降服の大詔である。中尉はまざまざと妻子の運命を想像しつくしてゐたのである。

無条件降服のことは、私たち情報室勤務の兵以外にも数日後には知れたと思ふ。日朝夕の点呼でも通達されたおぼへは全然ないのがふしぎである。分遣隊がつきつきと帰つて来た。私が数日ゐた温家荘の分遣小隊も帰つて来た。私と同時に入営で仲の良かった徳島県

路上

浅野 晃

坂道は雨を流し
薔薇は花を落した
花の色は流れた
うつくしかつた形も
そして踏まれた
一途に咲いた昨日といふ日
一夜の雨は花を流し
六月の日は坂道を照らす
燃えに燃えるみどりは
修道院の高い塀をかこみ
しぶきをはねあげて車が過ぎたあとを

かたつむりが一匹
鈍痛をこらへて
ゆつくりゆつくり横断する
ここもまた
おびたしい薔薇の落花
不断の香りが
六月の日のものの過剰と
をためごころのかなしさを
うたふ――
青い木陰の
そこだけいつまでも乾かない
絵具のみどりのやうに

て見せて、これが欲しいか、あれが欲しいか、と訊ねたうへ、情報室の下士官室の外にはこの少年をまはらせて、かけ声とともに一切、塀の外へはふり出した。この時、欲しいかないといつてことはられたのは、私がこれまでかぶつてゐて、いまは新品ととりかへられた軍帽である。田中先生のつけてゐたものといつて持つて行つてくれるかと思つたのに、と私のセンチメンタリズムは容赦なく拒絶された。

人の青木二等兵も帰つて来た様子であるが、一等兵を一人落して来た。生死は確かめないが、手榴弾の音がしたから、自殺したのだからといふ噂である。私はこのこと一つのためにも、営庭での体操のとき、私を突きとばした小隊長の下士官を憎らしく思つた。部下を落伍さしてよくぬけぬけと帰つて来たな、といふのが、その理由であつた。

ある日、私服（吉力のやうな恰好をしてゐた）で唐県のただ一つ商店のある通にゐると向ふから、この軍曹がやつて来た。一人ではなく、みな白昼酔つてゐる。私には気づかず（中国人と思つたにちがひない）、大声で「藤の野郎、殺してやる」とわめきながら通りすぎた。「藤」は、情報室主任の藤中尉なら、私の上官で、私は好きでもある。私は理由の何であるかを考へることもしないで、「殺してみろ、おれが次にはお前を殺してやる」とうしろ姿を睨みつけてゐた。

「皇軍」はもう解体してをり、（はじめから、或ひは昭和になつてからのことも知れないが）その証拠はこのやうに多くあるにも拘はらず、若い神経の強い兵隊たちは、食欲も少しも減らない様子である。ある日、汁粉が出た。隊に残つてゐる砂糖をみな使つてし

私は主計たちからも可愛がられてゐたのであらう、費ひきれなくなつて捨てられる、と思つた砂糖を飯盒に一杯もらつた。かうして唐県撤退の準備は出来上つた。

この間、私心がけながら準備未了となつたことが一つだけある。私はいまもさうだが腸が弱く、よく下痢をした。そこで医務室ともなじみになつてゐたが、軍医どのや下士官よりも若い浅井衛生兵の方が親しかつた。大阪の高槻の医専在学中に応召したのだとか聞いた。他の乙幹より一番好きな兵隊であつたが、これにたのんで廃棄する薬の中、毒薬を一袋もらふつもりだつたのが、とうとう言ひ出せなかつたのである。捕虜になるとき、もしくは捕虜になつて耐へられなくなつたとき、の用意にとであるが、まだ機会はあるとも思つた。

唐県で戦死した兵たちの遺骨は、「各班使役集合！」の号命で、情報室からは私がゆくと埋めることを命ぜられた。非力の私は掘るより埋める方に廻つた。そんなわけで、宇田川大隊の遺骨のありかは私が一番よく知つてゐる。ただし全部埋めずにこくわづかつつ戦友たちがそれぞれ持つて帰つて遺族に届けたかもしれない。ともかくこのことをもとにし

て「骨」の昭和二年五月号にのせた詩が出

河盛好蔵著

フランス文壇史

—第三共和国時代—

〔朝日新聞評〕外国の作家個人に対する研究書は数多くあるが、文壇史という形で年を追ひ、時代を追つて書いたものは日本では希有な試みである。著者は淡々と筆を進めてはいるものの、このような雑專業に取り組むだけでも冒険で、雑誌「文学界」に四年間にわたつて連載した忍耐と勉強は並み大抵のことではなかつたらうと推察される文章の読易さ、内容の面白さにつられて、資料や文献の広さや精密度を見落としがちになるが、専門家の研究論文としても立派なものであり、まくらべの書であると同時に字引のように座右の書とすべきものである。

B 6判・五三七ページ・五八〇円

東京都中央区銀座西八ノ四

文芸春秋新社

振替口座東京七八七四三番

来た。

某

戦友に

帰つて来い 帰つて来い

昭和二十年八月某日

僕たちがシヤベルをもつて

掘つた穴に埋めた戦友たちよ

帰つて来い 帰つて来い

もういつまでも河北省の

山中などに寝てゐるな

自衛のための戦争

水爆相手の戦争に

もう一度おまへたちの手が必要なのだ

帰つて来い 帰つて来い

骨だけになつた手で帰つて来い

(半自叙伝4)

編輯後記

四月三日。田中克巳氏が来阪した。佐藤春夫氏の門弟達ややるといふ「春の日」発刊のニュースを聞いた。四月四日。河盛好蔵氏から「フランス文壇史」を頂戴した。あつくお礼を申し上げます。川副国基氏から拙稿「おがひとに与ふる哀歌」完結の祝辞をいただいた。四月五日。福田清人氏から伊東全集編輯の礼状をいただいた。四月一日。立原道造の実弟健至君からたよりをいただいた。彼が愛蔵しているマリヤの厨子をどうした困縁で遺物が所蔵してゐたか不明であつたが、拙稿で判明したといふ。いかにも邪宗マリヤの厨子らしいひそかなこの伝へられ方に私は感謝した。

四月二日。前橋図書館の渡谷国忠氏から朔太郎関係資料として拙詩バック・ナンバリの要求があつた。このやうな學問上の要請には応じる用意があるので、必要の向きは速座なく申しでられたい。

果樹園六十四号 昭和三十六年六月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園 第六十四号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年六月一日発行

池田市野町一六八

編輯者 小高根二郎

大阪市東住吉区桑津町五の八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園社

定価 三十円



四月二六日。二十数年ぶりで福井に旅し、足羽山麓の妙厳寺に、橋野寛が可愛い盛り四歳で亡くした娘健子の墓「知遊童女墓」に参つた。戦火と雪害のため彫字の缺損と腐蝕がはなはだしく、このまま放置されたら、悼歌入かしのみのひとりはいかでおくつきをならべて父もここにすむ身ぞは、あと二十年もせぬうちに判讀できぬやうになるだらうと歎かれた。福井には文藝の土や歌人はゐらないのだろうか。

果樹園

第65号

詩人その生涯と運命 小高根二郎
ヘリック 詩抄 森 亮
ト ン ビ 堀之内 歴

貸 室 萩原 葉子
無条件降服 田中 克己
背 景 吉本 青司
桃 の 花 堀口 太平
海 の 花 浅野 晃
編輯後記

詩人その生涯と運命

作品と書簡から見た伊東野雄(五十三)

小高根二郎

鷹合町の私のアパートで、伊東はいささか乱痴気じみた宴をやつてから、鶴見橋の富士正晴氏とも同種の宴を開いたらしい。先の私宛の書簡から一週間後に出された次の書簡に、その模様をうかがふことができる。

「先夜はかなり愉快でした。身体にさはりはなかつたかと心配してゐましたがお葉書みて安心しました。わたしはあれから風邪をひいたらしくて、少しうつたうしく、力がぬけたみたいで変な工合です。床にねながら又「指導と信従」よんで感動してゐま

す。又近い内に、こんどはうまいコーヒーをのみながら話させよう。わたしの詩稿、果して二説三説に堪へればいいがと、内心考へてゐます。」

(昭和十四年七月二三日堺市北三国ヶ丘より大阪市(西成区鶴見橋通四丁目六 富士正晴宛はがき)

この書簡の冒頭、伊東が富士氏の健康を心配してゐるところから推すと、アルコールで昂揚したのは、伊東より、むしろ富士氏の方であつたのかもしれない。又伊東の方も風邪だか、何だか判らぬやうな症状で、伏つてゐる。二日酔ひ後の虚脱状態も手伝つた不調だつたのかもしれない。七月下旬……といへば、蒲田をかつぐにはちと暑すぎる。伊東は放恣なスタイルで床上に腹這ひになると、「指導と信従」生の追憶の書(ハンス、カロッサ著、芳賀徳(訳)昭和二年四月建設社刊)

を読み直したのである。

巻中……伊東が最も感動した頁は、カロッサとリルケの出会いの場面であつたに相違ない。出会いの舞台として予定されてゐた團秀画家ラザールのアトリエに到着するまでに、カロッサは路上でリルケを発見する。柔い黒帽。黒味がかつた青地の服。灰色の靴ゲートル。そんないでたちで両手を背に組み、とほとと歩む憔悴した中年男……。歩み寄るにつれてはつきりとする彼の容貌。まるで瀕死の野鳥が苦悶する表情をつくり、或ひは、この世の異常な仕事に献身しつくして、精根を費ひ果したといつた異常に疲労した恰好。カロッサならずとも、七年来の馴染である伊東は、あ、彼だ！ R・M・リルケだ！と直覺したに相違ない。

すかさず伊東はフケや埃を白く載せたままの黒のソフトを脱ぐ。瞬間、リルケは物怖じたやうに眼を影らせたが、「日本の愛読者」「貧乏な中学教師である詩人」だと判ると、子供のような無邪気さで青眼を清澄にかッやかせて意外に大きな骨ばつた手をさしだした。「初めてだとは思へません。生れてからの知己のやうな気がします……。」と彼は言つた。

「いや、先生。七年来なのです。あの「形象

の本」に感銘して以来です。」と、伊東は饒はこばつて立ち止つた。先生。「ドクイノの悲歌」の完成はまだでございませうか？ といふ質問が、伊東の咽喉もとまでこみあがつてきたが、絵が懸つてゐる落着いたアトリエ内で発すべき質問だと気附いて、伊東は黙つて彼の歩みに従つた。

光線の豊かな、テレピン油の臭ひのする部屋で、リルケは旅を語り、異國の風物を描写してみせた。語り手の自分は谷に潜み、聴き手は街道や、海辺や、山や、街に浮びあがらすやうな見事な手法で物語つた。スペイン。ロシア。エジプト。イタリア……。伊東の胸にカプリ島のピッコラ海に取材したリルケの「海の唄」が思ひ出された。古代の風。その潮風をうけとめる原始岩。その風と岩とが交す古代の会話。その会話の謎を解くやうに、月光の射す丘に揺ぶられてゐる無花果の樹。このリルケの「海の唄」から発想をえて伊東は「夕の海」を書いたのだ。カプリ島の原始岩に代へるに堺港頭に佇む五丈の燈台をもつてした。古代の風に代へてひたひた……と寄せる夕闇と波頭とを起用した。燈台。闇。波頭。これらの相関的な存在に意味を投じるためにとぼされる緑の光。明滅し、回転をする無益な予感に似た光……。イタリアと日本。

ピッコラ海と大阪湾。カプリ島と堺港。このリルケとの対応を経て彼はリルケを超越したと信じた。ああ、いまこの国に 到り着きし 最初の燕ぞ 鳴くゝと歌つた「燕」の凱歌は、初めて西歐を超越した日本詩人としての自負を謳歌した作品だった。西歐といつておこがましくはリルケと限定してもいい。リルケ超越の確信だった。

リルケは話題を転じて新たにとりかゝつた創作の話をした。それは困難な仕事であり、成功する目安もない……といつた謙虚な口ぶりだった。が、その謙虚さから、かへつてリルケの才能への新鮮な信頼が湧いてでるのを、伊東は感じた。伊東は嬉しくなつた。悶絶せんとする野鳥。その絶望的な憔悴が感じられるリルケのどこから、こんな信頼感や期待感が反応してくるのか？ リルケは黒いメモ帳からインセルのアルマナッハに発表したことのある散文を朗読してゐた。伊東はその朗読に耳を傾けながら、さう……自問した。静かで明確な抑揚のある音調。その朗読法と、いさ、か甘美な陶醉性のある自分の朗読法を、伊東は心底で対比しながら、それだからこそ天才なのだ！ と、先ほどの自問に自答してゐた。

この時、黒服に白エプロンをした女中が茶

を運んできた。が、寄木帳りの光つた床に足を滑らせて盆を投げだした。盆。湯わかし。皿。匙。砂糖壺が時ならぬ不協和音を惹起した。伊東ははッ！ とした。が、その拍子に、なほ朗読を続けるリルケと傍目もふらず傾聴しつづけてゐるカロッサのゐるアトリエから、伊東は閉めだされ床上に投げだされてゐた。

カロッサが北フランスの前線に出勤を命ぜられる前日にミュンヘンで恵まれたリルケとのこの出会。伊東は感動を繰返すと同時に、再度の対応と挑みとをリルケに対し感じただらう。なぜなら若い友の接遇法でさへ、リルケに対し伊東は非常な距離を感じたからである。「自分自身を陰影の中に置いて、全ての光りを何か遠い距つた物に、或ひは時には彼よりも差し障りにならない、誰か其の場にゐる他の一人に導いてゆく彼の比類のない話しぶり」。(芳賀武「指」)この鑄型を造るやうなネガティブな方法でリルケは若い友カロッサとの友情を造型した。しかし、今の伊東はそのネガティブな友情の造型ではあきたらなかつた。鑄型ではないポジティブな彫像。ポジティブな友情。暖い血汐の交流。……いや、泡立ち。それが伊東の渴望だった。だから

好んでヘラでも持つやうに若い友と共に酒杯を持つた。小高根との酒宴もさうだったし、富士との酒盛もさうであった。ポジティブに伊東自らの偽らざる像を造型してみせ、その造型に若い友を手伝はせようと図つた。先の富士苑書簡の末尾に、「わたしの詩稿 果

ヘリック詩抄 (七)

森 亮

乙女たちに

乙女らよ、咲き出た薔薇を摘むのです。
相も交らず急いで駆けてく「時」の奴。
けふはほろんでゐるこの薔薇が
あすは萎れてゆくでせう。

輝かしい天の燈の太陽は

空のいただき登れば登るほど、

み空の旅の足早まり、

西の宿りがもうそこに見えてくる。

若さと血潮が暖く流れてうごく

出だしの時代が一等しい。

だけど時は経ちます。段々に悪い時節が

次から次へとやつて来ます。

はにかんでないで、時を上手に使ふのです。
嫁ぐ相手のあるうちに、嫁ぎませうよ。
生まれて一度の花時がむなしく過ぎれば、
乙女らよ、いつまで待つても待ちぼうけ。

英詩のアンソロジーでヘリックは必ずと言っていい位に幾許かのスペースを与へられてゐる。彼の詩には短かくて格調の正しい、いはば姿かたちの整つた規格外が多いので、選集の編者はこれが取捨選択に嬉しい戸惑ひを感じることであらう。しかし誰でもためらふことなく選べる詩が二篇ある。「水仙の花」と、もう一つはこの「乙女たちに」(作品二〇八番)である。「今日を染しめ」の思想の一つの特殊化の場合として、青春を薔薇の花に譬へて、盛り

の時にこれを摘めと乙女に勧める詩を、中世のラテン詩人アウソニウスや十六世紀のロンサルが書いてゐる。ヘリックもこの詩で同じテーマを語用しきちんとままとめて見せた。

だ。鳥類の王者である孔雀なのだ。もうあの燕なんぞではない。燕雀という小鳥のジャンルに分類される燕ではない。小意気な燕尾服ではなく、前立毛のついた冠、紫紺にきらめく錦繡のマントを羽織つた王者なのだ。しかしこの王者は捕はれてゐる。世俗という愚昧な金網の中に……。それはアルコルが伊東の五体の内に駆け廻る時の幻影だつたに相違ない。燕雀なら自由に入りのでける金網。その金網は王者である孔雀や、覇者である鷲や、賢者である鴉鳥は拘束し、圧迫するのである。解き放て呪縛の網。王者には王者にふさはしい逸楽を恵めよ。いや、逸楽にポジティブに馴染むことも王者への道である。さう言へば年少の日から俺には逸楽の道は遠かつた。貧困。敵愾。克己、孤独。失恋。忍従。どれも逸楽からも王者の境涯からも遠かつた。伊東は酒宴と酒盛のひまに、学校取りに新世界にて天王寺動物園を訪ねたに相違ない。自分の分身とみなす孔雀に会ふために……。会つて王者の逸楽とかなしみを確かめるために……。

このとき伊東の胸裡に蘇つたのはリルケの豹 (DER PANTHER) だった。 *Im Jardin des Plantes, Paris* と頭註の附つた対応にふさはしい詩だった。

R・M・リルケ
大 山 定 一 訳

鉄棒の掃過のために

彼の眼はつかれて、もう何も見ない

彼には千の鉄棒があつて

千の鉄棒の向ふに世界は存在せぬ

しなやかで力強い彼の柔軟な歩行は

最も小さな圓周を多がいまはり

一個強大な意志が森閑と佇立する

中点をめぐつての力の舞踏である

ときをり、瞳孔の膜が音もなく

引きあげられる——と、一つの形象がをど

り込み

四肢の張りつめた寂寞のなかを走り

心臓にはいつて、消え失せる

王者ではないが動物界きつての貴族。その豹の体内まで投入されてゐる陰暗な柵。千の柵棒。彼は忍辱の思ひを抱いて小さな圓を廻る。疾駆すべき千里の山野の行程を回想し回復するために……。必殺の意志。その意志を

守るための輪舞。この呪縛よ悪夢であれ。しかし悪夢こそ恒常である。不変である。だが億万遍に一回なりとも逃走の奇績に恵まれぬとも限らぬ。もしや……と疲れた瞳孔を開く。突き入つてくる一つの形象。運命としての千の柵棒。四肢を走り抜け痺痺さすために心臓に突きささる。

この救ひない豹。ネガティヴな精神貴族リルケの映像！伊東は同じ救ひのない王者孔雀を凝視したが、伊東は玻璃の空となつてポジティブに救ひの声を自らの假象に投げかけてゐる。

孔雀の悲しみ

動物園にて

蝶はわが睡眠の周囲を舞ふ

くるはしく旋回の輪はちままり音もなく

はや清涼剤をわれはねがはず

深く約せしこと有れば

かくて衣光りわれは睡りつつ歩む

散らばれる反射をくぐり……

玻璃なる空はみつから堪へずして

聴け！ われを呼ぶ

第二詩集「夏花」

ると解釈していいであらう。

八月初旬に伊東は信州に旅した。「文芸文化」の清水文雄・栗山理一両氏に招待されたのである。両氏は池田勉氏と一緒に昨昭和十三年の高野における日本文学講義の盛大さを記念し、今年も旺んな夏行をプランしたのである。恩師の斉藤清衛先生が幸ひ親戚に当る法政大学予科長・井本健作氏の北軽井沢の別荘を借られた。ところが、先生は木崎湖の夏期大学を約束されてゐる。その留守を襲へば清涼な高原の夏を満喫できる計算だ。主宰の蓮田善明は応召して中国にある。残つた三人だけでも一緒に夏行をしていよいよ結束を強めねばならない。この名企画に、池田氏は奥さんの病気で心ならずも参加できなくなつた。二人だけでは意気があがらぬ。池田氏の代りに、「文芸文化」の日頃からの支援者である「コギト」の伊東と中島栄次郎が招かれることになつたのである。

当時、伊東も栗山氏も同じ堺に住んでゐた。が、夏行への出発は一緒ではなかつたらしい。中島も単独で参加したらしい。……といふのは、伊東はひとり東京廻りで信州に行つたからである。この年の春、伊東は転勤の運勤をしに上京した。が、結果的には立原道造

リルケの「豹」は眼をつぶつてゐる。伊東の「孔雀」も睡つてゐる。柵の向ふに世界が存在せぬことは共に同じである。豹はしなやかに力強く闘争の意志を中心に旋回してゐる。伊東の詩でその旋回を受持つてゐるのは、網を自由に出入りできる蝶である。△はや清涼剤をわれはねがはず、深く約せしこと有れば▽という詩句の意味は、慰藉ではない天との約束である真の救ひを希求してゐる……というほどの意であらう。蝶は慰めにきたのか、それとも天の意を伝へにきたのかはしらないが、孔雀は睡りながら歩みだす。豹と全く同じく眼をつぶつて歩きます。黄金に褐色の家紋を型つた衣裳をまとつた豹。錦繡の王衣に紫紺の家紋を染め抜いた孔雀。豹はもしやの期待で時折は瞳孔を開く。孔雀は自らの錦繡の乱反射をくぐる。豹の眼に突き入つてくるのは死の呪縛の形象。孔雀に聞えてくるのは、まばゆさにたまらず叫ぶ天の召喚の声。リルケの「豹」にも伊東の「孔雀」にも客観的には救ひはない。然し主観的には、リルケの最後までネガティブな意志に対し、伊東には△聴け！ われを呼ぶ▽、つまり、天が呼んでゐると錯覚するポジティブな意志が動いてゐる。こゝがリルケと伊東の相違、リルケに対する伊東の対応、ないし、挑みであ

の死の枕頭に佇んだだけであつた。信州に行くのに伊東がひとり東京を廻つたのは、転職の可能性とチャンスを探ぐためであらうし、第二詩集の出版書肆をぐるりあそびてみるか、それとも「文芸文化」の出版元の子文書房にするかを決定する必要があつたからだらう。それに伊東は旧職姫路を引払つて上京した酒井家を見舞つてゐる。訪問してみると、偶然……小太郎先生と百合子さんは軽井沢ホテルに避暑に行つてゐた。結局、伊東は軽井沢で先生と百合子さんに邂逅したわけである。私はこの話を、旅から飯つて私を勧め先に訪ねてきた伊東から聞いた覚えがある。私は伊東を新世界の国技館前の茶寮に誘つた。サンサンであつたか、私の好きな「春の日の歌」のレコードをかけさせながら、私は信じ難い彼のロマンス談義を聞いた記憶がある。白いバルコンの藤椅子にかけた紗の寛衣を着た女人……。伊東と全く似つかはしくない空想的な画面が、伊東と関連した私の記憶の溪流の淀みに、刺がれたアルバムの写真の一枚のやうに浮いてゐる。確かに私はその話を伊東から聞いたのだ。栗山・清水氏の記憶にも、木崎湖で伊東がそれらしい話をしたのを聞いた覚えがあるといふ。又、斉藤先生の借別荘は大きくなかつたために、そこに泊つ

ト ン ビ

堀之内 歴

トンビが銜えているのは

つよくて 直ぐな

一管の笛だ

滅多と手離されぬふえだ

擽うべき獲物あぶらげ

ばしよは先刻見届けてある が

一管のあの笛の手前

動揺の素振りは出来ない

ゆるやかに ただゆるやかに

ビィヤ ヒヨロク

工場 住宅 今や田園の蚕食きびしく

笛一管は老いて稍々心細げだ

一九六一・五・二五・

たのは栗山・清水氏だけで、伊東・中島は湖畔の茶店かに泊つたという記憶があるさうである。一晚伊東・中島は夜ッびいて騒いだために茶店の主である老夫婦と喧嘩になつたといふ。恐らく伊東は、小高根・富士とやつた現生謳歌の旺な酒宴を、はからずも邂逅した百合子さんとの思ひ出を肴にして、中島とやつたためだつたらう。

貸室 (1)

萩原 葉子

せまい土地に貸室のための家を建て、まだ一年と経たないのに、もう長いあいだのよくな気がするのは、不思議だ。

建築中には、隣接した家から朝夕どなり込まれ、世間のせちがらさを嫌というほど知らされたが、お金も充分なくいろいろ苦勞した家だけに、できてみると愛着のようなものもある。

二階と階下と合せて四部屋だが、一軒の家を貸すのと違って、部屋ごとに人が違うので、それだけ交渉が多くてめんどうは、覚悟はしていても嫌になることがある。

なにしろ、あまり近くなので知人や友人で

ない方がよいと思ひ、幹施所に頼み、事務的に交渉していつさいの感情をぬきにするように努めた。

さすがに商売人は、尊敬したいほどにあざやかで、言いくく困ることもですっぱりと、言いのけてくれるのでありがたい。

たとえ素人の私が、貸室を建ててかすにしても、借りる人からみれば私はただの貸室のおおやさんが管理人でしかなく、少しでもねざって良い条件で入りたいと思っているのだから、私もへんな素人くささから抜けて、商売だと割りきらなければ、ならない。が、それは分つていても、なかなかうまくはいかないのである。

はじめは女の人ばかりの方が、良いと思ひ若いひとを捜してもらつた。

いまの若いひととはと、よくいわれているので、心配でもあつたがそうかといつて年増の人では、部屋代をもってきたついでにでも、ながばなしをされるようになったら、忙しいのに困ると思つたからだつた。

部屋はすぐに満員になつてしまつたが、近所から聞きづつて、かなり来るので応待にわずらわしいほどだつた。

契約を済ませるまでがとても気が重く、まるきり世界の違ひと、話をする気持は寿

い、友達に会つたようになつたと嬉しい気持ちでいたのだが、次第に娘はなれなれしい態度になつて、逆に私の身の上を根ほり葉ほり聞きはじめた。そしてあげくにミシンを買いたいのだがお金がないので、借してもらえないだろうかとするのである。

しつぱ返しをされたような不快な気持ちでいたが、翌朝はもうすっかり荷造りも済ませたと、引越していつてしまつたのである。

背景

吉本 青司

洗濯をはじめたから

あがつたのか

あがつたから洗濯をはじめたのか

とにかく おまえが

洗濯を始めると雨はあがつた

ほくは布団にねをべつて

△天気と元氣Vを読んでいた

東西に前線がうろつき

その上を タイワン坊主の低気圧が

ぞろぞろ並んで通るので……

命がちぢむ思ひである、それでも引越して来てしまえば、めつたに顔を合せることもなく、部屋代も納めてくれるので、案ずるより生むがやすし、だつた。が長くなるにつれてやはり、めんどうなことが起つてきた。

看護婦のひとは、如才なく話しもしやすいのだが、病院からよく電話をかけてよして、こたつのスイッチを消し忘れたとか、時計を置いてきたが心配になつたので、帰るまで預つておいてもらいたいとか、洗濯ものを取りこんで下さい等といつてくる。それも急ぎの外出やら来客で、こたごたしていつる時に限つてなのである。

もう一人は、九州の方から洋裁の勉強に來ているという娘だつた。洋裁をやるといつるのにミシンも持つていないので、おかしと思つていたが、実は洋裁は大嫌らいで本当は小説を書きたいのだと私に相談に來た。

個人的なことに立ち入るのは、めんどうだし私など身の上相談は柄でもないのだが、遠く親元を離れていつては心細いだろうと思つて、ない智恵をしほつて相談相手にもなつていた。が、なぜかよそよそしくへんに卑屈なところのあるも、＃おおやとたなこ＃という間柄のせいだろうかと思はれなかった。

ある日、偶然に国電でその娘とはつたり合

無條件降服 (続)

田中 克己

唐果撤退のことは二等兵の私にもありありとわかつた。これは命令の出る直前だつたと思ふが、私の撤退準備の一つとなつたことは、図書のことだつた。入営前に陸軍軍曹として、第一師団に勤めてゐた大垣国司が、「軍隊では入隊前の身分を一応無視しながらそれによつてまた差別します」と教へ、入隊前の身分を証明する物をもつてゆけとすすめた。そこで私は第三詩集「神軍」、第四詩集「南の星」と「李太白」(日本評論社刊)をもつて行つた。この三冊だけでも大きな嵩なのに、私はまた隊内を歩いて、ごみ捨て場にあつた小杉放庵「唐詩及唐詩人」を拾つて來てゐた。それに佐藤中尉のかたみの「歩兵操典」など一包にすると、私は思案をきめて、營外の酒保に行つた。この酒保は斎藤中尉の愛人(だつたと思ふ)が経営し、これを主計曹長の妻(だつたと思ふ)が助け、三人の姑娘が雇はれてゐた。私はいつとはなしに、この酒保の女主人におぼえられてゐたので、本包を馬車に積んでくれないかといひ、承諾

してもらった。

撤退の日は午前三時起床だったかと思ふ。私は一時ごろまで眠れず、一時間ねたかと思ふと起きた。炊事班へ朝食と辨当をとりゆき兵には分配した。そのあとすぐ出発である。

眠

まだ眠つてゐる民家の間を、大隊は蕭々と出発し、城門をくぐり、望都県へのバス道路をゆく。夜が明けてふりかへると疑々たる大行軍である。間に馬や牛の曳く車があつて、酒保の姑娘や、負傷した小林伍長や保安隊の病人、家族が乗つてゐた。保安隊が私どもと一緒に唐県から引揚げるのは、考へてみれば当然で、いままでも日本軍と協同してゐたものが、中共軍の入城で助かる筈もないからである。

バス道路は村落とは全然はなれた畑中を走つてゐる。十軒ほど来たかと思ふと、右手の村から銃撃した。負傷者も何もないが、銃砲隊は歩兵砲を据えた。このとき斎藤中尉は私を呼んだ。「田中、伝令！」その命令は何だったかおぼえないが、たぶん戦つた隊にかまはず各隊前進をつづけよといふのもあつたらう。藤中尉は撤退の指揮を命じられてゐたやうである。私は復讐し、駈足し、各隊に命令を伝へ、帰つて来て復命した。これが

睡眠不足の私にはこたへた。私は全装備をし、しかも飯盒の中には砂糖まで入れてゐるのである。藤中尉の伝令にはもう一度つかはれた。私は怨めしげな顔もしないで、気合をかける(軍隊では元氣をつける、はげますと同義語である)上官の命に服しなければならぬ。

唐県を出て望都県の固現村のトーチカの辺りに来たころには私はもう完全にへたばつてゐた。しかもこのりまだ二三支那軍ある(光緒、望都県新志による)。私はもう何も考へず、喘ぎながら歩いた。他の班の二等兵で道ばたで叩かれてゐるのがある。へばつた兵隊は叩かれたあとまた歩き出した。私は藤中尉の命令もこの叩きだったかと合点しながら喘いだ。牛車に乗つてゐる保安隊の中尉に、背負袋の中から一包みを取り出して頼んだのは、この前後である。私はなぜか顔見知りだったこの中尉が、男のくせに車に乗つてゐるのを見つけると、大喜びで頼みこみ、彼はうなづいて受け取つて呉れた。この包の中には糸と針と布とのほか、昭和十七年シンガポールで私が買ひあさる人たちにたつた買つたバーカーの万年筆も入つてゐた。かさも大したことはなく重さも大してないこの包みをさへ、肩からとりのけねばならぬほど、参つてゐたのである。

桃の花

堀口 太平

てやらせたのが、今度は荻納兵長と私とで貼つた。ただしこの伍長は私を兄弟扱ひにした小林伍長ではなく、現地除隊ときまつた彼の

後任として情報室に來た信州出身の若い伍長である。藤中尉も現地除隊ときまつて、姿をあらはさない。(小林伍長は「お前をすぐ

医者から、白い、どろどろした、甘い水菓をもらつてきた。

保育園にあや子を送り、製本屋の横のせまい露路をかえつてくると、井戸ボンプのわきの桃の木の枝に、米びつが洗つてかけてあつた。あかがねのたがが光つていた。花がいまにもひらきそうである。

桃の花のさかりをみると、そのさかりのなかには、ざりざり追いつめてくるものがある。肝に銘じておこうと思つても、身も心も、止つてはいられないくらい流されてゐるのだ。

ひるごろ、夕立があつて、雷がなり、落ちつけなくて、食欲を失つた。子供が、はしかにかかった。

ペンキ塗りの床屋の看板をつけたまま、アムブルをつくつてゐる硝子工場がある。日本種の桃の木が、雨のなかに、花と葉をいっしょにだしている。夕方、雨がやんで、また通りかかったら、花のなかの、せまい枝のあいだに、鳩がきてとまっていた。

榴

胸をまるくはって、ふくれかえて、月の出のようだった。さわさわして、あつくて、あぶないものが、おちついてきたようだ。なにかを、——くるまのように、のりこえたようだ。

(三六、五一)

望都県に着き、県城を通りぬけ、この私のしばらくゐる京漢線の望都駅前の兵舎に着いたのは日ぐれ近くであつたらう。私は県城の手前では畑の唐辛子をひきぬき、その実をかみながらやつと辿り着いたのである。

万年筆の話のきりをつけることにする。私は望都での兵舎で落ち着くと、県城内の保安隊をたづねて、例の中尉をさがした。わからないでゐる中に、道ではつたり出合ふ。そこでいきこんで「我的包?」とたづねると、「合作社に置いてある」といふ。合作社といふのは、もうはつきりしないが、配給所のやうなものだつたかと思ふ、その返事で氣をよくして、別れて合作社を探しまはり、たづねると、「不知道(知りません)」といふ返事である。さういつた中尉の返事が何だかあやしげだつたと気づく。二三日また中尉を探し歩いて、見つからない中、私は忘れてしまふことにした。鵜外先生の「袖口のこがねのぼたん、ひとつおとしつ、その扣鈕(かぎん)を思ひうかべながら、私は信頼を裏切られた自分を口惜しく思つたばかりである。

望都の新しい兵舎は、兵の手ですぐきれいになつた。兵の一人である私も働かされた。その一つは伍長の室の壁貼りである。以前藤中尉の室の壁のときは、中国人の使役を督し北京へ呼ぶ」といひ、私は何だか信じなかつたが、それはちよつとおくれて実現する。私のやつた働きのもう一つは、京漢線の向ふ側に出る酒保の手入れである。新築のあと、木屑や石きれをとりのぞき、きれいにしながら、敗戦の軍隊に何の酒保がと私はふしぎに思つたが、これもやりをへる。

この間に、実はもつと大事なことが起つてゐた。望都県へ着くとすぐ、北京の日本新聞(東亜新報といつたか)が部隊にも配られて、敗戦の経過がはほわかつた。その晩のことだつたか、爆音がして、皆が走つてゆき、やがて医務室に入室の軍曹の手榴弾自殺とわかつた。原因不明の病気で入室してゐたが新聞を見たあと、自殺したのだとわかると、私は同じ気持の人間のゐたことに快く感じた。さつそく浅井医務兵をたづねて、自殺当時の話をきくと、「その直前あまり変つた様子はないが急に皆どけと顔色をかへてどなり、手榴弾の栓をぬいた。陽は天井まで飛び取りのけるのに困つた」と浅井は天井の血痕を指さし、それから声をひそめて「蠅虫がいつぱい湧いとつた。六七十匹ゐるかなあ」といつた。私はこの話をきいたとたん、手榴弾による自殺はもとより一切の自殺を否定する気持になつた。死に恥はさらしたくない、といふの

井

爆

が、簡単にしたその理由である。思へば私にもいろんな虫が湧いてゐさうである。入隊以来、肥えてやつと五三キロ、これが人生で最高の体重といへば、蛔虫や蟻虫も山ほどゐるかもしれない。浅井をはじめ皆にそれを見られるより、も少しましな死に方をと考へたのである。

死に方は山ほどある。私たちの現在ゐる前を走つてゐる京漢線は中国の鉄道の最も重要なもの一つで、日本軍降服後は北上する蔣介石軍（國府軍）を満載して走る。これが中共軍に夜間爆破される。軍隊の派遣を妨げるためである。わが大隊もそれを阻止すべく、相変らず戦斗にゆき、また望楼に駐屯してゐて、一日平均一名ぐらゐつ死傷が出る。私は情報室勤務なので、戦斗にゆかないくせに、その状況を知つてゐる。原隊復帰を願ひ出て、戦斗に参加すべきであらうか。否、である。私は中共と國府のこの戦ひを善いものは考へてゐないのである。もとより中共に対しても憎しみなど持つてゐない。

この大隊はかやうに戦斗配備についてゐるので、軍規は敗戦後も厳格である。日朝、日夕の点呼でも軍規の厳正が命ぜられる。そのためもあらう階級による敬礼をはじめ、上官への奉仕が依然として要求される。私の班の

憎

ふ税務署へ訪ねてゆくと、結核療養のため入院と病院もききながら、そのままになつて、このとき二人がなぜおこつたかはいまだにわからない。

私に上官監視の傾向があることは教育中にもすで見やぶられてゐた。しかしこの時の直屬上官たる若い美男子の伍長が、嘗門で負傷したときは早速とんで行つた。狙ひうちではなくそれだまで足に負傷したらしく、医務室での手当のあと、彼は私に背負はれて下士官室へ戻つた。私はその後、彼の癒るまで、毎日この美青年を背負つて医務室へ通つた。かういふ時、私はうれいのである。

いやだつたのは、朝食を運んで「田中、漬物もつて来い」といはれた時である。私はこの上官の命に「はい」と答へて炊事場へ行つた。折悪しく頭を下げてたのむべき上等兵も誰もゐない。私はとつさに、地面におちてゐた葉つ葉をひろい、手で揉んだ。私の汗でいくらか塩気がついたころ、私はそれを刻んで美青年伍長の膳に置いた。この一分間速成の漬物がどんな味であつたかは、私も知らない。軍規厳正を命令しなければならぬのは、軍規の紊れるおそれがあるか、紊れてゐる証

編成が變つて、伍長が一人ふえた。この伍長に奉仕すべき二等兵は私と伝書場係の某と二人しかゐらない。この二等兵が私と同じく怠惰者で伍長の世話をしなかつたことが、目についたと見える。ある日、他の班の上等兵から呼ばれた。新潟出身の男である。「おまへたち物を教へてやる」といつて、私に眼鏡をはづさせたあと、「氣をつけ」といつて、帯

海

浅野 晃

海のしはぶき
海のおぶやき
海のうなさき
口をぬぐつていまはまだ
光を反射してゐる海
不機嫌にのたうつて
おのれがおのれを虐げてゐる
海という戦場での
海という戦士の

海という虚しさ
海は猛獣である
また猛獣使ひである
二役を一人でやらされる
かなしい心を誰が知らう
けれどその海ですら
虚しい人間の生を
どうして知り得よう
ああ巨大な海よ
虚しい海よ
さらば魚族よ
貝類よ 人間よ

てはいけない」との達しがあつた。打つたのではなく、売るな、との達しである。私は呆れながらきいていたが、そのあと美青年伍長から随行を命じられた。京漢線の望都の次の駅、清風店まで用があつてゆく、ついて来いとのことである。私は一二〇発の小銃弾を着けて随行した。用向きは何であつたか。伍長は保安隊の衛所へ入つてゆく。出迎へた保安

革に手をかけた。帯革ビンタといつて、制裁の中でも痛いもの一つであらう。私が覚悟して足に力を入れて待つてゐると、彼は急に声の調子を変へて「おれは国を出る時、母親から下の者をいたはれ、といはれた。今まで誰も叩いたことがない。おまへたちがあまりひどいから止むを得ず叩かうと思ふが、考へればおまへたちは二人とも年寄りだ。わかるだらう。おれのいふことをきいて今後班長どのの世話をよくするか」といふ。もとより二人は声をそろへて「ハイ」といひ、放免される。その伍長は手にけがをして不自由をしてゐるのを、私たちが世話し足りなかつた由である。荻納、田中の二兵長が情報室で西尾一等兵と話してゐるのを、室に入らうとして聞く。「あまりですぜ」、といふ荻納兵長のことばに西尾は「おれもさう思うが」といつてあとは声が低くなつた。私のことを云つてゐるのだと気づいて、私は後がへりした。しかし何を私に対しておこつてゐたかはわからなかつた。このことに関しても制裁は受けなかつたが、私はつとめて氣をつけるやうにしてゐる。しかしどうしてよいかわからないのである。（帰国後、田中兵長は養徳社の松井君と同級だつたとき、また私の檀那寺の住職と父君と同僚の教師ときき、ついで勤め先とい

隊の兵の顔に見覚えがある。考へると、だいがまへ我が軍の誤射で負傷し、私が医務室へはこび、弾丸取出のあひだ、手をにぎつてやつてゐた男である、私はそれを思ひ出すと、伍長の入つて行つたあと、この男に好意を表はすすべを考へた。何もなし。いや、これがある。私は弾薬盒から五発の小銃弾をぬきとつて与へた。彼は喜んでこれを受けとり、やがて伍長が出て来ると（何も用はなかつた様子である）。中華そばを二人前、出して来た。伍長がその出された理由など考へないで食べるのを見ながら、私は「弾丸を売つたのかな」と自問しながら食べた。

も一つ白状する。このころ下衣の点検が近い、といふうはさが立つた。私は前にもいつた通り情報室ただ一人の二等兵なので、下士官の下衣の洗濯をする。（小林伍長はそれをささなかつたが）シャツを洗つたあと乾してゐる中にぬすまれた。私は非常に困つた。自身のシャツを代りにすることを知らないわけではないが、それはすでにぬすまれ果して身に付けてゐる一枚しかないのである。伍長に提供したら、私は裸かかひなければならぬのである。私の困つた様子を見、理由を聞いたあと、荻納か田中かどちらの伍長だつたか忘れたが、ついて来いといつて井戸の

ろに連れていった。そこにシャツが一枚吊るされてゐた。忘れ物の様子である。伍長はあつてそれを示すと姿を消した。私はあたりを見まはしたあと、人けのないのをたしかめると、それを持って逃げた。員数をつけたのである。ここまではよかつたが、自分の室へ帰つてあらためると、ポケットに五十円札が入つてゐた。私はこの札のおかげで非常に煩悶した。二等兵の月給の二ヶ月分近い金を私は盗んだのである。これが私の生涯でただ一つの盗みである。

田中兵長のことでは、ある日、「田中、小可哀そうと思はないか」といふ。この小孩は子供一般を指してゐるのではなく、この時まだ使用してゐた情報提供の中国人たちが連絡に使用する少年のことである。朝晩はだ寒くなつたのに、この少年はわらの上に着ぐるみころがつてゐるのである。私が同感の意を示すと、彼は毛布を一枚もつて来て、これをやつて呉れ、と投げ出した。私はこの命令を快く引き受けた。部隊から物資をもち出すことは衛兵所を通じては不能である。しかし私には自信がある。私は素手でまづ衛兵所の前を「情報室勤務田中二等兵、情報拾集に外出いたします」と断つて通り、少年に会つてから、その待つてゐるあたりへ塀越しに毛布を

投げ出した。しかし私の失望したことには、翌日、私が少年のところへ朝飯を運んで行く時、毛布はもうあたりに見えず、彼はいつもの通り着ぐるみでゐてゐた。私は落胆する同時に、中国の少年の強さに舌を巻いた。

私はこの間に、一等兵に昇進した。小野勝年氏ら、私よりあとで入隊した二等兵たちはすべて現地召集で、小林伍長らとともに除隊したから、一等兵になつても下はない。しかし襟章を星二つにつけ換へてから、私は城内にゐる原隊の荒木隊へ申告に行つた。「申告致します。陸軍二等兵田中克己は昭和二十年八月十五日付をもつて、陸軍一等兵を命ぜられました。ここに謹んで申告いたします」といふのを荒木中尉以下、将校のすべてとしかるべき下士官にいつてまはるのである。私はこれをすましたあと、外泊を許されてゐるので、教育中の仲良しだつた竹川一等兵と並んでねた。竹川はタバコを違反してすつたので私と並んで立たされたことがある。その時の教育班長だつた大塚伍長が、今となつて見ると、とてもやさしい人間とわかつたことを彼はうれしさにいつた。「さうだらう、教育者としてやむを得ずつくしたんだな」。私もうなづいたが、いまは望楼に行つてゐるとかで会へなかつた。竹川はまた他の班長か

らも好かれて近く北京への連絡に同行するのだ、といつた。私は急に起き上つて、北京へ行つたら、電々公社に勤めてゐる義弟の男への連絡をたのんだ。無事だといふことだけでも報してくれるやうに、電話でいいからと、くどくどと頼むと、竹川はこころよく引き受けてくれた。(半自伝 伝五)

編輯後記

五月二日。斎藤清衛先生から北野久憲の「天と地のあはひ」が興深かつた旨の便りを受けた。京都学徳大学の学生山崎英夫君から伊東静雄を卒業生のテーマとするので資料の照会に接した。伊東全集が光切れたことは喜ぶべきである。

五月八日。三枝康高氏より伊東全集入手の斡旋方依頼があつた。又五月廿五日の藤川文三氏の文章を見ても伊東全集を買つてゐる。結局は学者が購入者だつたのだ。それにしても、誰か不用の向きは三枝氏に譲つてあげて下さい。

五月三十日。産経同人雜誌評で池沢氏の「うば車」がとりあげられた。氏が今月休んだのは、普通稿のためである。私は運田論を続けるか伊東論に戻るか迷ふまじまつたが、ごらんのように伊東論を続けることにした。変らぬ御支援を願ひ上げる。(〇)

果樹園 第六十五号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年七月一日発行
池田市野町一六八
編輯者 小高根二郎
大坂市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園六十五号 昭和三十六年七月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園 第66号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎
失はれた歲月 美堂正義
未 知 吉本青司

蝶の学園 堀之内 歴
ヘリック詩抄 森 亮
山 浅野 晃
無条件降服 田中克己
編輯後記

詩人、その生涯と運命

小高根二郎

伊東はこの記念すべき信州の旅から飯つてきて、次のやうな書簡を森亮氏に送つてゐる。

「甚だ突然でございますがお許し下さい。わたくしは「コギト」に御連載になりましたルバイヤットの愛読者でございます。就いては近刊の小生の詩集「抒情詩集」(ぐりありあ・そさてえ叢書)の扉に、あの第二十一、二歌の八行を引用させていただけませんでせうか。御許可の程お願ひ申します。勿論貴名は明記し感謝申上ぐる所存にこ

ございます。右是非貴意を得たうございませう。八月十六日 伊東静雄

(昭和十四年八月一日、堺市北三国ヶ丘より) 東京市本郷区菊坂町常盤館内森亮宛書簡

伊東は「コギト」に連載された森亮氏の「ルバイヤット」オーマー・カイヤムの四行詩一を愛読してゐた。私はその朗読を伊東から聞かされたことがあつたほどである。私と森氏は大阪府立高津中学校で同期、同じ京阪電車沿線から通学してゐた。が中学当時は互ひに文学一特に春泥に似た詩の道を歩むやうにならうとは夢にも想つたことがなかつた。それにしても、高等学校、大学期、及び二三年の修練期を経たばかりで見せた森氏の老成した訳文は、私はばかりでなく伊東にも驚異であ

つたのである。伊東の手紙の文章はまるで齡上の友にでも送る書簡のやうに、敬意に満ち満ちてゐる。当時、森氏は東京私立開成中学校の教諭をしてゐた。

第二十一歌
おほかたの親しき友は、「詩」と「さだめ」の酒つくり搾り出だしし一の酒。見よその彼等
酌み交す圓居の杯のひとめぐり、將たふためぐり、
さて音もなくつきつきに憩ひにすべりおもむきぬ。

第二十二歌

友ら去りにしこの部屋に、今夏花の
新よそほひや、楽しんでささめく我等、
われらとて、地の臥所の下びにしづみ
おのが身を臥所とすらめ、誰がために。

(昭和十四年「コギト」二月号所載) (フイツチエラルド「ルバイヤット」森亮訳)

現世謳歌の伝統と継承。この思ひから伊東は、私・富士・中島……といつたぐあいに月々に若い友と一語に乱痴氣に近い酒宴をやつてのけてゐたわけである。森氏のこの訳詩が発表されたのは二月一日。翌三月の二十六日

には立原道造が死んだのだ。伊東は立原の死の枕頭に佇むことによつて、二年前の秋九月・十月とつぎつぎに死の慰ひに滑り込んだ心友辻野久意と畏友中原中也を回想してゐた。彼等の生涯が若さに相当する華やかさと同時に薄幸を運命づけられてゐただけに、彼等の去つた部屋、夏花で飾られたわが世で酒宴する残存者である伊東は、生存のあかしをする意味からも、充分に楽しみさきめかねばならなかつたのである。この森氏宛にルバイヤットの引用方を懇請した次の日に、次のやうな書簡を富士氏に送つてゐる。

「十四日に飯つて来ました。大へん疲れました。あなたの原稿（「文芸文化」の）、軽井沢でよみました。わたしの詩集の出版の都合で、一と月位おかれてゐるかもしれないと編輯者は言つてみました。わたしの本はやはり、ぐろりあそさえてから出ることにになりました。どうしてもさうなつてしまつたのです。「文芸文化」の方の叢書には気の毒したと思つてゐます。十月上旬に出ます。やはり古いのも入れる選集です。まだこちらに居られたらその内一度お逢ひしませう。」

（昭和十四年八月一七日、堺市北三国ヶ丘より大坂市西成区鶴見橋通四丁目六富士正晴宛はがき）
この書簡によると、伊東は富士氏の原稿を

エビス百拾五番一住吉中学校にお電話下さい。もし私不在の場合は電話口に出ましたものに、御都合のいい日と所とをお示し置き下されば幸甚です。

二十日

伊東静雄

（昭和十八年八月二〇日、堺市北三国ヶ丘より大阪府北河内郡友呂岐村木屋 森亮宛封書）

ルバイヤットの引用を諒承した森氏と、彼の好意を感謝する伊東とは、不二屋の二階で出会つたのである。鷹の眼の上。右眉の上にある乾葡萄に似た肉瘤はくろ。それを絶好の看板にして神妙に待機してゐる伊東……。その奇妙な看板を目当てにしてテールルの間を泳いでくる神経だけに細つたやうな小柄な青年。彼は乾葡萄をみつめて立ち止り、伊東はその処作で森氏だと判定すると、椅子から及び腰に立ち上り、

「森さんですか？」「あ、伊東さん……」と、自己紹介を省略して共に椅子に沈んだらう。すでに「コギト」誌上での旧知。しかも共感を呼び合ふ詩人同志。「指導と信従」に於けるリルケとカロッサの出会いながら、生れて以来の知己のやうに感じ合つたことだらう。が、顔に附いてる乾葡萄を目当てにしての喫茶店での出合。このなんとも奇妙でけれつなことは、「指導と信従」の解説で私が曲筆した、伊東とリルケの邂逅とはほぼ同断であ

軽井沢で読んでゐる。それは「詩集夏花」をめぐつて「伊東静雄論」である。先の七月二十三日附富士氏宛書簡に、伊東は「二説三説に堪へばいいが……」と謙遜しつつ詩稿「恐らく詩集『夏花』の」を富士氏に送つて

失はれた歳月

美 堂 正 義

私は友に逢ひにはるばるきた太陽の烈しく照りつける帳側から体をのり出し

紺青の海の底深く覗く

ここはマリアナ海溝の深淵

あれから十七年の歳月が

轟音を立てながら崩れ去り

過ぎた時間の青白い谷間の

重苦しい日々の推移

君は死んで幸福であるか

また 不幸であるかは知らない

生きてゐる私も同じ

そのことを二人きりで話したい

君が暗黒と沈黙とのなかにゐるを見た

歴史の断層に取り残され

青白い燐光を放つ有機体に還元して

人間の世俗から解放され

既に愛怨を超えて定着し

私を見る瞳には憐れみさえ浮べて

一寸ち二寸ち涙が流れてゐる

その故を私は知らないが

私の希望といふものは年を取ると失つて

いき

情熱は年々冷たくなるのを悲しんでゐる

昨夜南十字星に折つたとき

傾きかけたその星が微笑んだと思つたが

今朝の食卓のナフキンの白さが

眼に泌みるやうに鮮やかであつたが――

鷗がゆつくり傾斜する

頭上に拡つてゐる青い空よ

この海は十七年間と変わらないで

青く澄んで穏やかであらうが

私は言葉さえ失はれて見つめてゐる

る。伊東は八月下旬に次のやうな二通の書簡を富士氏に送つてゐる。

「朝太郎の詩集と『三人』有難う。伊東静雄論よみました。その内京都に行つて感想云ひます。今日は一寸お詫びせねばならん

ゐた事実が記述されてゐたが、それに基いて伊東静雄論を書いたものであらう。伊東は富士氏に軽井沢で「文芸文化」の編輯者清水文雄氏に会ふ旨と、もし伊東論を書いてくれたなら「文芸文化」に発表をして貰ふ由り富士氏に約束してゐたものに相違ない。伊東は私にそれとはなしに人間の解説し伝記の執筆を暗示するところがあつたが、富士氏には「僕の詩を褒めてくれ」と詩の解説者の役割を要請したやうだ。ちなみに、富士氏のこの詩集「夏花」論は、その刊行の遅延に伴つてずれ、翌年の昭和十五年「文芸文化」一、二、三月号に連載された。

この富士氏宛書簡の三日後、先にルバイヤットの引用方を要請した森氏に、次のやうな書簡を送つてゐる。

「森亮様

早速御承引いただき有難うございませう。お礼申し上げます。

わたくしも一度お会ひしてお礼申述べたく存じます。では二十四日午後一時から一時半迄、心斎橋不二屋といふ菓子屋の階下に座つてをります。もしお暇でしたらおいで下さいませんか。私は右の眉の上にはくろがありますからすぐわかります。もし当日お差つかへりましたら、当日午前中に

(昭和十四年八月二十八日、堺市北三国ヶ丘より)

(京都市吉田上大路小沢方富士正晴宛封書)

詩集の企画変更に伴ふ伊東の詫状である。

富士氏は「文芸文化」用の詩集解説文をすでに伊東に手渡してゐたが、野間宏・桑原静雄氏等とやつてゐた同人雑誌「三人」にも既に「伊東静雄論」ならびに詩集「夏花」の近刊予告広告を掲載してゐた。ところがぐろりあ・そさえてから収録詩をふやして頁数を増加してくれと伊東に要望してきた。その要望は伊東の精撰主義に背反した。潔癖な伊東は、頁数をふやさねば「ぐろりあ叢書」の一冊としての体裁がと、のはぬといふなら、出版を中止すると申入れたわけである。さりとして、最初に「文芸文化」叢書の一冊として出版を要請してきた子文書房に話を戻すことも不見識である。出版を敢てするには自費出版よりほか方途はない。さう……つき詰めて自分を狭い境涯に追ひ込んでゐる。そしてそれらの不手際的一切を頭脳の異常に帰してゐる。

自虐的な伊東は盛夏にはむしろ爽快感を感じた。次第にちりちりと暑くなつてくる季節に身構へてゐる心意。歯を喰ひしはつて堪へられるていどの熱量。それは快感だつたのだ。夏になると爽快感やら生命感を感じる記述

は各氏宛の書簡に随所に発見できる。「三月以来の不健康、このごろの酷暑の日光にいささか回復」(昭和十五年八月七日)。「夏は一年中つづいてもいいやうに思はれます」(八月十日附富士正晴)。「やつと烈しい陽光に、しづかなうつとりした気持をとりもどし」(昭和十七年宛書簡)……。なぜ、それである。晩年の死の床にあつても、「早くカツカと照るにぎやかな真夏になつてほしい」(昭和十六年六月一六日附福地邦樹宛書簡)と盛夏を渴仰してゐた。従つて伊東の絶唱の多く——「八月の石にすがりて」「朝顔」「水中花」「庭の蟬」「雲雀」など、盛夏に取材されてゐる作品が多い。

伊東は盛夏を自虐的に愛好した反面、その序幕である梅雨期や終幕の晩夏には、肉体的、精神的な憔悴で、頭脳も論理的な秩序を缺くことがあつたらしい。この書簡の末尾の後頭部のしびれがそれである。

三日後伊東は次のやうな書簡を富士氏に書き送つてゐる。

「お手紙有難う。池沢の言ひ方きいててあなたはいやな気がしたでせうね。ところが、あのしつこい云ひ方は実は幾分、あの男の私に対する友情表現法でもあるのです。あれが、われわれ仲間の挨拶みたいなのところもあるのです。池沢茂は私の高弟なんです

す。しかしわたしも今のところ今迄どほり寡作であるより仕方ないと思つてます。詩集もなるべく「文芸文化」から出すやうにしませう。栗山君あなたの原稿みて「わたしも教へられるところがあつた」と云つてました。お世辞にあらず。」

(昭和十四年八月三十一日、堺市北三国ヶ丘より大阪市鶴見橋、富士正晴宛がき)

この書簡の内容から推量するに、第二詩集の出版を伊東が延期しようと思つたのに対し、富士氏は齷齪さすべく訪問したやうである。恐らく、富士の伊東論の掲載が約束されてゐる「文芸文化」の子文書房に再度交渉することをすすめたであらう。そこで富士氏は池沢氏に出会ひ、いささかしつこく喰ひ下られたやうである。たぶん池沢氏は、富士氏の子文書房説に対しぐろりあ・そさえて説を主張したのであらう。池沢氏の高校の先輩、保田与重郎・伊藤佐喜雄氏等はぐろりあ叢書の著者に加はつてゐたから、当然……身びいきとしてもぐろりあ叢書への参加の方に加担したであらう。もしぐろりあの方がもつと頁数を要求するのなら、収録作品の数をもつとふやすべきであり、その作品がないといふならあらたに新作を制作するべきであらう……としつこく力説したものと思像される。文中の伊東の言葉——「今のところ今迄どほり寡

作であるより仕方ない……」といふ、いさ、か言ひわけめき、独白めいた言ひまわしで推量することができる。

当時池沢氏は東大美学を出て受験生相手の東京の出版社「旺文社」に勤めてゐた。丁度故郷の加古川に徴兵検査があつて、それに応ずる帰郷のついでに、この伊東訪問となつたわけである。氏の記憶によると、初め北三国ヶ丘に伊東を訪ね、そこから一緒に心齋橋の喫茶店に出掛け、そこで富士氏に出会つたやうな気がするといふ。伊東が先に森氏と出会つたのも心齋橋の喫茶店であつた。なにか

未知

吉本青司

うつくしい石の立つ丘陵や
葉燄火のもえる野を俯瞰し
空色のポストをぬけて来た手紙

西の旅の印象をしるした
簡潔な筆蹟は
どんな陰謀を隠しているやら……

かう……生きる世を惜みなく楽しみたいといふあせりに似た願ひから、友との会同の場所はしきりと賑やかな繁華街を選んだものであらう。

翌九月一日二日、伊東は次のやうに日記をしるしてゐる。

一日第一の興亜記念日なり。本日より学校始る。始業式、分列式、神社参拝、大掃除等あり。

頭重く、いんうつ也、夏の疲労もつて甚しい感がする。朝校庭で分列式ながめながら

手紙の主は
歌集へみずならの樹の下でVの
著者だといふが
たたんだ羽をひらくように
飛びたつころを まちうける期待を
仕掛けたワナに捕え得るひとなら
歌も高適さにあふれていよう

秘められた未知の陰謀を
知つてか 知らずか
変容するあじさいの夏……

、思索ばかりで行動なきものは発狂す、といふ言葉をつぶやいてゐた。この疲労はどうにかしなければいかん。三木露風の最近作の稀しき詩「憂鬱な日」といふのをよんでみると、日本の詩人の老年の悲しさがかんぜられた。それを思ひ出した。

自分は何かをつぎつぎにこんな調子で文字を書いてみようと思ひつた。自分の詩の発想法はゆきづまつてゐる。いや、ゆきづまつてゐるといふより、ゆきづまつたところからやつとしほり出されるやうな詩である。自分はそれを改めるやう努力したい。それには自由な文字を書きつける習慣が少しは足しになるかしらんと思ふ。

家庭はいやだ。しかし家庭を離れてひとりで生かれる自信も亦なし。日光つよく、後頭部いたみ、めまひを覚える。いくぶんの吐気と。

独逸とポーランド国境にて激戦中との号外あり。自分の頭脳では果して戦争に堪へるだらうか、二、三日前から自分はしきりにそれをあやぶんでゐる。ひる十二時記。
二日昨夜熱き風呂に入つたため、かなり頭清爽を覚える。

水い水い夏

中庭は白く乾ききつてゐる
おれの洋服の紺色も焼けた
あ、水かつた夏
鬱々と黒ずんだ木々だけが
相かはらずゆれてゐる

子供らの声は遠くまで透り
何か考へねばならぬことが
おれにはあるやうな気がする
しづかに後頭部がいたむ
あ、北條井沢の人の丈を越えた
高原の夏草

おれは水く我慢をした
いろんなことを
そして家でも苦しかつた

木崎の湖のほとりを
走つた自動車

おれはまだゆれてゐるのを覚える

あ、水かつた夏

午後宿泊訓練のため学校に残る。労働はわ

が心をつつましくする。しかし身体の疲労は堪へられぬ。左足神経痛気味なり。

伊東は昨昭和十三年にも日記をつけたことがあつた。九、十、十一月の三ヶ月間だけ。メモに類する簡潔な記述だつた。今年になって二月に二日間だけメモをし、三、四、五、六、七、八月の九ヶ月間記述を怠つてゐた。前掲のやうに、九月になつて改めてつけたわけは、自由に文字を書きつける日記の習慣から、もつと自由に……もつと気軽に……、詩の発想が誘導されぬかと伊東は願つたからである。又、事実、日記を付けておかねばならぬほど急に息苦しい空気の稀薄さや、ただならぬ重圧を、生きの身の日常に感じた。七月二十七日には日米通商条約の破棄が通告された。八月二十三日には独ソ不可侵条約が締結された。九月一日午前五時四十五分独逸はダンチヒの回復を意図してつひにポーランド侵入を開始したからである。第二次世界動乱は触発の危機にあつた。伊東は生徒の分列式を見ながら、「思索ばかりで行動なきものは発狂す」と感じたのは当然である。彼は朝礼時に生徒の徒手体操を眺めながら詩句を影取したことは既述した。あの日は回転し停止する秩序の美に感激の涙を浮べな

がら、舌の上に残つた珠玉を意味したほど余裕があつたのである。今日、分列行進にも同じく秩序の美はあつた筈である。しかし、伊東は感激の涙を浮べる代りに、発狂の衝動――涙腺に渴きを覚えたのである。この涙の渴きがめまひとほきけといふ生理となつたのかもしれない。「自分の頭脳で果して戦争に堪へるだらうか」。迫りくる世界戦乱の靴音に、伊東は発狂の不安を如実に感じだしてゐたのである。伊東はその発作の勃発を避けるために詩を書かうと思ひ立つた。あ、水かつた夏Vの疊句をもつ前掲のフラグメントは、一聯の詩想でつらぬかれてゐる。私の記憶の溪流の底にある一枚の色褪せた褐色の写真。白い寛衣を着た哀歌のわがひとの面影も、もう……そこには感じられない。人の丈を越えた夏草。その遮蔽物は伊東の回想を遮断してゐるからであらう。

伊東は九月中旬の十九日、次のやうな書簡を富士氏に書き送つてゐる。

「いつまでも暑いですね。京都はどうです。わたしの詩集、適当な紙が見つかったら、六十頁で、「文芸文化」から出版することになりました。いい紙があるかどうか問題はそれだけになつてゐます。一寸報告しときます。

蝶の学園

堀之内 歴

集中豪雨が暴れていった
今朝四日目に仰ぐ青空に
河内の天地はうそのようにしづか
雨あとを見に 自転車で町を走る
女子学園になると 校庭が低いのか
池になつてゐる
長い板塀越しに聳え立つ樟の校庭樹の
梢をはるかに鱗雲が流れている……と
樹の上から 白い蝶が一片
移り舞いして 下りてくる 気まぐれ
堀下は俤の多いとおりみち
一台の單車が 当ると見えたが
ひらりと交して 揺り上ぼる二枚ばね
表も裏も真白いその眩しさ
ただ一つ 何処から何処へ行く蝶か
ウロコ雲の切れはし ではあるまい

一九六一・六・二九

京都行き、身体疲労のため中々実行しかねてゐます。

健康を大切にして下さいよ。わたしは少しづつ平調に復しつつあり。」

(昭和十四年九月一日附、堺市北三国ヶ丘より京都市吉田上小路小沢方宮主正晴宛はがき)

九月一日の独逸のダンチヒ併合。九月三日英・仏は独逸に宣戦を布告。第二次世界動乱の口火はきられてすでに半月になつてゐたので、伊東は発狂の危機を感じるほどの重圧からどうやら脱れ、ふたたび沈潜した心境をとりもどしたやうである。二転三転した詩集上梓の計画が子文書房から出てゐる「文芸文化」叢書の方に落着いたことも、あづかつて力となつたであらう。この書簡と同じ日に書かれた日記は、さらに沈潜した心境に明彩を与へてゐる。

十九日 昨日よりやや爽涼、歯医者で五時に寒暖計みたら二十七度、先達中三十二、三度あつたのだ。今日いよいよ爽快、久し振りに身体がしつとり感じ、皮膚がしづかに呼吸するをおぼゆる。美しい詩が書きたい。

水い水い夏

わが服の紺色あせ

人生と和解出来ぬ男

そんなにみつむるな若い友、ふかい瞳に自然が与へる暗示は、それがいかに光耀にみちてゐるものであつても、つまるところ(それは)悲しみだ。自然は、変化だからだ。そして僕らも変化だ。

そんなにみつむるな若い友、自らを停めることによつて、自然へのまじはしの暗示をうくるな、歩きつつ道の花をつめ、多様のよろこびにはほほめ、ほほめは、自然と汝とを支へる唯一つのものだ。

ほほめは受けることと与へることとの調和だ。

風と光の中に身を粉々にせよ、自ら持するところあるな。

詩を釣る勿れ。

つまり、この日記は二つの未完の詩の二重奏で構成されてゐる。A水い水い夏Vは二日の日記に書かれた詩想のフラグメントであり

、八そんなにみつむるな若い友Vに始る十數行は明らかに第二詩集「夏花」の末尾に収録されてゐる「そんなに凝視めるな」の原型である。文芸文化叢書といふ形で出ることのきまつた第二詩集の原稿は、この八そんなにみつむるな若い友Vの完成と追加によつてまつたとみるべきだらう。

そんなに凝視めるな

そんなに凝視めるな わかい友
自然が興へる暗示は

いかにそれが光耀にみちてゐようととも凝視めるふかい瞳にはつひに悲しみだ鳥の飛翔の跡を天空にさがすな夕陽と朝陽のなかに立ちどまるな手にふるる野花はそれを摘み

花とみづからをささへつつ歩みを運へ問ひはそのまゝに答へであり

堪へる痛みもすてにひとつの睡眠だ風がたつたへる白い稜石の反射を、わかい友

そんなに水く凝視めるな
われ等は自然の多様と変化のうち

そ育ち

あ、歎びと意志も亦そこにあると知れ

第二詩集「夏花」

この詩の意味は前掲の日記の未完の詩句がそのまま解説となる。こゝにいふ八わかい友Vは日記と同じ日附で伊東が書簡を書き送つてゐた富士正晴氏とみるべきであらう。伊東の詩碑に彫まれた第七・八行——八手にふるる野花はそれを摘み、花とみづからをささへつつ歩みを運へVは、七年前の作品「事物の本抄」の第八聯——八私の手にふれたがる道の花らを触れながら、私は林を進むVから成育した詩句である。あの日、触れることがやつとだつた伊東は、摘み、しかもそれを携へてゆくことが、できるやうに成熟してゐたのである。

無条件降服 (続)

田中克己

この原隊へ帰つた時のことでおぼえてゐるのは、同年兵の相馬実が炊事の係長をしてゐたことである。相馬は教育中に右手が上らなくなつて、成績も悪かつたが、四条暇中学の

書記といふ旧歴の上に、人格が認められたのであらう。炊事班といふ戦斗に適しない、出来の悪い兵のやらされるときまつてゐる役に廻されたが、たちまち長として古兵を使用してゐるのである。私はそれをうれしく思ひながら、部隊本部で相変らず古兵に抑へられてゐる自分の人格の非力を悟らざるを得なかつた。

このころ私は脱走を本気で考へてゐた。情報室には古い地図が貼つてある。望都県から北京まで鉄道が通つてゐるが、鉄道でゆくのは危い。さう考へて、私は歩いて義弟のゐる天津へゆくことにし、地図の上で最短距離を辿る。高陽、任邱、雄、霸と地図を見やり、直線距離三百軒を何日で歩けるか計算して見る。途中の食糧は？日本人と知れたら？さういふことにも、いつものくせながら一応の答は出る。いつ、どうしてここを出るかといふ問題が最も緊要だが、私はこれも割つて、今度不寝番に立たされたときと決定する。不寝番は夜間一時間更替で、一人で監視するのである。そのとき北側の森林をくぐつて出る。しばらく鉄道に沿つてゆきそのあと右にそれる。あとは運まかせ、といふのが粗雑な私の計画である。

脱走の理由は山ほどあるが、その第一は私

が自殺を欲しくなつたことである。自殺が大死とすれば、隊にゐて死ぬことは、すべて大死である。それでは脱走したら大死でなくなるのか。然り。北京の新聞はこのごろ来なくなつてゐたやうに思ふが、鉄道沿線のこととして、北京、天津の噂だけは、伝はつてゐた。そしてその中で私の胸を最も強く打つたのは「北京天津の邦人の娘は、おほむね淫売と

なつた」とのしらせであつた。他に噂もあつたらうに、かういふ形で敗戦後の在留邦人の生活が伝へられ、これがまた私のセンチメントを強く動かしたとは、今から考へれば可笑しいが私はシンガポール占領後の華僑を見ただけに、これを真実と考へ、五三キロになつた体で、一人でも二人でも泥沼から救ひ出さうと考へたのである。部隊長に除隊を願ひ出

る、願ひ出て許されるなどは考へても見なかつた。

脱走の途中で死ぬ——それはなるべく考へないことにした。その上また部隊は北支軍の命令で今後食糧の自給自足を命じられてゐた。部隊はまづ手持ちの玉蜀黍の製粉を考へた。各班一名使役を命ぜられ、私は生れて初めて牛を使つて玉蜀黍を挽いた。その作業中

命の終つた日から絶え間なく排けてゆくのだ。

へリックク詩抄 (八)

森 亮

はにかむ乙女

太陽があざやかな朱に染める
朝ごとのそのらのおもてのやうに、
桜や杏の葉が、キャスリン梨が、
水々しい頬をほてらせるやうに、
いや、それよりか珊瑚細工や磨いたばかりの
紅玉が

もつと愛らしい赤色に輝くやうに、
菱形模様を織り出した真白い麻のナフキンが
薄色葡萄酒の晴れやかなピンクに照り映える

やうに、

そんなにチュリアは赤くなる、はにかみ屋

の彼女が
頬いつぱいをほてらせるとき。

★

水時計

ほらその水のいつぱい詰まつた水時計、
ごらんの通りの代物ながら、聞いて下され、
充ちみちた液は、物の本にも見えるやうに
恋人たちの涙が凝つて成つたもの。
それが一滴また一滴と上のガラスの器から
下のガラスの器へと移るのを聞けば、
したたる水の音が積みかさねる
舌足らずの言葉は告げてゐるではないか、
恋人たちが生ける日々流し溜めた涙は

詩を作るといふ精神の活動が恋愛行爲その物である場合に本當の恋の詩の誕生が見込まれるが、へリックはしばしば恋愛を単に美しい詩を作るための便利な素材と見做してゐるやうな印象を讀者に与へる。彼が女性を歌つた詩は、たとへ大げさな表現を用いた場合でも、恋愛詩と呼ぶには情熱が稀薄すぎる感みがある。「はにかむ乙女」(八二番)もその例に漏れない。かういふ場合、彼の意圖(？)を尊重して、その小手先の器用さを賞美するのが賢明であらう。次の「水時計」(一二七番)などは作風が多少違つてゐる。なにかに物が感じられて、現代人にはむしろ親しみやすい。彼の文学の師ベン・ヤンソンに砂時計を歌つた短詩があるが、必ずしもそれに引き摺られてゐない。

、通りかかった農婦が見かねたといふ風に、私に手伝つてくれ感激した私が手持ちの小鏡を与へた話はいつか書いたおほえがある。しかしこのタウモロコシの粉は役に立たなかつた。

十月十日に私はまだ脱走せずにおゐた。その証として私はこの日のことをよくおぼえてゐる。私は青天白日旗のひるがへる城内へ昼間散歩に行った。夕方、大同炭坑に働いてゐた人たちとその家族とをのせた一列車が駅に着いた。貨車の上で一月暮した。ここまで来る途中、毎日襲撃された。今夜のしづかなこと、と私のさし出すタバコを旨さうにふかしたあと、酒が何とかならないかと、相談する人があつた。私は当惑してその場をはなれ、本当に何とかならないだらうかと考へて床に入つてゐると、「非常！」の叫びとともに銃声がひびいた。敵襲である。みな銃をとつて走つた。西尾一等兵も撃つてゐる。みるみる関帝廟が燃え上つた。私はそこまで見とけてから、鉄道の方へ行つてみた。貨車はひっそりして無人の様である。私は「異常ありませんか」とつね、返答のないのに失望する。私は命令を受けないで、戦場を離脱してゐるのではなからうか。一応、全列車を見まはつたあと、匆々と私は隊内に戻つた。西尾は銃

の手入れをしながら、「よく撃つた」とほこ

山

浅野 晃

今日 苦小牧の町を歩いてゐてふと前方を見上げると樽前が手に取るやうに人家の屋根の上にある

この山がこんなに近くこんなに大きく見えるとは――

ほくのゐる勇拂の部落からではまるで遠くて小さいのだ

ほくは山の近さに驚き 喜びを感じたまつたくすばらしい山だ

彼は正午の光のなかにあつて生きた大きな牛である

残雪の面が褐色にうるんでゐるのまでが斑牛の皮膚にそつくりで

ゆつたりとそこに横になつてゐるここにかうしてゐるのに君は気がつか

かつたのかと人なつこい眼でほくに笑ひかけてゐる

ああさうだつたのだと

らしげである。私は入隊以来、一発も撃たない私の銃を銃架に置いて「つまらん」と独語して、いよいよ脱走の決意を深めた。以上が私の十月十日、即ち中国の辛亥革命記念日の追憶の全部である。

北 京

私は脱走を考へて毎日を通してゐる。そのために情報収集と称して營外へ出てゆく。營舎の外に貼りめぐらしてある蔣介石の「怒みに報いるに徳を以てせよ」といふビラはありがたく見てゐるが、私の歩いてゆく途は、中共軍の陣地で、雙十節の攻撃などから考へて、無事に通れる自信はない。しかしこの隊にゐて死ぬよりましだと思ふことが多いのである。京漢線の駅へゆくことも多いのだが、一日に何本かの汽車でゆくことを想像もしなかつたのは、我ながらふしぎである。この鉄道が相変らず日本軍の管理下にあつて、途中で引きずり下されるところでも思つてゐたからであらう。

駅の構内に巡警の詰所があるのを知つて、入つてゆく。別に警戒した風もなく二人の巡警は席をすゝめてくれた。もう一人、得体の知れない人物があるが、私は何となく次の意味のことを話した。「永い間日華両国民は不

和であつた。根本原因は何であれ、この数年間、日本軍は焚き、殺し、傷けた。この怒み

はたと蔣主席が忘れよといつても忘れられない。しかし子孫にまで怒みは残してほしくない。「勝手なひひ分であるが、私はさう望んでゐると、ただどしく述べた。巡警でないもう一人は私の話の途中で、私に同意して、私のいひ足りないところを補足してくれた。鮮人だつたのである。そんなわけで、私はこの巡警たちと知合ひになる。

そのすぐあと、たぶん西尾一等兵からであらう、私は現地除隊許可の内報を得た。小林伍長たちが除隊前に、部隊長にたのんでくれたと見える。西尾は新聞社の社員だから北京へゆけば支局で何とかしてくれよう、田中は餓死しないだらうかと部隊長が心配して中々うんといはなかつた由である。ともかく私の脱走計画は不用となつた。原隊の隊長荒木中尉が会ひたがつてゐるときき、申告かたがたゆくと、午飯をくはしてくれ。中尉も私の除隊後を心配してゐる様子である。礼をいって別れを告げ、竹川に会ひにいつて、「この間、北京へ連絡にいつた時、おれの方の連絡はどうだつた」ときくと、「なんぼ電話かけても通じなかつた」といふ。そのいひ方が弱々しいので、忘れて連絡しなかつたのだな、

ほくも旧知に笑ひを返したドームからいつもの煙が立ちのぼり青い無風の天に

一寸ぐらゐの高さになびいてゐる

屈託のない煙だ うつくしい息づかひだ今日は天気がいいから

奴さんも御機嫌なのだぬくぬくとやつてゐるのだ

すつかりほくと同じぢやないか山はいよいよ眼を細くして

君これからどこへ行くのほくは第一洋食店でモーツアルトをききながら

コーヒを飲まうといふ寸法さこれから畑仕事で忙しくなると

めつたに出てこれないからねはッはッはッうまくやつてるね ほくは

これから昼寝だ

ちや あはよ さやうなら

ほくはこんない友達がゐてくれることに有頂天になり

さらばラバウルよを口笛で吹きながら第一洋食店の方角へと歩を進めた。

と思つたから問いただしもしない。なまじ連

小高根太郎編

富岡鉄斎

書き下しの論文に加へて、書簡・隨筆・年譜・図書・文献目録及び未発表の近親者の思い出を追加。鉄斎研究に欠かせぬ基礎資料。

祖父鐵斎の思い出……………富岡益太郎
祖父富岡鐵斎……………富岡冬野
富岡鐵斎……………小高根太郎
父鐵斎のこと……………富岡とし子
B5麻布装製箱入原色4図版41
本文二〇頁 価九〇〇円 千50

東京都千代田区九段一ノ四
日本美術新報社

振替東京一六二五〇番

われ一行は左側の小さい出口から出て、誰かが呼んでくれた車に荷物をのせ、それから名

果樹園六十六号 昭和三十六年八月一日発行(毎月一回二日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

編輯後記

六月四日。天理大の高橋重臣氏よりコロンビア大学に一年留学する旨の連絡をいただいた。East Asian Library, Columbia University, New York 27N, Y. U. S. A. 六月一日。前橋市立図書館から萩原明太郎書斎復原資料記念パンフレットをお送りいただいた。萩原明太郎に関する資料が館長渡辺国忠氏の努力で次々に整備されつつある事実はうれし。

妻書房の堀内達夫氏から立原酒造拾遺集の企画を知らせてきた。愚生宛遺書簡も遺珠として収録されることになった由である。

六月五日。松江大学に森義夫を突然訪れた。私の勤め先の求人が主目的だったのでそこそこ辞退した。私の勤め六月十六日。いつも立ち寄りたく思ひながら立ち寄ったことのない留願の出雲大社に詣でた。近隣の部落の防風垣である築地松は印象的だった。八雲立つ出雲八重垣……はこれではなからうかと思った。

七月一日。クラブ関西でエツセイスト・クラブ賞を受けた庄野二氏の「ロケットゲムの村」の記念会があった。寿居文章先生と庄野潤三氏に初めてお目にかかった。その他安西冬樹、長沖一、司馬遼太郎、石濱恒夫、吉井栄次諸氏に久々でお会ひできた。その他小野十三郎氏にお話し、すぐ彼の横にゐた紅顔の美青年に挨拶を交した。が開会になつてその美青年がなんと藤沢和夫氏であつたのに吃驚した。まことに失礼をした。(O)

果樹園 第六十六号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年八月一日発行

池田市野町一六八
編輯者 小高根二郎
発行所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
發行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第67号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
橋 浅野 晃
指導 吉本青司

ヘリック詩抄 森 亮
貸 室 萩原 葉子
夏 日 抄 美堂 正義
北 京 田 中 克己
爽 涼 歌 堀之内 歴
編輯後記

詩人、その生涯と運命

作品と書簡から見た伊東静雄(五十五)

小高根二郎

伊東は翌十月初旬、次のやうな書簡を八わかい友V富士氏に送つてゐる。

「お手紙、原稿有難う。原稿三度よみました。三度目に、「友人が中原を限つた」に限つたといふあなたの意味が、いくらかわかりました。あれは、あの論の大切なひつかりだから、もう少し説明しとかなと、中々読者は理解に骨折れます。しかし、それにしても中原の「もつと深い、スケールの大きい」といふ言葉は、晩年の彼の詩と對比して、わけのわからぬ、無意味な言葉に

を忘れた兵隊の落着き先へ歩いて行つた。ここで一晩泊めてもらつたあと、私は北支電々会社の岡田氏を訪ねにゆく。竹川が度々電話をかけたのにだめだつたといつたのを半分信じてゐるので、直接会社へゆくことにしたのである。会社は西長安街にあつてすぐわかつた。私は受附で訪ねる人の名前をいひながら思案してゐた。岡田氏は天津にゐる私の義弟(妻の弟)の男である。一年前に東京の飯田橋で結婚式をあげて義弟たちが天津にいつたあとすぐ、近くにゐた岡田氏一家も北京にいつたときか聞いてゐない。会つたのも式の時だけである。その人を訪ねてどうするのか。私は実はあまり心配してゐなかつた。——困つてゐたら助けるつもりだつたのである。岡田氏は私の顔を見ると、至つて気さくに「しばらくですね。先に家へ行つて待つてくれませんか」といつて自宅を教へてくれた。すぐ先の北新華街のどこそこと聞いて、私がゆくとすぐわかつた。ここでも心安く迎へられて、挨拶もそこそこに私は湯を沸かしてもらひ、隊で着てゐたものを一切ぬぎすて熱湯に漬けた。すいぶん虱をわかしてゐることは、承知してゐたのである。

(半白叙傳6)

果樹園六十七号 昭和三十六年九月一日発行(毎月一回二日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

の文章、部分々はわかつても全体の要旨が中々わからなかつた。そして、自分の上述の短い感想も四回書き直したものです。それでも、わたしの感がひがいくらかありさう。

* 詩集こんどは夏花と名をかへました。どうでせう。いい題なくて困つてゐます。御意見かして下さい。もう印刷にかかつてゐる筈です。あなたに贈呈するのは、たのしみです。紙は中々いいのはいららしいです。

* 一週間ほどかかつて三行程詩かきました。この三行があまりよく出来たので、完成するのは馬鹿らしくなつて捨ててしまひました。阿々

* たれとも喋らず、コーヒーも飲まず、本もよみません。ただ一つ、ソロゲープといふロシアの詩人の小説「光と影」岩波文庫でよんで、自分も切に小説書きたくなつたです。

* 中原の本 どうぞ使つて下さい。

* 栗山君ともめつたに会ひません。

* 学校疲れるし、日が段々短くなるしいやです。身体は、まあまあといふ程度で、用心してゐるだけ、よくないのかもしれない。

十月五日 伊東静雄

(昭和十四年一〇月五日、堺市北三國ヶ丘より京都市吉田上大路小沢方富士正晴宛封書)

この書簡によつて伊東の中原中也観はつきりとする。中原の処女詩集「山羊の歌」の少数の予約購読者の一人だつた伊東……。又、処女詩集「わがひととに与ふる哀歌」の出版記念会の当夜、中原と一宿一飯の奇縁を結ぶにいたつた伊東……。彼の中原観は、往年のベタ惚れの境涯を過ぎて、「月の光その一」につきてゐた。ヴェルレーヌの「マンドリース」のチルシスとアマントからヒントを得て、死んだ愛人の幻影を歌つた「月の光」だけになつてゐた。つまり、ヴェルレーヌの抒情精神の日本での唯一の体顕者……といつたほどの意味に、伊東は中原の評価を限定しだしてゐたのである。この意味の中原観を、当時私も伊東から聞いた覚えがある。

即ち、伊東は中原を死後より生前により高く評価した。しかし、立原は生前より死後に於てより高く評価したのである。既述したが、立原の生前の正当な評価は、その天折趣味の詩風に対する伊東の骨身に徹した天折嫉忌の感情から邪魔をされてゐたのである。

伊東は一週間ほどかかつてできた三行詩を、その出来があまりによいので完成を中止して放棄した由……書いてゐる。それは十九日の日記に見えた八永い永い夏 わが服の紺

色あせ 人世と和解出来ぬ男Vである。この快心の三行を放棄して、伴奏のやうな役割をしてゐた「そんなに凝視めるな」の方を完成させたわけである。

伊東はソログープの小説を読んで自分も小説が書きたくなつた……と告白してゐる。ソログープなく、正しくはソログープである。つまり、中山省三郎訳の岩波文庫一五一九番「かくれんぼ 白い母 他二篇」を読んだのである。その「他二篇」の中の一編が伊東の感動した「光と影」なのだ。

フョードル・ソログープはペテルブルグの中学教師をしてゐたロシア前期の象徴派詩人。同じ中学教師である境涯も伊東の興味を喚起したであらう。しかし、伊東が伝記の愛好者であつたのに対し、彼は伝記不用論者であつたのである。この「光と影」は伊東が愛好した佐藤春夫氏の「星」のやうに、三十一折の短文の集成……といつた形式で、成り立つてゐる。

主人公のフローヂャは瘦せぎすの十二才の神経質な少年。母はもう九年間も寡婦である三十五才の賢母。彼女は息子の勉学の助けをするために自ら古典語を学んでゐるほどである。

フローヂャは新聞に挿入されてゐた影絵の

小さな広告冊子を発見する。彼はそれをズボンのポケットに秘蔵してゐて、家庭での自習の時間を盗んで影絵に耽溺する結果となる。ランプの灯影で彼は手と指とをからみあはせて、非具象の構成から具象の形象を造型する次元の違ふ夢の創造である。禿頭の紳士。兎。彼はその創造に夢中になつてゐるところを母に見見される。彼は不器用に身を矯める。そのとりつくろつた姿勢を発見した母は、

隠し煙草をしてゐたのではないかと疑ふ。照れたフローヂャは教本をとりだし影絵を上演してみせる。母は勉強を怠らぬことを注意する。フローヂャは一週間ばかり母の忠告を容れて影絵を断念するが、また夢幻造型の誘惑に敗北する。傷ましい世を逃れて天に飛んでゆく天使を創造する。牡牛の頭を作つて得意になつてゐるところを母にまた発見されてしまふ。「またそんなことをしてゐて……」と母はとがめ「もう決してしません」とフローヂャは約束する。が、またまた違約して、草原を旅する女を創作してみる。そこを母に見見されて、ついに教本を母にとりあげられる。とりあげた母自身も、かけがひのない息子をかくまひに魅了する指とその構成する影の魔力を実験してみる。そして少くとも影の存在を意

識するやうになる。母は悪癖を忘れさすつもりで、影を意識する時刻——宵の口にフローヂャを散歩につれた。霧のかかつた空に二つ三つ現れる星。フローヂャはその星だけに

橋

浅野 晃

人間が通るためにこしらへた筈の橋だがさうしてそこはまさしく街道なのだがここの橋はいつ来て見ても誰ひとり通つてゐない

橋の袂に某年某月某日竣工とある文字もまだはつきりと誦みとれるほど欄干も橋桁もしつかりしてゐるそれが雲りがちな曠野の只中にいかにも撫然とかかつてゐるのだ馬や車がいちどにとつと通るとき橋のあの楽しげな饒舌を想つて見るがよい

橋板がみしみし軋んで
さかんな砂埃が舞ひ上つたりすると
こぞとばかり元気いっぱい
祭りの太鼓を叩き鳴らすのだ

はといしい影が存在してゐないことを発見する。母はフローヂャの病状の深さを案じて医師の診断を仰ぐ。が、月並な食餌療法や生活様

色あせ 人世と和解出来ぬ男Vである。この快心の三行を放棄して、伴奏のやうな役割をしてゐた「そんなに凝視めるな」の方を完成させたわけである。

伊東はソログープの小説を読んで自分も小説が書きたくなつた……と告白してゐる。ソログープなく、正しくはソログープである。つまり、中山省三郎訳の岩波文庫一五一九番「かくれんぼ 白い母 他二篇」を読んだのである。その「他二篇」の中の一編が伊東の感動した「光と影」なのだ。

フョードル・ソログープはペテルブルグの中学教師をしてゐたロシア前期の象徴派詩人。同じ中学教師である境涯も伊東の興味を喚起したであらう。しかし、伊東が伝記の愛好者であつたのに対し、彼は伝記不用論者であつたのである。この「光と影」は伊東が愛好した佐藤春夫氏の「星」のやうに、三十一折の短文の集成……といつた形式で、成り立つてゐる。

主人公のフローヂャは瘦せぎすの十二才の神経質な少年。母はもう九年間も寡婦である三十五才の賢母。彼女は息子の勉学の助けをするために自ら古典語を学んでゐるほどである。

フローヂャは新聞に挿入されてゐた影絵の

はといしい影が存在してゐないことを発見する。母はフローヂャの病状の深さを案じて医師の診断を仰ぐ。が、月並な食餌療法や生活様

ほくが渡りかかるときは
すでにみんなが渡つてしまつたあとなのか
か
まだ誰も渡りに来ない前なのか
いつもほくひとりか
ちくはぐな下駄の音をひきづつて渡つてゆく

それでも橋は人なつかしげに
ほくをつかまへて話しかけてくる
退屈だらう、動けない君は
ちと散歩でもしてみたらどうかねと
ほくがそつと訊ねると
へへへと橋はわらひながら
川を眺めてゐると飽きませぬや
水の奴らがうたつたりこぼしたりして行きます

元気な小僧です
なるほどね
で君は彼等のおしやべりを聞いてやると
いふわけだね
まあさうです

次から次とあら手がやつて来ますんでぐるぐる渦を巻いて行くのもありますし葦の葉に腰をおろして一服する奴もあります
なかには名残が惜しいのか
が
ふり返りふり返りして行くのもあります
先をいそいでゐるんですね
ひとりも引き返して来る奴はみませんや
なにかよほどいいことが
あつちの方で待つてゐるに違ひありません
それはめづらしく晴れた午後だつた
しばらく橋に無沙汰をしてゐたのを想ひ出して
ぶらぶらその方へ歩みを運んでいつた
見ると橋は一頭の瘦せ馬を引きとめて
しきりと何か話しこんでゐた
水はどんどん流れてゐた

とを指名され、返答ができなかったために落第点をつけられる。母は校長先生に頼んで監禁所に入れてもらおうと威嚇する。その監禁所の壁にだつて影はある……とワロージャは反撥する。母は息子が死ぬんではないかと不安になる。彼女は自分もまた影のとりこになりだしてゐることに気づき、その不安は深刻になる。或る夜、寝つかれぬままに彼女は息子の睡り具合を見に寢室にいつてみた。赤い掛蒲団から両手をさしのべ、ワロージャは夢の中でさえも影を追求してゐたのに、愕然とする。もはや療すべき段階でもなく、またその方途もない。むしろ病癖の流れとともに流されながら、深みに溺れる危険をさせて浅みに沿ふて降る自然を選ばずに越したことはない。「毎晩、二人でちよつと影絵をするの、それから勉強するの。」と、母は息子に提言する。かくて二人は夜毎ランプの光を脊……壁に対面しながら、指が造型する夢幻の世界に、幸福な狂気に眼を輝やかせて沈んでゆくのであつた。

いささか冗長なほど「光と影」の紹介に私がかゝずらはつたわけは、岩波文庫のこの版は現在絶版になつてゐる模様なので、新世代の読者のために紹介する必要があつたからであるが、他方この作品が伊東に及ぼした影響

は、かなり深刻であつた……と思はれるからである。第一詩集「わがひとに与ふる哀歌」。子女書房にすでに手渡された第二詩集「夏花」。この二著の作品には光があつたが影の存在は……と言へば、第二詩集所収「八月の石にすがりて」の「見えや、太陽はかしこに わづかにおのれがためにこそ 深く、美しき木蔭をつくれぐらいいである。この陰影

指導

吉本青司

少女の弾くバイオリンは
すこし硬い感じがした
器用な指先なのに 自然の表情にとほし
くて

なん年かして――

△絃△という雑誌の△ウイーン便り△に
サモヒルのレッスンを受けている
少女からの手紙がのつていた

△手くびを柔かくして力を抜いて△
とサモヒル先生に教わってから

は、第三集「春のいそぎ」期ではいぜんとして育たなかつたが、第四詩集「反響」以後において成育し、伊東の詩に重厚な立体感を附与するのにあつた力となつてゐるのである。「反響」の「中心に燃える」に△中心に燃える一本の蠟燭の火照に めぐりつづける廻燈籠 蒼い光とほのあかい影とのみだれが 眺め入る眸 衣 くらい緑に ちらばる回版の輪を描く△と、中心に燃える光源の成立の補助としての影――あかい影に触れてゐる。さらに「飯路」にあつては影は光より主体性を持つていたつてゐる。足元を照らす懐中電燈の黄色い光の輪。△光の輪のなかにうかぶ 暈は 昼間より一層かけ深くさまざまされてあり△。この詩句においては、黄色い弱い光より暗く深い影の方がはるかに印象的である。さらに「反響以後」の「明るいランプ」「夜の停留所」にも影の詩的役割を発見することができる。

伊東はこのようにソログープの「光と影」に感銘したが、それから半月後、大山定一氏に書き送つた次の書簡に、リルケの陰画的創作法を批判してゐるが、それは一種の陰影論であるともみなされ、興味ふかい。

「先日御著書「マルテの手記」、御惠送

いただき、有難うございました。自分にとつて丁度正しい、いい時にとどいたとうれしく拝見してをります。先づ後記をよみ、本文の約半分をよんだ所です。後記の御親切さもよくわかりました。感謝いたします。

。わたくし自身の詩をもしごらんになつたら、をかしくお思ひかも知れませんが、私が詩を本気に書く気持ちになりましたのは、リルケの新詩集をよんでからであります。詩だけでしか表現されない種類の、思考の正確さが、わたしにもいくらか理解されたからであります。そして「マルテの手記」を今拝見しますと、その目の正確さのために払はれた勇猛な真の犠牲がわかる気がします。しかし写真のネガティヴ云々（後記の中の短文）と読者をいませめたリルケは矢張り幾分悲しいと思つてよみました。

生命の讃歌はこのネガティヴの、立ちどまりを通さずには果して出来ないものか、わたしはこのごろそのことばかりを考へてゐるのであります。

京都にも滅多に出る機会ありません。一度お会いしてお話うかがひたいと前々から望んでをります。わたしも近々拙詩集お手に許に差出せるのを楽しみにしてをります。御健康を祈ります。

はやいデタツシエにも弓が絃を離れないし

ともだちも△音が全然かわつた△
と言つてくれます

△手くびを柔かく……△

この平凡な一言が
少女の悩みをすくつたのだ

また 雨がふつてくる

朝の書斎は騒音から解放され しずかに
両音を聴くのにふさわしい

澄んだ目をして

少女がウイーンから帰ってくるのは
いつだろう

十九日

大山定一様

伊東静雄

（昭和十四年一月十九日、堺市北三国ヶ丘より）
（京都市上京区小山内河原町大山定一宛封書）

これは大山氏が十月七日に白水社から刊行した「マルテの手記」を伊東に贈呈したことに対する礼状である。伊東は後記の「解説」から読み始め、その中に引用されてゐる。リルケが一九一五年一月八日に若い読者であるL・Hに宛てた書簡の陰画的創作論を批判

してゐるのである。

「僕は「マルテの手記」といふ小説を凹型の鋳型か写真のネガティヴだと考へてゐる。かなしみや絶望や痛ましい想念などが、ここでは一つ一つ深い窪みや糸線をなしてゐるのだ。しかし、もしこの鋳型からほんたうの作品を鋳造することが出来るとすれば（たとへばブロンズをながしてポジティヴな立像をつくるやうに）、多分大へんすばらしい祝福と肯定の小説が出来るとちがひない。それは最も明確な面をもつた、最も安定した「至高の幸福」になるだらう。」

つまり、凹型の鋳型。写真の陰画……。その深い窪みや糸線は悲哀や絶望の領域や深さを現はしてゐるが、それにブロンズを流しこみ、或ひはフィルムに焼付けると、全く反対の心象――祝福と肯定の作品ができあがるといふのである。言はば逆説的な創作法である。換言すれば伊東好みの逆説的な肯定の譬喩であり、論理の筈である。しかるに伊東はこのリルケの言葉に、立ちどまりを感じ、その逆説的な手法に、いくぶん幻滅と悲しみとを感じてゐる。彼はポジティヴな生命の讃歌を希求してゐる。影絵といふ否定的な趣向は勉学の障碍とは知りながらも、その趣向を奪つたときには、生命にも影響する……といふ

ことが判れば、わが身も共にその趣向に耽溺していつたあのワロージヤの母の積極的な心意が今の伊東の心意だからである。これは現生謳歌の伊東の希求である。第二次世界動乱の勃発によつて、当初はいくぶんたじろぎをみせたが、すでに立ち直りをみせた現生謳歌の希求、生命の謳歌の渴仰とみなしてよいのではなからうか？

伊東は大山氏宛書簡で、ネガティヴなリルケの創作法に対し若干の反撥をしてゐるが、その三日後、リルケの新詩集から三聯三行の作詩法について目下学んでゐる……と富士正晴氏に書き送つてゐる事実は、すこぶる興味がある。

「先日はお手紙と原稿有難う。立原論矢張りところどころ読みにくい文章がありました。が、(一)の部分などその例です。」(あなたのエッセイは一番最初のところが一番わかりにくく、少し無理な論法があるやうです。それが癖ぢやないかと思ひますが)、全体について云へば殆んど同感です。同感だけでなく、いろいろ自分にはつきりしたところもあります。例へば(四)の後半の部分です。又そこが一番大切なところと思ひます。中原論よりよく出来てると思ひます。中原論は世評に対する反撥みたくないものが

露骨で、然もその反撥は世評の裏側にとまつてゐるやうで、即ち強くいふと世評とすつかり同じもので、立原論のやうな余裕がなかつたと思つてゐます。

一つ一つの詩に対する批評ですが、あれは皆、細緻で、又いかにも実際に詩を聞いてゐる人の鑑識の正確さを現してはゐますが、世に示す時には、無駄だと思ひます、実を云ふと作品の表現論は、一つの作品には一つしかないもので、又その一つといふのが、たれもが無意識に感じとるものであつて(いくらか深淺の度合のちがひはあつても)、無駄なことと思ひます。例へ無意識のものを意識的にしてみせても、それは無駄と思ひます。その理由を云ふなら……あ面倒くさくなつた。これは面談の日にゆづります。とにかく中原論も、立原論も表現についての専門批評が多すぎると思ひます。これは一冊の本にする時のために考へてゐる云ふのです。この点について、例へばよく画家が画を批評する時の表現論をいつても、私はあきたらず思つてゐるのです。わたしは批評は立言と思つてゐます。解説でも又よく行つて解釈でもないと思ひます。そして批評家に私達がのぞむのは、立言の構想の雄大と、決断と思ひます。

これはつまらんものですが、一つの糸口をみつめました。それはかなり、あなたの立原論によるところが多いのです、そしてリルケと。具体的に云ふと、三行三聯の詩形式の完成といふのが、私のいまの野心です

へリック詩抄 (九)

森 亮

泉に戯れる水の精たちに

すぎとほつてきらきら光る泉の水を
水よりも白いあなたの手に受けて
わたしにすすめて欲しいもの。
水掬ふその手のあたり
ぱつと開いた百合の花々
夢まぼろしと匂ふでせう。

それがいけなかつたら、美しい水の精よ、
首傾けこの玻璃の杯に
あなたの唇をふれるのです。
その一度のくちづけで
さかづきにあふれる水が
たちまちお酒に変わるでせう。

これはすでに四、五、実際に今迄も試みてゐるところですが、もつと方法を意識的にして、三、四十篇かいてみるつもりであります。そのために、リルケを殊に新詩集をしつかりよんでみようと思つてゐます。

笛

一マケドニウスにならつて
もうわしはそのかみの妙音を吹き鳴らす
からがない。
笛も傷んだが、このしゃがれ声では歌一つ
唄へない。

今くたびれた笛をとある立木に懸けるのは
渡り来ます牧神にお返ししたい気持から。
ヘリックの古典主義が最も柔軟な姿をとつて開花した物の一つがこの「泉に戯れる水の精たちに」(四九六番)であらう。泉とニフの取り合はせは寧ろ陳腐であるが、ヘリックはニフを有情の女人のやうに取り扱つて清新の趣きを出すことができた。原詩では一、二聯とも四行のスタンザ、その第一聯に GDP の語が見えるが、私はニフが手で水をすくふやうに訳してみた。「笛」(五七四番)は「ギリシア詞華集」からの翻案であらう。松の木蔭に牧神の像が置かれてゐることがプラトンの詩などから想像できるから、この詩の場合もさうかも知れないが私は本物の牧神が其処を訪れるやうに訳した。この半賦神が笛の妙手であることは言ふまでもない。

中谷 孝雄 著

梶 井 基 次 郎

〔目次〕 三高入學、非凡人へのあこがれ、学校騒動、教授たち、生活の乱れ、謹慎生活、劇研究会、暴力への恐怖、東大入學、「青空」創刊、目黒時代、麻布派、本郷派、小旅行、青年作家の動向、湯ヶ島時代、絶望への情熱、最後の東京生活、大阪時代、「レモン」の上梓・死 定価四二〇円

筑 摩 書 房

振替東京一六五七六八

☆ 有明については意見云ふほど読んでゐません

☆ 田中克己についてのあなたの意見は、少し性急です。あまりよんでゐないのぢやないですか。

☆ 立原について、そだがよい云々は、私は言つたこともう忘れましたが、取消します。まるであいまいで、無意味な言ですから。

☆ あまりほめた方の言葉は述べませんでした、それが、もうわれわれの間には、不要と思ひましたから言ひません。

☆ わたしはこの二三日詩かく気持やうやくおこりました。一つ詩作をやりました。

これはあなたの所謂ディアレクティークの形式のもりですがね。これが完成したら、私は確に五十年は残ります、今日これだけ

二十二日

伊東生

富士正晴様

(昭和四年一月二三日、堺市北三国ヶ丘より)

(京都市吉田上大路小沢方、富士正晴宛封書)

この書簡は、富士氏が中原論に引続き執筆した立原論を送つたのに対する批評である。富士氏の立原論の内容そのものが不明なので、伊東の評言の当否は判断しようもないが、伊東の評言のなかには光芒を放つての個性的な表現がみられる。世評に対する露骨な反撥は、世評の裏側にとまつてゐることであり、結局高さから見ると世評と全く同じ水準である……といった意味の言葉なぞ、それである。赤に対して黒といふ反対観念を提示するだけでは無意味である。普通の感光板には同じく黒に映じるにすぎない。その中間に白とか緑とかの相対的な観念を誘導しなくては、色彩としての意味を持たない。つまり、比較にはならない。この相対的な論理が伊東の批評の底辺であつた。伊東が卒業論文「子規の俳論」に於て、彼の露骨な芭蕉排撃、蕪村心酔を銜いたのも、そのためであつた。

萩原 葉子

はじめ、交渉を少なくすることはかり考え、幹旋所に頼んだもののやっぱりいくらかでも、知っている人の方が良いと私は思い直すようになっていた。

それに女の人をわざわざ選んだのに「小説家になりたい」という娘は、あとあじの悪いものが残って気分が悪いし、看護婦の人はタバコで畳を焦がされたうえに、半年間逐に一度も手洗いの掃除もしないままいきなり引越してしまい、なんのための女だからならなかった。

こんどは良い人なら男でも女でもかまわないと思ひ、心あたりの知人に片端から聞いてみた。そしてできれば「友人」が入ってくればと、はじめとは反対のことを願っていた。だが、貸室が出来た時に、なぜ知らせてくれなかったのかとあちこちから言われたのに、いざとなると申し合わせたようにこの間引越したばかりとか「勤め先が遠い」という人はかりだった。

かなりの知り合いがあっても、こんな時に

気安く頼める人は、限られた友人きりないし、ましてすぐに引越して来てくれる人など更にいらないことをいままさら私は気がついた。しかし運良く友人が来てくれれば、時には一緒に食事をしたり、おしやべりをして過ごすこともできるだろうし、そんなことを想像してみると、私はもうきうきうしていた。

近所に友人はいないし、何日も話をする相手もなく毎日机に向って、書くことだけに明け暮れている私である。時には誰かに会いたくて、たまらなくなっても互いに時間ももなく、つるも電話ですませてしまいう殺風景さだった。そんな毎日を送っている私に、いままでの緊張が一時に緩んでしまったかのように、私は友人の誰かと近くに住みたくなつたのだ。

だが何日待っても頼んだ人からは、思わしい返事はなく、次第に楽しい想像は実現できないことが分つてくると、私はまた幹旋所に頼むことにした。

落ち着いて考えてみると、大切な友人と万一にもおもしろくない事でも起つては、あとが寂しい思いをすることになるし、それに近くに顔を合せて暮せば、お互いにあらも見えるだろう。やはり「商売」と割りきつて考えようと自分に言い聞かせ、幹旋所から希望

者を案内してくるのを待つことにした。

幹旋所は頼めば翌日にはもう決まつてしまふぐらい、部屋を捜がしている人が多いらしいのに、こんどは幾日たつても一人も案内して来ないのだった。

空いた部屋に入つてぼんやり考えているうちに私はふと、森茉莉さんが仕事部屋に使わないかと思いついたのだった。

森茉莉さんとは、最近急に親しくなつて、なにかの会合の帰りなどにいくら話しても、話は尽きなかったし、家に遊びに来ると終電迄はまだ時間が足りない状態だった。

家が建つ前から一番陽当たりの良い部屋に入ることを勧めたのだが、八年も住み馴れたアパートを動くのは嫌だといったのである。

茉莉さんを心配して室生犀星氏は、ぜひ私の所へ引越さないといひ、天井から足が出たほどのアパートに一人暮しでは健康にも悪いし、急病の時にはどうするのかと、いくら言つてくれても、おいそれと動かない蕊の強さのある人だった。

だが、仕事部屋に通うのなら、家も近いので、きつとすぐに決めてくれるに違いないと思つた。アパートではうるさくて書けないという茉莉さんはいつても、切り日が迫つてくると見えても気の毒なくらいに、あつち

夏日抄

美堂 正義

頭の上から蟬時雨

こちらの樹の梢から

あちらの樹の枝から

短い夏に追ひ立てられるやうに

激しく燃える生命

空に鏝められ 岩に刻まれ

果ては空に昇つて一片の雲となり

ゆうべ金のやうに鋭く輝く

北京

田中 克己

こつちの喫茶店を捜して歩き、時には新宿まで通つて行くのだが、ようやく気がいった所が見つかると、こんどは人が尋ねて来て邪魔されるので喫茶店探しにはいつも骨を折つている人だった。

翌日、茉莉さんにさつそく私の名案を言うと、案に反してまただめだったのである。せつかくだがどんなに苦勞をしてもコピー代はかかって喫茶店でなくては、書けないというのだった。

私はまたがっかりしていると、幹旋所から一人の少年を案内して来たのである。

(つづく)

岡田家は電々公社につとめてゐる主人のほかに、夫人と三人の嬢から成つてゐた。長女は私の妻の弟と去年結婚したが、私はその披露の席に出たほか、実は天津にゐる義弟にこの縁談がもつて来られた時、花嫁候補の出身学校や勤め先への問合せは私がした。良いとなつてから義弟の代りに義母義姉と本人を見に行つたといふ因縁もあるので、厚くましく入

りこんだのかもしれない。しかし私は実は何かの役に立つつもりで、男手の少いこの家に入りこんだのだ。それでは役に立つだらうか。私がそれを自省してみるにはすこしひまがかつた。

私はまづ新華街を下つて和平門をくぐり、たぶん広安門大街にあつた露店市に行つた。服装をととのへるためである。帽子と大掛兒と鞋くつとが私の手持ちの金で買へた。大掛兒といふのは単衣ひとへの長い着物で、これから冬になるが、下に洋服を着てゐてもよいのである。持ち金が少いので、もとより古着である。

そのあと少くなつた在り金の補充に、私は軍隊からはいて来た革の長靴と上衣やズボンを買つた。かうして服装と小遣錢ができるので、私は外へ出かけた。まづ行つたのはこれから毎日の例となるが新聞の立ち見である。どこか忘れたが、さう遠くないところに掲示場があつて、そこへ行つて主な記事を立ちよみすると帰つて来て報告する。日字新聞はたぶん東亜新報といふのがあつて、毎日配達されてゐたかと思ふが、ひよつとしたらもう配達がとまつてゐたのかも知れない。ともかく市政府の管理下におかれていたことはまちがひなく、知りたいことは何も書いてなかつた筈である。それゆゑ私は岡田家へ、北平日

報、新華報(といつたと思ふ)などといふ中国新聞の報ずる日本関係のニュースを伝へた。「広島には今後百年間草木が生へない。」「日本天皇は皇太子に譲位することとなつた。」「日本は大凶作で人口の三分一は今年中に餓死する。」これらの記事が麗々しく掲げてあつたのを私はそのまま伝へたと思ふ。勤め先の接収が終つて、終日家にゐるやうになつた岡田氏をはじめ一家は黙つて、私の伝へるニュースを聞いてゐた。

隊の時の上官である藤中尉と黒田中尉がそろつて訪ねて呉れたのは、すぐだつたと思ふ。主として藤中尉がもと陸軍少佐だつた岡田氏に士官学校の後輩として敬意を表したのが、岡田氏もこれからは兄弟として万事指導を仰ぐといはれた元二等兵の私も、ともども指導は重荷と感ずる顔をしたので、二氏とも早々と引き上げた。そのあと答札に私が訪ねると藤中尉は麻雀の最中で、ほとんど話もできなかった。除隊後の職も仕事もないこの元中尉にとつて、ひよつとしたら麻雀は生計の途だつたのかもしれない。ともかくせまい部屋と赤ん坊を抱いた奥さんを見たあと、私も早々に引き上げ、そのうち二十年近く会はない。

小林伍長は私の方から訪ねて行つたのだと

思ふ。東城の東総布胡同にゐたとおぼえてゐる。ずいぶん遠いところまで歩いてゆくと、喜んでくれて、帰るとき、同居してゐる中野君といふのに何か耳打ちすると、中野君はうなづいて五千元だかの紙幣を私に渡した。私が辞退すると、中野君は「出す物は取れ、出さぬ物は欲しがるな」と教へてくれた。これはその後ながい間の私の処世訓となつた。

小林、中野両氏の住居へはこれからも訪ねたが、ある日のこと二人は天津行の相談してゐた。非常に危険だから慎重に、というので相談してゐるのである。それでふと思ひついて、私は天津にゐる義弟のところへ電話をかけてみたら、と岡田家にすすめた。通じるかしらと危ぶみながら、次女の節子嬢が市外通話を申しこむと、まもなくかかつた。家なかにはがる受話器をとつて楽しさうに話すのが、私のせいだと嬉しかつた。近々に初孫が出来るはずなのに手伝ひにもゆけない、おしめも作つてあるのに、となげくお母さんの話をきいてゐる中に私は決心がきまつた。おしめをもつて天津へ私がゆく、といふのである。小林伍長らが心配してゐる位だから、もとより決死の覚悟である。

またかと思はれるから決死の覚悟の説明をすると、このころ北京の日本人はしばしば襲

ことは電話で証明されたとしても、北京よりまだ治安が悪いにちがひない。も一つの挿話はアメリカ兵に關するもので、「天津で日本人の将校がみちでアメリカ兵に会つた。アメリカ兵は顔に唾をはきかけ、それからなぐつた。日本将校はしづかに唾をぬぐつてから腰の刀をぬいてアメリカ兵を一刀に切り殺し、おもむろにその場で切腹した」といふのであ

る。いまとなつては嘘のやうだが、私は半分本当にして聞いているのである。ともかく覚悟がきまると、私は岡田夫人からおしめをもらひ、早朝、北京駅に出かけた。切符売場にならんでゐると、よこにいる男が天津行の切符をもつてゐて、売つてくれた。日本のダフ屋といふのは、このまねをしたのか、それとも治安、経済状態が同じになれ

爽涼歌

堀之内 歴

急に空氣のふるえが
爽やかに伝わつて来た
俾が広いほうの街路へ出たのだ
幅員六十米 大通りのまんなかを
二列の丈高い銀杏並樹がはしり
土用夕陽が樹木の葉を
一まい一まいに洗い立て
緘かくふるえる軽い金屬音が
そこから流れているのだった

陽は傾くと大きく手招きをする
銀杏たちは嬉しげにチカ／＼し
荒野のころに戻っているらしい
昼は囚われた重いしげりが
このとき路上二帯の空氣を揺つて
なにか奏鳴をしている
とおい爽涼歌だ
ここにも
ひぐらしの哀音が欲しいと思ふ
俾を停めている

一九六一・七・二九

撃された。北京神社の神殿で神官の娘が凌辱されて自殺をした、といふのは噂話、それも悲劇を好む日本人の創作かもしれない。しかし扉をしめた日本人の住宅へ開門を迫り、開門すれば制服制帽の軍人たちが乱入して金めものを強奪する事件は頻々として起つた。私の隊に一寸の間入隊し、除隊を許されて帰るとき、眼鏡のつるが折れて紐にしている私にと、自分の眼鏡を置いて行つた近代科学図書館の副館長も襲はれてけがをしたと聞いてゐる。小林のところへゆくみち北京飯店の前を通ると、ちやうど行きあつた丸腰の日本兵二人は非常な悪意をこめた嘲罵をあげせられた。私は通りすがりに低声で「御苦労さまです」とささやいてから過ぎた。

私自身はさういふ眼にあはなかつた。さきほど書いた眼鏡のつるがまた折れて眼鏡屋にゆく。「これがかへてくれ」と自分でも上手でない北京話でいふと掌櫃的はしばらく私をみつめてゐて「日本人だつたのか」といつてから、主人に説明し、ふたりで哄笑してつるをかへてくれた。ただし汽車に乗り、天津へゆくとなると覚悟がある。天津関係の挿話として北京で伝へられてゐたことは「この間、日本租界で暴動があり、ずいぶん死傷者が出た」といふのである。義弟のつづがなかつた

ばどこの国でも必ず起る現象なのか、私にはわからないが、おかげで行列を解放された私はすぐ改札口を通つて列車の方へ急いだ。するとどこから警官が出て来て、「待て」といひ、私の包みを指さして「あけて見せろ」といふ。人相風采ともに怪しいと見たのである。私はすなほに包みをすぐ開けたが、ふと思ひついて「我是日本人(わしは日本人だ)」といつた。警官はこれをきくとしらへるの止めて「通れ」といつた。

天津と北京の間は二九キロあるのだが何時間かかつたらう。この車中はほとんど物をいはず、ただ売りに来た弁当や甘栗を買つたほか、湯気で曇つた窓に隣席の少年が落書きした文字が「原子炸彈」の四字だつたことをおぼえてゐる。

天津の地理は暗記して行つた。総站(中央停車場)からは日本租界が遠いといふので、東站で下車し、市電に沿つてゆくと、いけない、折から天津に来るといふ国民党の大官(何応欽?)を出迎へるため小、中学生が国旗をもつて整列してゐる。私はその列のあとを無言で数キロくぐりぬけて、やつと日本租界に到着し、宮島街の義弟の寓居に辿りついた。義弟は元気で、終戦直前に召集されたが終戦とともに帰宅し、これまで勤めてゐた学校

が休みとなつたので、これも終戦直前に満洲へ行ったまま院長が帰つて来ない歯科医院を友人の松井君とやつてゐるのである。日本人には一切の營業が禁止された中で医業だけは許されてをり、しかも患者は日本人、中国人をあはせて千客萬来だといふ。

私はおしめを届けて臨月の義妹を見舞つたあと、中学以来の親友西川英夫君を訪ねた。西川君も元気で、奥さん子供とも食糧難の内地とちがひ、一向に苦勞のない様子である。ただ会社が接収されたので、中国人に引きつぎをしてゐるが、それがまた私利を主としてゐるので、非常に困るといふ話をきく。治安が悪いなぞうそだつたと判ると、私は用事がなくなつたわけである。も一人高等学校で野球部をいっしょにやつた山内四郎君がある

それを見つつけよう。天津で二日ほど過したあと、私は北京に帰つた。今度は大掛兒をぬいで、満洲華北で戦時中に日本人の着た協和服といふのをつけ堂々と駅に乗りこむ。列を作つてゐるのを、怪しんで見ると、警官がまづ訊問してゐる。仕方なく私も並ぶと、「あなたは日本人でせう。」といふ。もとよりさうだと答へると、「すぐわかりますよ」と得意氣で、「旅行免状もつてますか」ときく。「もつてない」といふと、「通れませんが」とあごで指示する。なるほどそこにはアメリカ兵がゐる検査してゐる。順番になると、荷物をあけよといひ、あけて見せると、「これは何だ」ときく。義妹から預つて来た妹たちへの贈物の布である。私はとつさに「私の妻の布」と英語で答へた。うそもあざやかなものである。アメリカ兵は「きみは英語話せるね」といって、パスさしてくれた。

の長男が生れたのは、一週間ほど後だつたと思ふから、これが十一月の初だつたのである。(半自叙伝)

七月五日。初めて北海道に旅をした。空からいつたので、途中で松島の上を飛び、大正時代を通した仙台を雲の影に探した。幽玄な十和田湖を翼の下に眺めてゐるうちに津軽富士の姿を発見した。その手前に高等学校時代を送つた弘前らしい城下町を見降した。アインシュタインの原理をそのまゝ、地で行つたやうに、僕は別一列若返つてゆくやうな錯覚に捕はれてゐた。樺方志功博士と十八才の日に出会つた合浦の海辺を飛んだ時には、高等学校の學歌をくちさきんでゐた。やがて僕は札幌のクラリク先生の像の前に垢で光つた黒サージ服の群と一語に行んでゐたが、それは伊丹空港を立つてから四時間後の勘定となる。その夜僕は中学時代を過した大坂の伊丹港に舞ひ戻つたのだからまさに三十数年の時空を光より速く飛んだわけである。

七月一三日。島田三先生の記念会に上京してゐた森死氏がその版途に立ち寄つてくれた。純真な森氏は十代の中学校時代そのままの若々しい情熱を持つてゐた。彼も僕も頭髪は薄くなつたが、まだ幸ひ眞髪を楽しめるほどの元氣に思はれてゐる。

果樹園六十七号 昭和三十六年九月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価三十円

果樹園 第六十七号(毎月一回一日発行)
 昭和三十六年九月一日発行
 池田市野町一六八
 編輯者 小高根二郎
 大阪市東区桑津町五の八
 印刷所 元市印刷株式会社
 池田市野町一六八
 発行所 果樹園社
 定価 三十円

果樹園

第68号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎
 ヘリック詩抄 森亮
 朝の歌 美堂正義

ほっそりと 堀之内 歴
 全集追補書簡 伊東静雄
 Echo 吉本青司
 北 京 田中克己
 はまなすに寄す 浅野晃
 編輯後記

果樹園六十八号 昭和三十六年十月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社

定価三十円

詩人、その生涯と運命

作品と書簡から見た伊東静雄(五十一)

小高根二郎

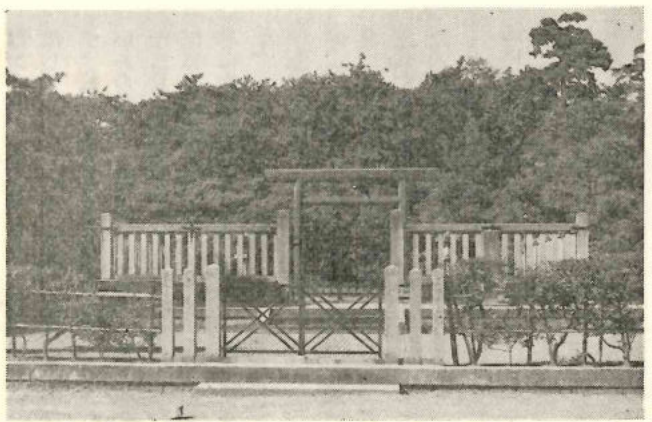
又、批評は解説ではなく、解釈でもなく、立言だ……と伊東は言つてゐるが、その趣旨は、単なる客観的、或ひは主観的分析、ないし説明といった限界を越えて、その内奥に述志のころばへを秘めてゐるべきだといふほどの意味であらう。その述志の構想の雄大さと決断の程度が批評家の尺度であるといふ意見である。伊東は詩は箴言であると言つてゐたほどだから、批評は述志立言であると考へたとしても別に不思議ではない。が、この考へ方の底には、保田与重郎の影響が若干感知

されるやうである。この影響といふのは、伊東の眼に映じた理想化された批評家与重郎像だつたのではあるまいか? 「戴冠詩人の御一人者」で透谷賞を受賞した若冠の批評家保田氏には、なにかさう感じさせる風々とした雰囲気を、その行文に漂はせてゐた。或ひは、漂つてゐると周囲の者を錯覚させるやうに、時の切迫した氣息が手助けしたのである。

保田氏の著「日本の橋」が東京堂から去月二十七日に改版上梓されたことも、伊東の批評論の成立に一役買ったのだらう。そこに収録されてゐる「誰ヶ袖屏風」「日本の橋」「河原操子」「木曾冠者」の難澁で鷹揚な文章から、伊東は伊東流に「英雄と詩人」を感知し、彼の構想と決断とを批評家の規模だと典型化したと思はれる。事実、保田氏は大正期の文

化文物は「臆病」だと評してゐた。

「大正期の文化文物のすべての成立する因由であり、又文芸の発想であるものが、すべて「臆病」である。外に出る文章でなく、内攻する文章である。決意の表現でなく、



北三國ヶ丘の伊東家の東園
 反正天皇陵(百舌鳥耳原北陵)

条件の云ひ方である。彼らは理論の統一整合を専ら關心し、現実のもつ矛盾と混沌の表現に極めて臆病である。その文化のイデオロギイに於ては、詩人と英雄の存在は認められなかつたのである。

(昭和四年「ゴキト」二月号、保田与重郎「文明開化の論議の終焉について」)

こゝに、保田氏は昭和期の「詩人と英雄」を待望し、「決断」の精神を鼓吹したわけである。そして更に、「我々に必要のものは生きてゐる大思想家と大詩人である」(昭和四年「五月号」保田)と決断して、生きてゐる大詩人の例記のやうに、田中克己氏と伊東静雄の名をしるしたのである。

この事實は、必ずや伊東に作用して、保田的な述志と構想と決断とを批評家の尺度にしたであらうし、伊東自らを現存の大詩人の一人と自認させるのに充分であつたであらう。しかるに四ヶ月後—九月一日の日記には、伊東は独ボ開戦のニュースに関連して、「自分の頭脳では果して戦争に堪へるだらうか」と、自らの「詩人と英雄」ぶりを危ふんでゐた。つまり、伊東は保田の眼鏡になつた大詩人でない事實を示してゐた。近頃、橋川文三氏は保田と伊東を比較し、「伊東静雄の場合、戦争の遂一の過程に膚接したその関心のもち方は、保田と比べては

るかに素樸であり、一喜一憂の大きな振幅は傷ましいほどに鮮かである。」

(昭和三年「文学」八月号、橋川文三「日本ロマン派と戦争」)

と言つてゐるが、この評言は適切である。

伊東は先の書簡の五日後、次のやうに論旨を布衍してゐる。

「お手紙有難う。前の私の手紙の書き方が拙かつたせいもあつて、誤解されたらしいです。深く蔵せよといふ考へでは断じてありません。啓蒙、解説は不要であるといふつもりです。芸術は啓蒙も解説も出来んと思ふのです。評論の目的は、愛する対象(今の場合立原、中原)と共同戦線を張つて、世の俗人共の傷をあげて怒らせることだけと思ふんですね。その目的のためにはあなたの論文はいくらか、あなた自身が立原、中原ととりくみすぎてると思ふのです。評論することが少しあなた自身の問題のためでありすぎると思ふんですね。

こんな言葉はさらひだが、外にいい言葉知らんのでやむなく使ふと、苛烈な文明批評であつてほしいですな。この辺少しあなたの想像で補つてよんでみて下さい。言葉不備ゆえ、この点、感想すぐ書いて知らせして下さい。啓蒙は絶対あかんですね。私の

ず。

次は「約束」これは少しきざつぽく、又据りがよすぎるし。

次は「夜の葦」これはいんきくさい。とにかく何か智恵貸して下さいな。二十七日 伊東生

ヘリックク詩抄 (十)

森 亮

怠惰のいましめ

君たちがいいお説教を聞けるやうに
ひとつアポロさまに頼んで耳を引っ張って貰はうか。

そもそも女の髪の毛をいろふのはよろしく
ない、

善き毛の一すぢ一すぢが仕掛けた毟だから。
頬や眼やくちびる、それに澄まし込んだおとがひ——

みんな落し穴で、愚かな連中を落し入れよう
と待ってゐる。
腕も、手も、からだぢゆうの何処も彼処も
が、

富士様

(昭和四年一月二七日、堺市北三国ヶ丘より、
京都市吉田上大路小沢方、富士正晴宛、封書)

伊東は富士氏に、芸術は啓蒙も解説もできるものではないと言つてゐる。しかし、伊東は私に対しては、詩人には解説者が必要だと

世の男たちを捕へるための網であり、手かせであるが、

取りわけ狙はれるのは物ぐさの輩だらう。
仕事に追はれて暮らすがい。さうすれば
こんな厄介な物にからまれないで日々がすごせる。

若年からこんにちまで嫌と言ふほど見て来たが、
恋にうつつを抜かすのは暇で退屈してゐる
男のやる事よ。

「怠惰のいましめ」(一四七番)はラテン文学の色濃いものである。アポロが人の耳を引っ張つて傾聴を求めるとはウェルギリウスの「牧歌」第六篇に出てゐる。但し、その場合はアポロ自身がしゃべることになつてゐるが、ヘリッククはアポロを単に耳を引っ張る役に使つてゐる。又、このお説教の中核である「仕事に追はれて暮らせば戀愛で憐むことはない」といふ思想はオウィディウスの「愛の療法」に由来するものと考へてよからう。

考へては。

* 立原の作品、仰せの通り、一寸送るのは大へんですから、かんべんして下さい。然し一月になると河出書房から選集が出ます。私も同じくそこから出るので。といふのは、今度河出書房で現代詩集三巻を十二月から予約販売の計画、各巻五人づつ全部で十五人の詩集、私は立原と共に第二巻に六十頁入るのです。おかね百四貫ひます。

全三巻十五人の詩人は、高村、萩原、三好、丸山、宮沢、田中冬二、中原、立原、北川、高橋新吉、金子光晴。蛙の詩人(名忘れた)——草野。小生、外二人忘れました(菊岡、蔵原)

それで、その題が要るんですがね、今月中に考へてみてくれませんか。間に合ふやうだつたら速達で知らせてくれませんか。前の「従順」は少しモラーリッシュな臭気をおぼえましたので、一寸気になります。然し音調や字体は大へんいいと思ひますね。

私は「光輝」といふのが大へん好きですが、これはランボオの詩集の名ゆゑ一寸でれる次第。

次に「反響」これは反と響とが平均とれ

言つてゐた。年少の友二人にまるで反対のことを言つてゐたわけである。それとも、芸術の方は解説できぬが、芸術家の方は解説できる……とでもいふ論理だらうか? いや、教師渡世十年。充分ひとをばかす古狸になつてゐた伊東は、人を見て法を説いたのだらう。

又、立原の作品を送るのに大変だからかんべんしてくれと言つてゐる。詩集「萱草」に「曉と夕の詩」ともに楽譜風な大型なので郵送するに不便だつたからである。その代り近く出る河出書房の「現代詩集」(昭和五年)を参考にしてくれと言つてゐる。その第二巻に伊東は立原と共に収録されることになつてゐるのである。その題名の選択に書簡の末尾で富士氏の応援を求めてゐたが、仮題「従順」

「光輝」「反響」「約束」「夜の葦」の五つの中から、上下の字が不均衡であると伊東が評した「反響」に落着いた事情については、これは富士氏に訊ねてみねばならぬ。といふのは、その頃から私は伊東に全く会つてゐないからである。今日はずまびらかにすることはできないが、伊東自らが或ひは参割してゐたかもしれないと思はれた或る種の計劃に、私は参加することを拒絶したからである。伊東全集の刊行で私は初めて彼の日記を読む機会をえたが、昭和十三年十月十八日の記事を見

て、その計劃にはたぶん伊東が参劇してゐたに相違ないと確信するにいたつた。とまれ、その拒絶は、私を伊東に会ひにくくしたのである。

その年の歳末、私が青春を住みわびた大阪を去つて京都の宇治に移住した。昭和十年の歳末にも西成の伊東の家の近くのアパートから豊中に遁走したことがあつたが、今度の場合は転職も兼ねてゐたから、より徹底した遁走であつた。かつては伊東の影響からの遁走であつたが、今度は詩から散文への遁走といふ意図も含蓄されてゐた。がさつな大阪のリアリズムの境涯から京都のもつロマンチズムの世界に陶醉する意図だつた。勤め先は京阪電車から宇治橋を渡つて右、堤防下に十萬坪を占めて建築されてゐるN化織会社の工場だつた。そこで私は、広告作成とは打つて交つて寄宿舎管理の仕事を担当することになつたのである。

明けて昭和十五年元旦、伊東は「文芸文化」の清水文雄氏と富士正晴氏に、進行中の詩集「夏花」に關連して、次のやうな書簡を送つてゐる。

「お葉書有難うございました、本、きれいな装幀になるさうでよろこんでゐます。紙

てゐた。一月中旬附書簡で、「伊東さんの詩集早く出したい」と清水氏に催促してきたし、二月三〇日附書簡では、「伊東さんの詩集のこと昨日出した手紙にも書いたが、早く見たい。」と、まるで伊東恋ひといった心境を書き送つてきてゐた。

伊東論をすでに四月前に執筆してゐた富士正晴氏も待ち侘びたやうで、時に督促状を出したらしく、次のやうな伊東の返事がある。

「夏花」は来年早々です。いつもいつもすみません。

又その内電話します。

「山の樹」の西垣君お会ひしたがつてます。」

(昭和十五年一月一日、堺市北三国ヶ丘より、大阪市鶴見橋富士正晴宛はがき)

この書簡の末尾の西垣君とは伊東の教へ子の西垣脩氏(現在明)である。住中時代から伊東は彼をこよなく愛してよく町をつれ歩いたらしい。時には松坂屋横であつたか禁断の小料理店に連れてあがり酒を呑ましたこともあつたらしい。育ちがよく出来のいいすなりと伸びた少年。少しばかり悪徳の世界に誘惑しても汚染される心配のない彼を、こんな交際で愛玩したのであらう。まだ欲情づいてゐるない彼に嫁さんの獲得法も教へたらしい。自分の体験であると前置して、もしこれぞと思

も鳥の子をみつけると本屋さんから通知があつて、これも大へんうれしいです。カバーの文字の色については、特別に好みはございませんが、第一部を見分けるしるしが、仰せのやうにえんじ色にできましたら一層よからうと存じます。先日、第二校とどき

朝の歌

美堂正義

午前六時二十七分
ラヂオから鳥の声がきこえてくる
朝食を終へ お茶を飲みながら
澄んだ音色に耳を傾ける
葉ずれや 涙流のせせらぎも交るが
今朝は日本アルプスの録音
雪をかづいた山が眼に浮んでくる

かつて都会の雑沓のなかで
ひとりぼつちに突放された気持のとき
そつばむいてゐる街並
ほんやりと街角で周囲を見廻はすと
無縁の風景がゆつくりと廻転する
その時並木の枝で小鳥の声をきいた

不思議な思ひでそれを楽しんだが

私はいつも思ふ
あれは空腹を訴へてゐるのではないだらうか

あれは妻を呼ぶ声かも知れぬ

小鳥たちは楽しく生きてゐるだらうかと
自問自答する身についた習癖を
自分ながら厭はしく思つてゐる

いろいろな啼き声が遠く
それぞれの音程をもつ

自然の微妙さと複雑に驚くが
生きてゐる悲しみ

生きねばならぬ宿命

それらのうへにも苦しみはありながら
稚れないものの哀歎が
静かな茶の間の空気に流れてくる

はれた乙女があつたら尾行する。どこまでも尾行する。そして家を確認してから直接親に申込む。僕はかうして日本一うつくしい嫁さんを手に入れた。西垣もさうするがよい……。酔眼を据えて伊東は、こんな軌道外れの教育まで担任したやうである。黒マントを羽織り

、三四日前返送したところ。 (三字不明) あなたにお面倒おかけしてすみませんでした。深くお礼申します。第三校も是非みたく存じ、本屋さんにもその由おねがひし (二字不明) ましたが、これは来年になるのでせうかまだまいりません。お言葉の通り、正月早々に本出ればかへつて (二字不明) 記念にな (二字不明) がと思つてをります。田中君には只今から手紙かいてすすめてみたいと思ひます。その結果は近日中に御返事します。」

(昭和十五年一月一日、堺市北三国ヶ丘より、東京市神楽谷、清水文雄宛はがき)

伊東は詩集「夏花」の装幀は自分の画で飾つた。黄と紺の四つ菱を配した装画で、あまり趣味のいいものではなかつたが、彼が生涯に持つた四冊の詩集中……自画で飾つたこの詩集の装幀が一番気に入つたものだつた。末尾に田中君云々とあるのは、文芸文化叢書の一冊に田中克己氏の詩集も加へたいといふ希望が清水氏から出て、その勧誘役を伊東が買つてたのである。この結果、田中氏の第二詩集「大陸遠望」が「夏花」について刊行されることになつた。

余談になるが、用紙の入手難によつて遅刊してゐる「夏花」の刊行を、中支戦線にある「文芸文化」の主宰者蓮田善明は待ちこがれることになつた。

、高校ダンディズムの蛮風にも染まず、きちんと靴を穿いて伊東にお共をしてゐる西垣氏に僕は出会つたことがある。難波近く御堂筋寄り、飾窓に中原中也の原稿や志功版画を陳列してゐた十二段屋の店頭で、あつた。

こんな西垣氏は松山高専から東大国文科に進むと同人雑誌「山の樹」をやつた。「四季」と「ゴキト」をこきまぜたやうな誌風だつた。同人は鈴木亨、小山正孝、沖広一郎(芥川比呂志)、中村真一郎、白井浩司、加藤周一、牧章造氏等で、当時西垣氏はその中でも有力な同人だつたのである。伊東はこの誇らしい教へ子を若い友富士氏にも紹介したかつたのである。

詩集「夏花」の刊行は遅れてゐたが、富士氏の「詩集「夏花」をめぐる——伊東静雄論」の第一回は、刊行予告のやうに「文芸文化」一月号から連載されたのである。この富士氏の好意に酬るやうに、富士氏に捧げた「小曲」——詩集「夏花」では「砂の花」と改題——を伊東は同誌に発表した。

砂の花 富士正晴に

松脂は つよくほつて

砂のご門 砂のお家
いちんち 坊やは砂場にゐる

黄色い つばの花 挿して
それが お砂の花ばたけ

地から二尺と よう飛ばぬ
季節おくれの もんもん蝶
よろめき継る 砂の花

坊やはねらふ もんもん蝶

その一撃に

花にうつ俯す 蝶のいろ
あ、おもしろ
花にしづまる 造りもの

「死んでる？ 生きてる？」

松脂は つよくにはつて
いちんち 坊やは砂場にゐる

第二詩集「夏花」

この砂場は恐らく第五十六号に掲載した写

ほっそりと

堀之内

歴

ほっそりと しかしつよく

どこまでも延びていようとす^{みきり}る汀は
そんなにも老けている 者であった

おどろの寝ぐらをぬけ

わたくしはレイ明の汀で目をす、ぐ
そして 一日の困バイは
ゆうべの汀に そつとこぼす

海水浴のすぎ去った浜は

松のそ林にシオ辛トンボだけいる
まひるま 海の蒼空の暗さは

忍びよる戦禍のかけではないか

汀はしかし老いて美しいものであった

一九六〇・八・三十

真の松林にでもあつたのだらう。人形を抱いて去りたい表情のまあちやんに向つて、伊東はおいでおいでをしてゐた。このまあちやんを坊やに見立て、伊東は「砂の花」を制作したと想像される。この詩を富士氏への献詩にしたについては特別内容的な意味があるわけではない。故立原道造への献詩「沫雪」の詞書「久振りに偶々成つたこの歌を、わが記念に、故立原道君に捧げようと思ふ」ほどの意味、つまり、久振りに偶々成つたこの歌を、わが「夏花」の記念に、富士正晴君に捧げようと思ふ……で、あつたのだらう。恐らく、この「砂の花」は、昨年八月の軽井沢行で制作され、富士氏の伊東静雄論と一緒に、編輯者の清水文雄氏に手渡されてゐたと想像される。かく私が想像するゆゑんは、全集発行後に発見された清水氏宛書簡に、軽井沢招待の礼に原稿を滞在中に書く旨が約束されてゐるからである。

「原稿。御返事も上げずに居ました。このごろ学期末にて殺人的に忙しく、まだ何もかいてゐません、軽井沢に行つたらお礼のためにまきつと書きます」

(昭和十四年七月一九日附清水文雄宛 封書の一部)

さう言へば、「砂の花」は従来の思索的、或ひは理想的な作詩法と面目を異にして、は

した。夜中だから静かにしろといふ小言をいたゞいて階下から戻ってきた原野氏に、おふくろ興奮しよつたんやナと伊東は放言して、原野氏は二の句がつけなかつたことがある。年寄夫婦を木崎湖畔で怒らせたのも、原野氏宅での前例のやうな事情であつたかも知れない。伊東、中島ともに死んでその事実を質しようもないが、これは私の妄想以上の確率がありさうである。

〔備考〕

昭和十三年一〇月一八日の日記

「栗山君から通知あり、蓮田君応召大阪駅通過をきき夜十一時特急に梅田にて送る。りつ小高根君に行けど留守なりしとして駅に來り、共に送る。夜十一時まで皆で風月にて茶のみ、おそく飯る。この頃商店法にて普通の店は十時、飲食店は十一時迄のきまり也。」

私の記憶によると、夜ニユース映画かなんか観て飯つてくるとりつさんの置手紙を手渡された。蓮田善明氏が応召して大阪駅を通過しますので見送らせませんか……と書いてあつた。但し、何時に通過するか書き渡らしてあつた。私は送るに送れずくやしさに舌打ちした記憶が今に残つてゐる。

なはだ即興的であり童謡的な即情性が基調となつてゐる。この詩の雰囲気には、久しぶりの心友達の会同といふ、すこしはしやぎ、同時に思ひ上つた情緒が手助けしたか？ と想はれる。真面目一徹な清水氏や栗山氏でさへ、斎藤清衛先生の留守を襲ふと、押入に愛蔵されてゐたビールの列を発見するや、えい！ やつつけてしまへ……と平らげると、空瓶に銚をし直して元の通りにならべておいたヤンチャもやつてのけたとのことである。伊東と中島が夜つびいて騒いだかどで茶屋の老夫婦と喧嘩したことは既述した。夏休。青春への借別。西欧と東亜に燃え上つた戦火に奪取されぬうちに、余り少いレイジユアを築きもうといふ抵抗もあつたに相違ない。伊東は「砂の花」の制作過程で例のごとく中島に朗読を聞かせたにちがひない。詩ではまき子ちゃん坊やに仕立て、ある。それは男の子を欲しがつてる伊東の潜在欲求の現れだと中島は喝破したことだらう。伊東はその中島の評言を契機として、まだ童貞の彼のために、得意の性教育を一席やらかしたかもわからない。事実、東淀川の上野栄二氏宅で、嫁を貰ふことになつた青木敬磨のために伊東は性教育をほどこしたことがあつた。あまり馬鹿笑ひと騒ぎが激しいので、階下から原野氏の母親が注意

全集追補書簡

清水文雄、安田翠生氏宛

伊東静雄

昭和十四年

七月十九日(堺市北三国ヶ丘町より、東京都世田谷区祖師谷二ノ六六、日本文学の会、清水文雄宛(封書))

清水文雄様

○軽井沢に來るやうにとのお招き、うれしかつたです。是非参りたいと思ひます。栗山池田両君とも打合せ、その指図に従ひます。ゆつくり涼しく、色々お話しませう。委細は面談にゆづります。

○斎藤先生にもよろしくお礼御伝言下さい。わたしは東京にも一、二日出ようと思つてゐます。

○原稿。御返事も上げずに居ました。このごろ学期末にて殺人的に忙しく、まだ何もかいてゐません。軽井沢に行つたらお礼のためにもまきつと書きます。

○とにかくお会ひした上で 伊東静雄 十九日

八月二日〔塚市北三国ヶ丘町より、東京市世田
谷区祖師谷二丁目六六、清水文雄宛(はがき)〕

早速中島君に行き、すゝめましたところ、
皆様の御厚意全くうれしく感謝の外はないと
大へん／＼喜んでみました。同君は世なれぬ
人にて独り旅の出来ぬやうな柄ゆえ、この
機会一入うれいのでありませう。わたしも
うれしく存じます。栗山君とよく打合はせて
参りませう。委細お会いしてから

八月二日

伊東生

昭和十九年

十一日〔塚市北三国ヶ丘町より、豊中市新免
安田章生宛(封書)〕

お手紙ありがとうございました。お噂はか
ねがねよく家森さんに承つてをりました。ど
うぞこれを機会にお心安く願上げます。拙詩
集よんで下さいました由うれしく存じます。
本日たしかに御歌集樹木拝受いたしました
た。わたくしも近來専ら和歌に関心いたして
をります。作歌の機会はなくてすこしてを
ります。しかし「春のいそぎ」の根柢をなす
ものは、和歌に近いものではなからうかと自
分では考へてをります。御歌集にはよく街路

をお歩きになるお心持が詠せられてあります
が、拙詩集では家の中にじつと坐りこんでゐ
る自分の姿を多く発見し、それを思ひくらべ
てさつきからひとり面白く思つてゐたこと
であります。私はすでに三十九才になつてし
まひました。

私の歌の方のお師匠さんは、光平、諸平、
曙寛、秋成の諸先生であります。毎晩床には
入つてから、それらの歌を二、三首づつ読み
ますのが、このごろの唯一の勉強であります。

E c h o

吉本青司

この家の猫は誰に似たのか
空ばかり見ている
みどりの林のうへの
さわやかな藍色の空
朝の小縁にちよんことと坐り
こずえにはばたく小鳥たちや
チチツとはしる燕のすがたを
こくびをかしげかしげ追っている
庭の藤椅子によっかかり

中谷孝雄 著 梶井基次郎

定編 四二〇円
筑摩書房

振替東京一六五七六八

3
学校のおかへりなどもしお慰ございました
ら、住中にもお立寄り下さい。家森さんと一
緒にお話うかがふことたのしみにして待つて
をります。

三十一日

伊東静雄

安田章生 様

侍史

よみかへして、自分のことのみ書きました
こと気付き、まことに失礼な手紙になつた
と存じます。お歌についての感想はきつと
その内親しく書いていただく機もあらうと
存じ、わざとひかへた気味もございませう。
御諒承下さい。

註

- 一 安田氏と東大文同朋で住中の教諭。
- 二 安田章生歌集「樹木」、昭和十八年二月二五日紀元発
行所刊
- 三 奈良航空隊海軍教授。

北 京

(続)

田中克己

西川英夫君は北京にゐる高等学校の同窓の
名簿を呉れた。私の北京の仕事はこのひと
ちを見舞つてまはることと決めてゐた。私は
まづ日字新聞の東亜新報社を訪ね、編集の田
中治郎氏を訪ねた。氏は高校だけでなく、中
学でも大先輩である。出て来た田中氏は見る
からに憔悴した風で、中国人管理下の新聞記
事のむつかしさを話したやうに思ふ。私はそ
こそこにして退去した。これは切けやうがな
いからである。(田中氏はいま奈良の太和タ
イムスの社長である。私は昭和二十一年から
たびたび会ふ機会をもつたが、双方とも北京
については殆ど語らなかつた。ふしぎなこと
である)。

南長街

次に訪ねたのは仁谷正雄氏で、これも大先
輩である。もう勤めには出られない様子で、
立派だが薄暗い北池子のお宅に招じ上げら
れて、時間になると奥さんの手作りのじゃじ
や麵といふのを食べさせてもらつた(と思
ふ)。可愛い坊ちゃん嬢ちゃんがあたが、こ
の坊やがあとで「北京から北京へ」といふ本

夜空の音楽に傾倒する
この家のあるじにそっくりで
おもわずクスリと笑つてしまふ
こどもたちは△エコーVだという
あるじは勝手に△エコーVときめ
鼠はとらず夜になると
こっそり山の樹木にのほり
星ではない 小鳥をとらえ
そこらじゅうに羽根をまきちらす
こいつはいささか困りもんだが
器量の猫だ と少しは
ほめてやりたくもある

を出してはめられてゐるのを見た。富士銀行
のロンドン支店長を勤められたあと、本店の
営業局長をしておいでの時、私は娘の就職を
依頼にゆききいていただけだが、娘は受験者
中もつとも細い体でパスし、いま勤めて四年
目になる。仁谷氏はその間に重役になられ、
今年是他の会社に栄転された様子である。そ
の後お礼にも伺つてないが、北京以来のおわ
びを一度ゆつくり申しあげたいものである。
娘もそろそろ婚期である。退職したらかな
らずお伺するときめてゐる。

三番目に伺つたのは、一年先輩の袴谷太郎
氏である。いまと同じくビクターに勤めてお
いでだつたと思ふ。高校入学の時、剣道を指
南していただいたのをおぼえてゐるので、心
易く話したが「覚えないな」といはれ、しか
も帰りがけ、若干のお金を包んで渡されたの
には弱つた。自分がそんなに見すばらしかつ
たのを知つたわけである。この機会にお礼と
お遊びを申上げておく。

そんなわけで同窓の諸先輩は大体まあ異状
ないとわかるが、私の仕事はこの方面ではな
いわけであるが、これら先輩を訪ねるみちす
がら、私のことだから色々見聞もしてゐる。
いまでもおぼえてゐるのは、紫禁城の見学で
ある。私の寓居から遠くなくて、毎日のやう
にその前の大通である長安街を歩いてゐるの
だから、当然とはいへやうが、秋晴れのあ
る日故宮博物院と称せられてゐるこの清朝の
宮城へ入つてゆくことにする。午門と呼ばれ
る正門の左側に出札所があつて、入場料はさ
う高くなかつたと記憶する。入場すると見物
人はちらほらで、もとより日本人らしいもの
は一人もゐない。私は太和殿の前の石階をの
ぼる。多少の感慨がないことはない。清朝三
百年の間、弁髪(べんぱつ)の官人が早朝参詣のため通つ
た路だからである。殿前の階をのほり正面の

玉座に近づく。まはりにいろいろな物が陳列してあるが、私は康熙帝や乾隆帝などのことを想起して感慨さらに深い。たゞし陳列物の中で一番目をひいたのは、これらほるか十七八世紀の遺物でなくて、日本軍の降服の調印に用ひられた机と椅子とである。北支軍ではなくともより支那派遣軍の總司令官と蔣介石の代理との間で行はれた調印の時の物である。私にこのそまつな机と椅子をしばし目をすゑて見たあと、日本の敗北は歴史にのこつたなと歎息した。

これも長安街を歩いてゐた時のことだが、人だかりがあるのでぞいて見ると母子で口から泡をはいて倒れてゐる母親、それにとりすがつてゐる少年である。とりまいて見てゐる人たちは手をかすでもなく、ただ黙つて見てゐるだけである。少年は泣いてゐる。何だかうすら寒い日であつたし、服装もほろに近い私は黙つて見てをれず、ポケットをさぐつて手にふれた金を全部少年にわたした。それから足早やにその場を立ち去つた。ちつぽけな善行が恥かしかつたからか、それもある。しかし私の常識では、旧中国ではかういふ哀れな人に人前で同情を表はすことは、その不幸に責任のある人のすることなのである。私は日本人と知られやしなやかをおそれたので

ある。

実際、私は物さへいはなければ、そしてただ歩いてゐるだけなら絶対に日本人とは見えなかつた様子である。眼鏡屋の時もさうだったが、小林を訪門した時だつたか、まはり塗して朝陽門大街を歩いた。ちやうど煙草がきれたので露店で買ふ。中国の煙草は専売でないで、どこでも売つてゐる種類も多いうへに、値段はまちまちなのである。ものをいはいないわけにはゆかない。「この煙草いくらだ」。私は指さした。露店商は商品をとりあげて、しばらくして聞いた。「あなた日本人ですか。私の中国語よりは旨い日本語である。仕方ない。「さうだ」と答へると、「ものさへいはねば絶対わかりませんよ」とほめられた。相手は鮮人だつたのである。小林をたびたび訪ねながら、ほとんど話すことがなかつた。ただどうしても話さねばならないのは、中野君と相談したあと、私を彼等の先生のところへつれて行つたことである。先生のお宅は朝陽門大街の裏通で、三人はすぐなかへ通された。お部屋へゆくと、五六十歳の老人（と私は思つた）は三十歳の婦人とが向ひあつて、西洋将棋をさしてゐる。これが先生と夫人だつたのだが。勝負が一番すむまでそこに坐つてゐて、私は感激してゐ

答が出ないのである。

御返事にはならなかつたが、先生のこの宿題のおかげで、私は一つの方向に動き出した。

はまなすに寄す

浅野 晃

四つの瞳に
青い海が白い船を逝かせる
北道の夏は
無言の花矢を注ぎ
水脈を走らせ

砂丘のかけ
むらがる真紅の花は
かくはしくすこやか

濁つたものを澄み返らせる力が
いまも働いてゐる

わたしが出会つたのも
おなじ力が
あなたやわたしの中に働いてゐる

者

私は昭和六年大学へ入学の学科を選ぶ際、東洋史学科といふ特殊学科を選んだ。入学志願の数が多く試験を受けて入学を許された

そこでだつた

ながい別離がわたしらを捉へ
はるかな夜にさまよはせる、けれど
わたしらはここで
いつも出会ひそして結ばれる

わたしらの尽きぬ夏の日
渾には光あふれ
わたしらの時は出会ひ結ばれ
不滅の橋が架けられるとき
あなたの瞳は燃え
よろこびは湧きのほる

生きのかがり、のちの世まで
女王蜂の勇気を与えるもの
石狩の川口の
灯台のかけに花をつけた
やさしいはまなす。

た。敗戦国人として何たる泰然さと思つたのである。やがて小林は「田中と申し在隊当時の友人ですが、仲間に入れていただきたいといふので連れて参りました」と私を紹介した。先生は私を手みやげに持参した「神軍」「南の星」「李太白」の三冊をちよつとめくらねばり、「どういふわけでこんなものを書いた」と訊ね、私をまごつかせたあと、出身学校をたづねられた。

「東大です」と返答すると「東大といはず、帝大出はみな実行力がないのでね」といはい、しばらく考へておいでだつたが、やがて、

「それちや宿題を出しておかう。いいか。」「お前は何か。」答ができたらまた会はう。」「宿題といふか、公衆といふか、えらいものをあつげられたわけである。私はおもむろに一札して退席した。

私は何だらう。馬鹿だ、卑劣漢だ、虚栄心の強い男だ、かういふ自己反省の結果に申し上ぐべきか。それとも、私は人間だ、父だし、日本人だ、死すべきものだとのたぐひのお答で勘弁してもらへるだらうか。私はこの日以来いろいろ考へて、いまだに

。この年九月満洲事変勃発などもいくらか關係があつたのかもしれない。在学中は概ね遊惰であつたが卒業論文を書くときになつてはじめて勉強し、はじめて一生の目標を得たやうに思ふ。しかし卒業の年、昭和九年は不況で、十八人の卒業生中、就職したのはわずか三人、私は朝日新聞の入社試験を受け、千何百人の中、第一次合格六十人の一人とはなつたが、第二次に見事にふりおとされた（この時合格した三人の一人がいま歐洲総局長の高垣金三郎である）。ついで毎日新聞社の入社試験を受けると、また第一次は千何百人中の二番、今度は大丈夫かと思つたが、第二次では三十人か採用したのにその中に入れられなかつた。すべて青く細く、風采態度の揚らなかつたせいだと自分では思つてゐる。そんなわけで大学院入学を申出たところへ結核療養中の教師の補充として臨時講師に來ないかと、高校で野球部の先輩だつた清徳保男氏にいはれた。（この人はまれに見る清高な詩人肌の人だつた。京大の哲学科を出、禅宗をやり詩歌を作つたが結核で昭和十二年に歿した。遺稿ハンス・ドリーシユの「形而上学」の訳は私が清書し、天野貞祐博士のお力そへて岩波文庫となつたが売れなかつた、絶版となつたままである。この書の跋を書いた親友五十

木俣 国修 編集
長谷川 泉

人と作品 現代文学講座

全 十 卷

現在日本文学の立体的鑑賞！ 小説中心主義の殻を破り、現代日本文学を立体的にとらえ、文学史的体系をたてながら、あらゆる盲点と難点をことごとく解明した。学生と教師のための新講義

各巻 三 八 〇 円

明治書院

嵐達六郎氏も昭和二十年満洲で戦死して会ふことがない。

三ヶ月の期限内で気楽につとめてゐる中、夏休みとなり上京すると、秋以後もつづけて勤めよとの手紙をもらひ、大分煩悶したのちこれに応じ、同級生の唯三人の就職者の一人となつた。しかしいやいや勤めてゐること四年にして東京へ妻子をつれて上り、職のないの困つて詩集西康省を出し、そのあと先生先輩のお世話で東洋史関係の仕事をする事になり、職訳「北方ツォーイスの社会構成」と

果樹園六十八号 昭和三十六年十月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園六十九号 昭和三十六年十一月一日発行(毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

果樹園

第69号

詩人、その生涯と運命 小高根 二郎
遠い花火 上村 肇
耳 福地 邦樹
署名 吉本 青司

結 第二室 梗 美堂 正義
生 戸 堀之内 歴
貸 浅野 晃
ヘリック 詩抄 萩原 葉子
青木敬應の 偽りない生涯 三枝 康高
編輯後記 筒 宇野 浩二

詩人、その生涯と運命

作品と書簡から見た伊東静雄(五十七)

小高根 二郎

一月末、二月中旬になつても「夏花」は出ず、その遅刊の詫状が富士氏に送られてゐる

「お手紙二通有難う。今日は「夏花」出来るだらうと毎日待つてゐますが、まだです。然し大へん立派な紙がみつかった由で、まあまあ我慢してゐます。あなたにも御迷惑かけてゐるだらうと思ひます。しかし、きつと今月中には出来る筈ですからどうぞよろしく。お案じ下された通り、果してお手紙とどいた日には風邪でねてゐました

いふのを出した。勤の先のアジア文化研究所長白鳥庫吉博士は「卒業後十年までは何も書くな」との御意見だったので、安心して書かず読んでゐる中、太平洋戦争となると、とたんにマラヤ軍に徴用された。報道任務といふことであつたが、事実上はなんら仕事なく、南方の果実を十分くつたあと帰還し、もとの研究所に勤めてゐた。

戦況日に日に悪く、東京に爆弾のおち出すころになると本もおちおち読めなかつたが、十年間の学問は日本軍の戦火に脅かされつづけた中国の同年輩よりいくらかましとの自信はある(そのころは私も自信が強かつたことを読者は御記憶ありたい)。日本の東洋学を中国に置いてゆかうと考へついたのである。私はかう決心するとさつそく同志をもとめて北京市内を歩きまはつた。(半自叙伝)

編輯後記

八月六日、福岡工業高校の文芸部担当教諭・久保節男氏から伊東研究会が学校に来て、速早に研究旅行をした由の連絡をいただいた。伊東全集が契機となつて、各地に研究室や研究会が現れつつある実情は喜ばしい。この日大阪の三浦国男といふ未知の人からも伊東研究会に取組むのことで資料の照会に接した。その他、大阪河内長野の中村光行氏の一人照一第八号も伊東研究特輯号をだしたが、引き続きこの特輯を続けるらう。

八月二日、堺のソビエトの埋立の進捗で堺港の風景がすつかり変つてしまふ心配があるので、意を決して猛暑の中に燈台の撮影に行った。港頭の燈台はいつか川の傍りに変貌してゐた。反正、仁徳殿にも廻つたが、さすがにここだけは變つてはゐなかつた。

八月二日、河内長野の国立病院を福地邦樹君の案内で撮影に行った。元陸軍幼年学校の校舎であつた病棟は雑草の草いきれに荒蕪してゐた。伊東が腰をためた病室の窓辺に近く、此の幼木があつた。さう言へば京大時代の下宿であつた阿呆院雑蕪、寒此處にも此の幼木があつた。ひそかに花咲いて甘く咲く寒此處。私は伊東の幽霊にでも出會つたやうに炎熱のなかでひやりひやりとした。

果樹園 第六十八号(毎月一回一日発行)

昭和三十六年十月一日発行

池田市野町一六八
編輯者 小高根 二郎
発行者 小高根 二郎
大阪市東住吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

で、伊東から富士氏に譲られ現在は小久保実氏が所蔵してゐる「四季」第五十六号(昭和二六年三月五号)の茅野蕭々「覚める」を掲載してゐる頁にペンで書きとめてある。

小 曲

天空には 雲の 影移り
しづかに めぐる 水ぐるま
手にした 灯の いまは消し
夜道して来た 牛方と
五頭の牛が あゆみます
ねむたい 野辺の のこり雪
しづかに めぐる 水ぐるま
どんなに 黄金に 光つたら
灯の想ひ 牛方と
五頭の牛が あゆみます
しづかに めぐる 水ぐるま
冬木の うれの 宿り木よ
しとしと あゆむ 牛方と
五頭の牛の 夜のあけに
子供がうたふ をさな歌

第三詩集「春のいそぎ」

先の「砂の花」に次ぐ童謡風なうたひかたであるが、なにか実情に添うた感じが稀薄で不分明な句もある。第二聯第三行の「人どんなに黄金に光つたら」なぞその例で、黄金にかつて光つたのは、水車にかゝる前の雪であつたのか、それとも消した灯がさうであつた……といふのであるのか有機的な関連がない。富士氏宛書簡には、「闇の中を、そこだけが不思議に照らされて……」とある。この詩想の実景が「小曲」では彫琢のためか消えて了つてゐる。そのためであると思ふが、伊東は後年この詩想をさらに練つてゐる。それが「未定稿(飯尾蘭をゆく牛)」である。「四季」昭和一六年四月号に書きとめられてゐるところから推すと、「小曲」より一年以上も経つた日に改作を試みたとみるべきである。

未定稿

わたしはみた 十頭の牛の
つぎつぎに 闇をぬうてゆくのを、
電車の灯は華やかに 闇どほに
折々牛らを照らしてゆくが
たれもみぬ、これらの牛は
同じ向きに角をむけて
つぎつぎに乏しい灯をぬけてゆく、

たれもみぬ 電車道路を

風さへねむる 夜半のみちのへ
まがきのばらの匂ひはたかく
灯の下を やみの下を
十頭の牛がゆくのを見た。

この「未定稿」の方が彫琢が完成されてゐないだけに、「小曲」より所期の詩想ははるかに明確に表現できてゐる。

「大へん待たせませんが「夏花」まだです。二十日には必ず出る由、大雪のため北陸から紙入らず、済まん済まん和本屋申してゐます。今明日中本屋、直接大阪に挨拶に来るさうです。」

(昭和一五年二月二日堺市北三国ヶ丘より、
大阪市住吉区北田辺八三七、富士正晴宛はがき)

富士氏の宛名が西成区鶴見橋から住吉区北田辺に変わつてゐる。大阪日赤病院に勤めてゐた敵父が地位が栄進して転居したのであらう。阪和線を利用すれば伊東の住む北三国ヶ丘はつい眼と鼻の先となつたわけである。富士氏宛書簡の四日後「若い友」の一人として、急に親密度を増してきた大谷正雄氏に次のやうな書簡を送つてゐる。

「速達いただいたので、詩、骨折つてみましたが、到頭出来ず、此の号にも何もものせ

遠い花火

上村 肇

なかば朽ちかけた橋のですりによつて
友達と二人 遠い夜空に上る花火を眺め
ていた。

友の話は妻との離婚の話で
三人の子供を どう分けるかと云うこと
であつた。

もう何年か前の話で

私はいくたびも その後

新しくなったこの橋の上を渡つたが
一度として

とほい夜空に上る花火を見たことがな
かつた。

友の消息も断えてしまった。

耳

福地 邦樹

掌をお腕のように丸めて耳をこすると
蕭々と風の音がする
私の耳がおぼえている数えきれない風の
日の記憶

森の風 町の風 恋をした夜の風
掌をびったり耳におしつけると
遠い海鳴りの音がする

二年間暮した海辺の町 島の女 幼い時
の船の旅

そして水に流れて死んだ祖父の物語

られず、残念でした。

このころは身心割に元気、春三月に上京
したい気持です。

これ書いてたら今又速達とどきました。
出来るだけこころみてみます。」

(二月一六日堺市北三国ヶ丘より、東京市世
田谷区松原町四四五、大谷正雄宛はがき)

これは大谷正雄氏の個人誌「非情派」の詩の執筆依頼に対する返事である。大谷家は奥州白河の酒醸家。兄の忠一郎は秋原明太郎に師事し「生理」にも執筆した詩人だつた。又妹のM子さんは昭和一四年の四月に朔太郎先生と結婚し一年ばかりで離別した因縁もあつた。そんな因縁から、伊東は格別に大谷正雄氏に関心したわけであつた。

この大谷氏宛書簡の二日後、宇治に遁走した「若い友」の私に、次のやうな書簡をくれた。

「昨日はヴェルレーヌ研究送つて下さつて有難う。さぞご面倒だつたでせう。早速よみ始めました。感謝します。

*そちらおなれになりましたか。お仕事の工合はどんな風ですか。一寸淀の風景も、お仕事も想像つきません。

*神納君先日学校に訪ねて来てくれました。十分間ほど話しました。詩二つ見せてく

れました。あなたの筆跡にそっくりな字を
かいてゐます。

*昨日午後四時頃突然平井弥太郎君、学校にきました。ずいぶん苦勞して、堺の家に行つたらしいですが留守でしたので、学校に来たのださうです。あなたに色々連絡取らうと苦心したさうですが駄目だつた由言つてましたので、一緒にいづも屋(ダウトン堀)で晩めし食ひ、七時すぎ別れました。大へん気持のいい人だと思ひました。詩三、四見せてくれました。

*私の詩集「夏花」もうすぐ出来る筈です。出来たらお送りしますから御高評下さい。今日はお礼ばかり

十八日 伊東静雄

小高根二郎様

(二月一八日堺市北三国ヶ丘より、京都府
宇治町玲音荘、小高根二郎宛封書)

私が伊東に貸した「ヴェルレーヌ研究」は堀口大学の著で昭和八年刊行された第一書房版であつた。伊東は私の書架にあつたことを覚えてゐて宇治に去つてから借用方を申し入れてきたのである。伊東に貸した本として他に「ニイチエ伝」(タニエル、アレキヤイ著)があつたことを覚えてゐる。が、この「ヴェルレーヌ研究」はそのまま私に返らなかつた。私

は宇治に書籍を残したまま昭和一七年に応召するが、戦後返還してきて必要あつて「ヴェルレヌ研究」を探したがみつからなかつた。留守の間に紛失したのであらうと想つてゐたが、この書簡によつて伊東に貸したまゝになつてゐたのを思ひ出した。恐らく昭和二十年北三国ヶ丘の罹災の折、伊東の蔵書と共に灰燼に飯したのだらう。

しかし私の離阪後、私は友人達で伊東に迷惑をかけてゐたのである。神納君といふのはN化粧品会社の文案家の一人で「四季」の投書家だつた。離別に際して爾後伊東の教へを受けるやうに言つておいたので、伊東を訪門したわけである。

平井弥太郎君は私の大学時代の画友の一人だつた。宮城県の白石中学を出ただけのランボウきどりの少年だつた。私は高校時代の友人Mと蒼穹会といふ絵の会をつくつたが、友人が紹介してきた平井も会員の一人に加へたのだつた。モチリアニまがひの油絵やガッシュを描いてゐた。ダダイズムの詩人尾形亀之助を叔父に持ち、アルコール中毒の彼が蒼穹会展を見に来たこともあつた。その血筋をうけてゐる平井も詩らしいものを書いてゐた。すでに丸山薫氏と文通をし、惠贈されたという「帆・ランプ・鴨」を現代詩の典型として

署名

吉本青司

台風の過ぎた画廊

客は誰もいず

絵と絵が何ごとかを語りあつてゐた

中央の卓に芳名録

△ほくも署名しようと思つたが

なんとなく止してしまつた▽

白いレースをかけたピアノの上に

シャンデリアがやさしい光を放つてゐた

ふと気がつく

天井で何かのきしる音

かすかに金属的な音象

——それは鼠の爪音だつた

手帖を出して「へねずみ▽」と書きとめたら

それきり鼠は黙してしまひ

またもとの静かな画廊

絵と絵は何ごとかを語りはじめ

海の匂いとも

空の匂いともなく

台風の過ぎた空気が

画廊いっぱいに占めてゐた

までご馳走して歓待してくれてゐたのであつ

た。

皆に待ちに待たれた「夏花」が出版されたのは一ヶ月後の三月一五日だつた。詩集の奥書は一五日になつてゐるが、実際の発行日はもう少し早かつたらしく、寄贈された詩集の礼状に対する伊東の返事は一八日附になつてゐる。

「お手紙有難う。御元氣のご様子で何よりです。昨日、「昭和詩鈔」送つて来ましたが、御作品載つてゐて、当然のことながら、私もうれしかつたです。このごろ御快調

のご模様にて結構です。ますます御健筆願ひます。

いつものことながら、呆然として暮してゐます。詩は中々書きにくい状態です。みな註文も断つてゐる始末。「夏花」の出版記念会、いまのところいつになるか、又果して、そんなものがあるかどうか未定です。あまり期待しないでゐて下さい。しかしもし開催する時はあなたは出席していただきたい第一の方です。

どうぞお気付きの雑誌には、適当に、御高評いただきますれば光榮です。又売行もそれだけきつとよくなると思ひます。「夏花」割に好評にて、初版千五百部殆んど売

切れ、目下第二版準備中です、喜んでゐます。

宇治にも行きたいと思ひます。しかし、家の中に寝てゐたい気持ちも大へん強いのであります。いつも疲れてばかりゆゑ。

先日、河井醉茗氏来阪、歓迎会に出ました。関西の詩人諸氏だいが来てゐましたが、顔みてたらいやな気がして、もう以後こんな会は閉口と、今更らしく思ひました。然し河井さんは「夏花」よんでゐてくれて、懇切な質問などしてくれて人中で名譽でした。

大阪に出られること少いのでせうね。そんな機会があつたら是非会つて下さい。神

また再び静けさをとり戻さうとする

季節の推移は

敏感な肌さえも感知し得ない間に変わる

みな光を失つていく風物のなかにあつて

沈静な姿勢を保たうとする

流れて止まることのない自然の

不安と苦渋の入り交つた感情の起伏に

叢の桔梗の一枝の

花前は澄んだ藍色に極まりながら

秋の深いいろどりを湛えてゐる

桔梗

美堂正義

林は夏の暗緑色の色が薄れ初め

明るい樹木の枝を透して

秋の影りの深い青空に

白雲がボツカリと浮んでゐる

喧ましく鳴き立ててゐた蟬の声も少なく

なり

小高根二郎様

十八日

伊東生

りしゆゑ

昨日は六里の遠足あ

大へん疲れてゐる夜。

出ることでありませう。

特異の新しい詩と思ひます。たしかに、あなたの詩と思ひます。段々エビゴーンも

納君、あまり親切にして上げなかつたので

このごろは、ちつとも顔見せません。

このごろ、方々で拝見するあなたの御作

品は、先の通天閣の、完成に近い同系列の

ものと思つて拝見してゐます。出来、不出

来は少い書き方と愚考します。とにかく、

特異の新しい詩と思ひます。たしかに、あ

なたの詩と思ひます。段々エビゴーンも

出ることありませう。

この書簡によると河井醉茗氏にも詩集を贈

呈してゐたやうである。第一詩集「わがひと

に与ふる哀歌」のときには恐らく寄贈名簿か

ら洩れてゐた筈である。即ち出版記念会の出

席者——萩原朔太郎、室生犀星、三好達治、

丸山薫、中原中也、淀野隆三、芳賀檀、辻野

久憲、三浦常夫、保田与重郎、檀一雄氏等「

四季」「コギト」の先輩や同僚の他に、保田

氏が寄贈をすすめた齋藤茂吉、高村光太郎、

谷川徹三、百田宗治、横光利一、千家元麿、

(三月一八日、堺市北三国ヶ丘町より、
京都府宇治町、小高根二郎宛封書)

堀口大学、武者小路実篤が加はつてゐたであらう。その他、伊東書簡で贈呈したことが判明してゐる人に、島崎藤村、河上徹太郎、兼常清佐、頼原退蔵がある。又、私が日常知つた伊東の私淑ぶりから中勘助の名も当然加へられてゐただらう。それに若い友であつた私や富士正晴も余沢に浴したのである。「古き師と少なき友に献ず」という献詞のやうに、出版部数三百部の中から新聞雑誌社への寄贈分を含めて百部に満たなかつたであらう。ところで「夏花」の出版部数は一五〇〇部だから五倍の増加である。出版社の販売政策だけでなく、伊東の交渉範囲も拡がつてゐたから当然贈呈先も増加してゐただらう。特に交渉を深めた「文芸文化」関係だけでも——斎藤清衛、蓮田善明、清水文雄、栗山理一、池田勉と新規に掲げることができる。河井醉茗にも斯道の先輩といふ詩壇的な意味で贈られたのであらう。しかるに伊東の最大の恩人萩原朔太郎には迅速くは贈られなかつたのである。その事情は朔太郎から伊東に与へられた次の書簡で判明する。

「啓。

久しく御無沙汰。

貴詩集今、落手。既刊のことは前から諸所の批評にて知つて居ました。それで毎日御

才二室戸

堀之内 歴

風威の衰へたところで
避難先の鉄筋をとり出す
なお尾を曳いている風の大駆けりの中で
なじみ深いわが通りの家並みは
瓦礫 トタン 板切れの散乱に
壊滅寸前の軒をつらねて
奇怪な静寂帯となつていた
ケバ／＼しい看板の一切は失せ
吹き抜けた二階窓から天井に大空を
のぞかせているもの
軒下が膝を屈し 大きな前屈みのもの
どれも清潔で簡素

わが家は……扉とび暗く固い屋内の露呈
の前で ハラ／＼と涙が伝う
哀しみてない涙
やがて 朽化した門口から 露地から
ゾロ／＼と人々が出て来はじめの夕べ
いづれも心の昂ぶりを抱いているのだ
わが町にこんなにも沢山人間がいたとは
委え果てた私の視力に
これらの人々の姿が何と懐かしく
美しかったことか
ドブ鼠 雀 鳴く虫たちも出始めると
やがて迫っている暗黒の夜を前に
私たち生命ある者ら
限らない交歓を交わし合はうとする
のであつた
虫 けもの 隣人たち
一九六二、九、一七

送本を待つてゐたが、一向に御便りなく、今度は小生への御寄贈が無い事と断念めて居たところでした。それで実は、少々君を怨んで居たわけでした。しかしやつと頂戴でき、ありがたく御礼申します。今日の詩集は、可成著るしい一転廻を示

とにかく、現詩壇の詩人中で、比類なき知性の深酷性を持つてゐる点で、当今、君に優るものなく、今度の詩集も、やはり現代の第一、最高峯を示すものと思ふ。

萩原朔太郎

伊東静雄様

（昭和十五年三月二七日、東京市世田谷区代田）
（六三より堺市北三国ヶ丘町伊東静雄宛封書）

この朔太郎書簡によると伊東の贈呈が遅れたのである。発行日の一五日よりこの書簡は一二月遅れてゐる。実際の刊行は一五日より多少早かつた模様だから、二週間ばかり遅れて朔太郎の手許に届いたとみねばならない。伊東が贈呈を遅らせたについて思ひ当るのは書簡中にある評言である。その評言を煮詰めると、「浪漫的な雰囲気は稀薄になり散文的

生

浅野 晃

無心に雲を見てゐるとき
雲の無心になつてゐる
無心に風を聞いてゐるとき
風の無心になつてゐる
どうしてこの耳やこの眼が
心にもないところに開かうか
心に触れるものだけが
いつか私をつれてゆく

無心に愛するとき
花のいのちは私のいのちだ

無心にさまよふとき
地のなげきは私のなげきだ

心ゆくままにゆき
心かへるままにかへる
ただ心から心へと
それを私は疑はない

無心に夜を眠るとき
無心に朝をさめるとき
心にかかる何があらう
私が生きているこの世界に

雲もゆき風もゆき花もゆき
私もゆく
心のこりの何があらう
どの時も心を尽くさせる

してゐる。前のより大分、散文的になつてゐますが、思想的には深酷性を加へてゐるやうです。浪漫的な雰囲気が稀薄になつた代りに、古典性が強度を加へ、且つ生活の体験から来る重圧性が深く、その点で何かの恐ろしいものを感じさせる。

になつた上、古臭くなつた。」といふことになる。つまり、朔太郎にとつては「新しき島崎藤村の詩を、若き日に再度よむ思ひ」と感銘した「わがひととに与ふる哀歌」の方が、この「夏花」よりはるかに価値高く思はれたのである。近頃の伊東の詩は散文的になつて初期の清新さが失はれた。さう、朔太郎が側近の誰彼に歎いた評言が、風のたよりにいつか伊東の耳に入つてゐた。より完璧になつた価値をより軽く評価する。さう、伊東は先生の評言に怒りに近い感情——不満を抱いてゐたのは事実であつた。しかし、朔太郎が寄贈してくれないのではないかと危惧したことにはいささか誤解も混つてゐた。つまり先生は発行より二ヶ月半も先行してゐた「文芸文化」の富士氏の「夏花」評を発売して、すでに第二詩集は発行されたものとの錯覚を抱かれたのである。先生が怨みに近い感情を抱かれたのも当然であつた。

ともあれ、伊東が朔太郎先生の「夏花」観に多少の不満を抱いたとはいへ、先生の権威にはいささかの疑義もさしはさまなかつた。先の私宛の書簡で、先生が編纂された「昭和詩鈔」(昭和十五年三月一五日程)に愚作が収録されたことを祝つてくれた事実は、それを証明してゐる。

萩原葉子

新しく人が部屋を見に来るたびに、私はいつも、胸さわぎを覚え、暫くはうわのそらなのである。私にとっては一大事といってもよいほどだからだ。

不安でかなり神経が疲れ、それでいてなんとなく新鮮な感じもある、おかしな気持なのである。

少年は陰影のある顔のせいが独得の雰囲気をもっていて、いままでの女の人たちとはかなり勝手が違っていた。幹旋所の人の立ち合でいつものように、一番嫌な契約書を取り交わしているうちに、ふと不安になってきた私は、二年の契約を一年にしたらったのだ。おそろくまだ二十歳にもならない年若いせいもあるし、強さと頑廃とのバランスがいまにも崩れてしまいそうな、危うさがあつたからだ。幹旋所の人の話で少年は小峰美好とあって沖繩から、勉強のために上京したのだということが分つた。

小峰の入った部屋は、私の家からすぐ真向いの位置になっているので、両方の目かくし

に建てた塀の間から、電気的光りや机の脚が見え、風鈴がチリンチリン鳴っている。私はかなり遅くまで起きているのだが、小峰はそれよりもっと遅いらしく、電気はいつまでも消えなかった。

数日後小峰に会つたので、私は勉強が大へんですねえと、「暑くて寝られないのです」と他人を受けつけない強さでいる。見るといかにも神経質そうに窪んだ目をまたいっている。まるで自分のせいでもあるような気になった私は、部屋に風が通らないせいで暑いのでしようなどと、しきりに詫びているのである。

戦争中は郊外のアパートに疎開したまま、八年間も家がなくて住みついてしまい、その時の不自由さや不満は嫌というほど味わつて来たので、いまになつてもすぐ借りる側の立場にまわつてしまう。だがそれがうまく相手に伝わってくれる時はほとんどなく、逆に注文を出されたりもう少し部屋代を安くしてもらえないかなどといわれてしまうのだった。

よけいなことをいって自分を後悔している、小峰はにこにこ明るい笑顔をつくり、「良い部屋に来てよくよかった」とひとく素直にいったのである。

小峰に済まなかつたと思うと、私は心で詫びながら、「なにか困ることもあつたら遠慮なくいつてください」と逃げるようにして帰つて来たのである。

ちょうど苺の出盛りの時で、赤く光つた苺を店で見かけるたびに、ガラスの器に盛つた赤い苺にミルクとさとうをかけて小峰に持つていったら、きつと喜ぶだらうと思つたのである。ある日買物の帰りに一番粒の大きい苺ときれいなガラスの器とを小峰のために求め、その思いつきにどきどきするほどだった。

だがその一方では、果してこちらの気持をそのまま受け取ってくれるだろうか、という不安にさいなまれてもいた。そして不安に思いはじめると小峰の片意地な他人を受けつけないところばかりが見えはじめ、苺の思いつきがばかばかしくなつてくるのだった。

或る夕方「太陽がいっぱい」のレコードをかけている時だった。ベルが鳴り出てゆくと、小峰が立っている。部屋代をもつてきたのである。私を見るなり「あんなうまいものは、生れてはじめて食べました」といっておじぎをしたのである。

苺をやめた私は暫く経つてから土産ものの干菓子紙に包んで、小峰の部屋の前に置い

てきた時のことをいっているのである。あんなものが美味しいというなら、苺はもっと喜こんだらう、がもう苺の季節は終つていた。いまさら自分の勇気のなさが悔やまれ、なぜ

ヘリック詩抄 (一)

森 亮

転生 その一

このみづみづしい器量好しの花々は
嘗て恋に悩んだ乙女たちの
生れ変つた姿なのだ。ごらん、今だつて
面をほてらせたり、青さめて色を失つた
り……

★

転生 その二

ここに見る桜草は、どれも皆
かつては誰それさんと呼ばれた乙女たち。
貧血病みの彼女らが今ではかうしては
かに咲いてゐる。
病めるお嬢さん方よ、あなた達の顔色に
似てゐやしませんか。

憎まれ口をきく人に

★

「どんな詩人を読みました」「だれが一番
すき」と何度尋ねても、
いつも判で押したやうにあなたの答は「
世に亡い詩人たち」。
遠からずわたしは緑の芝の下に眠るでせ
う。
そしたらきつとあなたは私を好きになる
でせう、それとも憎む?

ヘリックには「どうして薔薇は赤くなつたか」とか
「どうして百合は白くなつたか」といふ類の童話的
主題であげない奇想をもつてあんな短詩が幾つか
ある。ここに紹介する「転生その一」(三七番)、
「その二」(一六七番)も同じやうな奇想を生命と
する短章で、それに小数の話相手を予想させる会話
的発想の面白さが加はる。最後の「憎まれ口をきく
人に」(一七四番)も形式から見れば素朴な劇的小
獨白である。

ガラス戸の様子では、やはり勉強しているらしい。何を勉強してどこの学校に行っているのだろうか、どこで外食しているのだろうか、いっさいが分らない。たまには栄養のある食物でも持つていってあげようと思つても、やはり私にはそれができないのである。

土曜日の夕方、浮かぬ顔の小峰が玄関に現われ、いきなり「これからすぐ引越します」というのである。あつけにとられていると「よくしてもらつてゐるけれど……」と、済まなそうである。「急に?」私はとても不愉快な気持になつてそれだけいふたのだった。

いままで、皆申し合せたやうに、引越すことを突然に前日になつていいに來るのである。だがそれも若い女の人のせいだらうと諦めてもいたのである。

日を繰つてみるとまだ三ヶ月にもなつていなかった。いつも思うばかりでなにもしてあげられなかつたことが悔やまれたが、いまさら遅い。引越すことは本人の自由である。

月の半ばなので残りの部屋代とそっくり敷金を返してあげると、小峰は大いに恐縮して「契約書を昨夕しらべたら……」と受け取ろうとしない。「なにかの足しになるでしょう」「私はいっぱしのおおやのように、ことばだけは、はつきりと事務的にいった。

その夜小峰のいなくなった暗い部屋から、置き忘れた風鈴がいつものように、チリンチリン鳴っていて、ひよっこりまた帰ってくるような気がするのだった。(つづく)

青木敬磨の 偽りない生涯 (一)

三 枝 康 高

宗教のなかの意識の変革

青木敬磨は私の師である。それゆえ青木先生と呼ぶべきかも知れないが、他の人名にならって青木という。私の印象からいうと、青木の油などつけたことのない頭髪には、やや白いものが交り、細長い、どちらかというところが顔立ちであった。しかもかれは鉄緑の近眼鏡をその俗にいう鷲鼻にかけ、かけたところにはいつも褐色の錆のあとをつけていた。かれの目はいかにも鋭く私を見、私にその目を見返すなんらのすべもないほどであったが、かれに特有のものはその目だけではなかった。たとえばかれに特有のものはその服装で、いつも紺がすりの袷に揃いの羽織を着て、それらが長身のためか、いかにもつんつるてんであった。身なりにかまわぬかれはそ

し、下村寅太郎を友とした。「亡き父の背丈より伸びた。といって見上げる母の小さい眼には、長い間かくれていた歎びとともに、まったく別種な監視の眼があった。母は私の学校が進むことに、その土地その土地へついて廻った。やがてほとんど母にも無断のままに寮に入り、ある名月の夜、見知らぬ先輩に誘われて琵琶湖に行き、知らぬまにボート部に入れられていた。この莽猛野蛮な運動が私の中から似合わぬことは承知しながらも、私はただ自分のことを忘れてしまえさえてきればよかった。秋深き夕間に、負けたボートの上で泣いていると、傍で号泣していたのが大木だった。知らぬ間にふたりは肩を組み、泣きじやくりながら、湖上の夜霧にゆらく篝火に見入った。ふたりは図書室で落ちあひ、肩を押しあひながら吉田山を歩いた。時々散歩姿の大学者に会い、行きすぎると大木がその名を覚えてくれる。大木は京都に生れ、有名な学者や書物のことを詳しく知っていた」とかれは書く。

*ここにいう「大木」は、下村寅太郎のことを指す。

れを意とせず、僧籍にあつても肉食妻帯、俗人と何の変りもなく、私もやがて和やかなかれの目を感ずるようになった。私が心中考えているところまで見てしまふ、あの和やかな目を。実をいうと鋭い目はすこしも恐ろしいのである。というのは、鋭い目は私の視線が突きあてたところを漁るだけだからである。

私はかれに哲学を学んだが、かれの哲学する目的はモンテニユ流に言えば、死にかたを学ぶにあつたといえよう。青木は傑出した詩を書く伊東静雄と深い接触があつたようであるが、かならずしも同じ道は歩まなかつた。青木は「コギト」にも参加しなかつたし、したがって「日本浪漫派」とも何の関係もありはしない。しかも「信仰の無償性」は、かれのつましい生活と、貧しい心のなかにこそあつた。当時にあつてもっとも正当で、かつ強烈な生きかたは、指導者らしいもつたいぶつた人たちのなかにはなく、かれのように誰にも知られぬ孤独な魂としてでなければ、存在することを許されなかつたのかも知れぬ。私はかれの口からいつも、時代を洞察する鋭い文明批評のかすかすを聞かされていた。「戦争、戦争なんて、泥沼に足をつつこんだ日本政府に、先の見通しがあるのかい」な

るのでなければ、とうてい目的を貫徹することはできないと演説した。そういわれては表立って異議を唱えることもできぬままに、かえって蔭で尻ごみするものが三々五々出て来たことを、かれは後年回想して呵々大笑した。青木は伯父から学資を仰いでおり、しかも母ひとり子ひとりという境遇にあつたから、ことを起す人物としては、他の誰よりも悪い条件であつたはずである。それかあらぬか、桑原武夫の語るところによると、ストライキ当時の青木はいかにも颯爽として、肩で風を切るような感慨があつたかに見えたこのことである。

やがて青木は京都大学哲学科に学んで、西田幾多郎、田辺元につき、卒業論文はカントを撰んだが、とくに西田の影響はかれの生涯を、いいがたい強さで支配した。すでに西田は「善の研究」をはじめとし、「自覚に於ける直観と反成」「意識の問題」「芸術と道徳」を完成して、「働くものから見るものへ」に立ちむかっていた。とくにその「後篇」をなす「働くもの」「場所」の二論文は、これまでの思索がここで一大飛躍をとげ、ある窮極点をさし示していた。左右田喜一郎博士が「泰西の文物を入れて既に数十年、今にして漸く一西田博士を得た事は、我が哲学界の為

と。

青木の経歴についていえば、かれは明治三十六年二月十一日、兵庫県揖保郡御津村岩見で、浄土真宗の西念寺に生れ、五才ですでにその父を喪つている。「母は父の遺骸にうつ伏して泣いている。時々すすりあげて泣いている。私はしかし決して泣かない。お父ちゃんはなくなくなった。それは私の耳に大きすぎる響だつた。私にはいつまでも母の言葉の意味がわからなかつた。しかし父の死と同時に、私は一度に大人になつた。大人たちの複雑な神経が理解されるようになったのだから。私はあまりに多すぎる記憶をもっている。あらゆる記憶が一々意味をもって、私にせまってくる。踏みにじられた花びらのような記憶である。私には誰ひとりの身寄りもなく、誰の眼の前にもふるえる私の神経は、地獄の底のような孤獨にあつた。私はひそかに夢を見た。会いたいと思う夜には、かならず父の夢を見た。しかし夢のなかの父は峻峻で、多くはあちらを向いて、音もなく歩いて行ってしまつた」とかれは後年書いている。

*「眞良介の断章」と題する、青木のたゞ一つの小説より

やがて青木は伯父の後見のもとに、龍野中学校、第三高等学校に学び、務台理作を師と

る教諭がつとめ、その寮生を家族とする。ここに俯瞰して、雄大な砂丘のうねり、遠くはるかな大洋のたたずまい、足もとの可愛らしい野川など、眼に見心に思ううち、ある日ふとして老校長の、じつに子供らしいまでに純心な理想主義に行きあつた」という。しかもかれは一身上の都合から、教職を抛たなければならなくなり、飯路死を決心したがようやく思いとどまった。のち福井でふたたび教職に就いたが、酒に親しんで肺浸潤に冒され、最後の職場を大阪でえたが、かれにとつてはいずれも漂泊にすぎなかつた。概ね西田の推輓によつて就職したらしく、その間西田の許を訪れてはその助言を受けることが多かった。かれが詩をつくつて伊東と親交をむすび、「呂」を創刊したのはこの頃で、昭和四年、攝津の行信学校に入つてはじめて真宗の教学に没頭することになった。

書簡

宇野浩二

前略(いつも「果樹園」ありがたう存じます。突然ですが、伊東静男さんの「作品」(「伊東静男全集」)の業績と、各作品の発表年月

果樹園六十九号 昭和三十六年十一月一日発行 (毎月一回一日発行)

池田市野町一六八 果樹園社発行 印刷所 元市印刷株式会社 定価三十円

○作品を推薦する理由(四百字詰原稿紙一枚以内)

○伊藤静雄の略歴

右の事をお書きくださいましてなるべく早くおくりくださいませんか。(速達で) 妙なお願ひですが、今はちよつと申しかねますので……

三月九日 小高根二郎様

宇野浩二

○注文しました「伊藤静雄全集」今さきつきました。

(昭和三十六年三月九日東京都文京区森川町七十七号 浩二より池田市野町一六八小高根二郎宛速達封書)

編輯後記

九月六日。午前二時半から午後四時まで第二室台風が吹き荒れた。芦屋に上陸した風の神が京都に吹き抜ける目に当つてゐたためか風呂の煙突が折れただけの軽微な被害です。お見舞をいただいたので不精ながらここで御礼に代へます。但し、堀之内君の所は作品のやうな状態であつたし、福地君の所は被害があつた模様だが共に作品に恵まれたことで不幸中の幸くらいに御想像がほしい。

九月九日。大丸に開催された岸田劉生三十三回忌回顧展を見た。一巡して今さらながらにその才能と精進に感銘したが、年譜を見て三十九才の若さで死んでゐることに吃驚した。記憶では四〇代の半ばまで生きてゐたやうな印象があつたからである。それはと言見た明治大正名畫展での印象が對照してゐたのである。展覧されたのは小さな水彩の「颯子像」であつたが、黒田清輝の「水浴」や青木繁の「海山の幸」や中村つねの「エロシエンゴ像」などにくらべてもいささかの遜色がなかつた。小出重重や佐伯

祐三などは、まだマチス・ブラック・グラフィックなぞのエビゴネらしい脆弱さを露呈してゐたやうな印象が残つてゐたからである。特に精緻なシンボリックなリアリズムで描かれた「冬の日の崖上の道」「陽の當つた赤土と草」などの新しさに改めて感銘した。

九月二日。午後八時五十分、宇野浩二先生が逝去された。七十才であられた由である。後述の印象では先生は劉生の場合と反対に大変若しい。半年前にいただいた書簡はこのに掲載していただいたが、僕等の書く頼りないものにも同世代者のやうな熱心さで関心していただいたのである。胸膈疾患を推してゆるゆると自伝的な作業を進め、二度も書きがへてをられるあたり、衰弱をしいらしたからではないかと思ふ。それにしても痛惜すべき大先輩を失つたものである。心から哀福を祈り上げる。

九月二十七日。近くに住む安田章生氏に調査を願つてゐた伊東の寺町の下宿が判明して御教へをいただいた。寺町今出川上ル四丁目阿彌陀寺前町青木敬齋方であつたのである。当時青木に可愛いがつて貰つてゐた近所の子一高久芳衛氏が安田氏の歌誌「白珠」の同人であるよしみによつて判明したのである。本号から安田氏の墓場・東大での後輩三枝氏の青木伝を掲載した。どうやら私は伊東の幽霊だけだなく、今度は青木の亡霊からも手招きされてゐるやうである。(〇)

果樹園 第六十九号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年十一月一日発行

池田市野町一六八
編輯者 小高根二郎
大阪市東区吉区桑津町五の八
印刷所 元市印刷株式会社
池田市野町一六八
発行所 果樹園社
定価 三十円

果樹園

第70号

詩人、その生涯と運命 小高根二郎
貸 室 萩原葉子
葛飾のみち 堀口太平
青木敬齋の 三枝康高
偽りない生涯

遼の文瓶 美堂正義
風の笛 浅野晃
妻の涙 池沢茂
ヘリック詩抄 森亮
威 謹 堀之内 歴
北 諳 歌 吉本青司
編輯後記 田中克己

詩人、その生涯と運命

小高根二郎

先号に於て一月二七日附富士氏宛書簡に見えた「春のいそぎ」期の「小曲」——牛の詩について触れたが、同期の作品として「誕生日の即興歌」を逸してゐたことを読者諸氏にお詫びせねばならない。「誕生日の即興歌」は「砂の花」に続いて「文芸世紀」二月号に発表されてゐたからである。

誕生日の即興歌

くらい、西の屋角に 臍筋斗うつて ぞ

こいらに もつる あつ響 樹々の喚びと 警むる 草のしついつ よみ毎に吹き出る風の けふいく夜 何処より来て ああにぎはしや わがいのち 生くるいはひ まあ子や この父の為 灯さ

げて 折つて来い 隣家の ひと住まぬ籠のうちの かの山茶花の枝 いやいや 闇のお化けや 風の胴間声 それさへ 怖くないのなら 尤むるひとの あるものか 寧ろまあ子、こよひ わが祝ひに あの花のころを 言はうなら「ああかくて 誰がために 咲きつぐわれぞ」 さあ 折つておいで まあ子

自証まあ子はわが女の子の愛称。私の誕生日は十二月十日、この頃、海から吹上くる西風烈しく、丘陵の斜面に在るわが家は動搖して、眠られぬ

夜が屢々である。家の裏は、籠で隣家の大きな庭園につづいてゐて、もう永くひとが住んでゐない。一坪の庭もない私は、暖い日にはよくこつそり侵入して、その草木の姿を写生する。第三詩集「春のいそぎ」

この詩の舞台である人の住んでゐない裏の邸に關しては、辻野久憲の靈に捧げた「わが笛」(昭和二年二月号)の解説の折に触れ、勝手口の傍に、橋であつたか、夏蜜柑であつたか、つづらな黄金の実をつけた立樹のあつたことは既述した。又、その空邸の嵐の夜の光景に關しては「野分に寄す」(昭和四年二月号)に歌はれてゐたことも既述した。私の記憶によると、居間の向ふは奥行半間かそこいらの庭と名附けようもない空地で、伊東が自註にいう籠ではなく、疲れた築藩がそばだつてゐた。背伸びをして築藩の向ふを覗くと、伊東が誕生祝ひにまあ子ちゃんに折つてくることを命じた山茶花が淡紅と白のはだらの花辨をつけてゐた。そのすがれた花群が妙に私の記憶にこびりついてゐる。さういへば西成区の家でも、腐つた板塀の節穴から野朝顔がのぞいてゐた。

この「誕生日の即興歌」で注意をしたいのは、伊東が「光と影」を起用してゐることである。まあ子ちゃんに灯をかがけさせて闇の

36.12.2.

お化けを作らさうとしてゐることである。聞
だけではお化けにならない。立術を介して光
と影とが造型するお化け。それは明らかにソ
ログロブの影響だと思はれる。影絵に熱狂す
るワロージャを制止したあの神経質な母とは
反対に、伊東はまあ子ちゃんに灯をもたせて
お化けの影絵を作らせ、とがめる人があるも
んか……と風流の盗みをさへそのかしてゐ
る。この発想には、「光と影」に於けるあま
りに神経質だった未亡人の母親に対する反撥
が作用してゐる。それとともに多感繊細なワ
ロージャへの同情も作用してゐる。その反作
用として伊東は、自が祝祭のために侵入と奪
取を主題とした影絵——詩を作つたのである
……と言へないであらうか？

さう言へば、この「誕生日の即興歌」につ
づいて伊東が構想した牛と牛方を歌つた「小
曲」に、黄金に光つたる \vee と
、かつてあつた光、影絵としての灯を起用し
てゐる点を考へても、「光と影」の後曳がま
だ残つてゐたと解釈できるであらう。

「誕生日の即興歌」と共に二月二六日附の
頼原先生宛書簡も逸してゐた。従つて、二月
一八日、三月一八日附愚生宛書簡が先行して
しまつてゐたわけである。ご諒怒を請ふ。
「お葉書書いたき大へんうれしくございま

この書簡は、頼原先生が「文芸文化」一、
二月号で出版より先行した富士氏の「夏花」
評を読んで出版祝ひを書き送られたことに對
する、礼状であらう。

先生は昭和一年以来、退官されたまま療
養しておいでになつた。復官されたのは翌昭
和六年であつたから、概ね治療の段階に達
してをられたのであらう。伊東はもし京都で
出版記念会でも開かれることがあつたら、先
生においでをねがつて徳川の俳体の長詩の語
をしていただく……など、富士氏に冗談を
言つた由書いてゐるが、それは冗談ではなく
伊東の詩境の位置を物語るものであらう。徳
川の俳体の長詩といふからには、代表的な燕
村の「春風馬堤曲」を指してさう言つたのだ
らう。「春風馬堤曲」に関しては萩原明太郎
の「郷愁の詩人と謝蕪村」(昭和一年第一書房刊)でも馴
染みであつた。又、「春風馬堤曲の源流」と
しての支考が領導する美濃派の仮名詩その他
の韻文詩に関する先生の知識(昭和一年刊創
元通書蕪村各照)も、伊東は教へ子として当然心得てゐたであ
らう。私ごとき無知なものでさへ「明治の新
体詩の原流」として蕪村の「北寿老仙をいた
む」を愛誦してゐたほどであつた。

「日本の詩が真に日本の詩であるべき自覚
は、今に於いて最も高度に要求されて居る

した。丁度風邪でねてゐまして、お礼おく
れました。お許し下さい。いつも御無沙汰
ばかりしてをりますが、御案じ申してゐま
す、しかし御葉書下さる位だから大丈夫と
も存じます。詩集の評なぞよんで下さつて
うれしいです。あの筆者の富士といふ人が
京都から遊びに来ました時、こんど詩集の
出版記念の会を京都でして、その時頼原先
生に出でただいて、徳川の俳体の長詩の
お話ししていただくかなどと冗談申しまし
たら「三人」早速お送りしたものと見えま
す。本出たらすぐ謹呈したいと思つてをり
ますのに、紙のいいのがなくて中々出ませ
ん。広告ばかり先になりました。

このころは割に元氣にて、友人もありま
せんが、独りでいろいろ考へてをります。
私は今年で三十五歳になりましたが、今迄
のことを深く考へ、これから先きの覚悟を
きめるのいい年だと思つてをります。し
つかりやりたいと存じます。

このころはずつと、床には入つてから秋
成全集よんでをります。私は明治よりもあ
のころの抒情詩を大切にしてをります。

春になつたら一度お伺ひしたいと存じま
す。先日栗山理一君に会ひましたら、いつ
かお伺ひした由言つてをりました。

所謂新体詩は西洋詩の模倣として発生し
たにちがひないが、今日から回顧すればそ
れは単に自由清新な詩形を求めた動きにす
ぎなかつた。日本の詩と詩精神はずでに新
体詩以前、遙かに古い世から存して居たの
である。(「蕪村」前掲)

この頼原先生の考へが、伊東の考へでもあ
り、伊東をとらめぐる「若い友」——私達の
考へでもあつたのである。

書簡の末尾で栗山理一氏が頼原氏を訪ねた
由見えてゐるが、当時栗山氏は其角を研究し
てゐたと記憶してゐる。或ひは蕪門の人々、
それとも先生お得意の蕪村に関して教へを請
ふためであつたのかもしれない。それはとに
かく、前述した「春風馬堤曲」に栗山氏が読
みやすく訓読したので参考までに掲
載する。

春風馬堤曲

謝 蕪 山 理 一 訓 耶

余一日者老を故園に問ふ。澗水を渡り
、馬堤を過ぐ。偶女の郷に反省する者
に逢ふ。先後して行くこと数里、相顧
みて語る。容姿媚媚、癡情憐むべし。
因りて歌曲十八首を製り、女に代つて

木俣修・川副国基・長谷川泉 編集

人と作品 現代文学講座

第九集 一 昭和篇 Ⅰ

【評論・思想・隨筆】

小林秀雄(川副国基) 河上敬太郎・中村光夫・市原
豊太(長谷川泉) 保田与重郎・龜井勝一郎(橋川文
三) 福田清人(三好行雄) 森田たま(古谷桐武) 他

【小説】

堀辰雄(谷田昌平) 梶井基次郎(勝山功) 井伏鱒二
(桑川文樹) 阿部知二(久保田正文) 舟橋聖一・丹
羽文雄(村松定孝) 島本健作・石川達三・高見順・
北條民雄(関良) 中山義秀・石坂洋次郎・永井竜
男(保昌正志) 神西清(古林尚) 下村湖人(鳥越信
石川淳(長谷川泉) 太宰治(奥野健男) 中島敦(高
田瑞穂) 島崎藤村(分銅惇作)

【詩】

八木重吉(松隈義勇) 安西冬菊(阪本聰郎) 菱山修
三(古川清彦) 北園克衛(安藤一郎) 山之口鏡(芳
賀秀次郎) 伊藤信吉(関良) 丸山薫・中原中也・
立原道雄・田中冬二(笹沢英明) 神保光太郎・伊東
静雄(小高根二郎)

【其他、劇・脚本・短歌・俳句】 三八〇頁

明治書院

御養生お祈りいたします

二月二十六日

伊東静雄

頼原退蔵先生

(昭和一年二月二十六日、堺市北三国ヶ丘町
より京都大待車、頼原退蔵宛封書)

意を述べ、題して春風馬堤曲と曰ふ。

○やぶ入や浪花を出て長柄川

○春風や堤長うして家遠し

○堤より下りて芳草を摘めば 荆と棘と路

を塞げり

荆棘何の妬情ありて 裙を裂き且つ股を

傷ふや

○溪流石點々 石を踏んで香芹を撮る

多謝す水上の石 儂をして裙を沾さしめ

ざるを

○一軒の茶見世の柳老いにけり

○茶店の老婆子儂を見て慇懃に

○無恙を質し、且つ儂が春衣を美む

○店中二客あり 能く江南の語を解す

酒錢三緡を擲ち 我を迎へ欄を譲りて去

る

○古駅三両家、猫子妻を呼ぶ、妻来らず

○雛を呼ぶ雛外の鶏 雛外草地に満てり

雛飛んで雛を越えんとすれども 雛高く

して墮つること三四

○春艸路三叉、中に捷徑あり、我を迎ふ

○たんぽぽ花咲けり、三々五々、五々は黄

に

三々は白し、記得す去年この路よりす

○憐みとる蒲公英短うして乳を沍せり

○むかし、しきりにおもふ慈母の恩
慈母の懐抱別に春あり

○春あり、成長して浪花にあり
梅は白し、浪花橋辺財主の家

春情まなび得たり浪花風流
○郷を辞し弟に負いて身三春
本を忘れ末を取る接木の梅

○故郷春深し、行き行きて又行き行く
楊柳長堤道漸くくだれり

○首を矯げてはじめて見る故園の家黄昏
戸に倚る白髪の人弟を抱き我を
待つ春又春

○君見ずや古人太祇が句
敷入りの寝るやひとりの親の側

又、伊東は床に入つてから「上田秋成全集」を読んでゐる由、書簡の末尾に伝へてゐた。そして明治よりもこの頃の抒情詩を大切にすると書いてゐた。この頃の意味は、先の蕪村（1767-1808）も今度の秋成（1787-1808）も共に同時代に生きてゐたので、両方に掛つてゐると解釈してさしつかえないであらう。即ち、伊東が明治の抒情詩として愛好した鵬外の「うた日記」藤村の「落梅集」よりも、蕪村の「春風馬埵曲」秋成の「つづらぶみ」の方を大切に考へたということになるだらう。

この伊東の考へ方が、これから始まる第三詩集「春のいそぎ」期の根柢となる詩精神であるかと考へられる

貸室 (III)

萩原 葉子

翌日頼もしい友人のH子から電話がかかり、今いるアパートを急に引越すことになつたので、どこか捜さなければならず、私に一緒に捜してほしいといふのだつた。それなら、少年のいた部屋が空いたのでどうかといふと、仕事の都合で中央沿線ではなくては困るというのである。

H子は、年は私より上なのにまるで子供のようなたぢで、世間のことはいっさい分らず、よく一人で生きていられると不思議になるほどの人である。

とても放つておくわけにゆかず、私は早速H子と待ち合わせた、中央線のA駅までかけていった。

二人は「土地・家屋」と書いた店を見つけると、片っぱしから立ち寄りガラス窓にべたべた貼つてある紙を読んだ。H子の求める四畳半で四千五百円どまり、しかも駅から八分以内というのは、絶対になつた。四畳半は

どれも七八千円でなければ駅に近い所はない。二人は足を棒にして幹旋所に聞いて歩いたのだが、中央沿線の高いのびっくりして帰つてくるだけの一日だつた。

翌日もまた暑い日盛りを二人は汗を流しながら、捜し歩いた。こんどはS駅にしてみた。A駅よりかなり入つたS駅ならば、少しは安いだらうと思つたからである。

「アパート四畳半」というのを目を皿のようにして見つけ歩くとA駅よりはいくらか数はあつたが、部屋代は依然として高い。たまたに四千五百円というのを見つけると鬼の首でも取つた気持で聞いてみると、決まって「それはもうない」という返事である。あれはおとりに書いてあるだけらしいということが分つた二人はぶんぶん腹を立てはじめ

「だから私のところに来ればよいのに」

「あたしは中央沿線が好きなのよ」

「どうせ小田急線は嫌らしいでしょうよ、私だつて忙しいのに二日もつぶしてお供しているのに、いい加減に決めてくれなくては困るわよ」

「決めるといつたつて、どこに決めたらいいの？ 駅から三十分も歩けというの？」

「そのくらいがまんするものよ、第一あなは我儘よ」

汗とほこりでくたくたになりながら、腹立ち紛れに言い合つてゐるので、人は不思議そうに二人を見比べてゆく。米屋で米イチゴを

葛飾のみち

堀口 太平

ちょうど、中川はあげ汐で、海のように、ざわざわしていた。

田舎びた、薔薇の垣根が、川よりも低くなつてゐる。

いつも、それがつかえてきて、しばらくは、呑みこめないのだ。

とねりこの古い木と、小さな社のわかから、道が、ななめに、土手をおりている。

老人は、ひるねをしていた。

女は、玄關で横になつていた。

ふくら脛をふんだら、女は、目をさまして、笑つた。

うしろ手をついて、土手の方をみていた。

おきあがつてきた老人が、

態谷の土産だといつて、五家宝を盛つてくれ

突きながら、アパート捜しはもうこりこりだから、あとは自分で捜して決めなさいと、その日はH子と気まずく別れたのである。

た。石磯をかりて、顔をあらつた。

あつい風が、つよくふいた。

葦が、いち面にゆれていた。

白拍子が、たかく舞いあがつて、くちなしのように、きつく匂つてきた。

女の脂にしみた道だ。

がらがら、がらがらと、私は、きたない、あき離を引きずつていったのだ。

「わがわすれなばたれかしらん」七夕の西日が、まぶしくて、たのしかった。また、哀しかった。

二度も、おろさせ、

憎み、いかり、私は、縫目もなく、ぼろぼろになつた顔を捨て、とおつたのだ。

おんぼろ車前草のような、私鉄の駅で、電車をまっかえつた。

翌日またH子から電話で。昨日は自分が悪かつたといひ、今日こそはなんとしても決めてしまふから、もう一度だけお願いするといふのである。私はまたかたあきれながらも、実はずつと気になつていたので、早速でかけてゆくことにした。こんどはY駅である。都心より一時間も奥なので不便だが、ここならば安いだらうと思つたからだつた。

戦争中一度買出しにきたことがあつたが、当時とはまるきり様子が違つて、都会風になつてゐる。二人はことばに出せない失望でまた「土地・家屋」の看板を出した店を捜してゐた。

幹旋所の看板ほど、無味乾草のものではなく、自然と足が重く、嫌になつてくる。やがて、向い側の看板に大きく、二日間見飽きた「土地・家屋」の字が見えると、私はH子のために祈るような気持になつてゐた。H子の横顔にはもう今日こそは、決めなくてはという、気の毒なほどのあせりが見えている。二人は、ともかくも入つて聞いて見ようとシグナルの緑になるのを待つて、向う側に渡つた。

入口の椅子にそっくり返つていた口髭を生やした男は二人を見ると上半身を起こし、こちらの風采を目でさぐつたあと「一人でですか？」といふた。

「H子はいつものように希望をいうと」お客さん、それなら七千円出せばありますよ」と、軽蔑したようにいう。私はH子の希望がやっぱり無理だとH子に言い聞かせると、駅からバスでどの位乗れば、安い所があるのかと聞いてみた。

男はバスで三つめの所に新築アパートがあり、そこならちよどこちらの希望に叶っていると教え、それもぐつぐつしていれば後の客が来て無くなってしまおうといった。いまならちよどこ客もいないし、そっちの腹さえ決めてくれたら、自動車で案内してあげますよと促す、

H子を見るとやめようというようになつた。く気の悪い顔をしている。男はH子の気乗りしない様子に「いまだき、お客さんのようなこと言つたって絶対にあるものですか。他の店に行つて来て分つていないでしよう？」と強気に幾度も言う。

「ともかく見せてもらいたいです」私はH子に代つて言った。

「見せてあげるといふことは、うちじややつていないですよ」

「では、どうして決めるんですか？」私は驚ろいて聞くと

「はつきり、どのアパートに入ると腹の決

まったお客だけに、案内するんですよ」

「では、見て気に入らなかつた時には、やめられないんですか？」

「この賞状を見てくださいよ、すべて信用でゆくんです。部屋が気に入らないようなところへは、絶対に案内する店じやない」

「なんという一方的なことをいう店だろうと、私はあきれながら男の指さす方を見ると、なるほど賞状がたくさん並んで壁に掛けてある。「困つた時の神だのみ」なのか、私はそれをみると次第に店を信用していった。」

青木敬磨の

偽りない生涯 (二)

三枝 康 高

やがて故郷の漁村、岩見へ帰り、ここで自己の学問求道と郷党の道徳両面の師友たる生活につき、この最後の十年間は家庭と村、寺をめぐつて、もつとも困難で苦渋な時代ではあつたが、しかしもつとも充実した確乎たる生活であつた。かたちの上では半俗半僧のごとくであつたが、むしろ僧俗を超えた真の僧であり、学問求道と郷党の教化とがたがいに媒介しあい、真に相即した渾然たる生活がか

この連作には、かれの心根がすなおに反映している。人はこれをしも戦争協力の名で呼ぶであろうか、いやここには青年たちへの愛惜からの気おくれが、むしろ飾り気なく噴き出しているのを見るべきであろう。

青木はつねに中世の寺院が、村や町の共同体における、生活上の中心をなしていたことを懐しみ、それに近い態度で周囲の人たちとの間の接触を深めていったが、ついに宗門の理解はえられず、かえつて圧迫をさへ蒙つたようである。しかしかれが住職をしていた西念寺の境内には、自ら大工と協力して「木南舎」と呼ぶ集会場を建て、その一限に黒板を設けて子供たちを教へ、真中には炉を切つて青年たちと酒を酌み交し、好んで談笑をと

にしたのである。やがてかれののびのびとして屈託のない態度のなかに、人々は己を知るものを見出し、冠婚葬祭はもとより、時には

夫婦喧嘩の仲裁をたのみ、借金の保証人にも立つてもらつたようになった。こうして村祭りには青年たちがかれの演出にしたがつて、菊

遼の文瓶

美堂 正義

薄暗い陳列台を巡りながら

遼時代の白磁緑彩花瓶に眼が止まつた
中国とは違つたサラセン風の匂ひを嗅ぐ
中国基外民族の息吹きが
硝子を透して伝つてきて

私は楽しい想像にしばし立ち止まつた

指は西域の地図を辿る
万年雪を戴く天山山脈
世界の屋根バミール高原
天山北路、天山南路、タリム盆地、タクラマ
カン砂漠

サマルカンド、タシケント、カシニガル、トルファン、樓蘭、哈密、西州、干闥、沙州
文化の進路は道を見付けることから始まり
トルキスタン達は夢を追つて東遷する
渴悶は死に連つて
饑餓は眼を皿のやうに燃えさせ

砂漠に埋没されて風化されてしまふ

狼は青く瞳を光らし

蛇蝎は道を塞ぎ

秃鷲は喙を鋭くして伺つてゐる

天山の山を初めて越えたのは誰れだらう

溪川を渉り 石道を開いたのは誰れだらう

千古消えることのない雪が水となつて流れ

茫漠として砂漠の鹹湖に注ぎ

曹達は雪よりも白く日の光に輝いて

郷愁は雲のやうに沸いてくる

草原は天地の境までの拡がりは単調すぎ

砂漠の茶褐の砂は激しく孤独を掻き立てて

荒原には飛ぶ鳥の姿さえない

天涯極まりない天と地との間を

かすかな物音もない静寂が覆つてゐる

乾燥した空気は咽喉を痛くして

夜は星が高く大きく輝く

青く澄んだ空を追つて

世界の秘境を一步一步東へと

魅せられて曳かれながら歩いた道に

契丹、ナイマン、口紇、突厥、鮮卑、羌、柔然、氏、烏孫、伊列、大宛、大月氏、康居
戎と狄と胡との諸民族が雑居し
互に攻め防いで流離する地の涯を
目路の限りを荒涼とした風景が展げてゐる
昼は身を焼き、汗は眼に痛く沁み
夜は霜に身震ひしながら過す

夢を見るやうな民族の心は
異国のひとの魂に甦り開花して
石のやうに冷く固いものの上に具現する
白く鈍い光沢の肌に画かれた

一茎の草花の秘し
朔北の何処で焼いたのであらうか
その土は何処から運んだのであらうか
草原と砂漠の混交の文化か

歴気楼のやうに美しく燃え遂したもの
雄勁で頑な姿勢で立つてゐて
鞭鞭の金に追はれ安住の地を求め
天山山脈を西に越え中央亜細亜に移動した

短命の遼の運命をもしかと見定めながら
澄んでそよとも翳りさえ示さない

しかし青木のそのような任職ぶりは、世上僧職のなりわいとあまりにもかけ離れていたから、かれは近隣の寺院のはなはだしい誤解を受け、時としては野心家のように取沙汰された。かれはたしかに酒を嗜み、煙草を喫うことも遠慮しなかった。かれは剃髪しようと思わず、葬儀のときの他、衣や袈裟を身に纏わなかった。またかれは苦境に立つと、借金することもあり、総じて「坊主の坊主臭さ」を口をきわめて罵った。そのためついにはかれの噂が本山にまで聞え、かれは呼び出されて僧俗の見分けられぬその生活ぶりを難詰され、海外へ派遣する内示をさえない渡された。そこで青木はさかさまに、宗門運営上の本山の非行をくまなく暴露し、かれ自らは親鸞開宗の趣旨に反していないことを釈明して、かれとかれの家族は郷里に骨を埋めることを誓い、かえって休のいい追ひ出し策を紛碎した。以後表立たぬ隘口や中傷を意に介せず、かれは長島の巖院を慰めたりもした。

しかしかねてから青木は武者小路実篤の「新しい村」の運動や、有島武郎の農地解放などにも興味を抱き、またクロボトキンやマルクス、エンゲルスなど、国禁の書にも親しんで、かれみずから村のありかたを人知れず考えていた。晩年とくにかれの心を勞したの

、積年の伝統と因襲との重疊した漁業組合の紛争である。すなわちかれはこの難問を自ら手で解決し、組合そのものを全く再組織して、将来への基礎を固めただけでなく、直下に異状な効果を生むにいたらしめて、この地方のもっとも模範的なものとし、懇請されて「漁業組合長」となった。かれはいささかももったいぶったり、いばったりするところなく、これに身心困憊の極に達するまでに捨身し、挺身して、ほとんどその全力を傾けたのである。下村はいう、「先日私が展墓に彼の地に赴いた時、若き漁業組合員が瞳を輝かせつつ、「青木先生」に対する憧憬と追慕とを語るのを聞き、その記念に贈られた「大正新修大藏經」をその側に置いて、感慨に堪えざるものがあつた。これは一漁村の一事件に止まる意味のものではない。古の大徳の此処に存したことを想わざるを得なかつた」と。

私が青木との出会いを経験したのも、姫路高等学校に在学中、この村出身の学友の手引きによつてであるが、昭和十三年四月からかれは仏教青年会のために、学校で「歎異抄」の講義を引き受けてくれた。さらに八月、われわれはかれの許で西田の「人間的存在」を輪読し、十四年八月にはすすんで「絶対矛盾的自己同一」の輪読をおこなつた。その時の

風と笛

浅野 晃

みすほらしい服といふな
たましひの荒野といふな
渾沌は燃えてゐるのだ
君も知らない底の方で

破れた笛をとり出すのだ
思ひきり吹いてみるのだ
かすれた音を気にするな
風も疎林をそのやうに吹く
何のために吹くのかつて
そんなことを誰が知らう
聴く胸がどこにあるかつて
海がむかふで見入つてゐる

ふかい怖れを翔ける思ひを
与へて去る それが風だ
遠く暗いところから来て
われらのいのちをかき立ててゆく

きしろがねの酒

胴の間に肩そびやかし立ち上り入江とよめ
と歌うたひ出づ

またわれわれは室津へサイクリングを試み、
白昼花街に遊女をひやかしたりもした。

こうした潤達自在な日常生活を送りながら、かれは浄土教学の研究をおし進め、「善導和尚」の著がその成果として生れた。さらにこの問題を深化するため京都に出て、碩学に就いて参究することを願望していたが、漁業組合の整備もおわつて一おうの小閑をえ、十七年三月妻子を郷里に残して単身出京した。かれは京都の一友の下宿に仮寓して勉強に没頭し、その生活は文字通り「苦学」というべきもので、尼僧学校に教鞭をとりながら梵語を習い、京大で田辺の講筵に列して感激し、夢中になって月輪に「中論」を学んだ。こうして京都はかれの青春の地であつて、同時にまた最後の悦びの地ともなり、戦争下の生活は乏しかったが、心はつねに平和でかつ豊かであつた。

その間とくにかれ自らは、きわめて謙虚にその身を接し、人をうつ前にまずおのれを責めるといった日常生活を営んだ。務台理作に宛てた手紙にもこういつている。「至愚の生れ、切角求めても得難い師友に恵まれながら

青木が、これらのエッセイを通じて示した、晩年の西田へのはげしい傾倒と、論理の追求をもつてする宗教上のきびしい批判とは、われわれにほとんど天来の声のような感銘を与えた。かれは哲学者の名前を挙げて、「かれらには皈依ということがない」といつて非難した。私は有りていにいつて、かれのお蔭で「念仏」の何たるかを教えられただけでなく、私自ら「念仏するもの」のひとりに加わることができた。

その間にかれの息、敬介が避病院へ入院し、われわれも保菌者として禁足を命じられたことがあつた。私は無聊のままに駄作を試み

た。

ひて我物言はず

今日よりは山門閉つと門を嵌めて出で立つ

我が師は瘦せぬ

やがて敬介も退院し、われわれは外出を許されて、宵の口から岩見湾内に舟を浮べ、月光の下で酒宴を開き、遊泳をさえ試みた。

月出でて友どちきほひ舟にあれば今ぞ我が

手に碗をあげん

一筋に海原分けて進む舟の向つ仲辺に月は

上れり

コップ酒月の光にすかし見ればいや濁りな

、潮にでも引かれるものの如く、山野を彷徨いあるき、自儘勝手に取返しとつかぬ時間を空しくしました罰当りに、暇のあつた筈の頃には本が読めず、身辺多忙を極めはじめてから、本が読みたたくてたまらぬようになりまして、人に責められて寝言みたいなことを書きましたものの、御眼にとめて頂くどころか、自分ながら恥しくなるものばかりでした。本当はもつと何か別のことがあるし、あつた筈なのですが、言つてしまえば子供でも云うような、云わんでもいいことばかりになつてしまふます。村の生活は狭く、小生の無学は救いようもない程度だつたのです。……友人達は皆、小生を坊主とはよんでくれませぬけれど、それは私の顔に悪心ばかりが出ていたからで、真実はやはり伝統的に坊主なのです。坊主なら乞食することも死ぬことも厭うてはならない、と先祖達は申し伝えて居ります」と。

しかもかれの隣人への愛はありきたりのものではなく、きわめて鋭く透徹していた。たとえば私の母からかれに、私のことを相談した手紙の返事で、かれはいつた。「小生は何か康高君を一つの実験室のような気持でながめて居ります。あの人があなたのみならず、周囲の誰彼へ偏傲の態度をとるとき、彼は一

ばん淋しい時だろうと存じます。だから一ばん危い時です。母上としてはじつと辛棒して頂かねばならぬと存じます。彼は知らんてむずかるのではありません。知っているから甘えるのです。併し多分この甘える心が、彼の最も大切な神経をむしばんで来たことを、知っていないのではないかと存じます。あのままでは彼は亡んでしまいます。決して文士にはなく、灰になってしまいます。小生には見える様な気が致します」と。

当時私が大学を中途退学して、作家にならうとしたことへのかれの配慮である。かれの手紙はなおつづく、「但、康高君は御存知の様に、他の人のもたぬ神経をもって居ります。これは直ぐ伸びてくれれば、どれほど多くの人々が絶望から救われるかれません。そしてもし間違えば、又自身だけでなく幾つか貴い魂をも道づれに亡ぼしてしまいかも知れません。…無論せいたくさせる意味でなく、身も心も最もつましく貧しくあらしめること、その途だけがあの子に残されている、人間の間に伍して一人前に働か人並に戦う力など求める方が無理だ、と小生には考えられます。もとより文壇に出ることなど痴人の夢にすぎません。それを言ってみてもわからないでしょうから、一カ年遊ばせている間に

妻の涙

池沢 茂

交わらせてみるもいいでしょう。きっと自分から逃げ出して来ます。人に勝る思想、人にみせびらかす文章などあの子が求めたら、おしまいです」と。

幼稚園は一年やれば十分とは思ったもの、結局ほくも妻も、下の子の梅子は二年間やることにした。おなじどしの近所の子がたいて二年行きたったうえに、きょうだいのがひとりきりで、しかも、そのひとりが、ふつうでない幸吉だったからだ。幸吉といっしょにいと、おとなのほくたちでも、ときん精神状態が変になってくるくらいだから、いちばん染まりやすい幼児期の梅子には、どんなおそろしい影響があるかもしれない。おなじどしの近所の女の子と遊んでいても、きわだつて神経質だったり、わからずやのわがままだったりして、ほくも妻も、ときん、びくつとした。

入園テストはひるからで、妻が付き添って行った。ほくも夜勤で、ひるから出勤すればよかったから、その途中、幼稚園に立ちよつて、窓からのぞいてみた。すると妻はその窓

ぎわの近くに、じみな和服姿の側面を見せて、ほんやり、た、ずんでいた。希望や生活力にあふれたような、まだ若い、いかにも花やかな女たちが多いなかで、イスがたりないのか遠慮っぽく立ったまま、だれと話をかわすでもなく、小さな顔をさびしうにひきしめたまま、疲れきつたみたいに、うなだれている。それでも、ほくが窓ガラスをコツ／＼と、やがて気づいて、グラウンドへ出てきた。

「まだ順番がこないの。あと四、五人やと思うけど。ひとり、ひとり、園長室には行って、テストされるの。なかへ、はいつてみる？」近所の人も、二、三人来てるわ」

「いや、いいよ。あんまりゆっくりしてて、遅刻したらいかんから。それにしても。ずいぶん時間がかゝるんやね。テストって一体どんなことをするの？むずかしそう？」

「手をあげたり、ゆびを折ったり伸ばしたり、びよん／＼とんだり……」

「つまり簡単な身体検査だな。それなら、だいじょうぶだ。梅子ちゃんは、からだはどこも故障がないもの」

「それから、自分の名前やとを言ったり、鳥や動物や乗り物の絵を見せて答えさせたり、それから、数をかぞえたり、青や赤や黄

色や、いろいろな色の名前を言わせたり、いろ／＼するらしいわ」

「うん、それめだいじょうぶだな。名前もとしも言えるし、いつも絵本を見るから、たいていのことは知ってるし。数だけは、あや

ヘリック詩抄 (三)

森 亮

くちづけ

わたしたちの心のかよったくちづけから

ほら、たつた今生れ落ちたのは何でせう。

ごらんさい、正しくそれは、

それはね、二もとの紫羅櫚花。

あなたの唇はわたしの唇、私のはあなたの。

かうして二人のくちと心の結びつきから

紫羅櫚花が生れたのなら、

この私たちの瞳みから薔薇の花だつてひらくでせう。

美 声

あなたが歌ひ出さないうちは、手を琴に触れないうちは、
生の身のあなたが静かに坐つてらつしやつただけ。

あなたが歌ひ出さないうちは、手を琴に触れないうちは、
あなたは天上童形の神々しさになつてゐた。

ヘリックの詩の特色の一つは、猥雑な韻律形式のわくの中へ平易な言葉を用いた口語的発想が見たところ少しの無理もなく溶け込んであることである。ここに譯した二篇の原詩でも使用頻度の高い一音節の単語が圧倒的に多い。口語的発想といふのは「くちづけ」(一九二番)の三行目の初めのリック、リックや、私は意識してしまつたが、五行目のリック・キス・アンド・キス・アゲンの類である。「美声」(二二九番)の最後の行の「天上童形」に相当する原語はチエラビンで、それは九天使中の第二階級の天使である。

つたかて、なんにも悲観することあれへん」妻が平素よりも、しよんぼりして、ひどく元気がなさそうに見えたので、ほくは励ますように言った。が、はつとなつた。妻の顔色が、さつと暗く、かげつたからだ。でも、そのとき、おおせいの見知らぬ人たちのなかで気持ちのいじけていたらしい梅子が、ほつとしたように飛びだしてきて、ほくの手を力いっぱい引っぱりながら「とうちゃん、アメ買って！アメ買ってえな」とせがんだので、ほくは妻に合図をしてから、いそいで梅子を連れだし、近所の菓子屋で、キャラメルを買い与えた。「たべてもいい？」「い、よ、たべなさい」とほくは梅子にキャラメルをたべさせながら、また幼稚園の門まで来て「とうちゃん、もう会社へ行かんならんからね、ママのところへいらつしやい。先生に呼ばれたら「はいッ」と返事するんだよ。「おなまえは？」と聞かれたら「ミナミ・ウメコ」って言うんやつたね」と言つて別れた。

妻はえがおで見送つていたけれど、ほくは通勤の電車のなかで、ほくが「ことしはダメでも」と言つたときの、さつと暗くなつた妻の表情を思い浮かべていた、その変化があまりに激しくて、つまらぬことを口にしたものだ、と、ひどく気がか、つていたからだつた。

以前と違って、幼稚園は数がふえ建て増しもされたのに、子供はそのわりにふえていないから、ひとところみだいな入園難は解消している。むしろ先生みずからが勧誘にまわっているくらいで、よほどの障害児でないかぎり、落とされる気づかいはない。まず「順調に育っている梅子には、だから、万に一つの心配もあるはずがない。たゞ、そう思いきったときに、ほくの心におそってくるのは、もうひとりの、梅子の兄の幸吉のことだった。ほか「ダメでも」と言ったのは励ますためだったが、妻も、このことはをそのまゝ、「梅子がダメでも」と取るよりも、ふいと幸吉のことを思い浮かべていたのだろうか。幸吉は不治の障害児だからだ。しきりに入園を勧誘された梅子とは反対に、こちらから、あの託児所、この幼稚園へと、なんべんも足をほこび、むりに入れてもらっても、結局どこも中途で、やめなければならなかったからだ。

まだ乳飲み子だった梅子をか、えていた妻は、そのころ疲れすぎて、とき／＼半狂乱になった。ふたこと目には「幸ちゃんのような子ができたのは、あなたのせいよ。わたしは知らない」と言うのだ。おそ番で、夜半に疲れきって帰ってきた、妻はいきなり、ほくの、しった。夜勤あけで、ひるまに帰る、

睡眠不足のまゝ、休まずに、家にはかりいる幸吉を散歩に連れだし、週に一度の公休日にも日じゅう、友だちの全然ない幸吉を相手に遊んでやっても、妻はめったに、うれしそうに顔を見せない。ふつうの子よりも睡眠のみじかくて浅い幸吉が夜半に起きだしたり、いつまでも寝ないでいるのを引き取って、こちらも早く寝たいのをしんぼうしながら遊んでいても、妻はのぞきにきて「こんなにおそく、なにしているの！ 近所の人が変に思うやないの！」と責める。ほくはもう、どうしていいか、わからなかった。負担を軽くして、すこしでも楽になるよう、つとめているのではないか。幸吉も家にはかりいたら健康にわるいから、なるべく運動させて、からだだけでも丈夫にしてやろうとしているのではないか。できたら遊びのあいだに、いろ／＼教えて、なんとか知能を伸ばさせようと望んでいるのではないか。そうは思っても、それを言えば、妻はかえって神経を刺激されるのか、いっそう激しくの、しり返すにすぎない。憎らしそうに顔をゆがめ、目を神経質に光らせ、いら／＼と肩をふるわせながら、むやみと突っか、ってくる妻を目の前に行っていると「それ、その顔、その口ぶり、まるきり気遣いやないか。なんで幸吉がほくだけの血統なん

か。その精神病が幸吉に遺伝してるんや」とほくもだん／＼腹が立って、やりきれなくなった。幸吉のほかに、妻という、もうひとりの精神病者をか、えているみたいだった。なんのために、つらい動機に励まねばならないのか、こんなにみじめに生きるよりも、ひと思ひに死んだほうが、どれほどマシかしれないと、ほくはなんべんも思った。

ところが、その日、ほくが夜勤あけで、ひるまに帰ってくると、妻はにこ／＼していた。わりあい近くに養護施設ができて、幼稚園にも小学校にも行けなかった幸吉がぶじに通園できるようになってから、妻もだん／＼おだやかになっていたものの、このときのえがおは、はじめてみたいに晴れやかだった。あ、そうか、梅子がうま／＼いっただんだ、とほくは思い「梅子ちゃんどうだった？」とたずねると「あたし、びっくりしたわ。梅子ちゃんが、あんなに、はき／＼、しつかり答えるとは、全然思うてなんだもの」と、きのうの感動をあらためて、かみしめているふうで、また自然と、えがおにくずれていった。そうして、テストのようすを語りつづけたが、そのうちに、その目に、ふと、涙がにじんでいた。

「梅子ちゃんたら、先生が「カーゴメ、カーゴ

メの歌がうたえる人は、前へ出て下さい」言うたら「はい」と大きな声で返事をして、まっさきに出ていくんやもの。たいてい、もじ／＼して、なか／＼出てこないのに、ひとり列のまえへ出て……。うふ、うふ。ほかの人も、先生も、みんな感心してたわ。一番はき／＼して、よくできて、だれより返事もい、って……。これで安心したわ。あたしは幸ちゃんみたいな子を生んだけど、梅子ちゃ

んみたいなの、ちゃんとした子だって生めるんやもの」

涙を浮かべたまゝで、妻はまた、えがおになった。泣きわらいだった。ふつうでない子が生まれたのは全部がほくのせいだと責めていた妻も、心のなかでは、ほく以上に、幸吉について悩んでいたのだった。ほくは梅子の合格のことよりも、このことで一層安心し、これまでとき／＼ほくの心をかげらせてい

た曇りが、一時に晴れあがっていくのを感じた。

北 京

田 中 克 己

日本の東洋学といったが、これは今だに世界的な学問の一である。その生みの祖の一人である白鳥博士を所長とする研究所に勤めてゐたことは、兵隊となる前の私の誇りであった。その誇りが甦つて来たうへ、私は例の新聞の立読みで大発見をしてゐた。伯希和教授逝去の報である。漢名伯希和ではわかりにくからうが、これがフランスの東洋学者ポール・ペリオのことなのは、その道の人なら知らないものはない。ドイツ軍占領下で苦勞してであらう十月二十八日に六十七才かで亡くなられたのである。フランスの東洋学は日本の東洋学と双壁で、グラネー、マスベロ、ペリオの三人がその三羽鳥と教はつてゐたが、ペリオ教授を最後として、みな鬼籍に入ったことを、私はかくして知り、同時に自分の東洋学者としての責任をも重く考へたのだから、よほど自信が強かつた苦笑ものである。

序でながらいふと、食糧難の日本では、ペリオ教授の逝去など問題にはならなかつた。

威 嚇

— 独裁者への恐怖 —

堀之内

歴

夜の深まるにつれて風が激しさをましていた

家屋が鳴動する 聞こえる

△人間ヨ死シマエ ミンナ▽

長駝の咆哮の下に 広っぱの隅を
銀行の大棟を その下の数本の柳を
立ち看板の頼りなく大きなものを
それらが眼先に泛かびつく 動悸

— いっそ風の形相を見ていた方が—
小さく二階窓を開けてみる と
すぐ眼前に 風が大東になって
町じゅうを蹂躪しているところ

この憶病な潜視者などには無縁に 風は
△死シマエ ドウダ死シマエ▽
咽喉もたら繰り出される
いたく乾いてたその聞え

私はゆっくり窓を閉める
何かを 見てしまったのだ
みてしまうと それら横暴さの中で
私の恐怖は消え去っていた

一九六一、十、二七

翌年二月末、帰国してペリオ教授と親しかった羽田亨博士の令息明君に会ひ、この話をすると、博士が会ひたいと仰しやる。会つたしかに中国の新聞で見た旨を申し上げると、先生は歎息された(博士ももう亡い!)ただし近ごろの中国学界の論文では、伯希和は中央アジアの考古学的探險をしたあと、その発掘物を中国にのこさず、フランスに盗み帰つたとして盗賊あつかひをされてゐる。中共の東洋学もきびしい説である。

も一つ、私の責任感をそそり立てたのは、恩師和田清博士が兵隊の私によこされたハガキである。しよつちう懐にいられて歩いてゐたから汚れてはゐるが、私はこのハガキを隆福寺街の文殿閣へもつて行つて、掌櫃的たちに見せた。

「軍務御精励の由ご苦勞様です。東京ではあなたの出征後、あなたのもと勤め先が二つとも焼けました。原田淑人君も岩井大慧君も山本達郎君もやられました。私も今日か明日かと云々」

といふのだつたと思ふ。(乗船前の検査では一切の文書の携帯は許されないので、天津へ置いて来た)。私は掌櫃的たちに東洋考古学の世界の権威原田博士、東洋文庫主事岩井博士、東大東洋史学科の主任教授山本博士らの

名のところを示して、「都死みなした了」といつた。「やられました」といふ和田先生の文章を戦災で焚かれたと解釈できなかつたのは、兵隊ボケのせいであらうが、一には出征前のアメリカ空軍の絨氈爆撃の戦果を見て来たための誤解もある。戦前戦中、日本人と取引の多かつた掌櫃的たちはみるみる悲しい顔をした。そして客の一人も来ない店となつたことを嘆いたあと、私が「これを」といつて、乏しい懐中から、東洋学への回帰の第一歩としてとりあげた「柳辺紀略」をたしか五十元かで売つてくれたと思ふ。五十元はたしかマツチ一個の値だんだつたと思ふ。

私は焼けた東京、飢死のおそれある日本へ帰らない決心をすると、同志を求めて北京を歩きまはつた。

神戸大学教授百瀬弘氏が同じく復員してゐるのを知り、訪ねてゆくと、日向で裸になつてゐた。私が縋々と北京に残つて東洋学をやる決心を述べると、百瀬氏は「僕は体を丈夫にしておくよ」といつて、また日光浴をつけた。私は五十キロ(現在は十二指腸潰瘍で三十七キロである)の体に十分自信があり、ないのは頭脳なのに兵隊ボケを癒すことを誓ひながら引き下つた。

旗田巍氏の住居は東城だつたので、静かに住んでおいてなのを訪ねた。私がまた長々と東京の話をする、整理しなければならぬ資料の多くあることを述べて、北京に留まる様子を示された。同氏ははたして一般邦人より遅れて帰国され、満員となつた学界にいた場所がなく、しばらく定時制高校の教師をなすつたあと、都立大に移つて朝鮮史概説を岩波全書で出された。私はこの本を見てほつとした。朝鮮史の第一人者の地位を確立されたと思つたのである。小松川高校の韓国生徒の暴行事件で新聞に名前が出ておいてなのは見たが、そのあとまだお会いしてゐない。

宇田川部隊で、同じく二等兵ながら、私に古兵隊と呼ばねばならなかつた小野勝年氏とは、奇縁にも途で遭つた。家主に追つ立てを食つて移るといふので、荷車の後を押してゐるところである。私は今度の住居をきいたあと何つたら不在であつた。夫人が出て、いままから買物にゆくとのことであつた。私は日本人の婦人のはるか離れた東四市場への買物を危ぶみながら、止められないで途中まで護衛(のつもりだつたのである)を買つて出た。

汚い苦力と太々との同行こそ変なものだつたらう。私の宿所である岡田家の次嬢節子君を西車市場に案内したのはこの前後で、私は北

諧 謔 歌

吉 本 青 司

雨が断足でやってきた
教室の雨もり

屋根を突きぬけた光の粒子が

バケツの太鼓をたたく

ハヘイワ ヘイワ

ハホロビ ホロビ

招かぬ来訪者のかなでる

雨もりの曲は

その どちらともとれる旋律で

思案する少年たちの

頭蓋をゆさぶる

京城内を淑女と二度歩いたわけである。

ついでながら、奈良の国立博物館に小野氏が勤められてから、私は牛肉をもつてお宅を訪問した。北京時代と変らず、不便きはまる奈良市外の假寓へのお土産としての牛肉は喜ばれたが、夫人は十年ぶりに見た私を「お瘦せになりましたね」と迎へて下さつた。私の太つてゐたところの實見者として御紹介しておく。

小野氏とは北京に残つてもに学ぼうとの提案をする機会をもたなかつたのに、到頭ただ一人の同志が出来た。西城に住むY(さしきはりがあるので仮名にする)である。彼は名だけ知りあつてゐた私を快く迎へ、私の説明をきいたあと、全面的に賛成して、老北京でとほる某先生への同行を提案した。中国人が学徳ともに尊敬し、日本帝国主義とともに退去を求めてゐる北京在留日本人の例外として、残留を希望されてゐるこの先生を中心として同志を募らうといふのである。私はもとよりこれに賛成して、例の苦力服で同行した。先生は令嬢と二人だけのお住ひにしては広すぎる大邸宅に私たちを迎へ入れると、二人のこもこも語る北京残留の志をただ黙つて聞かれるのみで、賛否を表はされない。二人は戸外へ出て歎息した。

実は蒋介石政府の日僑対策はこのころ既にきまつてゐて、一人の日本人の残留を許さずこれを西郊にまず集め、アメリカの提供する船舶によつて日本に送還することになつてゐたのである。

この間、私はまだ小林のところへゆくこともあるが、いつも彼ははるなほで、中野君だけである。その中野君も忙しげにしてゐる。ある日ゆくと、応接の部屋の隣に若い女性がひとり寝てゐて、時も時に結核にかかり、食ふに困つてゐるのを引き取つてやつたのだといふことである。ちがつた意味の同志として中野君には敬意をあらたにした。

またある日、たぶんこれが最後だと思ふが訪ねてゆくと、立派な中国服を着て、「いまから会に出かけます」といふ。そのくせ帰れといはないので、私は彼が洋車(人力車)で出かけたあと、部屋に残ると、もう一人ゐたのが中国人で、彼が残して行つた机の上の書き物をとり上げる。よめたかよめなかつた、もとへ戻したあと私もとりあげると、達筆で「日本は今後、アメリカの植民地となる。享楽と追従とのみが行はれる。我らはこれにいかか処すべきか」と記してある箇所が目にとまつた。帰国後の予言どほりなのを見て、心を痛めたが私は

はついに如何に処すべきかの結論は出なかつた。

さて岡田家にも隣組単位の集結命令がとどいた。何月何日までに家財を整理してどこそこへ集合し、西部の集結地で帰国を待つこととなつたのである。私は岡田家の一員に教へられてゐないから、この命令には服しなくてよいが、電々公社の公舎であるここからは立ちのきななければならぬ。

「どうなさいますか」

といふ岡田氏に対し、私は

「北京に残ります」

と答へ、ついでYのところへ行つてみた。残留覚悟なのだから、当然の相談であるが、Yは事もなげに

「ここへいらつしやつたら」

といふ。これで宿舎はきまつた。私は岡田夫人が心もとながつて（この人も今はもう亡い数に入つた）、何かいるものはと問はれると、蒲団上下と毛布一枚とを、答えて、その明日集結するといふ日、門前から洋車に乗つた。

Y宅にはすでに二人の学者がゐた。私をいれて三人は二階の一室を与へられた。一泊した翌日、私はふととんでもないことに思ひついた。Yの子ども二人が、この院子にとちこ

められて所在なげなのが、同年輩の子どもを故国にのこし、今はその生死さへ確かめ得ない（実は私はとつくに死んだものとあきらめてゐた）ままに、感傷をそそられたのである。そのため私は二人に学校ごつこを申し出た。外出を禁止され、学校へゆけない二人は喜んで教科書をもつて来た。風のあたらぬ日なだに、私は机と椅子をならべ二人に国語の教科書を開かせ、次々に指名して読ませ、まぢがひは正した。

この日はほかに何をしたかおぼへえない。翌朝、私はまた学校の始業ベルを鳴らした。二人の生徒は出て来た。男生は昨日とちがつて元気がなく、顔が二倍になるくらい腫れ上つてゐる。さういへば昨日の授業中、父親が物かげで聞いてゐる気配がした。私は学校の休校を宣言すると同時に、私の死んだかもしれない子供は、ぜつたになぐらないことを決心した。この決心は守れたかどうか。私の子供はこのころ悲観性の私の予想を裏切つて、生きてゐて、学校どころではなかつたのである。

（半自叙伝九）

編輯後記

一〇月二三日、京都の寺町今出川上ルに、三十五年前茅東が下宿してゐる家を撮影に行った。案内は予め安田章生氏を頼はして人手してゐたので探案する勞苦からはまぬ

がれてゐたが、偶然に時代祭の日に當つてゐたために、自動車を持たぬに苦勞をした。千本丸太町まで電車でゆき、そこで自動車を買つて給ふと阿彌陀寺前町に繋げた。信長廟所と標示板が立つてゐる阿彌陀寺のすぐ前に、案内図で目印にしてある二日やゐるがすぐみつかつた。なかなか繁昌してきてゐるらしい大様な構へい北崎……うつつて變つて陰湿な狭小路が水溜をそこ二階屋に青木敬齋と母との寓居——つまり伊東の下宿だつたのである。もう家は廢屋に近くあと五年ともたないだらう。櫻札の眞新らしいは長らく空屋のままに放置されてゐた事実を物語つてゐるやうだつた。濡縁には葬式提灯に似たやうなものも二基置いてあつた。おとなへば薄暗い室内から青木敬齋と伊東静雄の幽霊が仲良く立ち現れたかもしれない。いづれ改めて聖護院の下宿の写真と共に紹介するつもりである。

一〇月三〇日、所用あつて仙台まで飛んで東北大学を二十七年ぶりに訪れた。理工学部を訪問が主目的であつたが、文学部の研究室に北住敏夫教授をお訪ねした。授業までの短時間だがあくお話しできた。巻頭広告の現代文学講座に大西祝を担当してをられる。僕は伊東静雄と神保光太郎の担当である。そんな縁を話してゐるうちに清水文雄氏と過日の学会で出會ひ、昔「文芸文化」にも執筆されたことがあつたことだつた。お話ししてゐるうちに学生時代の氏の勤敏な顔に思ひ當つた。

(〇)

果樹園 第七十号 (毎月一回一日発行)

昭和三十六年十二月一日発行

池田市野町一六八

編輯兼 小高根二郎

大阪市東住吉区桑津町五の八

印刷所 元市印刷株式会社

池田市野町一六八

発行所 果樹園社

定価 三十円